

2021年は平和……うおおドラゴン狩りじゃあああ！！！！

蒲焼丼

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

時は2021年。2020年の竜災害を乗り越えた東京は、順調に復興への道を歩んでいた……

と思っていたら再びドラゴンが襲来！

今度の相手は腐りかけ大好き真竜フォーマルハウト。黒いフロワロに覆われ人類は再び滅亡の危機に。

戦う理由、身内のごたごた、フラグが乱れ飛ぶ竜災害。新しい仲間とドタバタしながら全ての竜を狩り尽くせ！

## ※※注意※※

心情の描写というか、うちの13班はこういう人間で、こういう関係なんだなあと掘り下げて形にするのが目的でもあるので、前作『2020年になったのでドラゴン狩りじゃあああ!!!』以上に弊13班メンバーが悩むし考えるし人間関係に振り回される予定です。

メンバーがキャラメイクのフル12人に増える(予定)もあり、前作みたいにメインストーリーがさくさく進まない予感。人のネガティブなところを前作より割増しで出します(予定)。

前作はミナトの視点が多かった気がするので、メインストーリーはシキの視点を中心にしてみようとしてたりしてます。

個人の設定や世界観解釈、オリジナル展開有り。

弊13班内での恋愛要素も有り(予定)。2020はまっつたくそんな雰囲気なかったので、ラブコメとかケンカとかおふぎけとか楽しみたいです。感情のもつれあいをふりかけにして白米を食べたい。

挿絵が入っている話は末尾に「\*」がついています。神絵師の腕を食  
べればもつと画力上がりますか???

ストックがないので投稿ペースは不定期・ゆっくり・完結未定です。

\*\*\*感想待ってま〜〜す  
!!!!!! (クソデカヴォイス) \*\*\*

!!!!!!

# 目次

PROLOGUE 2021年 東京

Count 0. コール、13班! \* | 1

Count 1. 幕は静かに上がる \* | 34

Count 2. 2021.04.18 | Encounter

Arms of Formalhaut | \* | 65

PROLOGUE あらすじ | 98

幕裏1. 35日と20時間前 / 胸に隕石 \* | 100

幕裏2. ワンチャンあるかもしれない | 127

幕裏3. 素早くてマナが多いかもしれない、耐久力は紙 \* | 152

152

幕裏4. アイドル!!! | 181

PROLOGUE 幕裏 あらすじ | 202

CHAPTER1 新たなる戦場

Count 3. 再演 竜を狩る物語 | 205

Count 4. 必然||始まりの2人 | 231

Count 5. ドラゴン戦線 序【ぐだぐだ】\* | 260

Count 6. 赫灼として紅く— VS ティアマット | 291

\* | 291

幕裏5. まずは一步 | 321

CHAPTER1 あらすじ | 342

INTERMISSION 11の面影

Count 7. 厄日は続くよどこまでも | 344

Count 8. 殺竜兵器 | 373

Count 9. 地下下での小競り合い | 393

I N T E R M I S S I O N 1 あらすじ  
幕裏6. 出張！ 東京都庁の修羅場！

422 420

PROLOGUE 2021年 東京  
Count 0. コール、13班！ \*

花が咲くように、肉塊が飛び散った。

花畑。同じ形の花弁が円となり、開いて、芳しい香りを運ぶ鮮やかな絨毯。

いつか目にしたそのように、目の前には無数の赤い徒花が咲き乱れ、生温い鉄の香りを漂わせている。

断末魔も上げられず、仲間がびたびたと血潮をまき散らして崩れる。泣き別れになった下半身はその場に倒れ、吹き飛ばされた上半身は弧を描いて自分の頭上を飛んでいく。赤い雨が降り注ぎ、精錬された武具の輝きを塗りつぶした。

右に、親が帰りを待つ若輩が倒れている。

左に、子を抱きしめてから武器を手を取ってきたという壮年が転がっている。

目の前では、ついさつきまで支え合っていた仲間の下半身が地に伏している。

何かを守るため、共に武器を手を取った者たちが、ただの血と肉の塊になって絶命している。

同胞を屠った怪物が体を起こした。ぬらぬらと牙を濡らす唾液に、鮮血にひたされて目に痛いほど赤くなった、先のとがった長い舌。

湧き上がってきたのは恐怖ではない。純粹な怒りだ。

これだけ蹂躪しておきながら足りないか。生きとし生ける者、全てを喰い千切らなければ満たされないというのか。

——いいだろう。

ならば今度はこちらが、その救いようのない飢餓ごと切り刻んで、貴様を踏みこむ番だ。

たとえば自分が最後の独りだろうが、おまえたちを否定しきるまで止

まっつてなるものか。

おまえたちには存在しない心——恐怖を生み出して、根付けて、広げて、許しを請うてくるまで刃で抉ってやる。そして許しの代わりにとどめを与えてやる。

否定してやる。生まれたことを、存在したことを絶望させてやる!!

血の海になった地を蹴り上げる。

堅牢な表皮に無数の傷を刻めど、致命傷すら与えられていない化物……竜に突進を仕掛ける。

唯一柔い目玉を狙い振りかぶった瞬間、ぞろりと並んだ牙に腕を切断された。筋肉も骨も容易く削がれ、片腕は固く武器を握ったまま宙を舞う。

——まだだ!

残った片腕でスピアの武器をつかむ。竜の動きが鈍るのを見逃さず、疲労でだらりと開いた顎に一太刀を突きこんだ。

仇敵の絶叫が世界を揺らす。

終わらない。負けてなるものか。

斬る。潰す。下す。突き落とす。喰らいついて噛み千切って抉り出して粉々にして殺せ殺せ殺せ。

殺す。

殺す!

——絶対に殺してやるっ!!!

「あああああああああああああああああつっつ!!!」

\* \* \*

「——あ、あ……あ、あ?」

白い天井が見える。

肺に流れてくるのは新鮮な空気で、目を射るのは電灯の光。吐き気を催す血生臭さも、体にどろりとまとわりつく赤い海も、目の前に迫っていた憎きおとがいない。

前に突き出しているのは、喰いちぎられたはずの腕。

「……」

自分が仰向けに転がっているのに気付き、上体を起こす。振り払ってしまつたらしいタオルケットが床に落ち、体重を支えるマットレスがわずかに弾んだ。

「……?」

何だ、今のは。夢か?

胸糞悪い光景の名残りか、嫌な頭痛がこめかみを襲う。

職業柄、体調管理には人一倍気を付けているつもりだ。睡眠だって毎日しっかり取っている。なのにこの気持ち悪さは何だ。

勘弁してほしいと頭を振ると、地響きと共に騒がしい足音が近付いてきた。

蝶番が吹っ飛ぶ勢いで扉が開く。

「シキちゃん!? 大丈夫!? すっごい絶叫が聞こえてきたんだけど!?」

「……ミナト」

勢いよく駆け込んできたのは、共同生活を送るパートナーだ。足で



扉を押し開けるのはらしくないと思ったが、皿を持っているため両手がふさがっていたようだ。

皿をテーブルの上に滑らせ、彼女は自由になった指先に淡い光を灯す。怪我の類ではないから治癒魔法を使っても効果はないと思うのだが。

額に手を当てられ、まぶたをめくられ、脈を取られ、深呼吸を促され肌着越しに心音を聞かれる。

現役の看護師たちに医療の勉強を見てもらっているということもあつてか、手つきには無駄がない。数分もしないうちにミナトはふうと息を吐いて汗をぬぐった。

「見た感じ問題ないみたいだけど……何かあつたの？ フロア中に声が響き渡って……びっくりして何人かずっこけてたよ？」

「悪い。やな夢見ただけ」  
「夢？」

そうだ、夢。ただの夢。現実から最も遠くかけ離れた、支離滅裂な情報のパッチワークだ。

自分たちが送っている日常とは、何の関係も――

「シキちゃん？」

目を閉じて開いた瞬間、顔を覗き込んできたミナトの下半身が千切れて倒れた。

くびれから上を残して、臓器と血の滝が流れだす。

「っ」

「びゃあっ!？」

素っ頓狂な声が上がった。自分がパートナーのくびれをわしづかんだためだ。

もう一度まばたきをすると、彼女の下半身はちゃんとそこにあった。傷ひとつついていないし、汚れもない。念入りに揉めば骨と筋肉がぐにぐに動いて、問題なく機能していることを伝えてくる。

「し、シキちゃん、待つて……あんまりおなかは……最近運動できてないから、ちよつとぷにつてきてるからあああ」

満足いくまでこねくり回し、ギブアップの声が上がったところで手を放す。

ミナトは腹部をかばってテーブルまで退避した。テーブルの上では放置されていた朝食二人分が湯気を上げている。

「ほ、ほんと、どうしたの……?」

「……やっぱり夢か」

「夢? あ、嫌だったら言わなくていいけど……」

「別に。言うほどじゃない、つまらない夢よ」

時計が示す時刻は午前七時過ぎ。日課である早朝の訓練を終え、小休憩としてうたた寝したはいいが、結果最悪な夢を見てしまった。体も汗ばんで気持ち悪い。

シャワーを浴びたいが、それは食後にしよう。

パートナーと共に食卓について手を合わせる。

「んー、おいしい! 配給される食材とか炊き出しのレパートリーも増えてきてるし、復興が進んでるって感じでいいねえ」

「どこで復興を実感してんのよ」

先日成人したというのに、ミナトは日に日におとぼけ感が増している気がする。まあ、そうなるのも仕方ない気はするが。

2021年4月16日現在、人間はドラゴンから勝ち取った平和の中で生きている。日々呑気に過ごしても咎められない程度の余裕が、

ここ霞が関にはあった。

\* \* \*

『グッドモーニング！ 時間は八時！ トーキョーのみんなはもうウェイナップ？ 今日もDJチエロンが国会議事堂第一スタジオから元気いっぱいハッピーなチューンをメニメニお届けするよ！』

天井の四隅に設置されたスピーカーから、弾けるような声が飛び出した。

太陽が目を刺激して自分たちを起こすなら、この声は耳から気持ちよく覚醒を促してくれる。白髪と褐色肌のコントラストがまぶしい女性を思い浮かべながら、のんびり眠っていた人間が起き上がり始めた。

「人助け」を信条とし、裏表のない笑顔で駆け回る古菅チエロン<sup>フルスガ</sup>。人々から尊敬と信頼を集める彼女の放送は目覚ましとして一定の需要があった。訛り混じりの陽気なトーンに、彼女と付き合いのある者は今日も元気だなあ、と表情筋を緩める。

『オケイ、それじゃあサツソクいっちゃうよ？ かけちやうよ？ 今日日のファーストチューンは第七居住区の怯えていた男サンからのリクエスト！ Twinkleで「いつもそばに」……』

人気のポップスが流れ出すのを合図に、朝の空気が活気付く。

人々が背筋を伸ばして挨拶を交わし始める一方、音楽が流れないように配慮されている大部屋も、違う意味での盛り上がりを見せていた。

国会議事堂、2021年から新しく人類の拠点となった場所の参議院本会議場で、大人たちの声飛び交う。

一度文明が崩壊し、生活水準が大きく下がってしまった東京で、どこから復興作業に手をつけるべきか。ひとつ意見が上がれば反対が飛び、やつと議決に進むかと思いきや待ったがかかり、話し合いは遅々として進まない。

「そんなことに予算を回すなら、まずは居住区の整備が先だろう！」  
「そうですね！ 子どもたちの教育だってまだまだままならないって言うのに……」

「いや、しかし包括的な復興政策としては情報網と交通網の復興が不可欠で——」

「それより電力不足はどうなるのー？ こないだの停電も、結局二日間も直んなかったし、こつちの対策も進めてもらわないとさあ」

「診療室の待ち時間が長くてのう……なんとかしてもらえんもんじやろうか……」

「皆さん、順番に！ 順番をお願いします！」

円を描いて弁を振るう老若男女に、昨年よりも白髪の増えた政治家……アリアケ議員が声を張り上げる。

密集する上に、とにかく自分の意見を聞けと押し寄せてくる人、人……通勤ラッシュの満員電車、炎天下の大都会での交通整備といい勝負だ。

アリアケ議員は千手観音でなければ聖徳太子でもない。政治家としてどれだけ優れた目と耳と経験を持っても、怒涛の大合唱を捌くことはできず、まずは一列に並んでと根気強く言い聞かせる。

詰問と紙一重の人の波を食い止める部下を眺めながら、壇上の奥に座る総理大臣、犬塚 源一郎は重く息を吐いた。

「……情けない話だ。あちらを立てればこちらが立たず。議論のひとつもまとまらない」

共通の敵がいれば人は団結するという。その説は人類滅亡の危機

が訪れたことで証明された。

2020年、人を喰らうドラゴンたちが地球に降り立ったその時だけは、世界で起きていたあらゆる問題が蚊帳の外になった。戦争に使われる兵器は全てドラゴンに向けられ、人種で争う余力も生き残るためにつきこまれた。それでもほぼ全ての国が陥落されてしまったが。目の上どころか死因となりかねないたんこぶが消えたはいいものの、かつての豊かさを取り戻す道程は険しい上に細かく枝分かれしている。

秒で生きるか死ぬかが左右される非常事態が去り、生活に余裕ができた途端、今の生活は不便だとか、娯楽が足りないとか、限りなく要望が湧いてくるのだ。

「二年前のように一致団結して困難に立ち向かうあのまとまりはもう望めないのだろうか……」

人々の矢印は点でばらばらな方向を向いていて、舵を取るのも難しい。船頭多くして船山に上るというが、議事堂という船はまだ海に漕ぎ出すことさえできていないように思える。

頭を悩ませる日本のトップは、どうしたものか、と隣に立つ線の細い白衣に視線を向けた。

「……キリノ君。ムラクモ機関の総長として、君の意見を聞かせてくれないか」

アドバイスを求めた相手はひよろりと背が高く、見上げた首が少し辛くなる。

美白というよりは、屋内にこもっていたがゆえの不健康な白い肌。使い込まれてメッキがはがれ始めている銀縁眼鏡。

一目で理系、頭を使うタイプだとわかる男性は、総長と呼ぶには少し頼りない八の字眉になった。頭が横に振られ、緑の髪がさらりと揺れる。

「……イヌヅカ総理。我々、ムラクモ機関はあくまで政府の一組織。政治について語る言葉は持ちません」

「またそれか……」

何度か声をかけはしたが、キリノ——桐野<sup>キリノ</sup> 礼文<sup>アヤフミ</sup>はそのたびに謙虚な言葉を返すだけ。イヌヅカ総理もたまらずかぶりを振った。

丸投げをするわけではないが、キリノは一癖も二癖もある人員が集うムラクモ機関の総長だ。人をまとめる経験がないわけではないだろうから、意見を求めるものの、いい返事はもらえない。

「去年のドラゴンの襲来から東京を……いや、世界を救ったのは君たちだ。本来であれば、君が復興の陣頭指揮を執っていてもおかしくないというのに……」

「僕は……いえ、ムラクモ機関は、そんな野心を持ってはいけません。我々はマモノ討伐をはじめとする、この国の危機管理組織のうちのひとつです。それ以上でもそれ以下でもありません」

「……だが、しかし……」

うじうじと食い下がるイヌヅカ総理にキリノは苦笑する。彼の気持ちはわからないでもないからだ。

頼られるのは嫌、というわけではないが、竜災害と政治ではまるきり畑が違う。未曾有の非常時において政治家は無力だったが、逆にドラゴン戦線で活躍した者が政界でも輝くのかと問われれば否である。

ムラクモ総長と総理大臣の共通点は人の上に立つということだけで、他はまったくかすらない。互いに代役など務められないだろう。頑張ってくださいと念をこめつつ、キリノは総理の助けを求める視線に今度はきつぱりと告げた。

「ドラゴンの脅威が去った今、日本の復興の主演は市民たちです。こ

れからは総理を中心に市民の方々が団結してこの国をまとめていた  
だかなくては——」

「イヌヅカ総理！　ちよ、ちよつとこちらへ！」

言葉は壇上に駆け込んできたマカベ国防長官に遮られる。

嫌な予感を察知したのか、総理は眉間に刻むしわをさらに増やした。

「何だねいったい……」

「防衛費の予算配分の件で、市民団体が情報公開をと……」

国防長官に引きずられて総理が降りていく。

ますますヒートアップする議論から逃れ、キリノは会議場を後にする。

廊下に避難し、大部屋の扉を閉め、ふうとため息をひとつ。

人々の意見交換は熱が入りすぎて空回り気味だ。復興のために奮  
い立つのはいいが、他と衝突して、結果進まないなんて本末転倒だろ  
うに。

「会議は躍る、されど進まず……か」

疲れたと口にしてしまえばもっと疲労感が出てしまいそうで、喉元  
まで上がってきた言葉を呑みこむ。

絨毯の上品なえんじ色ですら胃もたれするように重く感じ、眉間を  
揉むキリノの視界に、純白のフリルがひらりと飛び込んだ。

「あつれー？　キリノさんじゃないですかあ！　おはようございまー  
す☆」

おはようございまーすと後を追って子どもの声が響く。

顔を上げると、ニコニコ笑顔の子どもが数人……違う、一人はおそ

らく成人前後だ。政治とはまだ無縁の子どもたちと一緒にあいさつをした女性、レイミが元気に手を振ってくる。

ムラクモ機関開発班所属の彼女は今日も今日とてメイド服だ。なぜその服装なのか、詳しい理由は誰も知らない。ちなみに彼女の年齢も誰も知らない。

「ああ、レイミくん……おはよう」

「大丈夫ですか……？　なんかすっごく疲れてるみたいですけど。あ！　そういえば、今日のモーニングチェロン、元気がもらえる歌特集だったんです。ほら、聞いてみますか？」

「え、い、いや……」

返す暇もなく目の前に携帯ラジオが突き出された。

レイミのお手製だろうか、ピンクに塗装されたファンシーな携帯ラジオはDJチェロンの声を廊下に流す。

『……ってワケで二曲続けてリスンしてもらったゲンキンもらえるソング！　ゲンキンもらってみんなハッピーだよね！　サイコーだよね！』

「ン」の一文字が加わっただけでよろしくない響きに聞こえるトークに苦笑いが出る。今日のラジオ放送始めの時はちゃんと「元気」と言っていないかっただろうか。

『それじゃあ続けてネクストソング！　……と思っただけど、ジャスタミニッツ！』

チェロンが珍しく真剣な声を響かせる。

おや、と思うのと同時に議事堂中に警報が鳴り、視界が痛々しい赤に染め上げられて思わず目を閉じた。

緊急事態を告げる非常灯の光だ。水を打ったように議事堂中が静



まり返り、チエロンの大きい声が一層よく通る。

『キンキュウのインフォメーション入ったよ。スカイタワーの周辺にメニメニマモノ出沒ってヤバいじゃん？ 危ないじゃん？ リスナーのみんなはキープオフ！ 近付くのはナツグツだよ！』

「ええ〜!？」

間髪入れずレイミが目を丸くした。

マモノの出没地点、東京スカイタワーはここ議事堂からは離れているが、自分たちと縁がないわけではない。

634メートルの空を突く塔。情報網の中核として調整がされている、東京ひいては日本復興の重要施設だ。マモノの大量発生は、間違いなくその遅延に響いてしまうだろう。

「東京スカイタワーって、今度みんなで復旧のお手伝いに行くところじゃないですか〜！ レイミ、心配ですう……」

「ようやく、彼女たちの出番か……」

「え？」

レイミへの挨拶もそこそこに、キリノは駆け出す。

向かう先は会議場とは反対方向にある、衆議院本会議場。現在は自分たちムラクモ機関の本部として使われている大部屋だ。

都庁時代からの顔馴染みである守衛に手を振り、扉を開く。

竜災害前のクラシックな雰囲気はどこへやら、目に入るのは、壁を隅まで埋める複数の大型モニター。血管のように床の上を流れるケーブル。山脈のように連なる資料のタワーだ。

すっかり戦闘専門組織の現場として煩雑になってしまった部屋の中央、額を突き合わせていた瓜二つの少女と少年がぱつと顔を上げた。

「キリノ！」

「つたく……遅いぞ、キリノ！」

手招きをする少女、NAV3。7と口をとがらせる少年、NAV3。6。愛称「ミイナ」と「ミロク」。今年で十四歳になる双子が自分を呼ぶ。

人工生命体という出自ゆえ同年代と比べるとかなり小柄な二人だが、近付けば去年と比べてだいぶ背が伸びていた。琥珀色の目に大人顔負けの知性を宿し、彼らはてきぱきと状況の報告をしてくれる。

「総理からの出勤許可は降りてる。これで三十五日と二十時間分の機動班出勤要請か。待ちくたびれたよ」

「出勤部隊はこちらに任せるとのことですけど、出勤するのは、もちろん……」

「ああ」

頷いて振り返る。

この言葉を、彼女たちの存在を口にするたびに、実は胸が弾んでしまふ。

非常時にうきうきするなんていけないとは思うけれど、今から自分が呼ぶのは、去年地球を襲った悪夢を覆してみせた自慢の仲間だ。その活躍を見聞きできる機会があるのは、嬉しくないと言い切れない。

息を引き締めて息を吸う。

ムラクモ機関総長、桐野 礼文は背筋を伸ばして大きく発声した。

「ムラクモ13班、召集だ！」

\* \* \*

日本政府の特務組織『叢雲機関』<sup>ムラクモ</sup>。そこに属する機動班の第13班、通称『13班』が自分とミナトをセットにした呼び方だ。

主な仕事内容は異形の獣「マモノ」の退治。2020年は外宇宙から飛来した脅威「ドラゴン」の討伐に命懸けで挑むことになった。

地球を滅ぼさんとしていた脅威の排除が完了すれば、自分たちはほぼお役御免。ドラゴンとの戦いで負った傷は一朝一夕で治るものではないため、静養も兼ねて13班は非常時以外は凍結されることになった。

「久々の召集じゃない？ 前に出動したのは……」

「先月だね。身体鈍っちゃってるかも」

最後に13班として活動したのは一か月以上も前だ。

寒さが和らいで春が顔を出し始めた先月、関西からこちらへ来たという一団をミナトが発見し、重傷者もいるとのことで自衛隊と共に救助活動を行った。今回はその時以来の出動になる。

マモノの大量発生ということは間違いなく戦闘になるだろう。日々運動はしているものの、戦うのは久々。勘が鈍っている可能性がある。気を付けて向かわなければ。

赤い腕章を左腕に通し、小走りで議事堂を移動する。

元自衛隊所属だった守衛たちの挨拶に応えて扉を開けると、自分たちを呼んだ上司と、ナビを務める双子が待っていた。

「キリノ、来たわよ」

「おはようございます。13班入ります！」

「シキ、ミナトくん、おはよう。今回もよろしく頼む！ さっそくで申し訳ありませんが、今回のミッションを説明します」

キリノの後を引き継ぎ、ミロクとミイナが前に出る。ほぼ毎日顔を合わせてはいるが、作戦のブリーフィングとして集まるのは久しぶりだ。

ナビの仕事ができることが嬉しいのか、二人は一度笑顔を浮かべ、真剣な表情に切り替わった。

「二時間ほど前、東京都墨田区押上においてマモノの発生事件があった。発生場所は東京スカイタワー……大規模なマモノの群れが発生していて、危険度はBランクだ」

「スカイタワー内部では、電子ネットワークの復旧工事が行われていて、多くの技術者が取り残されたままです。堂島リン陸将補率いる自衛隊の一個中隊によって救助活動が進められているけど……想定以上にマモノの数が多いため、救助活動は難航中です」

ミロクが口火を切り、ミイナが続ける。

マモノの発生自体は現在の地球では珍しくはない。けれど人海戦術を得意とする自衛隊でも手を焼くほどの規模はなかなか見られない。

ばらけてならともかく、一か所に数が集中するということは、それなりの原因があるのだろうか。

「堂島陸将補からの救助要請を受け、我々は13班の凍結を解除、本作戦に出動させることを決定しました。東京スカイタワーのマモノを討伐。及び、技術者の救助活動が今回のミッションです。君たちのことだから心配はしていないが……」

キリノが自分たちを……主に、体をまじまじと見つめる。やましきは一切なく、性別など意識していない保護者の目つきだ。

この体は、去年の真竜ニアラとの戦いで致命傷を負っている。実際に帰還直後は心臓の動きが何度か止まったらしいし、三途の川も渡りかけた。それを踏まえての視線だろう。

「二年前の戦いの後遺症で、本来の力はまだまだ出せないはずだ。そうでなくても久々の実戦。十分に注意してほしい」

「相変わらず心配性ね。脚ならもう大丈夫よ。なんならここで実演できるけど」

「あ、ちょ、ちょっとシキちゃん……!」

シキが片脚を振り上げようとして、ひらりとスカートが揺れる。

ルックス抜群の女子高生の脚。サイハイソックスを穿いているとはいえ、ふくらはぎから太ももまでの滑らかな線は嫌でも周囲の視線を釘づけにしてしまう。

ミナトは慌てて抱きしめる形で少女を押さえた。ミイナが素早くミロクの目を塞ぎ、キリノは固く目を閉じて手を前に突き出す。

「だ、だから! 君たちのことだから心配はしていないって言ったじゃないか。13班の実力は、僕たちが誰よりわかってるんだから。実演も結構です!」

「あっそ」

「私たちほんつと、爪一枚も欠けずに回復できたのが不思議な状態でしたもんね、キリノさんのお気持ちはお察しします……。なので、支援はよろしくお願いします」

「ああ、もちろんだ。僕たちの役目は、13班を信じてサポートすることだからね」

「私たちにとっても久しぶりだけど、腕はなまってないつもりです。後方支援は任せてください!」

ミイナが鼻を鳴らして赤い袖をまくってみせる。去年の戦いで13班のナビを務めたミロクがうなずき進み出て、握り拳を突き出してきた。

「満を持しての出動、だしな。13班復活を、見せつけてやろうぜ!」

「うん。この形でミロクにナビしてもらおうの本当に久々だな。先月の出動は途中合流って感じでドタバタしてたもんね」

「自衛隊一個中隊で対応しきれないってことは、去年のムラクモ試験

以上の数ってことね。ナビ頼んだわよ」

「了解！ それじゃあよろしくな、13班！」

「準備は万全かい？ それでは、ムラクモ13班、出動だ！」

キリノの号令でシキとミナトは素早く踵を返す。

「……いいな」

ミロクとアイコンタクトを交わして本部から出ていく13班の背中を見つめ、ミイナがぼつりと呟いた。

「ミロクは、13班の専属ナビ……ですもんね」

「寂しいかい？」

「……少し。けど、ミロクだけで大変なときは私も手伝いますし、ちゃんと私にもナビとしての仕事があるので、大丈夫です！ 10班には改めてヒムロが加わって、人員補充も考えているみたいでしたから、私も13班と一緒に戦う日はそう遠くなさそう」

「うん、そうだ。その時は10班をよろしく頼むよ」

言われずとも、というようにミイナは笑みを浮かべる。

ミイナもミロクも、昨年と比べると本当に感情が豊かになった。蒔いた種が翌日芽を出すように、子どもの成長は目を見張るものがある。

人は前に進むもの。傷も痛みも糧にして伸びることができる種族だ。13班も、医者には要観察と言われているが、あの様子なら問題ないだろう。

モニター前の席に走っていくナビたちを見送り、キリノも自分の持ち場へ向かった。

\* \* \*

国会議事堂と東京スカイタワーはそこそこ離れている。徒歩だと二時間はかかってしまう距離だ。

戦えない技術者もいるならのんびりしている暇はない。車を出してもらい、数十分で現場に到着する。

運転手に礼を言って降りる。装備を鳴らして走っていくと、入り口付近に立つ見慣れた赤髪がこっちに気付いて手を振った。

「13班！ 悪かったな、こんなところまで駆り出して。アタシたちじゃ、どうにも手がつけられなくて……」

「リンさん、マキタさん、お疲れ様です」

自衛隊の頭を務める堂島ドウジマ凛リン、そして副官であるマキタが手を振った。二人の使い込まれたアーマーが太陽の光に照らされて鈍く輝く。彼らの背後にあるタワーからは、マモノの咆哮と銃声の不協和音が絶えず響いていた。

「キリノたちから話は聞いたけど、今どうなってる？」

「中はかなりひどい状態だ。幸い死者はまだ出ていないが……それもいつまで続くかわからない」

「それでも今までは自衛隊単独でなんとかマモノを押さえ込めてたんだ。だけど、ここ何日かマモノが凶暴になっていてな。単独での討伐は難しいという判断になった。休養明け早々にすまないが、13班の力を貸してほしい」

奮戦しているであろう自衛隊員たちの雄叫びが、空気を伝ってこちらまで届いてくる。

マモノたちはいつにも増して活きがいらしい。ときどきパリン、と音を立ててタワー上階の窓が砕け散り、リンが眉間に手を当てた。

「本当は、おまえたちが活躍しない世の中が一番いいんだけど……なかなか、上手くはいかないな」

「大丈夫です、任せてください。最近運動不足気味だったので、ばりばり頑張ります！」

意気込んで握り拳を作るミナトに、自衛隊の二人は頼もしいなどと笑った。

この状況で最優先すべきは非戦闘員の保護。加えて、なるべく設備や機材を傷付けずに場を納める必要がある。

役割分担では迷わない。守ることが得意な自衛隊は技術者たちの護衛。マモノ討伐の専門家である自分たちは、一階から上までタワー内を巡って、マモノを徹底的に駆除していく。昨年の竜災害と同じパターンだ。

屋内に踏み込み、健闘を祈って入口で別れる。

マモノが侵入するのに最も容易な一階は激戦地と化していた。身に着けたデバイスを介し、体がムラクモ本部の機器と連携され、視界に数多の情報が流れ込んでくる。

文字通り蔓延っている敵性体に、なんぼのもんじやいと突っ込んでいく勇ましい自衛隊員たち。現場の暑苦しさまで受信したのか、通信機の向こうでうわつとミロクがたじろいだ。

『もうめちやくちやだな……！ コール、13班！ さっそく、マモノの反応を発見！ 戦闘状況、開始する！』

「了解」

「了解！」

キーツとけたたましく鳴いてウサギ型のマモノ飛び出してくる。硝煙と血の臭いにあてられたのか、赤い目は返り血でも浴びたかのようにな毒々しく潤って自分たちを映していた。

「ラビだね、二体だけなら私が——」



「いや」

ミナトがクロウを着けた指先を向けるが、それを遮ってシキが前に出る。

真つ先に飛びかかっていくかと思いきや、少女は肩を回し、手首足首をほぐし、興奮状態のマモノなど意に介さず準備運動を始めた。久々の戦闘で切り替えがうまくいかないのだろうか。

悠長に屈伸するシキにしびれを切らし、ラビたちは跳躍して牙を剥いた。

「あ、シキちゃんー！」

手を伸ばしながら既視感を覚えた。この場面、たしか去年のムラクモ試験の時にも見た気がする。あの時は確か、シキがキック一発でマモノを伸ばしてしまったのだ。

今回もシキは表情を変えずにマモノを迎え撃つ。ただし、

『シキ、脚は使うなよ！』

「わかってる」

構える武器は脚ではなく、ナツクルでもない。

——シャリン。

と、神楽鈴のような音が鳴った。

無風の水面に滴が落ちて波紋が広がる。大きな火事が慈雨によって鎮められる。そんな透明な響きで空気が揺らぐ。はちきれんばかりだった血生臭さが、清廉な金属音に浄化されていく。

小柄な体に不釣り合いな、大きく長いえんじ色の鞘。そこから抜かれたのは、明星の光を放つ刃。

天叢雲劍。一年前にとある男から継いだ——奇しくも三種の神器のひとつと同じ名を持つ長劍をシキは振りかぶる。

今も昔も変わらない。敵に対してすることはひとつ。

「ぶっ飛ばす」。……いや、今は、

「ぶった斬る」

走る軌跡。霞を晴らすように獣を両断する刃。

空をなぞる速さはそのままに、一閃はラビ二体をまとめて斬り伏せた。

命のやりとりは三秒にも満たず終わる。文字通りの一刀両断。

抜刀からとどめを刺すまでの動きは鮮やかの一言に尽きる。劍の切れ味は時間の流れすら断ち切ってしまったようで、振り抜かれた輝きや、それを長い髪が吸い込んで瞬く様がゆっくりと目に焼き付いた。

「ん、こんなもんか。……っと」

劍の重さに手を引かれ、シキはバランスを取るためにたたらを踏んだ。

その様子すら眼福で、ミナトはほあ、と間抜けな息を漏らしてしまう。

セーラー服の眩い純白。濡羽髪の深い黒。花のような、スカーフとサイハイソックスの赤。目の前の少女を形作る三原色だ。

それだけでも彼女は完成していたように思うけれど、そこに穢れを寄せつけない金加わったことで一層艶が出た気がする。背も髪も伸びて、表情は少し大人びて……うん、きれいになった。

錦というのだろうか、自分と同じく血肉を持つ人間なのに、まとう色彩がまるで違う。

「そういえばシキちゃん、今年で高校一年生だもんね……そうか、花も

恥じらう乙女という年代か、しかもまだ成長するっていう……」  
「何言ってるのかわかんないけど、その変態くさい視線やめてくれない。あゝーやっぱり違和感がある……」

花も恥じらい月も光を消す美少女だが、口から漏らしたのはちよつと締まりのないうめきだった。

したたる血を振り払って剣を納め、納得がいかないというようにシキは肩を上下させる。

なら拳を振るえばいいのに、なんて野暮なことは言わない。彼女はなんとなくで剣を振るっているわけではないから。

『シキ、体に違和感ないか？ けっこう大きく肩ぶん回してたけど』  
「問題ない。心配しすぎよ。キリノみたいね」

『おまえたちのバイタル管理はオレの重要任務だ。万が一は絶対に防がなきゃいけない。しつこいくら確認していくからな！』

ミロクの言葉には頷くしかない。

去年の竜災害での最後の戦い——真竜ニアラとの死闘。この戦闘で、シキの四肢は激しく損傷した。

常人を超越する異能力者、その中でも飛び抜けた頑丈さを持つデストロイヤーの彼女でも無事では済まず、体が「欠けた」のだ。

文字通り肉が抉れ、骨は砕け、血を失った。一命をとりとめたのちに調べたところ、その欠けによって数キロ体重が落ちていたという。

また戦えるようになるまで回復できたのは、彼女は飛鳥馬 式だから、としか説明しようがない。有言実行を体現する少女は、普通の人間ではまず再生すらしないだろう致命傷も、治すと決めたら治してみせる。

それでも、真竜との戦いはずっと尾を引いている。13班は長い間集中治療下にあったが、シキが手術を受けた回数はミナトの倍はあった。

医者たちに「実はサイボーグなのでは」と噂されるほど順調に回復

したシキだが、なにせ怪我のしかたも治り方も前例がない。

毎日診察を受けて、書類上は回復したと太鼓判を得られたものの、脚を激しく使うような戦い方は変えた方がいい、と医者側とムラクモ側で意見が一致した。

てつきり抵抗を見せるかと思っていたシキだが、説明を受けて返ってきたのは数秒の沈黙と「わかった」の一言。

彼女は前から剣を扱う練習をしていたが、これをきっかけにデストロイヤーからサムライへ転身したのだ。

デストロイヤーだった時と同じく、毎日の訓練は欠かさない。マサキから資料も借りて戦術の勉強もしている。

ミナトから見れば、金色の長剣も使い手のシキも無駄がなく、神楽のように美しい動きをしているのだが……サムライになった少女は納得していないらしい。

「そんなに悩むことないんじゃない？ 少なくともマモノ相手に苦戦はしてないし……巫女さんみたいできれいだったよ」

「何よその感想。私が嫌なのよ。なんかしつくりこないの」

『そもそも戦闘が久々だもんな。幸い、このマモノはそんなに強くない。戦いながらゆつくり勘を磨いていこうぜ！ 次はミナトも戦ってくれ。超能力は使えるよな？』

「うん、問題ないよ。……あ、あれ！」

離れた場所で一際激しい火花が散る。

何重にも重なって空気が破裂する音。銃声だ。

「くっそおおおっ！ 全然効かねえじゃねーか？ どうなってんだよおおっ!？」

「サスガさんの声だ！ 行こう！」

やけくそ気味になる男性の声も、去年の竜災害中、地下道で聞いたことがある。

現場に向かつてみれば、自衛隊員のサスガが突撃銃を発砲中だった。相手は昨年彼を救出した時と同じくドラゴン……ではなく、体長二メートルはいくかという巨大な狼だ。

カマチ隊員も加わり、嵐のような十字砲火クロスファイアが見舞われる。しかし狼はしなやかに跳ねて弾を躲し、あるいはその分厚い毛皮で銃撃を殺してしまふ。牽制はできるがダメージには至らず、といった様子だ。

「サスガさん、カマチさん！ 13班、加勢します！」

「応援か!? すまない、任せた……！」

自衛隊員の二人は素早く飛び退いた。入れ替わりに飛び出して、指先にマナを集める。

ミナトは幸い戦い方を変えなければいけない、ということにはならなかった。まだリハビリは終わっていないし全開には届かないが、炎も氷も雷も問題なく扱える。

鉛玉が通らないのであれば、属性攻撃はどうだ。

「っだあー！」

気合の一声と共に腕を振る。指の向きに従い飛び出したのは紅蓮の炎。銃弾のような音速は出せないが、マモノを捉えるには十分だ。狼型のマモノ、ウルヴァリンが炎に吞まれる。分厚い毛皮が激しく燃えて、獣の絶叫がフロアに響いた。

「まだ仕留めきれてないかも、お願いー！」

「ん」

立ち位置を入れ替える。シキが跳躍し、弧を描いて剣を振り下ろした。

毛皮が燃えて脆くなった肉に切っ先が埋まり、切断というよりは叩き、千切るような力強さでマモノの胴が泣き別れる。

戦闘終了。拳で猛威を振るっていた去年の姿が焼き付いているのか、カマチとサスガは剣を持つシキにまばたきを繰り返して、はあと息を吐いた。

「さすがは13班だな。あつという間に倒しちまいやがった……」

「はく、一瞬オレの天使ちゃんがお迎えに来てくれたのかと思ったぜ……」

「まーたおまえはそんなことを……ともかく、助かった。ありがとう」「いえいえ。それじゃあ私たちは先に進みますね。非戦闘員の方々の誘導、お願いします！」

終わったら飯でも食おうと手を振るサスガたちと別れて進む。

そこからの行動は、去年から散々繰り返してきた慣れたものだ。しらみつぶしに索敵し、マモノを発見次第討伐。シキの筋肉も、ミナトの神経も問題なく機能した。

時々自衛隊員や他のムラクモに出会っては戦いぶりを見てもらい、客観的にも体に問題はなさそうだと安心させることしばらく。群れの中でも巨大な個体を倒し、ミロクからOKサインが出た。

『敵反応、オールクリア。任務完了だ。堂島陸将補とキリノに連絡する。そのまま待機しててくれ』

「了解。……リンさんは去年三佐だったよね。陸将補ってどのくらいの階級なんだろう？」

「そもそも三佐って、三等陸佐のことでもいいのかしら。だったら少佐……？」 陸将補はその二つ、いや三つ……」

「三つ上だな。海外の軍だと少将になるよ」

「あ、噂をすれば」

照れくさそうなりんとにやにや笑うマキタが通路の曲がり角から顔を出す。後ろにはキリノもいた。タイミングをずらして来たのだろうか。

「ありがたいな、13班。これで電源確保の作業が進められるぜ」

「手ごわい奴さえ倒してもらえれば他のマモノはアタシたちで討伐できる。技術者の護衛は任せてくれ」

「マキタさん、リンさ……堂島陸将補、お疲れ様です！」

「中佐と大佐すつ飛ばして昇進したってことか。やるわね」

「こら、からかうなよ、その話はもういいだろっ」

おどけて敬礼をするミナトとシキのつむじにリンが拳を当てる。

相容れるまで時間がかかっていた去年の気まづさはどこへやら、すつかり打ち解けた様子 of 女性陣を見て微笑み、キリノは胸に下げたネームホルダーをマキタに見せた。

「僕はこのまま、ここで技術責任者として電子ネットワークの復旧作業に当たることにした」

「……って、いいのか？ ムラクモの総長さんが」

「まとまらない会議に顔だけ出してるよりは有意義だろうと思ってね。立候補させてもらったんだ」

「そこはアタシも同感だな。東京スカイタワーの電子ネットワークが復旧すれば、日本各地と連絡が取り合えるようになる。東京だけじゃなくて、この国全体の復興のために、情報インフラの整備は不可欠なプロジェクトだよ」

おだてるのをやめない13班を両腕でヘッドロックしながらリンが頷く。

市民の一部が漏らすように、停電や断水の発生など、まだ議事堂の生活には不安が残る部分がある。しかし議事堂だけ、東京だけとせまい視野で活動しているのは、都外のどこかで生き残っている人々に日が当たらない。

そうともキリノは同調して頷いた。

「通信の断絶した東京以外の地域にも、こうして復興の道を進んでいくコミユニティがあるはずだ。そして、そこにはきつと助けを待っている人がたくさんいる」

腕を広げれば荷物は高く積めない。歩みは少し遅くなってしまうだろう。けれどその分、遠く離れた場所で頑張る誰かにも手が届く。ドラゴンのような脅威はいないのだから焦ることはない。なるべく誰かを取り残すことなく地盤を整え、復興の道を進んでいきたい。そのための架け橋となるのがこのスカイタワーだ。

キリノは高く伸びる天井を見上げ、シキとミナトに視線を送る。

「通信網が元通りになれば、君たち13班も今までよりずっと忙しくなるだろう。それまではゆっくり、拠点で肩を温めておいてくれ」

「了解。今日は任務完了ってことで、私たちは戻るから」

「階段を駆け上がり続けて思ったよりも疲れちゃったので、議事堂で休ませてもらいますね」

「うん、今日はお疲れ様……ああ、そうだ！」

大事なことを言い忘れていたようだ。キリノが飛び出して呼び止めてくる。

「電子ネットワーク全面復旧の記念式典は、議事堂にも中継されるはずだ。僕も映るはずだから、ちゃんと見ておいてくれよー！」

ずるっ、とリンとマキタが足を滑らせる。

同じくずっこけそうになったミナトを受け止めて「子どもか」とシキはシンプルなツツコミを入れた。

『……はあ。おい、キリノは放っておいていいからな、さっさと帰還して、休息を取ってくれ』

「じゃ、帰るわ。キリノ、はしやぎすぎて中継中にこけたりしないで



よ」

「マモノはほとんど倒しましたけど、全てではないと思うので、皆さん気を付けてくださいね。お疲れ様です」

タワーの復旧作業に関しては手伝えることはない。機械の扱いは門外漢だ。ここからはキリノたちに任せよう。

外の景色を眺めつつ、スカイタワーを降りていく。マモノの叫びは聞こえない。まだ物陰に潜んでいる可能性はあるが、危険な個体はいないだろう。入る前よりはずっと静かになった。

議事堂に到着すると、久しぶりに出勤時の装備を見たためか興奮気味の子どもたちが駆け寄ってくる。普段なら高く抱き上げるなりジャイアントスイングなり遊んでやるところだが、戦闘で体が汚れているのでやんわり遠ざけて屋内に入った。

『おかえり、13班！ キリノから辞令が届いてる。……13班は本日をもって復帰。今後はムラクモ機関の一員として、国会議事堂に駐留せよ……だつてさ。まあ、二人とも他の奴らと一緒に議事堂で生活してたからそこは変わらないけど』

「復帰？ てことは、今使ってる場所は……」

『議事堂の地下にあるムラクモ居住区に個室が割り当てられてる。引っ越しだ、荷物まとめておいてくれ！』

個室での生活になるのは都庁から議事堂に越してきて数か月ぶりだ。大部屋でスペースを割り当て、大人数で共同生活を送っていた身としてはありがたい。

周りの人が羨ましがるからあまりはしやぎすぎないようにと釘を刺される。その数分後、ミロクと合流してシキとミナトはムラクモ居住区へ案内された。

「はい、ここに13班の部屋だ」

ミロクが扉を開けて目に入った内装に、おお、と目を見張る。

清潔感のある白、談話用のソファにマガジンラック、石張りの床に大きく刻まれたムラクモ機関のマーク。

緑色の壁と床で落ち着いていた都庁の部屋とはまた雰囲気が違う。人々の喧騒から離れたためか、地下なのになんだか空気が新鮮になった気さえした。

「広いわね。二人だけでここ使つていいわけ？」

「いいんだよ。装備とか荷物とか、資料でスペースが埋まるだろ？」

それに機動班は重労働なんだから、羽伸ばしてもらわないとな。何かあったら、ターミナルで呼んでくれ。今日久々の実戦だったんだし、ゆっくり休んで疲れをとってくれ」

「やった！ これぐらいスペースあるならもうちよつと私物持ち込めそう」

今まで使用していた生活スペースから荷物を運び、これはあつち、あれはそつちとミロクの指示のもと片付ける。

小さな引越しがひと段落したところで、少年ナビは仕事中には見せない、迷うような表情を浮かべた。

「あ、あのさ……」

「うん？」

「……今日は久しぶりに13班のナビができて、嬉しかった。じゃ、じゃあ……おやすみ！」

こちらが反応するよりも早く、ミロクは入り口に衝突して部屋を飛び出していく。

数秒後、顔を真っ赤にした彼は戻ってきて包みを置いたかと思いきや、また有無を言わせず走り去ってしまった。

ミイナもそうだが、ナビの双子は素直になると決まって赤面してしまふ。

初めて出会った時よりは大人っぽくなったが、小柄なのも相まってまだかわいらしさの方が目立つ。頭を撫でてやりたいなあと思いつながらミナトは笑った。

「もーかわいいなあ。相変わらず照れ屋さんなんだからー」

「追いかけるのはやめてやんなさいよ。……これひのまる弁当ね。夕飯に食べるか」

さつさとシャワーを浴びて着替え、自分が使うベッドを決めて明日の予定を確認する。

スマートフォンをはじめとした端末にスケジュールの記録はされているが、心配性なミナトは愛用の手帳に文字を書き込んでいた。彼女がページをめくった際に小さな紙切れが落ちたため、気付いていない持ち主に代わってそれを拾う。

「ミナト、これ——」

名前を呼んで渡そうとして、ちらりと見えた紙片の記述に手が止まった。

丸みのある単純な文字。とめ・はね・はらいは控えめで、荒事を好かない女性の人となりを表すような字だった。

そんな字で複数書かれているのは、六桁の数字。

同じようにいくつか並ぶ漢字と、その上に——

「……」

「ん？ シキちゃん、呼んだ？」

「……そこ、虫いるけど」

「えっ!!?」

ベッドを指差せば、今日一番の大声を上げてパートナーは飛び上がる。暴れ牛のような勢いで衝突され、二人まとめてベッドに転がっ

た。

「嘘、やだ、どこ!？」

「嘘」

「え?」

「だから、嘘」

「……なんで??？」

「なんとなく」

「も……!」

ミナトは自分を下敷きにしたままへなへな脱力した。彼女の指から手帳が抜け、シーツの上に落ちる。

それを素早く開き、紙片を挟んで元の位置に戻す。

直後にパートナーは体を起こした。もう、と怒った様子で自身の肩を抱く。

「虫苦手なの知ってるくせに……意地悪しないでよ」

「あんただってたまにちよっかいかけてくるでしょうが。やり返しただけよ」

心当たりがあるのかミナトは口をつぐみ、少し拗ねた様子で自分のベッドに戻る。

……手帳に触れたことは気付かれていないようだ。聞こえないようにため息を吐いた。

嫌なものを見てしまったと思い、直後に首を振って訂正する。

2020年で一生分、下手をすれば人生数回分の厄介を経験したのだから、誰にだって秘めることの二つや二つはあるはずだ。その存在に気付いてしまっても、目くじらを立てて取り除くことが正解とは思えない。

ただ、放置するのもいい気はしない。

「ミナト」

「んー？」

着崩れから覗く黒ずんだ背を見て、パートナーの名前を呼ぶ。

パジャマを着直しながら振り向くミナトはいつも通りのアホ面だ。汚い物なんて何も知らないような、気の抜けた笑顔。

「13班復帰ってことは、また面倒ごとを押し付けられるってことよ。パンクする前に適度にガス抜きしなさいよね」

「え、いきなりどうしたの？」

「私は慣れてるからいいけど、あんたは限界あるでしょ」

「んー……これでもちよつとは成長したよ？ まあ、心配してくれてありがとう。電気消すね」

室内灯を消し、ベッドに潜り、枕に頭を預ける。

静かになった部屋で、おやすみなさいとミナトの声が聞こえた。おやすみと返して目を閉じた。

\* \* \*

新しい部屋に移り、人の視線を気にせず快適に眠れるはずが、今朝と同じく嫌な夢を見た。

止まない悲鳴と怒号、引き裂かれる肉、赤い雨、霧散する命。怒りに吞まれ、体の制御がきかなくなる。

視界が真っ赤に染まったところで目が開く。中途半端な時間に、最低最悪の気分で覚醒してしまった。

「……………くそ」

汗をぬぐって部屋を抜け、階段を上がり、議事堂の入口に立った。穏やかな風が吹いている。広場に築かれたバリケード付近に立つ見張りの自衛隊員も、あくびをしながらのんきに立ち話をしている。なんてことのない日常だ。これからも当然続くであろう、復興途中の町並みにある、小さな人間の小さな拠点。眺めるうちに、うるさかった鼓動は落ち着いていく。

問題ない。明後日……日付が進んだから明日か。明日にはスカイタワーが再稼働し、拠点も町もより騒がしくなるだろう。

嫌な考えなんて無駄にパフォーマンスを下げるだけだ。早く眠って、また嫌な夢を見たら、思う存分叩きのめしてやろう。

大きなあくびをこぼして、シキは自分たちの部屋に戻った。

Count 1. 幕は静かに上がる \*

「あ、あの！ ちょっと待ってくださいーい！ きゃっ!!」  
「ぶあっ」

朝の支度を済ませて部屋を出た直後、誰かに衝突されて床にすっ転んだ。

窒息しそうなので起きてほしいが、人を下敷きに行っていることにも気付かないのか、上にいる女性は「眼鏡……眼鏡！」とわたわたしている。

手で床を叩いて抗議する。ミナトが女性の腕を引っ張り上げ、彼女は悲鳴を上げて飛び退いた。

「すいません……すいません……！ あの……13班……ですよね？」  
「ああ、髪が乱れて……ごめんなさい！」

慎重な手つきでこちらの髪と服を整え、女性は涙目で謝罪を繰り返す。

彼女が何度も頭を下げるたび、スーツに押し込められた女性らしいふくらみがブウンと揺れる。なるほど、鼻と口を密封していたのはこのふたつの塊か。

ミナトが初めてドラゴンを見た時のような顔で自身の胸をなでているが、たぶんくだらないことしか考えていないので無視しよう。

「もう謝らなくていいから。あんた誰？」

「わ、私は……ムラクモ1班所属の苦木 とまぎ シズカと、申します……」

「ああ、その腕章……見たことない顔だけど、新人？」

「は、はい。私は事務方というか、調整役というか……秘書つて言えばわかりやすいですかね？ つ、つまりは全然偉くない普通の新人ムラ

クモです！ よろしくお願いします！ 今回はその、13班のサポート役に任命されました」

通信機の向こうから「報告書作成とか、13班じゃなくてもできそうな仕事とかな」とミロクが付け加えた。

それは助かると頷いた。なんせムラクモは仕事が多すぎる。

インフラ整備や設備の補強・拡充、要救助者の搜索と保護などなど、東京を中心とした復興作業は内容が多岐にわたる。

専門的などころはそこに精通した者に任せるしかない。けれど、竜災害後の地上ではまともに身動きがとれやしない。

最初に越えるべきハードルであり、最大の難関であるのがマモノの存在だ。まず一般人は太刀打ちできない。この時点で議事堂から外へ出られる者が限られる。

討伐が進んでいる地域でなら一般人でも活動できるが、昨日のスカイタワーのように何かの拍子に敵性体が発生する可能性はゼロではない。そのため、常に議事堂外での仕事はムラクモや自衛隊での確認・付き添いが必要になる。

次につまづくのは人や物の移動。人力よりも車両の方がはるかに効率がいいが、その車両が通るための道が荒れたり崩壊してしまっているため、まずはその整備から始めなければいけない。

食糧補充の探索や、私事で自宅に帰りたいという市民の護送も定期的に実施されるが、建物は高い確率で倒壊している。そうでなくても一度フロワロに侵食されたのであれば、目に見えない場所が脆くなつて刺激を与えた瞬間崩れる……なんてこともあるかもしれない。

何をするにもリスクが伴う現状、危険に対処できる人材の補助が求められる。自分たち13班を始め、「力」を持つ者へ要請が殺到するのは必然だった。

拠点を議事堂に移してからは復興への熱意がますます高まり、あちこちから声を掛けられる。昨年の怪我を考慮してキリノたちがセーブをかけてくれてはいるが、作業量が一般市民よりも多いのは明らかだった。



「社畜っていうと変だけど、実際働き詰めだもんねえ。ほんと猫の手も借りたいくらい……」

苦笑するミナトの顔にはほんのり疲労の色が浮かんでいた。

力仕事で体力を使った後は進捗記録と報・連・相が待っている。いつどこで何を<sup>w</sup>どの段階<sup>1</sup>まで進めた<sup>H</sup>のかの管理がずさんだと、各組織間での引継ぎや連携が取れず、あらかじめ立てられた作業計画にいくつも支障が出る。

この作業は仕事が多ければ多いほど発生する。つまり、引っぱりだこ状態である自衛隊やムラクモ機動班は事務作業量もかなり多い。貴重なPCを支給してもらっているが、正直焼け石に水レベルで割に合っていない。

とにかく腕が足りず、目が足りず、脳が足りず、口が足りない。体がいくつかあっても追いつかない。多重〇分身の術が使えればいいのにという眩きが漏らされたのは一度や二度ではない。

そうして忙殺される日が続き、昇天しかけの人員が散見され始めてしばらく。議事堂を回す者たちの全会一致で、各組織の増員・人事の見直しが行われたらしい。「オレとミイナも協力したんだ」とミロクが少し誇らしげに言った。

『シズカは今年1班に配属されたんだ。試験の成績ダントツで良かったんだぞ』

どどん頼れよとミロクに紹介され、シズカは改めて頭を下げた。

『顔合わせも兼ねて13班をムラクモ本部に連れてきてもらおうと思っただけけど……そういうえば、シズカはちよつとそそっかしいんだったな』

「すいません、なんか緊張しちゃって……。アスマさん、シバさん、詳細はムラクモ本部でお話ししますので……こちらへ、どうぞ……」

『おい、そつち参議院会議場の方だぞ!』

「あああ、すみませーん!」

子ヤギのようにふるふる震えるシズカを見て、シキはムラクモ試験時に挙動不審にしていた相棒の姿を思い出した。

「去年のあんたに似てるわね」

「え、そうなの?」

軽口をたたきながらムラクモ本部に入る。

離れたナビの席からミロクとミイナが見守る中、シズカは背筋を伸ばして気合を入れ直し、アンダーリムの眼鏡の位置を調整しながら資料を見た。

「あ、改めてよろしくお願いいたします! 私はこれから13班の秘書として、できる限り13班をサポートしていくつもりです。何か困ったことがあったらなんでも言ってください! では、さつそく……今後のスケジュールについてですが……現状のスケジュールでは、スカイタワー復旧まではフリーになっていますね」

「今は特別仕事はなさそうってこと?」

「そ、そうなるかと」

仕事がなければ特別な連絡事項もない。つまりは余暇だと。

こちらとしては喜ばしいが、気合を入れて臨んだ手前、シズカはすることがないという状況に焦りを感じたようだ。

白い手が汗を流して資料をめくる。バインダーを指でなぞりながら各フロアの状況をぶつぶつ呟き、あつと彼女は顔を上げた。

「そういえば、チェロンさんが、クエストオフィスの案件がたまってるって言ってました。お手伝いすると喜ばれるかも! クエストオフィスはエントランスにあります。一度覗いてみてください!」

「了解。まあいつもと同じってことね」

「スカイタワーの稼働準備で議事堂の人も少ないしね。できるお仕事から片付けていこうか。シズカさん、行ってきますね」

「はい、いってらっしゃい！」

ボリユームのある巻き毛を揺らして手を振るシズカに送り出される。

クエストオフィスに顔を出すと、おなじみ古菅チエロンがカウンターに身を乗り出してきた。

「ハイ、13班！ 久しぶりじゃない？ チョーシはソウグツ？ ヒマしてるから手伝いたい？ センキューベリマツ！ キャットのハンドも借りたかったところだよ！」

「いやまだ何も言っていないわよ。その通りだけど」

「相変わらずクールだねヒーロー！ ジャパニーズセイ『クーデレ』？」

「違う。……クーデレって何？」

反射的に否定したが言葉の意味をよく知らないのでミナトに尋ねる。彼女はなぜか菩薩のような顔をして静かに笑うだけだった。たぶんまたくだらないことを考えているので放っておこう。

「依頼がたまってるんでしょ？ 私たちが済ませるから寄越して」

「シユア！ ラジオ放送スタートしてからリスナーからの依頼がヤマ盛りテンコ盛り？ 困ってるヒトまだまだメニメニいるんだね！ 特に急ぎの依頼はこの三つ！ ハリイアップで片付けちゃって！」

建築班のミヤに、機動10班のヒムロ。それから、議事堂とは別に渋谷で生活しているSKYのネコ。依頼人たちはいずれも面識のある面子だ。

ミヤの依頼は議事堂内で片付けられそうなので、ネコとヒムロから

のそれは手分けで受けるかと相談する。特別難しい内容ではないので、日が暮れる前には終わらせられそうだ。

ミナトはネコからの依頼、ヒムロからの依頼は自分が受けることになり、議事堂前広場で別れた。

\* \* \*

渋谷は相変わらず緑が生い茂っている。コンクリートまで貫く強靱な樹は、帝竜スリーピーホロウがこの街を根城にしたことで生まれただものだ。

街の看板でもあったショッピングビルは壁がすっかり苔むし、つる草が垂れ幕のようにかかっている。グリーンカーテンと言っただったか。

今回、シキとは別れての行動だ。ナビはシキの方にミロクが、自分にはミイナがついてくれることになった。通信機越しに少女の声が聞こえるのがなんだか懐かしい。

『ミナト、SKYのアジトは右の大通りを直進です。マモノの反応はないから、焦らず行きましょう』

「ん、ありがとう。マモノがいないなら戦闘もないかな？ ミイナのナビ久しぶりだなー」

『そうですね。シキはヒムロと一緒に国分寺に向かっている途中だそうですね。向こうはミロクに任せて、私たちも依頼を完了させちゃいましょう』

「了解！」

小走りで大通りを通り、木の根をくぐり、たまに登って進んでいく。

外からは出口のない迷宮に見えるのか、この樹海は一部から踏み込みたくないと遠ざけられている。

そもそも竜の巣窟ということで一級の危険地帯ではあったが、敵を排除してからは穏やかな森になった。アスレチック感覚で体を動かせるし、皮肉にも文明が破壊され、緑が増えたことで空気が美味しい。虫対策をしていけば過ごしやすい場所だとは思う。

空の青と植物の緑を反射して涼しい色に染まった都会を歩いていると、見覚えのある人影が二つ見えた。

ああ、そういえば初めてここで出会い、開口一番にカツアゲされそうになったんだよなあと懐かしみながら声をかける。

「イノさん、グチさーん。こんにちはー」

「ん？ あつれー？ もしかしてミナトじゃない？ ウツソ、超久しぶりじゃん！」

振り向く女性は相変わらず派手なギャルメイクで、隣の青年も金に染めた髪を目印のように輝かせている。崩壊した街で自分らしさを貫く姿はたくましささえ感じさせる。

竜災害を共にして一気に打ち解けたSKYの男女はノリよくハイタッチをしてくれた。

「もー、たまには顔出しなよね。ネコたちだって、寂しがってたよー？」

「もうドラゴンはいなくなっただし、これからはちよいちよい顔出せよな！ って、その袋、もしかして……マキの薬、届けに来てくれたとか!?!」

「そうです。これだけあればしばらくは大丈夫かなとは思いますがどう？」

「ウツソ、マジで？ 超嬉しいんだけど！」

肩から下げた大きなエコバッグには、ネコからの依頼を確認した医務区からの支給品が入っている。傷薬から内服薬一式、あとは食生活の補助も考えて野菜系の保存食などなどだ。

S K Yメンバーの体調が芳しくないと助けを求められたが、こちらもちらの傷病人で手いっぱい。外では事故や戦闘が発生しないとも言い切れないため、昨年からナースのもとで医療を勉強していたミナトが顔見せついでに配達を請け負った。

「マキ、マジ辛そうだからさ。早く届けてあげてよ!」

「マキはこの奥でネコとダイゴが付き添ってるからよろしく頼むわ! いやーそれにしてもマジ懐かしいな。しばらくぶりに、そっち顔出すかな。ムサシさんのスカートの中身、ご無沙汰だもんな」

「……ちなみに議事堂にいる人たちのスカートには私がヒートボディをかけておいたので、やるならそれ相応の覚悟をしてめくってくださいね?」

「えっ」

「冗談ですよ。失礼します」

なんだよーとグチの声を背に受けながら通りを進む。異界化した渋谷はどこも似たような緑の景色で、しばらくぶりに来たので土地勘に自信がない。ミイナに地図を表示してもらいながらネコたちのもとへ向かう。

荷物が小枝に引っかからないように注意を払って大通りへ抜ける。コンテナやドラム缶で区切られた一角を覗くと、うんうん頭をうならせる背中が連なっているのが見えた。

「おーい、大丈夫ですかー?」

「え……ミナト!」

人だかりに声をかけると、いの一番に女性が振り向く。S K Yの古株で、自分と同じ数少ないサイキックである友人だ。

ネコという愛称の通り、パーカーのフードの三角耳がびよこりと揺れる。眼鏡越しの猫目が嬉しそうに輝いて、笑って手を振れば彼女も笑った。

「ネコ、久しぶり！」

「にゃー！ 来てくれたんだ！ たぶんアタシの依頼っしょ？ こっちこっち、マキの調子がよくないの！」

再会の言葉を交わして手を繋がれる。誘導された先、話の中心にいたのはSKYメンバーのマキという女性で、彼女とねんごろな仲のシノが優しく背中を撫でていた。

なるほど、彼女の顔色は他より血の気がない。寝不足なのか、目の下にはクマも浮いている。

ネコと同じくリーダー格であるダイゴとも挨拶を交わし、役に立ちそうな物はないかとエコバッグを覗き込んだ。

「これ看護師さんたちからです。栄養補給のドリンクとペースト、サプリメント。あと貧血予防の薬と……」

「こんなにいっぱい……ありがとう！ マキってば、もう三日何食べても吐いちゃう状態です」

「咳も発熱もない。風邪や感染症の類じゃないとは思いますが……」

怪我はなく心音は正常。体温は三十六度で喉の奥は腫れていない。薬と一緒に預かってきたチエックシートで症状を確認するが、ダイゴが言うようにこれといった問題はない。

視覚情報との連携でミイナにバイタルチェックも行ってもらうが、やはり傷病の兆候は見当たらないとのことだ。

「うーん……胃腸だけピンポイントに調子が悪いのかな。何かの食べ物にあたってしまったとか。心当たりある人いませんか？」

「……つつても、SKYの食事はみんな同じだし」

症状が嘔吐ならある程度原因は絞られる。最近の食生活を尋ねると、料理当番のメンバーが献立の書かれた紙を取り出した。

「ここ最近の食事メニューは……昨日が、デヴオカレー……昨日が、ろおばあうどん……。そんな、変なモン食ってないよなあ？」

「……原因それでは？」

「え？ いや普通に食べるしウマイんだぞこれ！ 一緒に食べたオレらは平気だったし！ 何なら食ってみろよ！」

「結構です！ ちよ、ローパー持ってこようとしなくていいですから！」

ナマコもかくやのぬめりを放つローパーが近付くのが耐えられずに走り出す。

食文化の違いでわあぎやあ騒ぎ始めるミナトたちを尻目に、チエツクシートを覗いてネコたちは首を傾げた。

「ここじゃどうしても限界あるよね……やっぱ、議事堂の医務区に連れてった方がいいのかなあ」

「いや、せっかく渋谷に戻ってこれたんだ。マキも、ここにいたいって言ってるし……」

「う……ん……私……ここで……シノと一緒に、いたいよ……」

渋谷はSKYにとっての家。家族みんなで暮らす居場所。ドラゴンが去って平和になったというのに、ここから離れてしまうのは嫌だとシノとマキは首を振った。

2人は帝竜の鱗粉によつて錯乱し、家族同然の仲間を手にかけてしまった過去がある。彼らを弔うという意味でも、この地に生やした根は抜きたくないと男女は訴えた。

気持ちは痛いほどにわかる。ダイゴは薬の種類を確認してうなずいた。

「……まあ、この状態のマキを霞ヶ関まで運ぶのも骨だ。しばらくはこちらで様子を見るさ。……おい夕オ、貴重な食糧で遊ぶんじやな



い」

ダイゴの言葉に仰天したミナトは派手にすっ転ぶ。好き嫌いは人それぞれなので文句はないが、あのうねうねぬるぬるねとねとした生物Xを食べるなんてドリアンよりも抵抗がある。ドリアン食べたことないけど。

そんなまさかと驚愕して立ち上がれずにいるところをネコが助け起こしてくれる。握った指先を見て彼女はにまりと頬を緩めた。

「んふふ、使ってくれてんだ、にゃんクロー。そっちはスカイタワーの復旧とか派手なことやってるらしいけど……どう？ みんな元気にしてる？」

「う、うん、みんなネコに会いたがってるよ」

「にゃはははは！ ネコちゃんはみんなのアイドルだからね〜♪」

「あ、あと、アリアケさんも元気だって」

「……それは、知ってる」

「こいつ、ちよくちよくオヤジさんとは飯食いがてら、会ってるからな」

「にゃ……にゃああああつ！ い、言わないでって言ったっしょー!? ていうか、別にオヤジじゃないし！ オジサンだし！」

幼少時に誘拐されムラクモに流れ着いたという経験を持つネコだが、去年、アリアケ議員との出会いにより「有明 寧子<sup>アリアケ</sup>」という彼女本来の戸籍が明らかになった。

一波乱あったものの、彼女は「寧子」ではなくSKYのネコとして生きる、とアリアケ議員に宣言した。

父親である議員もそれを受け入れ、二人は距離を置いてそれぞれの時間を過ごしている。といっても、今の話を聞く限り、すっぱり縁が切れたわけではないらしい。

交流していながら素直になろうとしない様子に肩をすくめると、「とにかく〜」とネコは無理やり話を切り上げた。

「今回はありがと！ これ、お礼だから持ってってよ」

「では、また会おう」

「はい。それじゃ、今日はここでおいとましますね」

見送ってくれると言うので、お言葉に甘えておしゃべりしながら渋谷入口へ向かう。

互いの生活圏の整備で忙しく、顔を合わせられる機会は少ない。次に会えるのがいつになるかわからないということもあつて、足取りは自然と小さく、遅くなった。

渋谷の入口が見えてきたところで医務区からの伝言を思い出す。ナースのナミとユキの名前を出すと、昨年しつこく世話をされたネコは呆れた笑い声を漏らした。

「みんなSKYの子たちは無理してないかなって気にしてるよ。『今回は薬を送ってあげるけど、次からは議事堂の医務区へ来ること！』だって」

「はいはい、魚減らしてくれるならいいよって伝えておいて」

「もー。けっこう本気で心配してるんだからね？」

「わかつてるってー」

『……あの、ネコ。マキの体なんですけど……』

控えめな声量でミイナが会話に混ぜつつくる。なぜだかわからないがいつもより覇気がない。道に迷っているような、授業中に教師にわからないところを質問するようなためらいを感じる声だ。

「え、ミイナ、どうしたの？ もしかして何かあつた？」

『いえ、ミナトの目にもムラクモ本部の機器にも異常はないです、傷病の類はない、という分析結果は間違つてはいないと思うんですけど……』

「じゃあ、大きな問題があるわけじゃないんでしょ？」

『そう、ですね。はい』

歯切れの悪い返事にネコと揃って首を傾げる。

通信機の向こうでうんうん唸るミイナに、心配しないでとネコが握り拳を作った。

「だーいじょうぶ。マキはアタシたちの家族だもん。ちゃんと見ておくよ」

『わかりました。何かあればすぐに議事堂へ来てください』

「じゃあね。みんなも体調に気を付けて」

「あんたも、働きすぎて倒れないようにねー」

またしばしの別れだと思うと名残り惜しい。けれどまだやることがある。仕事も立場も忘れてみんなで遊ぶのは、復興がひと段落してからだ。

ネコが豆粒くらいの大きさになるまで手を振り、ミナトは踵を返した。

\* \* \*

カツ、と容赦のない太陽光線が車窓を貫通して肌に突き刺さる。

「そうそう試験に適した場所がないのはわかるけど……なんでよりによって国分寺なのよ」

ざりざりとタイヤが砂を踏み固める音、熱気のコもった車内、滲んてくる汗。不快指数は勢いよく上昇中だ。耐えきれずに愚痴をこぼす。

現在地は国分寺の砂漠手前。異界化によつて草も生えない砂地に

なった熱帯にて、2021年度のムラクモ試験が実施される。

ヒム口からの依頼はその試験での監督補助だ。候補生たちとは現地で集合することになっている。

「この俺が新人教育とはな。ナガレの方がよほど向いてたんだが……」

とこぼしてヒム口は頭をかくが、そこに昨年見せたヒステリックさはなかった。

ナガレが倒れ、ガトウが死に、アオイまでいなくなり、2020年に事実上解散となっている機動10班。かつて竜災害の最前線に立ち、13班を導いてくれた班は、今は名前が残っているだけだ。

先達三人への敬意は深く刻まれているが、機動班所属の人員はこの班へ編入されることに対して及び腰になる。……誰も表立って口にはしないが、メンバー全員が殉職してしまったことに嫌なものを感じているのだろう。

なので、ガトウの死に絶望していたヒム口がこの班の所属になるのは予想できていなかった。ニアラを倒した後、彼はドラゴンがいないならとムラクモに戻り、なんだかんだ言いつつ訓練生の教官まで務めている。人生、何が起きるかわからないものだ。

「わざわざ悪いな。自衛隊からも聞いている通りだ。ここ最近、マモノの活動が活発化している。俺たち機動10班に急ぎ人員を増強することになったんだ」

「戦闘分野は万年人員不足だしいいんじゃない。10班は嫌だ、なんてバカなこと言う奴らじゃなくてよかったわね」

「ああ。訓練生はまだまだひよつこだが、一応、作業員や一般人の中から戦闘技術の高い者だけを選抜している。渡した資料に目を通しておいてくれ」

「ん」

渡されたりリストに載っているのは三名。いずれも一般人の中に紛れるには目立つ程度の異能力を持つているらしい。

運動能力情報技能  
デストロイヤーにハッカーにトリックスター。バランスも問題なさそう。試験で実力を認められればそのまま機動班として働き始めることになるだろう。

「次はいよいよ最後の実践試験なんだが」と言っただけ息を吐き、ヒムロは呆れたように頭を振った。

「訓練生たちがどうしても、13班の戦いぶりを一度この目で見てみたいって言うもんでな。……今回はシバがいないようだが、大丈夫か？」

「何その言い方。マモノ相手なら苦戦しないわよ。舐めないでくれる」

「そんなこと言ったって、おまえ、相当パートナーに入れ込んでる。去年のあれを見ればわかる」

口笛を吹いてとぼけてみせる。

忘れたとは言わせないぞというように、ヒムロは東京タワー攻略作戦の話掘り返してきた。人竜ミヅチに叩き落され、展望台から一気に下層まで戻ってしまった時のことだ。

「人を足代わりに呼んで、『ミナトが死ぬかどうかの瀬戸際だ、断つたらミヅチの前におまえを殺す』なんて脅してきた。ドラゴンより恐ろしい人間がいるなんて初めて知ったぞ」

「結果、私もあんたも今こうして生きてるでしょうが。不満でもあるの？」

「不満じゃない。これでシバに何かあったら、おまえが……、……。……去年の俺みたいになる可能性がある。それを心配してるだけだ」

過去の自分を振り返って思うところがあるのか、ヒムロは洗面を作って黙ってしまう。

移動中の車内はせまくて手足を伸ばせないので手持無沙汰だ。退屈を紛らわそうと、改めて候補生のリストを読み込む。

最後の一人まで読み終えて、なんとはなしに用紙の端をいじると、ペリつと音がした。

「……ん？」

「どうした」

「……候補生って四人いるの？」

リストは薄い紙が二枚、ぴったり重なっていた。慎重にはがしてめくってみると、二枚目の上部にぽつんと一人分の情報が載っている。

バストアップの写真を指さすと、ああとヒム口はうなずいた。

「ついこの間見つかった異能力者だ。都庁時代からいたらしいんだが……先日指名乗りをあげてきて、急遽参加してもらったことになった。訓練は見えていないから、実力は未知数。合格したとしても配属先がまだ検討されてない……もしかしたら13班に入る可能性もあるかな」

「まさか。ていうか、未知数の奴を試験に放り込んでいいの？」

「それもあつて依頼を出した。万が一の時のサポートと、新人たちに一発、おまえの力を見せてもらおうってわけだ。……かつこいいところ、見せてやってくれ」

笑ってこつちを向く姿に、かつての10班メンバーが重なる。

池袋で見せた気弱さはどこへやら、すっかり頼もしくなってしまう。ミナトもそうだが、臆病な人間が腹を括った際の変わりようは目を見張るものがある。

窓の外を見れば、一面の砂丘と帝竜によって作られた施設が視界に入った。ここからは歩きになりそうだ。

先に到着していたらしい車の傍に駐車し、乾燥した空気の中を歩く。

砂に埋もれて錆びついた歩道橋の一部を越えて進んでいくと、ムラクモ支給の作業着をまとった男女三人と、ほぼ飛び入り参加となったもう一人がいた。人数を数えたヒムロが声をかける。

「よし、全員いるな。これから——」

「うおおおおおッ！ 見ろッ！ 伝説の13班のお出ましましたああッ！」

「自分は13班に憧れて、機動班を志したであります！ 本日はよろしくお願いいたします！」

「ブン……13班なんて、ただ運が良かっただけじゃない。私があのときムラクモだったら、もっと上手くやれたわよ……」

「お喋りはそこまでだ！」

思い思いを口にする面々に教官が喝を飛ばす。うん、例年の試験の如く個性的な奴らが集まっているのはわかった。

「今回の試験は実戦形式……命を落とす可能性もあるということも忘れるな！ よし、ではこれより13班のシキに模擬戦闘を行ってもらおう。おまえら、よく見ておけよ？ シキ、準備はいいな」

「あの、13班は二人編成でしたよね？ もう一人の方はどちらに……？」

「相方は別の仕事。こっちは忙しいの。新人のお守りに必要以上の時間は割けない——」

『シキちゃん！ こっちの用事は終わったよ、ダイゴさんたちがよろしくだって！ そっちはどう？』

少しだけ挑発してやろうと思ったところでミナトから通信が入った。大きな声は耳からはみ出て国分寺の風に乗り、候補生たちがおっと湧き上がる。

出力をスピーカーに切り替え、ミナトは音声のみであいさつした。明るい声で敬語を使う様子は小学一年生の自己紹介みたいで、この場

で最も緊張感がない。試験前の緊張した空気が一気に社会科見学のそれに変わる。

『そっかー、サイキックはいないんですね。異能力者の中でも数が少ないって言われてるもんなんー』

「あのねえ、今から体張った試験が始まるのに空気緩めてどうすんの」  
『え、緩めたつもりはなかったんだけど……』

「こうして駄弁ってる時点で緩んでんのよ。ちよつとは自覚を——そこ、しやがめ!!」

えっ、とミナトと候補生たちの声が重なる。

候補生たちの背面、盛り上がった砂丘から四足歩行の影が飛ぶ。ほぼタツクルの形でヒムロが候補生を押し倒し、直後にその上を影が通り過ぎた。

砂を蹴散らして着地したのは、巨大な二本の牙を持つデスジャツカルだった。嫌な名前の通りの肉食獣で、マモノの中では凶暴な部類だ。

「ミロク、他のマモノは？」

『大丈夫、この一体だけだ。ヒムロと候補生は距離を取れ！ 13班、戦闘開始!』

マモノがエンジンをかけるように前脚で砂地を踏み鳴らす。

昨日と同じく一刀両断といきたいが、相手は脇差ほどの長さがある牙を持っている。ただ剣を振るだけではそこに当たって防がれるだろう。

「……拳こぶちの方が早いか。ミロク、脚は使わないから!」

『え? あ、おい!』

剣を納めて腰を落とし、これ見よがしに人差し指を曲げてみせる。



デスジャツカルはわかりやすく吠えて、一直線に飛びかかってきた。

幸い今日は風が弱く、砂嵐もない。視界は良好で相手の動きも捉えやすい。

伸ばされた前足をつかみ、腕を回して獣を宙でひっくり返す。

「——っふ!!」

丸見えになった胴に思い切り肘打ちを入れ、下敷きにして砂地に叩きつけた。一切緩めず肘を食い込ませればバキツと響く粉碎音。

圧迫された骨肉は形を変えて容れ物を破裂させる。折れた骨が紫の皮膚を突き破り、デスジャツカルは抵抗する間もなく息絶えた。

『生体反応消失。戦闘終了。……もう、びっくりさせなよ』

「剣は使うけど格闘を捨てるなんて言っていないでしょ。キリノたちにも許可は取ってる。私はやりやすいように戦っていくから」

『あああ、そっちに行けないのがもどかしい……! シキちゃん怪我していないよね?』

「余裕よ、舐めんな」

「……おまえ、今あの人は何したかわかった?」

「え、いえ、まったく……」

「わ、私はわかったわよ。あのくらい、当然よ……」

昨年のムラクモ試験の開始時と同じく、秒で終わったデモンストレーションと肉塊と化したマモノに候補生たちは呆けるだけだった。生理現象か冷汗かわからない滴が彼らの頬を伝う。

次はおまえらの番だとヒムロが手を叩いて空気を切り替えた。

「ターゲットはデスジャツカル! ターゲットを撃破した後、ここまですべて戻ってくる。これが採用の条件だ! 無理だと思えば素直に戻ってこい! それでは一回、散開!」

それぞれの背を見送り、さてとヒムロが振り返る。視線が心配性の大人たちと同じように脚に向かっていたので、膝を叩いて問題ない旨を示した。

「いきなり武器を仕舞うから驚いたぞ……悪いがもう一仕事、手伝ってくれるか？ あいつらプライドだけは一人前だから、無理して突っ込んで、へばってるだろう。マモノに食われちまう前に、へばった新人たちを回収して回りたい」

「了解。手分けでいいの？ 四人いるから二人ずつ？」

「ああ。危なっかしいと思う奴から見に行ってくれ。何かあったら呼べよ。そこまで離れてなければ瞬間移動テレポートですぐに行ける」

会話もそこそこに散らばり、候補生たちの様子を見に行く。

去年は自分とミナト以外の候補者もスムーズにマモノを倒していたが、今回、息巻いて試験に挑んだ者たちの実力は……、

「ちよ、ちよつとお待ちなさい！ この白旗が見えませんか？ か、完全降伏しているというのに……！ 攻撃をやめないとは……卑怯です！ も、もう……ぜえつ……自分は……」

「うおおあああアツ！ クソツ……出でよ、究極奥義ツ！ スカイハイリユニジョンツ!! って、出ねえ……出ねえよ！ だってそんな技……持つてないんだもんよおッ！」

「馬鹿野郎！ 無茶して突っ込むなって言っただろ！」

……そこかしこから流れてくる発言とヒムロの怒声を聞く限り、現時点ではいまひとつと言ったところか。

途中、斜に構えていたトリックスターの女も見えたが、ターゲットを討伐後、相打ちという体でダウン。漁夫の利で襲いかかろうとしていたマモノを蹴散らし、ヒムロに預けた。

残るはあと一人。他三人と比べて始終黙っていたのであまり印象

に残っていないが。

「確かこつちに……あ、」

いた、という眩きは乾いた風にさらわれる。

風上から流れた声を聞き取ったのか、風下にいる四人目の受験者はわずかに顔を動かしてこちらを見上げた。

派手な服装だ。他三人の機能性重視のつなぎとは違う。表が青、裏が紅色のネオンカラーのコートに、手首に輝くメタルアクセサリー。ムラクモよりはSKYになじみそうな出で立ち。

そして自分の黒髪とは正反対の、色素のない白い髪。

男にしては線が細い方で、なんだか不健康そうな印象を受ける。ターゲットのデスジャツカルを前に構えもとらずに棒立ちしているし……見る限りでは、戦闘に向いているとは思えない。

こいつやる気あるのかと疑った瞬間、突風が吹く。彼の四又に分かれたコートの裾がバタバタはためくのと同時に、デスジャツカルが砂地を蹴った。

「！」

今までの受験者が苦戦していたこともあって反射的に飛び出す。

しかし砂丘を下りきる前に、突然デスジャツカルが宙で動きを止めた。牙は剥いたままなのに目は虚ろで、崩れるように砂漠に着地する。

何が起きたか把握する前に、受験者がすつと手を上げた。指先には青い光が宿り、またマモノの周囲にもわずかにその粒子が浮かんでいる。

彼が指を横に滑らせると、デスジャツカルはその向きに進む。逆に向ければまた従う。体を無理やりというより、命令を発する精神を弄っているのだろう。

人形のように対象を操る異能力。これは、

(ハツカーか)

電子のブルーライトを媒介に、対象に干渉する特殊な職業。知識はある程度あるが出会ったことはほぼない。間近で戦闘を見るのは初めてだ。

彼はハッキングしたマモノをしばらく遊ばせ、おもむろに取り出した円月輪チャクラムを投げる。武器は陽光に煌めきながら、毛皮に潜って獣の喉を裂いた。

暑さの中に血の臭いが加わって顔をしかめる。危機感なくマモノをしとめてみせた受験者も顔の前の空気を手で払い、気怠げな足取りでこっちに歩いてきた。砂にまみれた白髪をフードに仕舞い、舞い戻ってきた武器をキャッチする。

「これでいいんだろ」

「戻るまでが試験」

初めて交わす言葉はなんとも味気ない。そもそも教官の真似事なんてしたことがないから、こういうときに何を言えばいいかも知らない。劳いの言葉でも贈ればいいのだろうか。いや、特に必要ないか。

デスジャツカルが絶命していることを確認してさっさと戻る。国分寺の入り口で他の三人を介抱していたヒムロがこちらに気付き、ほうと顎に手を当てた。

「そつちはどうだった。見たところ怪我はしてないみたいだが」

「問題なし。ターゲットの討伐は確認できた」

『特に苦戦してなかったぞ。ちゃんと倒して戻ってこれたし、基準は満たしてるんじゃないか?』

ミロクと一緒に結果と詳細を伝える。通信機の方こうでミナトが小さく拍手をした。

『無傷で倒せたんだね、すごい！』

「あんただだって楽勝でしょ？」

『いや、私が試験受けたときと比べたら全然違う』

「ああ……」

去年のムラクモ試験を思い出す。シキが半ば強引にパートナーにしたミナトは確かにへっぽこだった。戦闘経験がなければ根性も体力も技術もなく、自分の火で自分の服を焦がして半べそになっていた姿が懐かしい。

合格者が出たのは喜ばしいが、自分が面倒を見ていた三人が結果を出せなかったのが少し悔しいのか、ヒムロは額に手を当てて息を吐いた。

「四人中三人脱落、か……見ての通り、散々な結果だ。まだまだシゴキが足りなかったみたいだな」

「ラビならともかく、デスジャツカルはハードル高かったかもね。しかたないんじゃない」

「機動隊の人員を増やして少しは13班を楽にと思ってたんだが、まだまだ隠居には早そうだ。しばらくは不動のエースで、間違いないな。協力感謝する。それじゃあ議事堂に戻るぞ！ 各員、車に乗れ！」

「てわけで、今から帰るから」

『うん、お疲れ様ー！』

『おつかれ！ 人助けもいいけど、今日は、そろそろ体を休めた方がいいぞ！』

\* \* \*

議事堂へ帰還後、シズカに呼び出されてムラクモ本部に向かう。

先に戻っていたミナトと話していた相手が顔を向ける。ツンツンとどがったまなじりが特徴的な少女。けれどその尖った唇から紡がれるのは大人顔負けの語彙だ。初対面の人間は必ず目を丸くするだろう。

「久しぶりだな、シキ。実戦復帰したと聞いたが、どうだ、調子は？」

そう、久しぶり。この少女とは昨年から面識がある。依頼を通して研究室で顔を合わせたのだが、印象が強すぎて忘れてたくても忘れられない。

その時理不尽に怒鳴られたことを思い出し、約半年越しの意趣返しとして口角を片方だけ上げてみせた。

「見たことないお子様がいるわね、どちら様？」

少女の隣に控えるシズカがぎよつと目を見開き、ミナトが苦笑いでこつちを見る。

まなじりをわずかに痙攣させ、少女——エメルは錆びついた笑いを浮かべた。

「……………。おもしろい冗談を言うようになったな。それとも、久しぶりすぎてこのエメルの顔を見忘れたのか？」

「冗談よ。久しぶり、エメル。調子は悪くはない」

「悪くはない、も結構だが、常に絶好調とあってほしいものだ。人員を補強したとはいえ、対ドラゴン戦において戦力になるのは、実質13班だけなのだからな」

「いつもこんな感じですよ」とミナトがシズカに耳打ちしている。棘で

互いをつつくようなコミュニケーションを見慣れていないのか、シズカは半信半疑といった様子だ。

エメルがキリノと同じく組織でも高い地位についているからか、彼女は恐る恐る声をかけた。

「実は私、エメルさんにお会いするの初めてなんです。ムラクモ機関最高顧問……ですよね？　前アメリカ国防長官で、先の竜災害の時に来日したと伺いました」

「ここ数か月は東京を離れていたからな。知らない顔もずいぶん増えた。……それにしても最高顧問とは大層な肩書きがついたものだ」

「で、ですが……アメリカが七匹の帝竜の殲滅に成功したのは、エメルさんの功績だって……」

「勘違いするなよ？　私は戦闘員ではないからな。ただ、アメリカ軍に知識と策を与えただけだ。それはムラクモでも同じこと。……13班。私が長期間、議事堂を留守にしていた理由を伝えていなかったな」

「そういえば、何かやってるとは思ってたけど」

「特に詳細も告げずに出ていっちゃったもんね。何も知らない」

ミナトと顔を見合わせて頷く。エメルは年始の拠点移動後もしばらくムラクモと共に活動していたが、春が来る前に用事があると言って姿を消した。

非現実的ではあるが、彼女はドラゴンに滅ぼされてしまったどこかの星から流れてきた「ヒュプノス」という存在らしい。昨年、SKYと行動を共にしていた不思議な青い髪の女性、アイテルもヒュプノスで、二人は姉妹だそうだ。

その経緯ゆえ誰よりドラゴンに詳しく、誰よりドラゴンに憎悪を燃やすエメルは、当然のようにムラクモ機関にも手を貸すようになった。今回の数か月の外出も、ドラゴン関係の仕事だとか。

「……おまえたちが『真竜ニアラ』を倒してのち、ドラゴンはこの地球

上から姿を消した。だが、真竜はあと六体存在する」

「そーいやそんなこと言ってたわね」

去年散々殴りつけてやった金色の竜、ニアラ。あいつが自身を表す言葉として使っていた「真竜」というのは、ドラゴンたちを統べる親玉という意味らしい。

てつきり竜災害を乗り越えて後は復興だけと思っていたのに、そんな竜が残り六体……すなわち未来で竜災害が六度発生するのだとエメルは言う。驚きと怒りで手入れ中だった剣を床に突き刺してしまった。

真竜がお行儀よく順番に来るとも限らない。二体以上が同時に攻めてくることだって考えられる。

何事も、壊すのは一瞬だが築き上げるにはかなりの時間が必要だ。復興にだってまだまだ足踏みしている状態なのに、また来られては地球がもたない。

ミナトが若干顔を青くしてエメルを見る。自分と同じく対ドラゴンの最前線に立っていたのだ、竜の再来なんて言葉を聞いていつものようににこにこ笑うことはできないだろう。

「……本当に、あと六体も？ あんな事件があと六回も起きるの？」

「ああ。ニアラを退けたとなれば、なおさら目をつけられるだろう。奴らがいつ、またこの星に狙いをつけ飛来するかわからん。私はその時に備えて、各国に残る殺竜機関と連携して次へ向けた研究、開発を進めている。いずれ、おまえたちにも協力を仰ぐことになるだろう。心構えをしておいてくれ。……よし、話は以上だ。スカイタワーはキノノに任せておいて問題ないだろう。ご苦労だったな」

「そ、それでは、13班はお部屋に戻ってお休みください——」

「ちよーつと待っタ」

エメルが切り上げ、シズカが頭を下げる前に待ったがかけられる。この独特なイントネーションからしておのずと相手は限られる。



嫌な予感がして回れ右をしようとしたが、それよりも早く肩をつかまれた。

歓迎していない様子もお構いなしに出てきたのは研究員のマサキだ。他と同じように久しぶりと声をかけてくる彼は、今も異能力者のスキル研究・開発を担当している。

昨日の任務も今日のムラクモ試験の詳細も、ナビ達と一緒に見ていたヨとマサキは目を輝かせた。

「13班、おやすみなさいの前に戦闘についての話をしよう！ シキもミナトくんも、現時点で問題はないようだが……生きるための人間の機能というか、キミたちの体は肉体の再生、機能の回復にほぼ全てのエネルギーを回していたようだからネ、昨日今日と戦ってみて、あまり力が出なかつただろう？」

「……まあ」

「そうですね。去年みたいな本気はまだ出せません」

「うんうん、真竜すら返り討ちにして見せたキミたちの能力は今も眠ったままダ。それを呼び覚ますことができるように私から饞別だヨ！」

白衣をひるがえしたマサキは何やら怪しい動きをして自身の体をまさぐっている。

知らんふりして帰ってきたが、こちらの体を気遣ったのことは、突っぱねるのはよろしくないだろうと思っただけだ。

どこにやったかな、なんていい加減なことを言いながら彼がとりだしたのは、やはりというかハズレであってほしかった注射器だった。

「ムラクモ特製注射―Ⅱダ！ 研究班が改良を重ねた特別栄養剤、体に害がないことは証明済み。さあ、早い者勝ちだゾ」

「いや、いい」

「失礼しますおやすみなさい」

「なんで逃げるんだい!? こんなに素晴らしい即効栄養剤、ムラクモ

以外じゃ発明できないヨ！」

「いいって言ってんでしょ！ こつち来んな！」

「だからなんでそんなに針が太いんですか!? どうしても打たなきゃいけないなら医務室勤務の方に打っていただきたいです！」

パートナーと肩を並べてムラクモ本部から飛び出す。

異能力者の脚力で引き離せると思ったが、マサキは通信機を使って指示を出し、行く先々で他の研究員が「大丈夫だよ！ 痛くないから！」と繰り返して追いかけてくる。

ついには弱みでも握られているのかヒムロまでもが駆り出され、瞬間移動には勝てずに捕まってしまった。

南無、と両手を合わせるミロクとミイナ。ご愁傷様、と目を逸らす自衛隊。打たれたことがあるのか見なかった振りをして遠ざかっていく他のムラクモたち。

電灯を反射して光るのは、ある意味真竜よりも驚異的な、極太の銀の針。

シリンダーに映る自分たちのひきつった顔が、息を荒くするマサキが迫る。

「痛くない、痛くないからネ……！」

「やめろバカ、放せ！」

「嫌だ、嫌だああ注射は嫌あああ」

ブスリ。

ツギヤーーーーー!!?

嗚呼無常。神は死んだ。こんな痛みが世に存在しているのか。いやよくない。

リハビリ中にも何度か注射は打たれたが、ムラクモの人間にされるそれはわざとかと疑うほど痛い。

悶絶する自分たちとは対照的に、マサキはやりきったと汗をぬぐっていた。

「ぎつとこんなところサ！ 技をもっと極めて去年の輝きを早く取り戻すんだ。期待しているヨ！」

「このヘタクソ！ 栄養剤だけじゃなくて注射器と注射の腕も改良しろ！」

「死ぬ……いだい、死ぬ……」

栄養剤を打ったはずなのに疲労が押し寄せてきた。さわやかに笑って去っていくマサキにヤジを飛ばし、クエストオフィスに依頼完了の報告をして自室に飛び込む。

「くそ、大して運動してないのに疲れた」

「そんなことないよ、マモノとの戦闘があっただでしょ？」

寝支度がなあなあにならないうちにシャワーを浴びてベッドに倒れる。ミナトが髪をとかしながら渋谷の様子を話して、そっちはどうだったと尋ねてきた。

「今日のムラクモ試験の合格者ってどんな人だったの？ 私音声通話だけだったから顔は確認できなくて」

「どんなって……。男」

「男……もうちよつと何か」

「青い服着た男。ハッカーだった」

ハッカーかあ、と間延びした声を出しながら、ミナトはドライヤーのスイッチを入れる。熱風に押されるように首を傾げるあたり、彼女もあまり詳しくないのだろう。

ハッカー。情報技能S級。重度のメカマニアから選出されるサポーター。

その力はサイキックに似た特異性を持つが、操るのは属性ではない。ハッカーという名の通り、彼らは対象に干渉する能力を持つ。

機械の操作だけなら一般人と変わらないが、彼らを異能力者たらしめるのは、生物や空間にも及ぶ干渉力だ。実際、今日の試験でフードのハッカーは敵へのクラッキングを成功させていた。

敵をジャックし、味方の能力を底上げする技。サイキックがマナそのものを操る魔術師なら、ハッカーはマナを介して特定の対象を操る電子の術師。物理以外の手段で戦況を整える、トリッキーなポジションだ。

しかし、あの男、何だろう。

頭の隅で何かが引っかかる。去年、S K Yとの接触で自分の過去を思い出していった時のような、時をさかのぼるような違和感。

「何だ、どこかで……」

「……？　もしかして知り合いだったりする？」

「知り合いじゃない。でもまったくの初対面でもない、気がする」

「んー、まあ、合格したならどこかの任務で一緒になるかもだし、その時にあいさつすればいいんじゃない？」

「ん」

それもそうか。すぐに思い出せないことに貴重な睡眠時間を割くのはもったいない。今日は早めに寝てしまおう。

電気を消してふとんをかぶり、天井をぼんやりと見つめる。

昨日今日と久々の戦闘で気が昂ったからか、マモノを屠った感触がまざまざと体に残っている。

相手の肉体を破壊したときの、臓器がひしゃげて破裂する衝撃、骨の折れる音。眠ろうと目を閉じてても何度もフラッシュバックして収まってくれない。

痙攣する腕を握って力を込める。鈍い痛みと熱を与えれば、嫌な感覚は時間をかけて引っ込んでいった。

「……」

寝返りを打ち、枕もとに立てかけてある武器を手を取った。

音を立てないように鞘をずらし、灯火のような黄金色に自身の瞳を映す。

ひたりと剣身に触れば手の熱が瞬く間に吸われ、不自然に強くなっていた鼓動も鎮まる。剣を戻して、極力動きを抑えてもう一度ふとんをかぶった。今度はちゃんと眠れそうだ。

(つたく、毎日何なんだか……)

ここのところ……いや、今年に入ってからだろうか。かなり前から嫌な夢を見る。

誰かが死ぬ。目の前で命が貪られていく。それが何度も繰り返される、吐き気を催す悪夢。

最後には決まって、視界が真っ赤に染まったところで目が開く。鳥肌が立って、体温が上がって、五感が異常に過敏になる感覚が続く。気持ち悪くてたまらない。体の中に自分の知らない誰かが入っているみたいで嫌だ。

夢も見ないくらい深く眠ってしまおう。睡眠をしっかりと取れば、この違和感も消えるはずだ。

枕に後頭部を押し付け目を閉じる。

しつこくこびりつく疼きを無視して、シキは眠りに落ちた。

2021年4月18日の朝はざわめきに満ちていた。

今日は日本一高い建造物、東京スカイツリーが再稼働される日だ。外を見れば真っ先に目に入る首都のシンボル、その復旧に浮き足立つ空気がムラクモ居住区にも流れ込んでくる。

顔を洗って着替えている最中、ターミナルの起動音が鳴る。

朝から一足早く作業をしていたらしいミロクの笑顔が画面に映った。「おはよ、13班」とあいさつをして、時計を指差しながらスカイツリーの方にも問題がないことを教えてくれる。

『これからタワーの電源復旧と、復興記念の式典が始まるみたいだ。本会議場で現地との中継をつなぐから、13班も参加してくれ。本会議場はエントランスの東側だ。ムラクモ本部とは逆だから間違えるなよ!』

「はい。今からそっち向かうね」

身だしなみを整え、はねる髪をなでつけて部屋を出る。

見知った顔とあいさつを交わしてエントランスに上がれば、同じく式典に参加する大人たちが陽気に話しながら参議院側の会議場に向かっていった。参議院会議場の大部屋は連日の会議以上の声が飛び交っている。

席を埋めているのは政治家をはじめ、ムラクモや一般市民の中から復興に尽力した者たちだ。中には開発班のケイマやレイミもいて、最前列にはイヌヅカ総理がうきうきといった様子で腰掛けていた。

「いよいよですな、総理！」

「ああ……いよいよ日本復興計画ののろしが上がる。これは偉大な一歩だよ！」

「おはよ。ケイマ、隣空いてるなら座るわよ」

「おつ、おはよう13班！ いいぜ、埋まっちゃう前に座れよ。いやあ、長かったような短かったような……お、俺もこのプロジェクトに協力したんだよな……ちよつとただけだけど……。ううっ……なんか感無量だぜ……！」

開発班の若手は情緒のエンジン全開で汗と涙を流す。

対して、横にいるレイミは青色吐息気味だった。膝の上には祝いの場にそぐわぬ愛用の銃器があつて、彼女は我が子を慰めるように銃身をなでていた。

「あゝあ……レイミも記念式典、出たかったですう……せつかくレイミのグレネリンコたんを全国の皆さんにお披露目するチャンスだったのに〜」

「俺たち代表して、ジジイが行ってるだろ。つかグレネリンコたんはしまつとけ！」

「レイミさん、それ誰かに注意されなかつたんですか……？」

いつもより入念に磨かれて光を放っているライフルグレネードを指摘すると、レイミはてへつと舌を出した。愛らしさよりも底知れぬオーラが漂ってくるのはなぜだろう。

もうすぐ時間になってしまふし、追及はしないでおこよう。席に座つて時間が進むのを待つ。

数分経つて、時計の針が予定の数字に重なった。

アリアケ議員が前に出て、マイクをいじる。ハウリングが響いて何人かが顔をしかめたが、眠りかけていた者もいたのでいい目覚ましになつただろう。

「ご愛嬌、と言うように議員は微笑み、鼓膜のケアを意識してか穏や

かな声で部屋全体に呼びかけた。

「皆さん、ご静粛に。間もなく、スカイタワーからの映像が届きます。スクリーンにご注目ください」

巨大なスクリーンが会場全員の視線を浴びて点灯する。けれど画面は何も写さず、黒と灰色の砂嵐を流すだけ。

最初は接続中か、電源を入れた際の待機状態だろうと思い、一同は待った。

しかし三分経っても五分経っても、映像は流れない。

「どうしたんだね？ 機材の故障か？」

「いえ……おかしい、キリノ君との通信が……」

総理とアリアケ議員の会話からざわめきが大きくなっていく。

周りの人間が顔を見合わせ首を傾げる中、すぐ隣から音がしてミナトは反射的に横を向いた。

シキが机に手をつけて立ち上がっている。流線を描くまつ毛を大きく持ち上げ、彼女はモニターを凝視していた。

いや、凝視というより、そこから何かを感じとっているような。

「……シキちゃん？」

他の人間が向けてくる訝しげな視線は意に介さず。少女の体は前に傾いて髪は流れ、その隙間から見える瞳は画面の砂嵐しか映していない。

「……いる」

「え？」

何かを呟いたパートナーの顔を覗き込んで、ぞくりと背筋が震え



る。

本能に警告を飛ばすような赤。命に直結する血の色がふたつ。出血でも充血でもない。シキの瞳の色が真紅に染まっている。

少女の目は淡く薄桃がかった玉鋼の色だったはずだ。何度も近くで見てきたのだから間違いはない。

けれど、まばたきをしても目をこすつても、彼女の瞳は血の色だ。光の角度でそう見えているわけでもない。

何が起きているのだろう。少し、怖い。

ミナトはゆっくり手を伸ばして、硬直している少女のまなじりに手を伸ばした。

\* \* \*

スカイタワーの展望台で、自衛隊員がただただ空を見上げている。昨日も今日も天気は晴れで、浮かぶのは水彩筆で優しく触れたような雲だ。加えて、春を象徴する桃色の花びらがちらほらと宙に舞っていた。人が手を加えた場所だけでなく、土壌や植物も去年の汚染から回復しつつあるらしい。

穏やかな日差しがかぶっているヘルメットに熱を与える。

彼らは静かに汗を流した。こめかみを伝い、震えるまつげに弾かれ、顎の先からしたり落ちる。

脂混じりのそれが地面と潰れ、ぼたり、と粘着質な音が響いた。

「お、おい……嘘だろ……こんな……」

ばさり、と風が屋上に吹き渡る。

汗をさらうように吹いたそれは、自然のものではなければ人が起こしたものでもない。

鳥など遠く及ばない、巨大な翼が空気を捉えて押し出す音だ。

何度も嘘だと自身に言い聞かせる。しかし目の前のそれは消えてくれない。むしろ、ますます大きく近付いて――通信機に手を当て、ありつたけの声を出した。

「屋内班!! 堂島陸将補、応答願います!! あいつが、あいつが――」

一際強い風圧が押し寄せる。

黒い何かが視界を埋め、頭蓋が軋む感触がした。

\* \* \*

地響きのような重い音が響く。

未だ国会議事堂と繋がらないモニターから天井に視線を移し、リンは首を傾げた。

何やら様子がおかしい気がする。施設のどこかで不具合が起きているのだろうか。

「どうした? ゲーブルの断線か?」

「いいや、電圧が急激に低下しているようだ。機材の方は異常ないんだが……」

ワジは素早く配線や機器を確認していくが、目視での異常は確認できな

い。その横でキリノも通信機の様子を見ながら、マイクの向こうに呼びかける。

「国会議事堂! 応答願う! ……おかしいな、通信も遮断されてる……」

つい先ほどまでは何も問題なかった。発電装置も各機器も、トラブルなく稼働している。

専門家でも原因が判断できない事態だ。いったいなぜ――

「っ!？」

首を傾げる一同の横つ面を張ったのは、タワー全体を突き上げるように襲った揺れと、通信機から響く悲鳴だった。

『たっ……助け……あいつが……っ……あいつが、また……っ!ぎゃあああああ……』

「お、おい……!?! 屋上班! どうなってやがる!?!」

『ど、堂島陸将補……ダメです……ここは……もう……奴らが――』

激しいノイズが走り、マキタの呼びかけも虚しく通信が切れる。

「クソツ……! 大将! どうする!?!」

「緊急避難を開始! これより本隊は非戦闘員を誘導し、スカイタワーから脱出する!」

リンの判断は迅速だった。指示を聞いた部下たちもフロア中に散り散りになり、技術者や給仕の係員を素早く保護していく。

通信機から届いた声。並のマモノ相手に、去年の災害を乗り越えた自衛隊員が出すものじゃない。

焦燥を歯噛みして抑え、リンはマキタに安全第一だと前置きした。

「マキタ、おまえは屋上班の救出を頼む。……絶対に無茶はするなよ!」

\* \* \*

まなじりに触れた指先に反応して、シキが目を閉じる。すぐに開かれた瞳は、いつもの色に戻っていた。

けれど少女はミナトを見ずに踵を返す。同時に、ミロクの声が通信機を震わせた。

『緊急通信！ スカイタワーからの通信が遮断された！ 同時に未確認の飛行物体を観測！ 何らかの異常事態が発生している可能性がある！ 13班、急いで現場に向かってくれ！』

「ど、どういうことだ!? キリノ君……キリノ君!？」

「総理、落ち着いてください!」

総理とアリアケ議員の声、そして一気に曇り模様になったざわめきを背に浴びながら会場を飛び出す。

ムラクモ居住区の自室に戻って武器を手に取り、飛ぶ勢いでエントランスに出た。

「誰か！ 車運転できる奴!」

シキの呼びかけにいち早く反応したのは待機していた自衛隊員。そして好奇心旺盛なジャーナリスト。

「行かせてくださいっす〜!」と騒ぐジャーナリストが押さえられている間に車に飛び乗り、鞭で叩くように議事堂から発進した。

進行方向、青空にそびえる銀色の塔。遠目からでは何が起きているかは判断できない。

空に届かんばかりの建造物と異常事態。視界を横切る、去年変形したままの東京タワー。……嫌な物を連想してしまう。

目を閉じて瞑想すること数分、土煙を飛ばし、車はスカイタワー前で急停止した。

『おい、13班！ スカイタワー内部は通信障害が発生してる』

それだけじゃない、とミロクの声が震えた。

タワー入り口、舗装された地面や壁に、灯火のような赤い花が繁茂している。

忘れもしない。赤は赤でも、二度と見たくなかった赤だ。ミナトは思わず目を閉じてしまう。

「そんな……、これって！」

『この赤い花は……まさか……！ ……いや、なんでもない！ 今はスカイタワーにいる奴らの救助を最優先で考えよう。どこまで電波が届くかわかんないけど、ギリギリまでナビするから、気を付けて進んでくれ！』

「あつ、シキちゃん、待って！」

シキが何も言わずに、獲物を追う狼の如くタワーに飛び込んだ。

「13班現着した！ リンとキリノたちは！」

「展望台付近の階になります！ 技術者の避難誘導は、自衛隊にお任せを！ 13班は先へ！」

「こちらA班！ 天望テッキ340の避難誘導が終わりました。引き続き、B班との合流まで待機します。オーバー……」

中は一昨日のマモノ発生時と同じく騒がしい。けれど空気がまるで違う。限界まで張り詰めて、今にも千切れそうな糸が悲鳴を上げているようだ。

ひたすら廊下を走り続けると、グレーの装備で統一された自衛隊員たちに混ざり、白衣やブラウンのエプロンが視界に映る。キリノたち作業員の面々だ。自衛隊に守られる中、的確に指示を飛ばして避難誘導に協力している。

「みなさん、落ち着いて！ はぐれないように気を付けてください！  
全員揃って脱出しましょう」

「な、なんでこんなことに……全て順調に進んでいたはずが……」

「オレなんか、十年ぶりに作業着をおろしたってえのにさ。はあくあ  
……」

「……おまえら、無駄口はやめておけ。これからでけえ嵐が来るぞ」

「嵐いい……？」

「キリノ！ 出口への退路は確保した。技術者たちの誘導、任せても  
いいか？」

「ああ、もちろん！ 君たちはどうする？」

「屋上班の救出に向かったマキタの部隊との連絡が途絶えた……今か  
ら加勢に——」

「待った、私たちが行く！」

背を向けようとするリンにシキが割り込む。強張っていた面々の  
表情がこちらを見て和らいだ。

「13班！ 来てくれたのか……！」

『キリノ……堂島陸将補……！ 聞こえるか？ そこは危険だ。後は

13班に任せて、撤退してくれ』

「……わかった。残りの自衛隊員たちは屋上にいるはずだ」

ミロクの指示にリンが銃を持っていた腕を下ろし、一度目を閉じ  
て、開ける。

覗く眼光は目的をしっかりと定めていて揺るぎない。これなら屋内  
は彼女に任せて問題ないだろう。

「アタシたちは技術者を連れてスカイタワーの入口まで避難する。

……頼んだぞ、13班！」

「任せて」

「皆さん、気を付けてください！」

互いの無事を祈って走り出す。

階段を駆け上がり、時折飛び出してくるマモノを蹴散らし、疾駆する中、シキは前を向いたままミナトに呼びかけた。

「去年、ムラクモ選抜試験が都庁で実施されたのはなんでだか知ってる?」

「え、マモノが大量発生したからでしょう? 候補生だった人たちの実力を確認するために、討伐も兼ねて……」

「それよ。マモノは都庁のどこに発生した?」

「どこって……屋、内」

屋内で間違いないはず。自衛隊が市民の避難を完了させてマモノが外に出ないよう閉じ込めていたと、後にリンから聞いている。

今も昔も頼もしい自衛隊だが、ムラクモ試験当時に現場にいた戦力では、多数の暴れるマモノを屋内に誘導して閉じ込める、というのは無理があっただろう。

マモノはフロワロが放つ瘴気によって、異形に、凶暴になってしまった地球の原生生物。花も自立して移動する姿になり、汚物や微生物さえもスライムになって人間を襲う。煙のように現れる存在ではない。

正確に表すのなら、2020年の3月31日、大量のマモノたちは屋内に自然発生したのではなく、外から都庁の中へ入り込んだということ。

「そう。てことはあいつらのほとんどは、わざわざ『屋内』を巣にしたってこと。人質とった逃亡犯でもあるまいし、本能でそこに入って、居座ってたはずよ。で、その日、」

「……都庁に、あいつが来た」

言葉を引き継いで口にする。シキが頷く。

あの赤い怪物が現れる数時間前に、大量のマモノは集まった。まるで、主が舞い降りる舞台を整えるように。

マモノがドラゴンに襲いかかるところは目撃されたことがない。その爪と牙を、明確な害意と共に向ける相手は、自分たち人間だ。一昨日、局所的に発生したマモノの群れ。そして一際凶暴な個体の出現。

去年の、あの赤い悪夢をなぞって再現しているような。そんな、まさか。

震える肩を押さえつける。前を走るシキが振り返った。

「戻る?」

「へ……平気! 行こう!」

戻るなんてタチの悪い冗談、シキが口にするわけがない。気を遣わせてしまったことを情けなく思い、自身の頬を叩いて前を向く。

緩やかなカーブを描く通路を進むと、取り乱した様子の自衛隊員がいた。恥も外聞もなくし、身を寄せ合って腰を抜かしている。

「大丈夫ですか!?! 怪我は!?!」

「う、嘘だ……信じない……奴らは、一年前に13班が……」

呼びかけにも応じず、ぬいぐるみを盾にする子どものように突撃銃を抱え、自衛隊員はひたすら首を振るだけ。

「あ、あいつらが……あいつらが、また……うわああああーっ!!」

決壊する絶叫を合図に、空間が赤とオレンジに満たされた。

暖色の花卉に、煌々と燃える光の粒子。

これは、一年前にも見た光景だ。

周囲が闇に覆われ、空気がこの場から逃げるように破裂し、巨大な



影が通路をふさぐ。

激しくキーボードを叩く音が聞こえる。ミロクが何度もそんなと繰り返した。

『う、嘘だろ……だけど、この姿……！ この反応……！』

心臓を食い破るような衝撃が体を襲う。電流と錯覚するほどに激しく鳥肌が立った。

ズグン、と体中に刻まれた傷痕が疼きだす。

「……ちよつと……」

精神が感情を削ぎ落とし、思考が生存のためだけに研ぎ澄まされていく。

「嘘でしょ……？」

つい先日まで何事もない日常で笑っていた自分が干からび、殻になり、中から本能が顔を出す。

間違いない。目の前のこいつは――！

『――ドラゴンだ!!』

黒い表皮に稲妻、ひび割れのように走る青色。ヤギのように反り曲がった屈強な角。赤くぎらつく複眼。

闇の名残をまとったドラゴンは、牙を剥き出しにして炎を吐き出した。

「っ!!」

シキとミナトは同時に前に飛び出し、拳と氷を放つ。

吹き裂き、蒸発させ、広がる火を押し殺し、後ろの自衛隊員の無事を確認した。

「安全確保！」

「了解！」

絶望する自衛隊員を連れて、ミナトが通路の奥へ走っていく。

くすぶり、焦げた臭いを放つ絨毯を蹴り上げ、抜いた剣を間髪入れずに竜の首へ叩き込んだ。

刃と鱗が衝突して火花を散らす。自身の体がひび割れる感触に黒いドラゴンは猛り、素早く回転して尾の鞭を繰り出した。

「ちっ！」

この巨体で暴ればタワーがどうなるかなど、ドラゴンは考えもしない。去年と同じく破壊と殺戮を尽くすのみだ。

腰を落として地面と平行に剣を風ぎ、頭上すれすれをかすめる尾に刃を立てて勢いを削ぐ。

それでも止めきれずに足が床を離れ、壁に叩きつけられるのと同様に窓ガラスが尾に砕かれて宙を舞った。

光を散らすガラスの粒を浴びながら、再びドラゴンは火炎を吐こうと口を開いた。

「ダメ!!」

パートナーの声と冷気が飛び出し、竜の舌を凍らせる。

生まれた隙は逃さない。中途半端に開いたままの口に剣を滑り込ませ、体ごと回って振り抜く。黄金の業物は下顎を切断し、支えをなくした舌が床まで垂れた。

絶叫しても哀れみなど不要。がら空きになった上顎に突進し、喉の奥から脳天を突き破る。

紅眼から光をなくし、黒竜の生体反応が視覚情報から消えた。

「シキちゃん、大丈夫!？」

「問題ない。……こいつ、間違いなくドラゴンね。普通のワイバーンとは違うけど」

『確かに、ドラゴン……だった……。だけど……ドラゴンはもう倒したはずだろ？　なのにどうして……』

思い当たる節は一つしかない。

エメルが言っていた、ニアラ以外にも六体の真竜がいるという事実。

ミナトと顔を見合わせる。考えていることは同じようで、パートナーは顔に苦渋を浮かべて頷いた。

「……考えたくないけど……真竜が……」

「また来たってこと？　……!」

タワーが揺れる。緊急の赤いランプと警報が轟き、それをかき消すように咆哮が響き渡った。

『……!?!　もう一体、ドラゴンの反応を捕捉!　展望台付近だ……急げ!』

「了解!」

『急に妨害電波が濃くなったな……なんとか展望台までもつてくれよ……!』

タワーの上を目指して走る。

目的地に近づくにつれ、通信機のノイズがひどくなり、事切れた自衛隊員まで目に入る。

やめてくれという願いも虚しく、展望台への出口前には複数の遺体が折り重なっていた。

唯一自分の足で立っていたマキタはうつむき、傷だらけになったヘルメットを床に叩きつけた。

「……五人、やられちゃった。あの……ドラゴンに……」

「ま、マキタさ——」

「なんでドラゴンがここにいる!? おまえらが全部倒しちゃったはずだろ!」

そのはずだ。間違いない。ゆえに、詰め寄ってくる彼に返せる答えがない。

数時間前まで生きていたはずの仲間たちに黙祷する。マキタは深く呼吸をして、ゆっくりかぶりを振った。

「いや……悪い……おまえらのせいじゃないのは、わかってる。何が起こったかまったくわからねえけど、リンや技術者たちは無事に逃げたんだよな……?」

「非戦闘員の避難誘導を頼んだ。タワー脱出を目標に動いてるだろうから、危険な場所には行ってないはず」

「……なら、よかった。俺たちは地上へ降りる。先行隊と合流できれば御の字だ。……お互い、生きて会おうぜ」

一人分の足音が重く響いて遠のいていく。

入れ替わりにミロクから通信が入るが、ノイズはますますひどく、途切れた単語が聞こえるだけだ。

『……から屋上……出ら……る……ドラゴン……反応は……の先だ……』

「ちよつとミロク、大丈夫?」

『クソ……ど……やら通信……限界みたい……な……絶対……無理は……るな……!』

視覚に表示される情報が徐々に薄くなっていく。ムラクモ本部との連携もこの先は望めないだろう。

互いに目を合わせてうなずく。武器を構えながら扉を開け、展望台に出た。

直後、屋内でも戦った黒いドラゴンが舞い降りて吼える。

「やるわよ！ とりあえず、殺された奴らの分は返してやる！」

「うん、絶対許さない……！」

竜が炎のブレスを吐く。

ミナトも対抗して火をぶつけた。炎熱は絡み合い、踊るようにして自分たちを避けていく。

「こ、っのー！」

サイキックの指示に従い、火の濁流は向きを変えて竜に殺到した。竜巻となって敵を囲むそれを目眩しに、剣を下段に構えて走り出す。

狙うのは、翼竜の前足の代わりである部分。風を巻き起こし、ソニックブームも放てる強靱な翼の膜。

ステップを踏み、剣の重量を活かして回転する。

触れる空気を喰らい、呼応するように天叢雲剣は輝いた。

「千切れろ!!」

切っ先が真空波を放った。無数の切り傷が走り、追い討ちで剣を突き込んで切り裂けば、青い膜はだらしなく剥がれて役割を失う。

風を捕まえることができずにバランスを取れなくなった巨体が不安定に揺れる。

火傷で脆くなった皮膚に剣を突き立てて抉るが、体の奥に刃が届いてもまだ倒れない。ワイバーンを超えるしぶとさだ。

「ミナト！」

降ってくる牙を躲して下がる。血があふれる傷口を示せば、パートナーがありつたけの冷気をそこに集中させた。

血飛沫が開いた花のように固まる。

根を張るように氷は広がり、全身を包まれ体温を奪われたドラゴンは動かなくなった。

「生体反応は……くそ、ミロクがいないと不便ね。たぶん死んだとは思うけど」

「はあ……ダメだね、やっぱり前より疲れやすくなってる……ちよつと休憩……」

ミナトが汗をぬぐってマナ水を飲む。

タワーを駆け上がる中、ざつと確認できただけでも十人近い犠牲者が出てしまった。自分たちのものでもドラゴンのもものでもない、壁や床にこびりついていた血に手を合わせ、間に合わなかったことを謝る。

他に敵影はない。が、今までの経験と情報からして、ドラゴンは真竜ありきの生物だ。雑魚数体が偶然地上に迷い込んだとは考えにくい。

他の場所に出現している可能性もある。早くタワーから出てリノやキリノたちと合流しよう。

「一息つくのは後。まずはここから出——」

扉まで戻ろうとして、

ズツ、と視界がずれた。

「……っ!?!」

地震、いや違う。大気が鳴動している。空間が歪み、宙の一点がねじれていく。屋内でドラゴンが出現した時と同じだ。何も無いところから闇が生まれ、凝縮し、形を得て顕現する。

「ミナト!!」

名前を呼んだ時には既にパートナーは動いていた。

太陽かと思紛うほどの炎熱の塊が一直線に飛んでいく。ウオークライの剛火球もかすむ熱量だ。

しかし、火炎は着弾した瞬間、霞のように払われてしまう。

ミナトが咳き込み、大量の汗を流す。今出せるありつただけの力を放出した証だ。

なのに。

「効いてない……!!」

炎を霧散させた闇は、髑髏を思わせる左右対称の紋となっていた。中空に浮かび、黒い光を放ちながらこちらを睥睨している。

「……」

空気がどす黒く穢れていく。

星ごと圧縮させて潰してしまうような威圧感。地球の裏側にいても感じられそうな存在感。

前に味わったことがある。遙か彼方の宇宙から、自分を見下ろしていたあいつと同じ。

隙を見せるな。無駄な動きはするな。

四肢を失いたくなければ目を逸らすな。

「シキちゃん。扉、開けるね」

「頼んだ」

ミナトが指先を震わせる。  
生み出された氷が扉を吹き飛ばす。その音を合図に靴底を鳴らし  
て転進した。

唯一の逃げ道に体を滑り込ませようとした瞬間、悪寒が肌を襲う。

「離れろ！」

「っうわ!？」

風、いや、黒く淀んだ波が押し寄せる。それが触れた瞬間、出入り  
口の穴を赤黒い草花がふさいだ。

特徴的な花弁に暗色の茎と葉。フロワロだ。けれど色が違う。  
禍々しい、生命が絶えた焦土を想起させる黒。

青かった空が血の色に染められていく。地面も壁も、一面にフロワ  
ロが繁茂していく。

咆哮が轟く。竜が青空を喰らって舞い踊り、次々と展望台に降りて  
くる。

文字通りの四面楚歌。無傷で歩けるような場所はない。  
にじり寄る圧に後退し、パートナーと背中を合わせた。

「……………これは」

「まづい……………!」

\* \* \*

湧き出るマモノを退け、自衛隊員たちに前後左右を固めてもらいな  
がらキリノたちはタワーから出た。

遅れて合流してきたマキタによれば、13班は展望台に進んだとい



う。

去年の死闘をくぐり抜けた二人だ、簡単に死ぬはずはない。

けれどこの状況はまずい。一年前の東京都庁での惨事の再現だ。

634メートルの高さを見上げても彼女たちの姿が見えるわけではないが、それでもキリノはタワーを仰いだ。

仰いで、それが目に入った。

「な、何だ……？ ああの紋章……」

遠目に見てもわかる不気味な紋章。暗くなってしまった空の中、一際暗いそれが視線を奪う。

心臓のように大きく脈打ち、放たれた闇が目を襲った。

固められた空気がのしかかり、体が石のように固まってしまう。

「くっ……あ、頭が……頭の中に言葉が……」

ガリ、ガリ、と見えない爪が、五感を通して脳に情報を刻みつけていく。

呼称。名前。絶対的な強者を表す音の列。

其の名は。

「……フォーマル……ハウト……？」

地上を覆うフロワロと光。体を囲む光の円環。

それすらも目に入らない。冷たい鉤爪で心臓を握られたみたいだ。精神の自由が奪われていく。

「フォーマル……ハウト……」

「フォーマルハウト……？」

「っ……！ ぼけっとしてる場合じゃねえだろ！ 早く、脱出だ！」

頭の中に響く宣告を振り切り、マキタが踏み出す。乱暴に揺さぶられ、あるいは叩かれ、面々の視界に景色が戻ってきた。

その景色も地球全体が覆い隠されてしまったような暗天で、リンが弱々しく首を振る。

「だ……だけど13班が……」

「このままここにいたら、全滅だぞ！」

「シキ……ミナトくん……13班……」

「ぼけつとすんな！ 車まで走るぞ！」

\* \* \*

『何……てん……!? 早……逃……ろ!』

辛うじて聞こえたミロクの声もすぐに途切れた。

逃げられるならとつくに逃げている。だか屋内への道を断たれ、左右はドラゴンに挟まれ、空にはあの日のように無数の翼の影が舞っている。こんな状況でどこを目指せというのか。

何より、思考はナビからの警告よりも、すぐ後ろから響く音に奪われていた。

甲高い破碎音。硬い物が圧力をかけられたミシリという悲鳴。さらには液体をぶちまける不協和音が悪寒を煽る。

デコイミラーが砕かれ、骨が軋み、パートナーが血反吐を吐いたのだと気付くのに数秒かかった。

「ミナ——」

ゆっくり倒れる彼女を呼ぶより先に、ゾツと肌が逆立つ。ほぼ無意

識に片腕が跳ね上がった。

轟音が鼓膜を貫く。

真正面から衝撃を受け止めた剣がミナトと同じく背後へ吹き飛ぶ。つかんでいた右腕ももげる勢いで反転し、一本釣りされた魚のように体が浮いた。

「っ、あ……!!?」

地面に叩きつけられる。体のすぐ下で亀裂が走り、全身がゴム玉のように弾んだ。

見えなかった。知覚もできなかった。ここ数分の戦いで掘り起こされてきていた一年前の勘が砂一粒分働いて、なんとかもろにくらうことは免れた。

立て、と本能が神経を叩く。けれど体は節々が錆びついて動かない。

動け。この程度の攻撃が何だ。去年はすぐに立ち上がっていただろうが。

「――ごげ、うごげ、ってば……!!」

腕に力を込めた。いや、込めているつもりなのに、関節が笑って機能しない。すべきことは明確なのに、簡単なそれにも体がついてこない。

「あ……っ、げ、ほ、っは……あゝ！」

ビシヤリと、生温かい液体が散って頬にかかる。辛うじて動く眼が、すぐ傍に倒れているミナトを捉えた。

外傷は少ないが激しく咳き込み、鮮血を吐き続けている。彼女もまた体を起こそうともがくが、手足は無様に地を搔くだけ。打ち上げられた魚みたいだ。

「ミナト……!?!」

「いき……息……でき、なっ……くるし——」

ミナトは必死に酸素を取り込もうとして目を見開き、また激しい咳と吐血を繰り返す。

彼女の口に空気と共に黒い瘴気が吸い込まれるのを見て、反射的に互いの口をふさいだ。

体が動かない理由が分かった。焦りで気付かなかったが、この黒い瘴気……周囲に咲き乱れるフロワロの毒がずっと自分たちを蝕んでいたのだ。

炭化したような花卉に触れて猛毒と化した空気が、最小限の呼吸で全身に針地獄のような苦痛をもたらす。

体の内外からじわじわ嬲られ、二酸化炭素と一緒に血が口から流れ出た。

ダメだ、これは、

(勝てな——)

「っ……!!」

舌を噛み、バカなことを考えかけた頭を黙らせる。

認めてたまるか。仮にそうだとして、おまえはここであっさり首を落とされるのか。違うだろう。

諦めるな。たとえ地獄の災禍に沈められようが、生を手放すことを是とするな。

「ミナト」

目の前ではパートナーが呼吸を堪え、痛みに涙をこぼして悶えている。

倒れたまま手を伸ばし、頬をつねって呼びかけた。

「自分のことだけに集中してろ。追い詰められてるのわかるでしょ。いいわね、ここを生き抜くことだけ考えて」

ほんのわずかに音が聞こえた。クロウを着けた指先が、カリカリと地面をひっかく。

意識を失う瀬戸際なのだろう。声は一切聞こえず、けれど独りにはしないというように、セーラーの裾が握られた。

目を閉じる。呼吸は最小限にして、心臓があばらを叩く音と感覚をつなぐ。

「——っ!!」

一際大きな鼓動と共に、麻痺した神経に撃鉄を落とす。

熱い。無理やり限界を越えさせたことで血が煮えて全身が燃える。だつたらなんだ。これは自分の体だ。持ち主が思い通りに動かせる。なくてどうする。

「っの、いうこと、きけ……!!」

脳が焼き切れる錯覚も、血肉や骨の絶叫も無視して起き上がった。

目の前で浮遊する髑髏が明滅しては歪む。コケにされているように胸糞悪い。

舌打ちが漏れる。敵もそうだが自分にも腹が立った。

致命傷を負っていたとはいえ、どこかに緩みがなかったとは言いきれない。一度撃退したことのある相手だという油断がわずかに存在していた。

金色の剣をかざして空を照らす。鏡となって自分の顔を映す剣身は、この闇の中にあつて少しもくすんでいなかった。

対して、使い手はほんの数分でこのザマだ。かつての持ち主がこの

場にいたら、きつと鼻で笑われる。

『こんなんじや、正義の味方は名乗れねえぞ……?』

ああ、そういえばそんなことを言われた気がする。

別に正義の味方なんて目指していないし、ただ目の前に障害があれば邪魔だから打ち倒すだけだ。

でも、どうだ。目の前の趣味の悪い紋には傷をつけるどころか接近すらできていない。

一方的な鬨りで限界を迎えた自分と、余裕綽々と主張する武器の輝きの差はなんとも滑稽で。

手に握る天叢雲剣にこんなものかと言われた気がした。やられっぱなしで終われるか。踏み出せ。

あいつにも、目の前のこいつにも、負けてたまるか。

黒いフロワロを踏みつけ切っ先を向ける。

宙に浮かぶ紋が、笑みを浮かべた気がした。

赤黒い嵐が吹き荒れた。

自分たちを囲う竜巻の向こうで、翼竜たちが勝利を宣言するように吼え猛っている。

東京の街が赤と黒に沈む。積み上げてきた復興の印がごっそりと薙ぎ払われていく。

残るのは濁った音だけが響く世界……いや、

「……シ、……や……」

「聞こえてるわよ。心配するな」

今にも消えそうなかすれ声。けれど何よりも信頼できる命の灯り。確か一年前は、ウォークライに突っ込んだところを背後に突き飛ば

して庇ってもらったんだったか。  
乾いた笑いがこぼれた。

「あの時と逆ね」

返事はない。

大丈夫、まだ死んではいないだろう。だからこそ、さっさと終わらせて帰らなければ。

「……その、センスのかけらもないツラ、覚えたから」

ミナトを背後に庇い、剣を構える。

「絶対、倍返しにしてやる。首洗って待ってろ」

息ができない。四肢に力が入らない。

瘴気の波が押し寄せる。

くそ、くそ。

「くそおおっ!!!」

振り下ろす刃は、届かない。

\* \* \*

天から降る黒い閃光が大地を撃つ。見えない何かが一瞬で地平線まで駆け抜けたと思えば、後を追って大地にフロワロが咲き乱れた。

一年前、地上が赤く染まった時を思い出す。

その赤が、スカイタワーを覆う稲妻を映して黒く染まっていく。

視界を埋める毒花の嵐。この世のものではない光景にリンは目を見張った。

「これは……フロワロ、なのか……!?」

次々と花が開いては瘴気を放つ。体が上げる悲鳴にキリノは口を覆い、胸を押さえた。

窒息とは違う、傍にいただけで全身を蝕む苦痛。昨年とは段違いの毒性だ。

「いけない……早く車へ！ 瘴気が……ゴホツ……」

「早く乗りこめ！」

目の前にバンが駐車し、運転席からマキタが顔を出す。

13班は、とは誰も口にできない。今この場にはいない者の安否を知る術はない。根拠もなく生きていると断言できる希望は、生き地獄の中で根こそぎ奪い取られていた。

青空が見えない。白い雲は血を吸ったように赤く染まり、化け物が踊り、どこまでもどこまでも、晴れない悪夢がそこにある。

女性の作業員が涙を流し、腰を抜かしてへたり込んだ。

「も……もうダメです……私はここで……」

「馬鹿野郎！ こんなところで諦めてどうすんだ！」

ワジが一喝して女性へ寄ろうとする。瘴気を飛ばして行手を遮るフロワロに、キリノは彼を引き止めた。

「ワジさんは先に車へ！」

「キリノ!? おまえ……」

同じように自分の肩をつかみ返すワジにキリノは大丈夫だと言い



聞かせる。

もちろん、何の保証もない空元気だ。けれど、ムラクモを縁の下で支え続けてきた彼に何かあったら、ケイマやレイミに顔向けできない。

誰よりも過酷な場所で今も戦っているだろう少女と女性の背中が浮かぶ。

彼女たちなら、きつとためらいもなく踏み出すだろう。

目の前の命が取りこぼされないように手を伸ばす。その意思は、戦えない自分とて同じ。

「皆さんの……技術力は……これからのこの国に……必要な力です……！」 必ず無事に……議事堂へ……！」

「キリノ、やめろ！ 生身じゃ無理だ！」

リンの制止も、ブレーキをかけようとする恐怖も振り切り、嘲笑うようにたゆたう瘴気へ突っ込んでいく。

電撃とも、火傷とも言えない未知の痛みが体を襲う。白衣など容易く貫通し、全身を苛む激痛に生理的な涙がこぼれた。

「ぐっ……は……やく……手を……！」

「ひ……ああ……！」

足から力が抜ける。なんとか感覚の残る腕を駆使し、這って進む。腰を抜かしたままの女性へ手を伸ばす。絶望に暮れる瞳に向けて、大丈夫と念じるように笑顔を浮かべる。

「あなたも、僕も……こんなところで死んだりしない！ さあ……帰りましょう、議事堂へ……！」

震える手は皮膚が黒く変色しつつある。それでも痛みなど悟らせないよう、キリノは笑った。ほんの少しでも、希望の代名詞となつて

いる彼女たちを思い出してもらえるように。

懐中電灯くらいの光にはなれたかもしれない。女性が歯を食いしばり、体を縫いとめる暗闇から抜け出して手を伸ばしてきた。

まともに動かない体を引きずり、瘴気の中から抜け出した自分たちを叱咤激励しながらリンたちが担ぎ上げる。

全員が生きていることを確認して、キリノは意識を手放した。

一同はなるべく呼吸をしないよう、汗を流してバンへ駆け込む。

復興の象徴から一転、監獄に変貌してしまったスカイタワーを見上げ、リンは歯痒さに唇を噛んだ。

「13班……絶対に……こんなところで終わるなよ……！」

壊れんばかりにアクセルを踏む。車は暴走する勢いで走り出した。

\* \* \*

嵐が止み、紋章は消え、ドラゴンもどこかへ飛び去った頃。

暗雲を裂いて鉄の塊が空を飛ぶ。障害が多すぎて近付けなかったスカイタワーの展望台へ機体を寄せると、プロペラが生む風に黒い花弁が巻き起こされた。

風にさらわれないよう、お気に入りのサングラスをかけ直して展望台に降り立つ。

目の前で倒れている女二人は、わずかに背を上下させていた。肌には血の気もある。そこまで出血もしていないし、瀕死というわけではなさそうだ。

「……息はあるみてーだな。さすがに、ここにくたばるタマじゃねえか。しっかし、先の戦役の英雄——ムラクモ13班を瞬殺とはな……」

遠く離れた地からでも観測できた反応はどこにも見えない。昨年の人竜ミヅチよろしく、ご丁寧にご世界中の人間へ自己紹介をしてくれた真竜は、今はここから離れているようだ。

頭の中に刻まれた文字をなぞってその名を口にする。湧き出てくるのは怒りではなく喜び。いずれ自分たちが超え、ヒーローへの踏み台になってくれるだろう最終目標に胸が躍る。

「フォーマルハウト……狩りごたえありそうじゃねーか。サイパンからヘリ飛ばして来たかいたがアツたぜ」

「シヨー兄は13班のこと、過大評価しすぎだよ。こんな奴ら、シヨー兄の足もとにも及ばないのに」

続いて降りてきた妹がため息をつきながら言い切った。展望台に転がる女性、そしてそれを庇うようにかぶさって倒れる少女を一瞥し、期待外れだと鼻を鳴らす。

「一撃も返せずこのザマなんて……これで世界を救ったヒーロー面してるんだから情けないを通り越して、笑えるね」

2020年の竜災害で、自分たち以外に唯一ドラゴンと戦い抜き、真竜を撃退したという、小さな島国の狩る者。

かつての大統領も、その補佐をしていた金髪の女性も評価していた戦士、の、はずだが。一見、華奢な体にそこまでの覇気は感じられない。

真竜と相対して生きているのだから、それで十分素質はあるのだろうが。昨年から抱き続けていた期待は、惨敗した姿を見てしおれてしまった。

「ま、大衆向けのデモンストラーションはこいつらに任せるさ。本物のヒーローが誰なのかは、神のみぞ知る、だ。ほら、とつとと回収す

るぞ。ブラックホークの燃料が限界だ」

「オーケー、シヨー兄」

倒れる二人を担ごうとして、視界の端で何かが光る。

光源は、黒髪の少女が目を伏せている今もしつかりと握っている長物だ。そこらへんに転がる端材を拾ってフロワロの絨毯から掘り起こすと、星のような輝きが現れる。

波紋のような意匠が彫られた長剣。刃こぼれ一つない光は、剣を武器にする自身の目に彗星のように焼きついた。

「へえ……剣の趣味は悪くないじゃん。これキレイ——」

手を伸ばして触れてみようとした瞬間、ヒュツと耳もとで風が唸る。

首の皮に触れる冷たい感触。視界に収まっていたはずの金色の剣が、自分の頸動脈に添えられている。

赤いスカーフを風になびかせ、倒れていたはずの少女が目を開いてこつちを見ている。垂れ幕のような黒髪から覗く玉鋼の瞳が、まっすぐ自分を射抜いていた。

「敵か、味方か」

「は……？ なっ、」

「敵か、味方か、それだけ答えろっ!!」

立ちこめる瘴気も、真竜顕現の名残で荒れていた風の流れも、雷切のような声がすべてを斬り払う。

静まり返る展望台で、パートナーの女性を庇い立つ少女の荒い息だけが空気を揺らす。

一番先に動いたのは兄の方だった。

「驚かせて悪い。俺たちは敵じゃない。おまえたちの同業者みたいな

もんさ」

害意はないと両手を上げてアピールする。向けられる刃にそつと手を添え、妹の首根つこを引いて下がらせた。

「ムラクモ13班、救助に来た。真竜はもういない。脱出するなら今のうちだぜ？ 足はあるから安心しな」

顎をしゃくつて後ろに控えるへりを示す。

兄を睨み、妹を睨み、傍に倒れる女性を確認して、少女は剣を鞘に納める。

ふつ、と息を吐いたかと思えば、彼女は糸が切れたように昏倒した。空いている片手は変わらず仲間を守っている。揺るがない姿勢に無意識に口笛を吹いていた。

「なにがなんでも……って形相だったな、いいねえ。ただの女の子ってわけしやなさそうだ。ほら、いつまで腰抜かしてんだ？」

「な、ぬ、抜かしてない！」

顔を赤くして妹が立ち上がる。完全に沈黙している少女を忌々しげに睨む目に、手荒にするなよと釘を刺しておいた。

パイロットに急かされて13班を運びこみ、へりは展望台から離れていく。

タワーの先端に浮かぶ真竜の紋様が人間の敗走を見送り、舌なめずりをした。

少年たちが空を見上げる。少女が目を見開いて口を覆い、男は固い表情で暗雲を睨み、女性はああと息を吐く。

やがて戦いに身を投じる者も、そうでない者も、世界中の人間が等しく2020年を思い出していた。

桜が自然と違う法則で散るのはこれで二度目。地上も海も、フロワ  
口に覆われるのは、これで二度目。

これは人と竜の物語。数多あるうち、どこかの可能性で戦っていた  
ムラクモ13班の記録。

異界の花に全てが沈む時、今度こそ人類は滅亡する。

2021年4月18日。飛鳥馬アスママ 式と志波シキシバ 湊は、二度目の竜災害  
に身を投じることになる。

SEVENTH DRAGON 2020—II

# PROLOGUE あらすじ

PROLOGUE

2021年 東京

くあらすじく

西暦2020年3月31日。突如地球に飛来した『ドラゴン』により人類は滅亡の危機に陥った。

日本政府の対マモノ組織『ムラクモ機関』は生き残った者たちを率いてドラゴン戦線を展開。主人公の飛鳥馬<sup>アスマ</sup> 式<sup>シキ</sup>と志波<sup>シバ</sup> 湊<sup>ミナト</sup>は、ムラクモ機関の機動13班として戦い、真竜ニアラを退けドラゴンの撃退に成功した。

月日は流れ、2021年4月。東京では国会議事堂を拠点に復興作業が進められ、2020年の戦いで大きな傷を負ったシキとミナトは日々リハビリに励んでいた。

東京復興の要となるトウキョウスカイタワーの稼働当日、昨年倒したはずのドラゴンが襲来。シキとミナトの13班が出動するも、二人は謎の紋章に敗北してしまう。

紋章の正体、再び世界を襲ったドラゴンを率いるのは『第五真竜フォーマルハウト』。スカイタワーは真竜の根城となり、地球には毒花『フロワロ』が咲き乱れた。

二度目の人類滅亡の危機が迫る中、13班は再びドラゴンたちとの戦いに挑む。

これは、どこかの世界であった竜を狩る物語。

\* \* \*

13班メンバー

※年齢は2021年の誕生日で到達する歳。

生年月日横の（ ）は学校に通っている場合の学年。

【飛鳥馬 式 / アスマ シキ】

スチューデント♀ 標準カラー / サムライ・デストロイヤー

ボイスタイプG（佐藤 利奈 様）

生年月日：2006/02/03 15歳（高等部1年生）

主人公その1。ムラクモで生まれ育ったフィジカル天元突破女子。相変わらず負けず嫌いだが、ミナトに影響されて少し丸くなった。平時はゆかなさんか日笠さんボイスに近い。

ニアラとの戦いで致命傷を負い、両脚がミンチになった。手術とりハビリを重ねてなんとか回復しつつある。

タケハヤから託された剣を継いでサムライに転身。デストロイヤーの感覚も活かし、格闘も交えて戦う。

【志波 湊 / シバ ミナト】

スタイル未定・なし 女 / サイキック

ボイスタイプC（堀江 由衣 様）

生年月日：2001/04/01 20歳（大学2年生）

主人公その2。一般家庭出身。先天性の超能力を持つ。

よく言えば人を尊重できる、悪く言えば自分の本音をはっきり言えない性格。世界が平和になったため、実際のボイスのような余裕が出てきた。

人竜ミヅチ戦で重傷を負い、そのままニアラ戦で魔法を全開でぶっ放し続けて体がパンク。手術とりハビリを重ねてなんとか回復しつつある。得意な魔法は氷、治癒、防御。

その他

【??】

アングラ♂ 標準カラー

ムラクモ試験に飛び入り参加した白髪赤目の青年。

唯一の試験合格者だが詳細は不明。シキは見覚えがある様子。



「ごめんね、ちゃんとした花じゃなくて」

目の前に立つ手作りの墓標に、道すがら摘んできた小さな花を添える。

そこに骨が埋まっているわけじゃない。ムラクモに参加してドラゴンと戦っている間に、竜災害の犠牲者たちは腐って溶けて、骨もなくなってしまうた。

真竜ニアラ率いるドラゴンたちが、地球を襲った日から一年。

「早いね。時間が経つのは」

生まれつき「超能力<sup>サイキック</sup>」と呼ばれる力を持っていた自分は、生き延びて家族や友人を探すためにムラクモ機関に入った。パートナーの少女や仲間たちの力を借りて、なんとかドラゴンと戦う力を身に付けニアラを倒し、事なきを得た。

復興計画が始まってから、時間と余裕があるときはキリノに許可をもらい、あちこちを回ったけれど。

「……」

安否が確認できない人もたくさんいる。ただ、関東を中心に心当たりがある場所を徹底的に探しまわった甲斐あって、親しい人は見つけることができた。

みんな、肉も骨も朽ちた状態で。

珍しいことじゃない。身内や知り合いを亡くしていない者なんて、今の地球にはいないくらいだ。

最善は生きていてほしかった。それは叶わなかったけど、死んだこ

とがわかったのはよかったと思う。生死が不明ではきちんと供養することもできないから。

乾いた血と泥で汚れた、看護師の制服の切れ端。そして身分証明のネームプレート。それらが転がっていた場所が、最愛の人の命が尽きた場所だと知って、花と飲み物を添えることにした。

「あのね、復興計画はそこそこ進んで、今は通信状態を回復させるために、トウキョウスカイタワーの修繕に集中してるんだけど……」

すっかり廃れてしまった病院の廊下で、ガラスをなくした窓から吹く風と日を受けながら、今まであったことを話す。

パートナーや自衛隊の人たちには前もってどこに行くかを言っている。身内の墓参りということもあつて気を遣ってくれたから、付き添いはいない。

新しい友だちの話、ムラクモ機関の本拠地が都庁から国会議事堂に移った話、去年の誕生日プレゼントのお礼。とりあえず頭に浮かんだことを言葉にして伝えていく。

「……ほらこれ。去年くれたやつ。似合う？」

死してなお残してくれていた誕生日プレゼントの服を、一年経った今日、初めて身に着けた。

事情を話したらナガレ夫人が貴重な化粧道具を使ってメイクをしてくれた。自分がするよりずっと上手い。

廊下の壁に背中を預ける。小さな墓標にかけられているネームホルダーを見つめる。報告に伝えてくれる人はいない。

廃れた病院の中はとて静かだ。風はいつもより柔らかく、穏やかな気温は春の訪れを告げていて。

このまま時間が止まりそうだななんて思えたそのとき。

「……？」

か細い声が聞こえた。……ような、気がした。

「……誰かいる？」

真つ先に「一般市民」「避難民」の単語が浮かぶ。

自分が知る限り、坵地から外に出る人間はいない。いるとしても自衛隊かムラクモ、またはSKYの、戦う術を持つ人間だけだ。

しかし、戦う術がないとはいえ生き残った人々はある。各地の生存者がコミュニケーションを築いていてもおかしくない。実際、そうしてなんとかドラゴンとマモノから逃れていた者たちを保護したことがある。

「じゃあね、お母さん。私行くから」

とりあえず母の墓標に踵を向けて、声が聞こえたほうに向かう。

聞こえたというか、そんな気がしたただけだけれど。誰もいないと言いつつ切れないから確認はしたほうがいい。大抵、嫌な予感ほどよく当たる。

耳を澄ませて階段を下りていく。足音をたてないように二階、一階と降りていって、地下フロアの入り口前で通信機のスイッチを入れた。

『はい、こちらムラクモ本部』

「ミロク、こちらミナト」

『ミナト？ どうした、何かあったのか？』

「病院にいるんだけど、何か心配がして……。地上の階には誰もいなかった。今から地下フロアに入るんだけど、生体反応の確認できないかな」

『わかった。ちょっと待っていてくれ』

キーボードの打たれる音が連続して聞こえる。病院全体を大雑把

にスキャンした結果、地上の階には反応なし。そして地下には、

『本当だ、生体反応多数！ 二十、三十、四十ぐらいか？ かなり多いぞ……！』

「本当？ マモノが大量発生してるとか？」

『かもしれないし、うちいくつかは生存者つてこともあるな。悪い。そこ地下だし、病院自体が議事堂から離れてるから、マモノか人間かの区別は時間がかかりそうだ』

「中に入ろうか？ 目視の視界情報ならそつちもわかるよね」

『いや、電気も通ってないから視界は悪いだろうし、万が一も考えられる。単独じゃ危険だから、確認できるまでそこを動かないで——』

——助けてっ!!!

「人の声確認！ ごめん、突入する！」

『あ、おい！』

地下入り口の錆びた鉄扉を押し開ける。中に入って壁を調べると、ブレーカーか回線らしい装置に手が触れた。

マナを調整しながら電気を生み出して送り込む。そのままスイッチを弄ると、運良く地下の電灯が復活してくれた。

暗闇から明るい世界に切り替わって目が痛む。瞬きしながら見回すが、入り口周辺には何もいない。

正面、右、左。どの通路を進めばいいのか。

デコイミラーではなく、真正正銘の分身を作り出せればと焦る思考を導くように、もう一度助けを求める声が響いてきた。

声を辿って右側に走り出す。道なりに進んで突き当たりを曲がると、ラビが数体奥の部屋に雪崩れ込もうとしていた。

「ストップ！」

マモノのグループに遠慮なくフリーズを放つ。ニアラとの戦いで傷を負ってから本調子が出せないが、雑魚相手なら問題ない。壁と天井を伝って飛び出した氷は、問題なく標的の体を貫いた。

「大丈夫ですか!?!」

崩れ落ちるラビの向こうで戦々恐々としていた人々が固まる。死んだラビと自分を交互に見て、声をかけると、呆けた表情のまま頷いた。

「えっと、声が聞こえて、救助に来たんですけど……!」

救助、の言葉を聞いた途端、穴だらけになって崩れているドアの向こうにいる人々は一斉に涙を流し始めた。

異能力を使っている人間を見たら普通は怖がるものだが、それを考えられないほど追い詰められていたみたいだ。彼らはただただ傍にいる人とひしつと抱き合う。

とりあえず人数を確認しようとした瞬間、人集りの先頭にいた男が飛び出してきた。

「す、すみません! あの一!」  
「わっ!」

バンダナとヘッドフォンを身に着けた青年に肩をつかまれる。ここにいる人たちを守っていたのか、ひとときわ全身ぼろぼろだ。彼は自身のことは意に介さずに必死に舌を回す。

「あの一! 金髪の男と、よく似た女の子三人組見なかったっすか!?!  
おれと同じ、高校生ぐらいの一!」

「高校生ぐらいの……? 見てないですけど、もしかして、ここ以外にも地下に誰かいるんですか?」

返事を聞いた途端、青年の顔がぐしゃりと歪んだ。目に涙の膜が張り、危うく目尻からこぼしそうになるのを彼はリストバンドで拭う。事情を聞いてみると、二十人近い大人数で東京をさまよっていた彼らは、傷薬などの物資を調達するためこの病院に入ったそうだ。その途端マモノに襲われたらしい。軍事組織でもない一般人の集まりは一瞬でパニックに陥り、地下に逃げ込んだ際に二手に別れてしまった。

恐怖と混乱で痛覚が麻痺しているのかもしれない。青年は傷が重くなって血が滴る腕を振り乱しながら説明してくれた。

「おれたちはなんとかあったけど、もう片方の人たちが……！　そこに、おれのダチとその家族がいるんです！」

確かに、今すぐにも探しにいかなきやいけない。最悪の場合、既にマモノに……。

もう一度、ミロクに周囲の生体反応をスキャンしてもらおう。この部屋の付近にマモノはいないそうだ。

予備の通信機を青年に渡す。不思議そうな顔をする彼の腕を取り、傷を治療しながら使い方を説明した。

「今から、その人たちを捜しにいつてみます。何かあったらこれで連絡をください」

「う、うす」と返事をしながらも、彼は自分の傷を塞いでいく治癒魔法の光に気を取られていた。後ろで座り込む人々も、夢を見ているような顔で非現実的な治療行為を見つめる。

距離は離れているといえど、マモノはまだまだ地下にいる。気取られないように部屋の隅に身を寄せて静かにしているように伝え、傷薬を渡して部屋を出た。

唯一の入り口である、ドアが外れた長方形の穴を氷で塞ぐ。彼らは

またまた目を見開いて口をぱくぱくさせていたが説明は全部後。今は人命救助が優先だ。

「ええと、応急処置、止血の仕方は……」

医師や看護師たちに習った知識を復唱しながら廊下を駆ける。

天井が低くて窓がない。地下は閉塞感があるし、怖くて苦手だ。ましてや独りぼっちなんて状況は。

でもそれは、足を止める理由にはならない。

絶対に助けよう。彼らはまだ生きている。

\* \* \*

本業は高校生だが、社会で働いている者を社会人とするのであれば、一応その肩書きも持っていた。

個人的にはアーティストやミュージシャンの方が好きだ。そりや歌って踊るけれど、楽器の演奏もできるしロックも歌う。

しかし華やかな衣装が似合う妹たちの存在もあり、自分も、自分が所属する男性ユニットもアイドルと認識されていた。

家族全員音楽が好きで、両親が芸能界で裏方の役職をしていたのがきっかけだ。ちよつとした興味から飛び込んだ業界だったが、幼い頃から体に染み込んでいた音感や世間に通じるものだったらしい。両親の援助もあって、妹たちと一緒にそれなりに上手くやれていた。

波に乗って知名度が上昇し、2020年。ライブのために家族総出で友人も連れ、春に関西に行った。

そこでドラゴンに襲われた。

「っっー……」

ドラゴンから逃げることはできた。途中で何人も誰かが死ぬのを見たけれど。

目に映るのは、オレンジの灯りが温かく照らす自宅のリビングではなく、マンホール下の真っ暗な下水道。漂うのは大好きな料理の香りではなく、吐き気を催す腐敗した臭い。聞こえるのは家族の団らんではなく、ヘドロ交じりの汚水が流れていく音と誰かのうめき声。五感は全て、体験したことのない負で埋め尽くされていた。

異形の牙の餌食にならないように、まずは安全を確保すること。妹たちが泣きじやくる中、父が「絶対に生きよう」と言った。尊敬する社会人の先達であり、いつでも頼りがいのあつた彼の声が震えるのを初めて聞いた。

にこやかだった母も、毎日顔を合わせてバカなやりとりをしては大口開けて笑っていた友人も、下を向いて、じわじわと迫るそれをうっかり口にしてしまわないよう唇を噛んでいる。

いつか訪れる「それ」、けれど実感を持っていなかった「それ」。

(……あ)

「死ぬ」かもしれない。

生まれて初めて、命あるもの全てに寄り添っているそれを、最悪の形で感じてしまった。

ひたすら隠れて、ひたすら逃げて、本当に危ない時は戦って。気が付けば、ドラゴンはいつの間にか地上から消えていた。

高台の上って、あの巨大で凶悪な影がひとつもないことを確認して、嬉しさのあまり叫んでしまったことを覚えている。その後マモノに襲われて父に拳骨をくらった。

『……家に、帰りたい』

誰が呟いたのだろう。たぶん末っ子のシホだ。



我が家に焦がれているのはみんな一緒に、家を目指して東へ東へひたすら進み続けた。日本の首都の東京なら、人も物も集まっているはずだという予想もあった。

いろんな人と出会い、別れ、気が付けばあの日から一年。

マモノの存在もあつて思うように進めず、それでも歩き続け、関東地方の手前まで来たあたりで、風の噂を聞いた。

「東京では『対ドラゴン戦線』が組まれ、多くの人間が集まっている」。自分たちの判断は間違っていないかつと足を速め、東京に着いた。そして食糧と薬を確保しようと病院に入つて、

(矢先にこれかよ……)

ウサギのようなマモノにやられた傷が熱い。

旅の途中で合流して一緒に移動してきた人たちとはぐれ、マモノたちとの追いかけてこが始まって三十分。えぐれた右胸からはずっと血が流れている。転がり込んだ部屋の床には血溜まりと鉄臭さが広がっていた。

部屋の外にはマモノが集まってきている。血の匂いに興奮したのか、壁越しでも激しい叫びが響いて耳に痛い。しっかりとした造りの扉も、何度も体当たりを受け止めて破られそうだ。

「おにい、おにい！ しっかりとよー！」

「なんで血が止まらないの!?!」

「ハジメ、聞こえる!?!」

ああ、妹たちが揃って泣いている。

思えば、血も繋がってないのによく慕ってくれたものだ。顔を合わせた日から「おにいちゃんおにいちゃん」なんて後ろをついて回つて……まずい、これが走馬灯か。

傷口を押さえてくれている両親はずっと汗を流している。

せめてマモノがいなくなれば。治療なり出口を目指すなりできる

のに。

そう思いながら、血が流れすぎて意識が曖昧になり始めたとき。

『どっ……!? 誰か! 誰かいる!』

「……は?」

思わず声が出た。

一瞬、はぐれてしまった人たちが来たのかと思った。けど違う。聞いたことのない声だ。

というか、マモノが――、

『もう、どいて!』

ガガガギギンツ!! と硬い音が空気を揺らす。それを境に部屋の外が一気に静かになった。

『誰か! 誰かいますか!? 救助に来ました!』

マジか。

(救助……?)

「……ぐ、っあ!」

血が喉に押し寄せる。堪らず吐くと、母と父が自分に呼びかけ、「ここだ!」と声と足音が近付いてきて、

「……いた! って、やっぱり怪我人!!」

一人の女性が扉をこじ開けて現れた。

言葉が出なかったのは、驚きと、自分たちと違う綺麗な出で立ちに少し見惚れたのもあると思う。

柔らかそうな干したてのブラウスに、スリットの入ったAラインのスカート。クロスストラップのポンプス。いつの間に電気が通っていたのか、白熱灯に照らされる彼女は道を尋ねやすそうな柔和な雰囲気をもとっていた。崖っぷちの状況で助けに来てくれたのもあって眩しく見える。

あ、違う。視界が白く霞んできているんだ。

こっちに駆け寄って声をかけてくれる彼女に返事もできない。口から血が流れ続けて止まらない。

女性が両親をどかせて、腰に下げていたバッグをひっくり返す。

「大丈夫!? 私の声、聞こえますか!？」

治療を始めてくれるみたいだ。でも、もう意識がほとんどはつきりしない。頭から足まで、全身の背面が濡れるほど血が流れてる。たぶん間に合わない。

俺はいいからみんなを助けてと言おうとして、ひゅーひゅー喉が鳴る。目の裏側が熱くなって、不意に涙がこぼれた。水滴で目の霞が少し取れる。

女性は冷や汗を流していた。ハの字になった眉と歪んだ目尻。おまけに声が少しだけ震えていて、やはり自分は助からないのかもなど実感する。

もういいから、俺のことはいいから、逃げて。家族を、みんなを、少しでも安全な場所へ。

ああでも、こんなところで死にたくないな。地面の下で死ぬなんて、地獄に堕ちたみたいで嫌だ。

世界から色が失われていく。どれだけがいても意識がすりつぶされるように崩れ、寒気が自分を引きはがしてどこかへさらっていうとしている。

死んだらもうなにもできない。誰にも会えないしどこにも行けない。歌うこともできなくなってしまう。

今まであたりまえに自分を囲んでいたもの全てが、途方もなくまぶ

しく見えた。同時に、失ってしまったえばもう手が届かない物なのだとうやく気付いた。

後ろから肩をつかまれて、もつと深いところに引きずり下ろされるような感覚に襲われる。

死にたくない。嫌だ。

誰か。

（助け——）

「大丈夫だよ」

目にかかっていた髪が上げられる。

自分の額をなでて顔を覗き込みながら、女性が笑った。

「よく頑張ったね。絶対助けるから、もうちよつと踏ん張って！」

ぐいっと汗が拭われる。同時に、胸に溜まっていた嫌な気持ちも拭き取られた気がした。

本当はそつちだつて不安だろうに。

応えなきやいけないと思つて、なんとか頷く。女性はまた笑つたあと、真剣な顔に戻つた。

「ミロク、医務室と繋げてくれる？ さすが、ありがとう。ナミさんユキさん、治療始めます。指示お願いします！」

家族と周りの人が見守る中、白い手が赤く濡れるのも構わず女性は手当てを始める。

不思議な光が傷口を照らす熱さと、薬が染みる痛みに翻弄されながら、絶えずかけられる励ましの声をたぐり寄せて必死に意識を保つ。

どのくらい経つただろう。包帯を巻かれて、汗をかいた女性が「お疲れ様」と微笑む。

ありがとうと言おうとしたけど、血を流しすぎたからか体が動かな

い。疲労に誘われるまま、目を閉じて息を吐いた。

\* \* \*

目が覚める。いつの間にか寝ていたみたいだ。天井が見えるから、自分はまだ生きている。

やけに温かくて身動きが取れないと思ったら、両隣と頭を囲うように妹たちがぐつつついて寝ていた。

どっちにしても傷が痛んで動けない。目だけを動かしてあたりを確認すると、壁際にアホ面で熟睡してる友人がいた。

「オクタ……!？」

「んあ……?」

マンガみたいに膨らんでいた鼻ちようちんが割れて、友人のオクタは目をこする。寝ぼけ眼と目が合って、小さく叫んでこっちに寄ってきた。

「うおおハジメ！ 目え覚めたんだな！」

「おまえ……いつこっち来たんだよ。大丈夫だったのか……痛つて、「生死ギリギリの怪我人に言われたくねーよ」

いつも通り脳天気になんて笑って、オクタは説明を始める。自分たちの救助の前にオクタたちのほうにあの女性が来て、自分の治療を済ませたあとに彼らをこっちに連れてきたらしい。大部屋の中にはオクタと一緒にはぐれてしまった人たちの姿も見えた。みんな体を寄せあつて眠っている。

散々マモノに追いかけて、逃げ場のない地下に追い詰められたところに差し伸べられた手。九死に一生を得たのだ。



した。

「様子見にきたんだけど特に問題ないみたいだね。……ごめんなさい、病院めちやくちやだし、私は医者じゃないからさすがに輸血みたいな本格的な処置はできなくて」

自分に謝っているのだと気づき、そんなことはないかと返そうとして咳き込む。「喋らなくていいよ。無理しないで」と囁き、彼女は適当な場所に腰を下ろした。

廃墟を歩き回ったためか、ブラウスの白は薄汚れてしまっている。けれど、布地には長い間厳しい環境にさらされたような傷みはない。やはり、東京には人間が生活できる拠点があるのだ。女性はそこから来たのだろう。

彼女の手は自分が流した血で赤黒く汚れていた。オクタが気遣わしげに声をかける。

「あの、いろいろ大丈夫ですか？ 疲れてるみたいだし、ちよつと休んだ方が……」

「平気平気。ドラゴンやマモノでてんやわんやだった時に比べたら全然。それより、君たちのほうがへとへとでしょう。お疲れ様。どこから来たの？」

「大阪っす。おれたち、家がこっちにあるんで」  
「大阪!？」

女性は驚き、慌てて両手で口を塞いだ。眠っている人々を見回し、今の大声で起きてしまった者がいないか確認して、ほつと息を吐く。

「関西からここまで来たんだ……徒歩で？」

「ほぼ歩きっす。ときどきバイクとか車に乗ったんすけど、エンジン音でマモノたちに気付かれることが多くて、全然進まなくて」

「そっか……ならやっぱり疲れてるでしょう？ まだ時間があるか

ら、休んで——」

女性が言い終わらないうちに外から凄まじい雄叫びが響いてきた。人間ではなく、マモノの。

安堵に和らいでいた空気が一瞬にして破裂する。部屋にいた人間全員が弾けるように目を開け、くぐもった悲鳴を上げた。

「な、なに、今の……!」

「マモノ? あのウサギのやつじゃない!」

「やだ、もう嫌!」

人から人へ不安が伝染していく。誰かの金切り声に妹たちが起こされ、泣きそうな顔で体を寄せてきた。

女性が立ち上がる。静かにするように呼びかけ、変わらず笑顔で「安心してください」と周囲に語りかけた。

「落ち着いて。もうすぐ救援が来ます。マモノもすぐに討伐されます。自衛隊の方が避難誘導をしてくださるので、動ける方は負傷している方を支えてあげてください」

「きゅ、救援……?」

「私たち、助かるの?」

「もちろんです。もしマモノがこっちに来てても私が必ず守ります。なので、何かがあつた時すぐ動けるように準備をお願いします」

女性は笑顔のまま頷いた。縫るように繰り返される質問に丁寧に答え、少しずつ人を落ち着かせていく。大丈夫という声が温かく響いて、毛布のように人々を包んでいく。

幸い凍ってしまった空気はほぐれ始めたが、さつき聞こえた叫びは、あのウサギ型のマモノのものじゃない。もっと凶暴で、巨大な……。

思わずオクタが女性に尋ねた。



「あ、あの、まさか……戦うんすか？」

「え？ うん。……あはは、そんな顔しないで」

さらっと彼女は頭を縦に振る。

「大丈夫。一年前の大変な状況を、私もあなたたちも乗り越えてこられたでしょう？ 自分を信じよう。もう少ししたら、私の友だちが助けにきてくれるから」

女性は頭上を見上げて目を細める。薄汚れた天井を透かして太陽を見るように。

つられて上を見る。目に入るのは星ではなく蛍光灯の明かり。けれど、廃れてコンクリートがむき出しになった天井を越えて、青い空が見える。そんな気がした。

「大丈夫。みんなで一緒に安全な場所に行こう」

「私たちはマモノ討伐が先だけどね」

飛び込んできた声に、女性があれつと振り向く。部屋の入り口に女子が立っていた。

「お疲れ。迎えにきた」

長い髪とセーラー服のスカートを揺らす中高生らしき女子に、全員が呆けてぱちくりと目を瞬かせる。

対照的に、女性は顔を輝かせて女子に駆け寄った。

「シキちゃん！ 早いね、助かるよ。他の人は？」

「今来る。道が荒れてるから、途中から車降りて走ってきた」

女子は左腕に青い籠手を着け、見間違いじゃなければ腰に剣を下げている。現代日本では見慣れない格好だ。銃刀法に引つかかったりしないのだろうか。

突然の闖入者（しかもよく見れば目鼻立ちが整った美少女）に全員が沈黙する中、ヘルメットにアーマー装備、銃を抱えた大人が部屋に入ってくる。今度はひと目で分かった。自衛隊だ。

「生存者発見！ 負傷者多数、重傷者一名！」

「安全な場所へご案内します。みなさん、ついてきてください！」

「じ、自衛隊だ！」

「俺たち助かったんだ！」

担架が広げられ、真っ先に自分が乗せられて運び出される。

移動する途中、女性と、シキと呼ばれた女子が途中で列から離れた。そしてあろうことかこの地下の奥、マモノの叫びが響いてきた通路に入っていく。

思わず体を起こそうとして自衛隊員に怒られる。でも叱るなら自分より先にあの二人を叱ってほしい。マモノの討伐なんて危険は、それこそ自衛隊しかできない仕事なのだ。たとえ魔法使いでも超能力者でも、自分の恩人が危険な目に合うのは嫌だ。

「何……してんすか!? あの人、俺を助けてくれたのに！」

「人命救助が第一だ。中でも君は今とても危険な状態なんだ。喋らないで寝ていてくれ」

「女の人囮にして助けてもらったって嬉しくねえよ！ あの人たちも

一般人だろ……っ、ゲホッ」

「ハジメ、動いちゃダメよ！」

妹のニナに担架に押さえつけられる。女一人にも押さえ込まれるなんて、自分はどれだけ弱っているのか。

話が聞こえていたのか、通路の奥に進もうとしていた女性が振り

返った。名前も知らない彼女は「大丈夫」と口を動かし、ひらひらと手を振る。

「……君の言う通りだ。女性を囮にするなど、褒められたものではない。だが、彼女たちは例外だ。囮ではない。むしろ彼女たちに頼むしかない」

「……どういう意味っすか……」

「彼女たちはマモノ討伐の専門家だ」

オクタが言っていたことを思い出す。

——あの人すげーよ、魔法使いだぜ。あつというまにマモノ倒した。

女性が女子と肩を並べて進み出す。二人とも、左腕に赤い腕章を巻いていた。

深く鮮烈な色に目を奪われる。

(何だそれ……そんなの、)

マモノ討伐の専門家。まるで、都市伝説のあの組織みたいじゃないか。

その背中が廊下の角を曲がって見えなくなった瞬間、ブツリと意識が途切れた。

\* \* \*

「これで、よし……と」

獣の死骸を観察し、脅威がちやんと絶命していることを確認する。ラビ及びベアの討伐完了。一年かけてリハビリを続けてきた甲斐

あつて、去年の全盛期には届かずとも、大型のマモノ相手でも問題なく戦えた。

一息つくくと、ミロクが優しく自分たちの名前を呼んでくれる。

『ミナト、シキ、お疲れ。大丈夫か？』

「ありがとう。私たちは大丈夫だけど……重傷の男の子いたでしょ？」

あの子、大丈夫かな」

『大急ぎ医務室に運び込んで、今手術してるって。ミナトの応急処置がなかったら死んでたと思うぞ』

「そっか」

ため息が引つ込まない。止血と手当をしたとはいえ、輸血もできずに数時間過ごしたのだ。死んでいてもまったく不思議じゃない。

どうか、どうか助かってほしい。彼には家族も友人もいた。彼が死んでしまったら、その人たちはどれだけの悲しみと空虚に苛まれてしまうのか。

「もう、一年前のこの季節も散々だったなあ……」

「……ああ、そういや去年のムラクモ試験から一年くらい経つわね」

つくづくついてないと、愚痴がこぼれてしまう。

去年は帝竜ウォークライの炎に焼かれて、重傷で寝込んでいる間に誕生日を迎えてしまったし、今年は……、今年は。

「あつ」

「何よ」

「ううん、なんでもない」

そうだ、ウォークライに負けた日の翌日。自分は年を取った。

つまり、そろそろ誕生日だ。生まれてから20回目の。

今日は3月12日。あと3週間ほどで成人してしまうじゃないか。

すっかり忘れていた。

(……今言うようなことじゃないか)

お祭りムードになっっている場合じゃない。誕生日を祝うなんて、いつでもどこでもできる。

……げん担ぎや、願掛けというわけではないが。あの青年が助かったら、バーテンダーにカクテルでも作ってもらおう。もちろん、アルコール摂取が許される誕生日以降に。

夜に一人でこっさり、静かに彼の存命と自分の誕生日を早めに祝う。慎ましやだけれど、とても素敵だ。

大丈夫。きつと助かる。目の前の命を取りこぼさないために、自分は徹底的に治癒魔法や応急処置の特訓をしてきたのだから。

\* \* \*

「うああああああおにいー!!」

「いでえっ!!」

目覚め一番、妹たちが顔面を崩壊させて飛びついてきた。

ベッドの上で女三人に揉みくちやにされる。周りの人たちが羨ましそうに見てくるが、どっこいこっちは細腕の割に腕力と握力が強い相手に締め付けられて悦になんか浸れないのだ。痛い。怪我が痛い。死ぬ。

妹たちを宥めて離してくれたのは両親だった。その隣には鼻をかむオクタがいて、だらしのない顔でよかったよかったと頷いている。

「ハジメ。具合どうだ？」

「ああ、怪我が痛くて体がだるい、ぐらい……あれ、ここどこだ？」

部屋の中には医療器具が並んでいて医務室に見える。自分が気を失った場所も医療施設の中だったが、あそこは薄汚れた廃墟でこんなに清潔じゃなかった。

ベッドの前を歩き来るナースに、他にもいる患者らしい人たちを見ていると、オクタが話したくてたまらないという顔で身振り手振りをする。

「ここな、国会議事堂だつて。この部屋はその医務室」

「国会議事堂？」

なぜそんな、政治家が集まるような場所に。

「ほら、『東京にドラゴンと戦うための組織がある』つて噂。あれマジだったんだよ。最初は東京都庁を拠点にして、次にここに移ったんだつて。ていうか、すげーぞハジメ！」

「な、何が……」

『ムラクモ機関』！ 前に話しただろ、都市伝説の組織！ ドラゴンと戦う組織つていうのがそのムラクモ機関だったんだよ。つまりここ、本拠地！」

「むら……え、嘘だろ！」

「嘘じゃねーつてマジだつて！」

高校入学直後、オクタと仲良くなったときにネットで見聞きした都市伝説。凶暴なマモノや事件に対処する戦闘組織、ムラクモ機関。噂の一例としては、数年前に報道されたハイジャック事件、その解決に彼らが絡んでいたという話がある。

学校の休み時間にマンガがきながらの評判を見聞きし、「マジかよかけえな」と二人で盛り上がっていた気がする。

まさかそれが、本当に実在していたなんて。しかもここが本拠地。

「なんで死にそうになつてたのにそんなに盛り上がれるの？」  
「男の子はよくわからないね」

うおーっと握る拳を見て、長女の二ナと次女のミウが呆れたようにため息をついた。いつの時代も異性の間ではロマンの理解がされにくいものだ。

「そんでな、ムラクモ機関は本当にドラゴンと戦つてたんだと。自衛隊と協力して生存者の保護もやってたらしくて、おれの親も無事だったわ！」

言葉を続けようとして、オクタの顔がぐしゃつと歪む。

感極まつて鼻水を垂らし始めた友人は、声をかすれさせて腕で顔を覆った。

「マジでよお……ムラクモ機関は実在してるし、ドラゴンのせいで人類滅亡しかけて、でもなんとかなつたし、家族も生きてたし、おまえも助かつたし、よかつたなあ……よかつた……」  
「……そだな」

そうだ、自分たち一家と共に関西に来ていたオクタは、家族の安否が確認できないまま、それでも一緒にここまで来てくれていた。家族全員が無事だった自分に比べ、肉親と連絡も取れない生活はさぞ不安だっただろう。彼も彼の家族も無事でよかつた。

両親と妹たちが同じタイミングでティッシュを差し出す。オクタは「あざっす」と笑って全部受け取り、一気に鼻をかんだ。

「それにな、それに、病院の中でおれらを助けてくれた人、覚えてるか？」

「病院の中で……あ、おねーさん」

……、  
そうだ。病院の地下で死にそうになっていた自分は、あのとき

「おまえを助けてくれたそのおねーさん、ムラクモ機関の人だったんだよー!」

「え……そうか、自衛隊の人がマモノ討伐の専門家とか言ってた……って、マジかよ! 俺ムラクモの人に助けられたの!? ああいう女の人もいんの!? ス〇ークみたいなおっさんだらけかと思ってたのにギャップ!」

「だよな! なんか胸熱だよな!」

『……』

ついさつきまで目に涙を溜めていたはずの妹たちがチベットスナギツネのようなジト目になっている。

聞こえよがしのため息を聞き流して話を続けていると、医務室のドアが開いて、縦に積み重ねられたダンボールが運び込まれてきた。

「失礼しまーす。ナミさん、ユキさん、ムサシさん。追加の薬品です」「わ、大荷物じゃない! 重かったでしょう?」

「いえいえ。運動にもなりますし、これぐらいなら問題ないですよ」「助かるわ。ありがとうね、ミナトちゃん」

いくつも積まれていた箱が医者とナースの手でどけられていく。荷物のタワーは少しずつ低くなっていき、運んできた人間の顔がひよっこりと現れた。

「あ」

「あ!」

「ん? あっ」

見覚えのある顔に声が出る。続いてオクタも声を上げ、相手もこっ



ちに気付いて口を開いた。

女性だ。あのときの。

「シバさん！　こんちわつす！」

「こんにちは。オクタクん。アサヒナさんたちも」

元気よく腰を折るオクタに、女性も会釈して歩いてくる。その目がさつと自分の全身を見回して、ナースと同じ優しそうな笑顔が作られた。

「目が覚めたんだね。傷の具合は？」

「え、あ……少し痛むけど大丈夫、です」

「そつか！　……議事堂に運び込んだときに、出血しすぎてて危ないってお医者さんが言ってたみたいでどうなるかと思ってたけど……よかった」

「そうだよ。おにい、この人が助けて応急処置してくれなかったら死んでたんだからね！」

「なんでシホが威張るんだよ」

我がことのように胸を張る妹につっこむ。ぶーと頬を膨らませて唇を尖らせるシホに女性がくすくす笑った。

……あのとき、自分を助けてくれた人がそこにいる。

服装はあの日と違い、活動しやすそうなパンツスタイルだ。清潔感のある服装をしつつも足には自衛隊と同じ軍靴を履いていて、かなり使い込まれている。余所行きというよりは、体を動かして働いたための格好。

彼女は受身になって家族やオクタの話の聞き、相槌を打っていた。ときどき、傍を通る看護師や離れた場所にいる患者の挨拶にも笑顔で応える。

目立つわけでもないのに人を惹きつける姿に、「やっぱムラクモの人だな」とオクタが囁いてきた。彼女の左腕、赤い生地にかっこいい

マークが刻まれた腕章。あれがムラクモ機関の証らしい。

一通りの話と挨拶を終えて、彼女はこつちに向き直って背筋を伸ばした。

「初めてじゃないけど、あのときは挨拶してる状況じゃなかったから……。改めて、初めまして。志波 湊です。よろしく願います」  
「ど、どうも。朝比奈 アサヒナ 一 ハジメ つす、よろしく願います。……あ、握手」

こつちに伸ばされて空中で止まっていた手を慌てて握る。

自分より小さい女の人の手。少しかさつきはあるけど、爪の形が丁寧に整えられている柔らかい手。ほんのり伝わってくる肌の温かさは優しい感じがする。

穏やかな笑顔に浮かぶ小さなえくぼを見ると、不意に胸が締まった。

『大丈夫だよ』

「……」

この人が命を救ってくれたのだ。この手で血を拭って、傷を癒してくれた。

『よく頑張ったね。絶対助けるから、もうちよつと踏ん張って！』

倒れて意識が朦朧として、それでも死にたくないともがく中、何度も呼んで自分を繋ぎ止めてくれた声と、頭を撫でて安心を与えてくれたのも、彼女の……。

(……やばい。(これ、))

うなじのあたりがじわじわ熱い。頭がくらくらする。握る手の感

覚だけがどんどん熱く鮮明になる。

世界が切り離されて遠くに飛んでいってしまったみたいだ。オクタや家族が向けてくる視線も、「ほおく」とか「ちよっと……?」とか「あらー」なんて声も右から左。目の前の女性の眼差しを受けるだけで自分の五感はいっぱいいっぱいだ。

「あ、あの」

「うん？」

「ありがとうございます。おかげさまで……今、生きて、るんで」

変な顔にならないように意識しながら、しどろもどろになって礼を言う。

優しく返された「助けられてよかった」に、ズドンと胸の奥に隕石が落ちたような気がした。

## 幕裏2. ワンチャンあるかもしれない

「それで、彼の怪我が完治するのはいつ頃だった?」

「あと二週間くらいだとお医者さんは言っていました」

「ふむふむ、順調だね。……あの怪我を一か月しないうちに退院か」

すごいなあ、と苦笑いをするキリノに、自分もまた苦笑いしか返せない。

(やっぱり、ただの一般人じゃなさそう)

数日前、母の墓参りに行って、そのとき出会ったアサヒナ一家とオクタという青年。彼らを含め病院地下にいた生存者は全員保護、新しく避難民登録をして、議事堂で暮らしていくことになった。

アサヒナ家のハジメという青年は命を落としてもおかしくないぐらいの出血量だったが、なんとか一命を取り留めて順調に回復している。……本当に、冗談にならないぐらいの血が流れていたのに。

強い生命力にまさかと思った。ムラクモ機関の研究者一同も、その話を聞いて目を光らせた。

『うん、その青年、異能力者の可能性があるネ』

専門分野の能力開発から異能力者に長年関わってきたマサキはさうつと言った。それと同時に、現在議事堂を留守にしているムラクモ機関の最高顧問、エメルの言葉を思い出した。

「戦力確保の優先」。そのために、「異能力者と思しき者には積極的に声をかける」こと。人間が真竜ニアラに勝ったことを誰よりも誇り、同時に誰よりもドラゴンの再来を懸念していた彼女は、竜災害後も、今に至るまでムラクモの尻を叩き続けている。

再来なんて何を恐ろしいことをとツツコむと、「真竜は全てで七体だ。あと六体いるのだぞ」とさらつと爆弾を投下された。

あんな大災害があと六回。気が遠くなつて卒倒してしまつた日が懐かしい。

真竜が星に降り立てば、地表はフロワロに覆われ、人間も動物も淘汰されてしまう。それを考えれば、戦力の増強に根強く取り組むことに文句はない。けれど、人の気持ちを一切無視するのはいただけない。

アサヒナ ハジメが異能力者だとしても、彼には家族がいる。友人もいる。そしてマモノに襲われて死になつた経験がある。大切なものがあつて、恐怖と痛みを味わっている人間を戦いに引き込むのは気が引ける。

せめてじっくり考えて選択ができるように、ムラクモに属していない異能力者には心に余裕をもってもらいたい。キリノに相談して、彼の適性検査をするのは怪我が完治してから、ということにしてもらった。

「キリノさん、仮に彼が異能力者だったとしても……」

「わかつているよ。戦う意思がない人を、無理に前線に出すなんてことはしない。仮に今ドラゴンが来たとしても、ムラクモは去年よりは余裕を持てると思う。……去年の君のような無茶はさせない。そこは信用してほしい」

「はい。そこはもちろん信じてます」

去年の竜災害時、それまで普通の生活を送っていた自分は着の身着のまま戦場に立った。そうしなければ生きる可能性がつかめなかつたからだ。

目の前には怪物がいるけれど、一步後ろは崖で、逃げる場所などない。後退はそのまま「死」を意味する。だから前に出るしかなかった。

最終決断をしたのは誰でもない自分自身。けれどさすがに、ムラクモに入つてすぐに帝竜と戦うことになるなんて誰も想像できないだ

ろう。ウォークライ討伐後日、目が覚めたベッドの上でこの組織やばくないかと静かに汗を流したものだ。

去年の竜災害での学びは、千年前から存在してきたムラクモ機関の地盤をより強固なものにした。

表舞台に出て一般人との距離が近くなった分、彼らのことを考慮する必要もあってムラクモは派手には動けないが……自分たち人間が目指すものは復興と平和。武力の拡充ばかり考えて本当の目的を忘れてしまつては元も子もない。

自分は何のためにどうあるべきかを胸中で再確認し、特筆事項を書き留めたメモ帳を広げる。

「現時点で報告できることは以上です。彼らが今後どうしていくのか……話し合いを進められるように、最低限、適性検査も準備は進めておこうと思います」

「ああ、ありがとう。ミナトくんも仕事ぶりが板についてきたね」  
「え、そうですか？ えへへ……」

不意打ちの褒め言葉に頬が温かくなる。竜災害前は大学への進学を控えていたし、社会が崩壊しているのであまり自覚がないが、自分はムラクモ機関に就職した社会人なのだ。それらしいと言ってもらえるのは悪い気はしない。

「それじゃあ、失礼します」

キリノに頭を下げて執務室を出る。

上司からの良い評価はやる気を燃え上がらせてくれた。今日はまだまだ働けそうだ。

ニアラを倒してドラゴンがいなくなったといつても、依然世界は荒廃したまま。一日も早く復興を進めなければならぬ。

できることを探すため、ミナトはチェロンがいるクエストオフィスに向かった。

\* \* \*

病院で自分たちを助けてくれたシバ ミナトと、彼女と一緒にいたシキという少女は、思ったよりもずっとすごい人物だった。

ドラゴンの襲撃を受けたその日から、ムラクモ機関は生き残った人間をまとめて対ドラゴン戦線を組織していた。途中からその最前線に立ち、主戦力としてドラゴンを倒していったのが、あの女性と少女が所属する機動13班らしい。

避難生活を過ごす市民から出た依頼を解決し、拠点環境の改善にも尽力したのだとか。昨年から彼女たちを見ていた人々は、口を揃えて「英雄だ」と13班を称えていた。

称賛を浴びても、新聞記者の記事に大々的に取り上げられても、彼女たちは協力者の存在をあげて、天狗になる様子はない。そんな謙虚な姿勢もあって、13班は一般市民からも自衛隊からも、信頼と友好を抱かれているみたいだ。

「それでね、この薬は痛み止めなんだけど……普通の人と異能力者とじゃ、効果に小さいとは言えない差異があるの」

「量も限られてますよね。やっぱり、別々に作るしかないのか……にしてもローパーは万能だなあ……薬にも使えるなんて」

(そろそろ終わる時間か)

ミナトは毎日、朝早くか夜遅くに医務室に来る。手が空いている現役看護師の人たちに医療の勉強を見てもらっているようだ。ときどき怪我人の手当てを手伝うこともあった。

自分が観察してきた中では、勉強時間は長くても二時間。今日は時計の針が一周と半分回ったところで、彼女はペンを走らせていたルーズリーフをバインダーにまとめた。

「よし。今日はこんな感じで……」

「そうだね。人も増えてきたし」

「いつもありがとうございます」

「ううん。こつちも復習になるしね。いつもお手伝いありがとう」

筆記用具を脇に抱え、看護師のナミと挨拶を交わしたミナトの動きが急に止まる。

真剣な顔になって床を見つめ続ける彼女を、ナミが覗き込んだ。

「ミナトちゃん？ どうしたの？」

「……いえ、なんでもないです。それじゃ、失礼します」

（……俺もミナトさんって呼びた——）

い。と思ったところで、ぐるっとこつちを向いた彼女の目と自分の視線がかち合った。

（心読まれた!?!）

「すみません！」

「え、どうしたの？」

「なん、なんでもないっす……」

ただの偶然だったみたいだ。ミナトは首を傾げたまま自分に向かって歩いてくる。

国会議事堂に来てそれなりに日が経った。最近彼女の勉強の帰りに声をかけ、話をするのが日課になっている（そのたびに妹たちが絡んでくるのは適当に流すことに決めた）。

けれどそれももう最後だろう。右胸の怪我は二日前に完治。何度か健診を受けて、普通に動いても問題なしと太鼓判を押された。

自分は今日、家族とオクタがいる一般居住区に移る。ミナトは一般市民の立ち入りが禁止されているムラクモのフロアにすることが多



いので、医務室を出れば顔を合わせられる確率がぐっと下がってしまった。

「ハジメくん、ちよつといいかな。あ……いまさらだけど名前呼びは失礼か。アサヒナくんって呼んだほうが」

「え!?! いえ、ハジメで大丈夫です! むしろぜひ」

「そ、そう?」

せめて最後は今までで一番楽しい話題を、と考えていたが、先にミナトが口を開く。

「話したいことがあるんだけど、大切な話だから……まず、君のご家族と、それからオクタクんたちをここに呼ぶね」

「え? わ、わかりました。ていうか、そろそろ来る時間だと……」

「おにい、元気? 迎えに来たよー!」

「私たちがいなくて寂しかったでしょ?」

「怪我は大丈夫そうだね」

「こーらシホ、ニナ、ミウ、静かにしろ」

噂をすればのタイミングで家族が入ってくる。各々自由に喋りだす妹たちを父が嗜め、母がミナトに挨拶をした。

数分後にはオクタ一家がムラクモの誰かと一緒に医務室に来る。全員揃ったところで部屋の隅に案内され、人目に触れないよう周りをカーテンで囲んだところで、ミナトの隣に立つ眼鏡の男性が会釈をした。

「ムラクモ機関の総長のキリノです。突然お呼び出ししてしまつて申し訳ありません」

「む、ムラクモの総長!?! なんてそんな上の人が……」

身にまとうのはスーツではなく白衣。顔つきは柔和温順。雰囲気

は企業戦士というより研究職だ。

思わず目が瞬く。目の前の彼は良い意味で、ドラゴンとの戦いに勝利した組織の長とは思えない。どちらかと言うとリーダーを支える副リーダーに向いていそうに見える。ミナトに目を向けると、「私の上司です」と笑って紹介された。

ムラクモ機関総長に13班のメンバー。まさかの組み合わせに疑問と興奮でオクタの鼻息が荒くなる。直後に両親に悪い癖だと叱られ、彼は居住まいを正した。

キリノ総長が続ける。

「まずはじめに、注意事項を……。ここからの話は、他の方々には口外しないでいただければと思います」

「この話をしないことで日常生活に支障をきたすことはないのですが、どうかよろしくお願いします」

優しそうな笑顔を作ってキリノとミナトは頭を下げる。反射的にこっちも全員頭を下げて、話はゆっくりと始まった。

「今回、朝比奈<sup>アサヒナ</sup> 一<sup>ハジメ</sup>さんと奥田<sup>オクダ</sup> 僚悟<sup>リョウゴ</sup>くん、そしてご家族の皆さんにお集まりいただいたのは、彼ら二人の適性検査の許可を頂くためです」  
「適性検査？」

「はい。……落ち着いて聞いてほしいのですが」

何の検査、と全員揃って首を傾げると、ミナトがなぜか沈んだような顔になり、遠慮がちにこっちを見つめてくる。

「ハジメくん。前に、私が倒れてる君を見つけたときね、君、出血多量で死んでもおかしくない状態だったの」

「えっと、そうっすね……。？」

「君を議事堂に運んだ後に調べただけで、成人男性の平均の血液量……。その約半分が、君が倒れてた場所に流れていた。血液の総量が人

より多かつたとしても、君は致死量を超える血を流した。しかも、止血はしたけど輸血をせずにその場で数時間過ごした。それでも死なずに、今日までに快復したの」

「あー……それは、すごいことなんすか？」

「うん、すごいこと。あとね、」

次にオクタの方を向いて、ミナトは「聞いたんだけど」と続ける。

「関西から東京に向かう道のりで何度かマモノに襲われて、それをオクタくんがなんとかしてくれてたっていう話。それに君は、一緒にいた人を守るために病院でもマモノに抵抗してたよね」

「ああ、おれ、昔から体が頑丈で……なんとか追っ払うぐらいなら」

「うん、そう。『マモノと戦えるくらい』……以上の経緯を踏まえて、私たちムラクモは、君たち二人に『異能力者』の力があるのではと考えました」

え？ と、朝比奈家と奥田家、計九人の声がハモる。告げられた結論に、無意識にオクタと顔を見合わせていた。

異能力者。ムラクモの、ミナトたちと同じ。

「マジかよ」以外の言葉が見当たらない。

「あくまでも予想です。調べもせずに断定はできません。異能力者かどうか……異能力者だった場合、何の力をどの程度持っているのかの適性検査をするのは、ご本人と保護者も方から許可を得られてからになるのですが……」

恐る恐るといった様子でミナトは語りかけてくる。たつぷり沈黙をおいて、父が「ちよつと待ってください」と手を上げた。

「そもそも、異能力者というやつのはず？」

「常人にはない、特殊な潜在能力を持ち、それを引き出せる人間。とム

ラクモでは定義しています」

「それで、息子たちが異能力者だった場合、」

「……ムラクモとしては、新しいメンバーとして参入する意思があるかどうかを、お聞きしたいのですが……」

「ですが」

渋い顔になってあご髭を弄る父に「強制ではありません」とキリノ総長が落ち着かせるように言った。

「異能力者であってもそうでなくても、議事堂にいるみなさんは戦力以前に市民だということを、僕たちは心得ています。ですからもちろん、ムラクモへの参加は義務ではありません。これは今後の身の振り方の選択肢として提示しているだけです」

何度も何度も椅子から腰を浮かせかける家族に対し、とにかく安心してほしいと繰り返し、粘り強く説き伏せる。

ミナトが柔らかい笑みを作って続けた。

「まずはみなさんご自身の生活と安全を確保することが第一です。ただし異能力者だった場合、力の扱い方を把握しておいて損はない、とは思いますが。戦うということではなくて、自分の力がどういうものなのか理解して、何かのはずみで日常生活中に事故を起こしてしまわないよう、コントロールする術を学ぶといえますか……」

「シバさんも、そうだったんすか？」

「子どものときにちよつとやらかしちやつたことがあって。……話を戻しますが、ムラクモには長い間異能力の研究、開発に携わってきた研究者の方々がいらつしやいます。何か、自分の能力に対して不可解なことや不安なことがある場合は、その方々にお話を聞くこともできますから、気になることはあればご相談ください。……でも、これは異能力者だった場合のお話です」

「僕たちは、まず君たちが異能力者なのかを確認したいです。検査結

果がどうあれ、その情報は悪用しないと誓います。ムラクモ機関は個人の能力を把握すると同時に保護する役割もありますから。そこはイヌヅカ総理も尽力してくれるはずです」

懇切丁寧な説明だ。なるべく自分たちの心に寄り添おうという配慮を感じる。悪いようにはされないとするのは、信じてもいいのかもしれない。

だが、まだわからないこともある。

学校で授業を受けるときよりもずっと真面目に、オクタが「はい！」と手を挙げて、気になることを訊いてくれた。

「その、適性検査っていうのは、具体的に何をするんですか？ 機械みたいなので体をスキャンしたりとか？」

「それもあります。まず体が健康体かどうか知らなければいけないので、最初に医師による基本的な健康診断。それから、日本の教育機関でも実施されている身体検査……短距離、長距離走や握力ですね。大概はそれで異能力者かどうかの見当はつけられるので」

「え、そんな簡単なもので？」

「大概の見当は。これで見つけられるのは、身体能力に秀でた異能力者になります。……どんな力を持っているにせよ、異能力者は常人より優れた身体能力を持っていることが多いのですが……。他には、特殊能力がないかどうかの検査です」

「特殊能力？」

「……ミナトくん、見せてくれるかい？」

総長に名前を呼ばれたミナトが、えっ、と固まった。

「み、見せるんですか？ 今、目の前で？」

「ちよつとだけでいいよ。彼らを救助する際にも能力を見せたんだらう？」

「そうですね……ちよつと待つてください。クロウ着けます」

さつきまで真摯な眼差しで自分たちと向き合ってくれていた目が泳ぐ。ミナトは下を向いたまま、上着の胸ポケットから小さなケースを取り出した。

開いた口から取り出されたものが彼女の指先に着けられるのを見て、女の妹たちが真っ先に反応する。

「ネイル？ なんですか、それ？」

「クロウっていうの。私みたいな異能力者が使ってる道具のひとつだよ」

「ネコ柄だ、かわいい……」

「え……あ、いや、違う！ 私の趣味じゃないの！ そもそもお洒落でネイル着けることもないし、いい年してネコ柄とかそんな……あ、嫌いなわけじゃないんだ。友達からもらった大切な物だしこういう素敵なのはかわいい子じゃないと似合わないのはわかってるんだけど……いやそうじゃなかった、異能力の話の続きだけど！ ですけど……！」

（かわいいな）

（似合うのにな）

頼れる年上女性の雰囲気はどこへやら、顔を赤くして頭を横に振ったり舌足らずになる様子を見て、自分と相棒の心がひとつになった。

クロウは両手分、計十個あるが、ミナトは左手に薄手のグローブをしている。彼女は何も着けていない右手だけにネイルを装着し、自分たちから少し離れた。そして服の袖をまくって、手のひらを上に向けてる。

「えーっと、キリノさんがおっしゃっていたように、異能力者には身体能力に秀でた人と違って、特殊な形の力を持つ人もいます。スーパーコンピューターみたいに関機械の扱いや情報処理に優れている人とか、私みたいなサイキックとか」

「サイ——？」

ふわ、と空気が暖まる。

何もないはずのミナトの手の上に、小さな火の玉が踊っていた。

全員が固まる。というか、時間が止まったみたいに動かない。病院で助けられた時にもほんの少しだけ目撃したが、何の前触れもなく火なんか出されたら呆けるしかない。

火はミナトの白い手に押し出されて宙に浮いた。続いて、彼女は手招きをするように五本の指を曲げる。

今度は空気が冷えたかと思えば、その指先が拳大の氷を握っていた。全員の顎がかくんと開く。

「私はいわゆる超能力者……サイキックと呼ばれる異能力者です。普通、道具を使わなければ起こせない現象を、ある程度人為的に発生させることができます」

火と氷がまとめられてジュアツと音を立てて消えた。それを聞いて、夢から覚めたように全員が動き出す。

すごいのか怖いのかわからない表情で全員がミナトを見た。彼女はぎこちなく笑って、「あとは」と言いながらも一度氷を生み出す。ナイフのように薄く鋭く尖ったそれで、彼女は自分の手をチクリと刺した。自分たちに向けられた手のひらには血の赤い珠が浮かんでいる。

「ある程度の怪我なら、こうして治せます」

指先が淡い光を放つ。じわじわと膨らんでいく血の珠を包み、浅く裂けた傷口をあつという間に塞いでみせた。

優しく温かな光。見覚えがある。薄ぼんやりとした記憶が頭の片隅で揺り動かされた。薄暗く廃れた地下で自分が浴びた光だ。

「それ、もしかして、それで俺の傷も治してくれたんすか？」  
「うん。でも君の傷は結構深くて、完全に治せなかったの。止血はできたけど……君の命を助けたのは、私じゃなくて腕のいいお医者さんだよ。私に手術はできないから」

家族一同、どうしていいかわからず未だ動けずにいた。……鼻息荒く目を輝かせるオクタ以外は。

こいつはもうだめだろう。おそらく興奮で脳内アドレナリンどばどば状態だ。

「すっげー！ その力でドラゴンと戦ってたのかぁ……！ あの、ムラクモの主力ってことは、シバさんがムラクモ機関で最強なんですか！？」

「え、最強？ いや、私よりもずっと強い子が……」

「はい、ミナトくんたちの話はそこまでにしましょう」

こほんとキリノ総長が咳払いをした。大きく脱線しそうになった話を元に戻して、ミナトがネイルを外す横で自分たちに向き合う。

「今見せていただいたように、異能力者には超常的な力を持つ者も存在します。なので適性検査は、まず異能力者かを調べ、次に体に宿る力が身体能力型か特殊能力型かを判断、最後にそれがC級〜S級のどこに当てはまるのかを決めるという流れになります。……何かご質問は？」

沈黙する。話についていけないのかそれぞれが顔を合わせる中、シホがおずおずと手を挙げた。兄妹の中でも一番勉強嫌いの末っ子が積極的に話を聞く姿勢になるのは珍しい。

「は、はい。あの、もし、おにいが異能力者？ ……だったとして、ムラクモに入るんじゃないかって、今まで通りの生活を選んだら、何か……」



妹はもごもごと口ごもる。言葉が見当たらないんじゃないやなく、言ってもいいのかどうかためらっているように見えた。友人とケンカをして、どんな風に謝ればいいのかと反省するときに見せる顔だ。

ミナトが首を傾げて妹の表情を伺いながら、予想した質問を優しい声音で口にしていく。

「大丈夫。誰も怒ったりしないよ。安全なほうを選ぶのは賢い選択。命は大事だもん」

「じゃあ……」

「何も変わらない。今まで通りの生活が続くだけ。もし文句を言ってくる人がいたら、堂々と言い返していいからね」

ほーっ、と妹たちが息を吐いた。同じように、両親、オクタの両親も安心して笑みを浮かべる。

(……やっぱ、反対だよなあ)

ムラクモに興味を持っていると言ったら、たぶん家族総出で止めにくるだろう。

いや、まだ入るかどうかが決まったわけじゃないし、それ以前に……。

「それも、異能力者だった場合の話です。入隊希望だとしても、試験で基準を超えた結果を出せなければメンバーとして迎えることはできません。さらにS級であってもなくても、伸びしろがない限り戦闘への参加は認められません。戦闘員でも、教官や研究者をつけ、初歩的な訓練から始めてもらいます。A級やB級と判断された入隊希望者は、基本、物資の調達や、戦闘員の補佐が役目の作業員として働いてもらうことになります」

さあ、と自分たちの返事を促すように、ムラクモの二人は居住まい

を正す。それぞれの瞳が、自分とオクタを交互に見た。代表してキリノ総長が口を開く。

「どうでしょう。……適性検査を受けてみる気は？ もちろん、これも拒否するか承諾するかは自由です」

「……」

あくまでも自分たちの意思を尊重するという話に、オクタと顔を見合わせる。家族も一斉にこつちを見てきた。

検査結果・個人情報保護の保護。

専門家による能力の判断。

入隊するかしないか、選択の自由。

入隊後のサポート。

(……条件は)

(しつかりしてるよな)

自分たちはムラクモの人員じゃない。だから、まだ知らないことがたくさんある。議事堂に来てからしばらく、いろんな人たちから話を聞いたとはいえ、不安要素は数えきれないし保証もできない。

けれど、この人たちは体を張って自分たちを守ってくれている。

ちらつとミナトを伺ってみる。彼女は立ったまま瞑想するように目を閉じていた。唇は自然な横一文字を描いていて、自分は干渉しない意思表示している。

……正直に言うと、「安全なただモンはもらいたい」主義だ。

さらに欲を混ぜると、目の前にいる彼女とお近付きになれるかもしれない。

言葉にしないで目だけでオクタと意思疎通する。何度も確認する必要はなかった。

「まず受けるだけなら」

「お願いしたいです」

「え、本当？」

ミナトがぱちつと目を開けて、喜んでいいのかどうか伺いを立てるような微笑を作った。キリノ総長も、話が一步前進したことに満足そうに頷く。

対照的に家族は……まあ想像はできていたが、洩面を作っている。妹たちが一斉に顔を覗き込んでくる。選ぶ言葉を間違えてないかなんて言いたげに眉を寄せて二ナが「本当に？」と確認してきた。

「本当に？ 本当に受けるの？」

「何度も言うけど検査だろ？ 別に危険な真似させられるわけじゃないし、結果がどうでも選ばせてもらえるんだから、損ないじゃん」

「そうだけど……！」

「あとは、保護者の方々のご判断になりますけど……」

キリノが親側に視線を移す。オクタは自分の親を、こっちはこっちで父と母の説得を試みた。

「検査を受けるだけだろ。別に何も問題ない」

「それで、あなたが異能力者だってわかったら、どうするの？」

「そんときに考えるよ。ドラゴンがいなくなっても、外にはマモノがいるし。ある程度危険があるのには変わりないんだから。ただ……シバさん」

「うん？」

「もし俺が異能力者で……ムラクモに入らないとしても、その、力の使い方とか、もしものために自衛の術とか、教えてもらえるんすよね？」  
「復興作業で忙しいから、いつ、誰が君に教えられるかはわからない。能力によっては手探りで能力開発を進めていくしかないかもだけど。それでもいいなら、ムラクモは力を貸すよ」

「あざっす。……そういうことだから」

ムラクモ云々は置いておいて、検査を受ける意思是曲げないことを伝える。オクタも同じだ。

保護者達は揃って譲らないことを悟ってくれたみたいで、仕方ないと頷く。ミナトとキリノは表情を緩めて頭を下げた。

「ご協力、感謝します。ただ、ハジメくんの体のこともあります。これから一日に一回は医務室に来ていただいて体調を確認して、一週間後あたりに適性検査ということでもよろしいでしょうか？　まずは議事堂での生活に慣れてもらって、心身ともにコンディションを整えてもらえれば」

ムラクモの二人はもう一度頭を下げて礼を言う。今日はその場で解散になって、ミナトがムラクモ居住区に帰るついでに自分たちを一般居住区まで送ってくれることになった。

「ごめんなさい。いろいろと驚いたでしょ？」

「いえいえ！　むしろあのムラクモ機関に声かけてもらえるなんて……」

「これで俺たちがただの体が丈夫な一般人だったら笑えるけど」

「現実的なこと言うなよハジメ！」

「あはは、まだ可能性の話だからね」

列の先頭を歩く女性の隣にさりげなく並ぶ。さっきの誘いを受けたことが気に入らないのか、後ろにいる二ナがふんつ、と鼻を鳴らし、ミウが鋭い視線を背中に刺し、シホが無言で踵を蹴ってきた。

だがもう決まったことだ。自分とオクタは来週のどこかで適性検査を受ける。それでもし、異能力者で、さらにS級と判断された場合は……まだ決まっていないが。

気付かれないように隣を歩くミナトを横目で見下ろす。

普通の女の人だ。ついさつき火や氷をひよいと出してみせたとは

いえ、それ以外は自分たちとまったく変わらない人間に見える。

医務室で彼女が自分の力を見せたときの表情を思い出す。あまり気が進んでる様子ではなかった。子どものときにやらかしたなんて言っていたから、人にその能力を見られるのは好きじゃないのかもしれない。

じーっと見つめ続けていると、彼女の小振りな鼻がぴくりと上下した。

「あれ……いい匂い」

「え？ ……本当だ」

一緒に鼻を動かして、廊下の向こうから流れてくる匂いを嗅ぎ取る。確かこの先には、議事堂の人間が利用している食堂があったはず。

どこか懐かしいと思わせる、芳ばしいスパイスの香り……味気ない病人食ばかり食べさせられていた舌がその刺激を受け取って一気に唾が出始めた。

間違いない、この香りは。

「カレー！ 今日の昼、カレーなんすか!?!」

「みたいだね。お昼までまだまだあるけど、食堂行きたくなくなるなあ……!」

今日から思い切り塩気や油があるものを食べられると知って、さぞかし美味なのだろうと思いを馳せながら居住区に入る。妹たちは相変わらず踵につま先をこつこつ当ててきていて、振り返ると顔を逸らされた。

「なんだよさつきから……っておい、ニナにミウまで加わんな!」

「ふーんだ。おにいのバカ!」

「そうよ、ハジメのバカ」

「そうだね、ハジメくんのおバカ」

「言つとくけどな、この中で一番成績良いの俺だからな……?」

『頭腦の話じゃないし、バカ』

「ハモんなバカ!」

なぜだかずっと不機嫌なままの妹たちとつつけんどんな会話が続く。お気に入りのブーツの踵がへこむので本気でやめてほしい。

こつちの意思などお構いなしの様子に頭をがしがし搔く。するとミナトが控えめに笑った。

「仲良いんだね?」

「え、そう見えます?」

「見えるというか、雰囲気です。ちよつと羨ましいな。私一人っ子だったから。あ、はい、ここが君とご家族の生活スペースだよ」

さりげなく彼女の家事情が語られる。自分から話すということとは、もう少し突っ込んだ質問をしても大丈夫なのだろうか。

思いきって口を開いたとき、一瞬早く別の声が「ミナト」と憧れのファーストネームを呼んだ。同時に妹三人が「あ、○○校!」と口に手を当てる。

部屋の入り口を振り向くと、長い黒髪の女子が一人、こつちに向かって歩いてくるところだった。

「あ、あんときの」

自衛隊と一緒に救援として病院に来ていた女子だ。

病院で見たときは余裕がなかったから気付かなかったが、袖口・胸もとが小洒落たセーラー服に、ストラップが交差した形のローファーには見覚えがある。女子からの圧倒的人気を誇る都内の中高一貫校の制服だ。

長女の二ナ、次女のミウ、三女のシホが「この制服着たい!」とロツ

クオンしたものの、上二人は中学・高校受験ともに撃沈。シホは中学受験で落ち、高校こそはと目指していた私立校の証。竜災害があったから、シホは高校受験ができなかったが。

「やっと見つけた。あんた通信機忘れないでよ。議事堂の中広くて探すの大変なんだから」

「ごめんごめん」

目鼻立ちがはつきりした、意志の強そうな美少女だった。鮮やかな赤のサイハイを穿いた足を前後させながら、ミナトに何かを投げ渡す。

年が離れているはずの人にタメ口はいかなものかと思ったが、この少女もムラクモで、ミナトと仲が良いゆえの態度なのだろう。笑顔で謝るミナトから親しげな雰囲気を感じる。

憧れだが手が届かなかった制服をバツチり着こなして歩いてくるムラクモに気圧され、女衆がうおと後退る。さらにピカピカに磨かれた籠手と腰に下がる剣にオクタが目を輝かせた。

「す、すげえ……かっけえ……！ 君もムラクモの機関員だね!？」

「……ミナト、誰？」

「二週間前に議事堂に来た人たちだよ。ほら、シキちゃんも一緒に助けてくれたでしょ？」

「ああ、あの時の……」

「そ。今日お話して、来週に適性検査を受けることになったの。アサヒナ ハジメくんとオクタ リョウゴくん。検査受けるのは男の子二人で、こちらはハジメくんの妹さんたちと、それぞれの親御さんたち」

「紹介しますね」とミナトがこつちを振り向く。肩に手を置かれた少女は、不機嫌ではないのだろうが上機嫌でもない無表情でされるがままだった。

「私と同じ、13班の飛鳥馬 式ちゃん。ムラクモ最強はこの子です！」

「そういう紹介やめて。それで道場破りとかなんとか言って一般人がムラクモ居住区に突っ込んできたんだから」

「あ、そうだ、あれどうなったの？」

「床割ったら逃げ帰った」

「……廊下の損傷はそれかあ……」

「怒られた」

「それはそうだよ！」

スケールの違う言葉が飛び交っている気がするが聞き流す。この少女がヤバイのはわかった。

医務室のときと同じくらい呆気にとられる自分たちの前で話は進み、ミナトが手を合わせる。

「そうだシキちゃん、今日は食堂でお昼食べない？ 今日カレーなんだって」

「無理じゃない？ たった今仕事が入ったし」

「え？」

ミナトが笑ったまま固まる。シキと紹介された少女は「だからあんなを探してたの」と小さい用紙を取り出して提示した。

「首都高の瓦礫撤去が難航してる。あそこを車が通れる状態にしないと、自衛隊の車両が物資や怪我人を運べないから、その片付け。ついでにそこらへん回って、生存者の搜索と物資の調達していくわよ」

箇条書きで数個書いてあるメモが読み上げられていくたびに、ミナトの顔が青くなっていく。続いて目がぐるぐる回り出し、チャカチャカチャカチャカチーンと何かを計算する音がした。……ような気が



した。

「……カレーは？」

「諦めて」

「……たぶん、量に限りが」

「そうね、諦めて」

「……カ」

「弁当でも栄養は取れる。諦めろ」

天井からタライが落ちて頭に衝突し、ミナトが崩れていくような幻覚が見えた。

ああ、おそらく舌がカレーモードだったのだろう。嗅覚と味覚を敏感に刺激する魅惑的な香りを嗅いでたのだから仕方ない。

ゆっくりゆっくり俯いていくミナトの腕をシキがつかんで引きずり出す。ううん、容赦がない。

「ほら、日が暮れないうちにさっさと行くわよ」

「うん……わかってる。わかってたよなんとなくね……。あ、そういうわけで、失礼しまーす……」

「お、お疲れ様っす……」

ミナトの上着とシキの黒髪が翻る。

赤い腕章が存在を誇張するように揺れて、自分たち以外にもその背中を見送る人たちが、はーっ、とため息をついた。

「毎日大変ねえ」

「若い女の子二人でしょ？ ドラゴンなんて化け物相手によくやってこれたね」

「あの人たちの活躍で差別が減って、他の異能力者の人も過ごしやすくなったんだって」

「俺、マモノに食われそうになったところをあの子たちに助けられた

んだ！ いいだろ？」

「間抜け」

あちこちから言葉が生まれて交わされていく。ここにいる誰もが13班に対して好意的だった。それだけ、あの二人は去年誰かのために頑張って戦っていたんだらう。

ドラゴンとマモノ相手に立ち回り、東京ひいては日本も世界も救い、英雄と呼ばれるようになったムラクモ13班。そのメンバーが目の前にいる。しかも屈強な男じゃなくて、美少女とお姉さんという組み合わせ。いろいろくるものがあつた。

「……マモノ討伐の専門家、か」

自分より小さくて細い背中。けれど見かけは関係ない。どんどん遠ざかっていくにも関わらず、それはとても大きく見える。

これがムラクモ13班。

自分たちとは住む世界が違う気がして、隣にいる友人だけに聞こえるように呟いた。

「……オクタ」

「どした？」

「あわよくばお近付きになりたいとか……やっぱダメだよな」

「何言ってるんだよ男だろ！ 欲望に忠実になろうぜ！」

「嫌な言い方やめろ！」

ぎゃーわーと騒ぎ始めたところで、天井につけられたスピーカーから中断されていたラジオが再放送される。

肌の露出が高いことで有名なDJチエロンの声と一緒に、新しい音楽が流れ始めた。

『ヘイ！ ラジオ止めちゃってソーリー！ リクエスト、バンバン流

「してくよー!」

「……あれ?」

「この曲……」

流れ始める聞き覚えのあるイントロに耳が反応した。自分もみんなも動きを止める。

歓声のSEから始まって、軽快なメロディで男も女も入れるようなノリをBGMに……、

『今日も今日とてベリービジーなヒーロー、13班のミナトからのリクエスト! え? 本人がいないのに流すのはバッド? ドンウォーリーッ! ミナトには携帯レディオをパスしたよ! そーゆーことで、みんなも知ってるよね? 有名三姉妹アイドル「トリコロルtricolor」! 曲名は——』

ガッ!! と上を向いていた頭が下がる。

言いたいことは全員同じだ。けど言葉が出ない。驚きすぎて目配せするしかなかった。

13班の彼女が? リクエスト?

……「妹たちの曲」を?

「え、ま、マジかよ! おいハジメ! ニナちゃんたちの曲じゃねえか! これは踊るしかねえ!」

竜災害の前、配信、CDの売り上げ共に大きく伸びて話題になった、妹たちのユニットの曲が流れる。

少女三人の声が伴奏に乗って再生される中、オタクの血を押さえきれなかったのか、オクタがどこからともなくペンライトを取り出してヲタ芸を始めた。おまえは何をしているんだ。

周りの人たちがざわつきながら注目してくる。けどそんなことどうでもいい。頭の中がたった一つの事件で埋め尽くされていた。

ミナトがリクエストした。この曲を。自分が作詞、作曲して、妹たちが歌った歌を。

気まぐれで選んだのではなくて、彼女が妹たちのファンだからだとしたら。

「……二ナさん、ミウさん、シホさん」

「……何よ、さん付けで呼んだりして」

「うーん、なんとなく予想はつくけど……」

「おにい、言いたいことがあるなら言いなよ」

「ワンチャンあるかもしれないので、今度あの人と話すときに一緒に来て——」

『バカ!』

拳三つが容赦なく顔面に埋まる。

ですよ、と心の中で呟きながらハジメは議事堂の床に倒れた。

幕裏3. 素早くてマナが多いかもしれないけど、耐久力は紙 \*

「身長は……よし、まだ伸びてる」

「ハジメー、おまえ身長いくつだった？」

「174」

「また一緒か！ 決着つかねー。体重はおれの勝ちだけだな！」

「これは筋肉の差だな」とドヤ顔で言うオクタに軽くパンチを入れる。見かけだけじゃない腹筋の固さにちくしようとう歯軋りをした。

血液検査やカウンセリングは引つかかることなく無事通過。怪我の影響もなく、作務衣のような薄い服を着て受けた身体測定は自分もオクタもいたって健康体だと太鼓判を押されて終わった。

あとは運動能力や、それ以外の特別な力がないか調べて、異能力者かどうか精査していくことになる。

「そういうことで、これから運動能力テストを始めるぞー！」

「お、おおー！」

「おおー！」

おお、おお、おお……。

「……さて、やるか」

「ういっす」

ムラクモ機関のイツキに続いて拳を宙に突き上げる自分たちの声が、建物の壁に当たってむなしく響く。

議事堂前の広場だと改修作業で行き来する人たちの邪魔になると

いうことで、測定は議事堂の裏側でやることになった。表じゃなくて裏。日向じゃなくて日陰。なんだか寂しい。

憧れの女性がいらないことがモチベーションに影響して、ハジメは路上にしやがみこんだ。

「うー、シバさんに見てもらえると思ってたのに……」

「そりやないない！ 13班は東京復興作業の手伝いでいつも引っ張りだこだよ。あの二人は働き者みたいだからな。俺はムラクモに入って日が浅いから最近知ったんだけど！」

「イツキさんもおれらみたいに声かけられてムラクモ試験受けたんすか？」

「いや、俺は戦闘員じゃなくて第2班、通称情報支援班所属なんだ。自分で言うのもなんだけど、重度の職業マニアだから、おまえたちの査定に役立てると思うぜ。デユフ……」

「お、おお、よろしくお願いします……」

「やあ、待たせたネ」

個性的な笑い方をするイツキにたじろいでいると、研究者らしき白衣を来た男と、キャリアアウーマンのような女性が器具を複数持って歩いてきた。

「初めまして。私はマサキ。彼女は補佐のセンゴクくんダ。イツキと一緒に君たちの能力査定を行わせてもらう。まあ能力と言っても、異能力者かどうか確かめるだけだからね。君たちが今まで学校で受けていた身体測定と何ら変わりないから、緊張しなくてもいいヨ」

「よろしくお願いします」

「お願いしますー！」

「うんうん、元気のいい若者が協力的なのは喜ばしい限りだ。素敵な女性諸君もいることだしネ」

「女性『諸君』？」

ここに居るのは、自分とオクタとイツキ、マサキにセンゴクの五人。女性はセンゴクしかないはず。

女性の諸君ってどうということだと思った瞬間、「わ！」と聞き慣れた声と手が背中を押した。

「だっ!? ……な、二ナ!? なんでおまえ、」

「二ナ姉だけじゃないよー!」

「私たちもいまーすっ」

「シホ、ミウ!?」

マサキの背中からシホが、センゴクの背中からミウが飛び出してポーズを決める。二ナが自分の背中からするりと抜け出して、色違いのスポートウエアを着た長女、次女、三女は得意気な顔をして横一列に並んだ。二ナが一步前に出て胸を張る。

「その、異能力者かどうか確かめるっていう検査、私たちも受けることにしたから」

「はあ!？」

「えっ、二ナちゃんたちも異能力者かもしれないって言われたのか?」  
「いいえ、なにも」

まさかと目を丸くするオクタにミウが頭を横に振る。

いつの間に行動したのか、三人はムラクモ機関のキリノ総長に直談判をしいって、能力査定を受ける許可を取ってきたらしい。総長曰く「ムラクモの情報了他言しないのであれば、積極的な姿勢は歓迎します」……だそうだ。

「ちよ、ちよっと待っててくださいよ! いいんすか、これ!？」

マサキは妹たちに対して歓迎ムードなので、センゴクに尋ねてみる。

普通は駄目なんだがな、とセンゴクは凜々しい見た目に似合いの中性的な口調で、手に握る紙の束をめくった。

「2020年……去年の竜災害で、我々は国内の異能力者のデータの大半を損失してしまった。この一年を通して復旧を進めてはきたが、まだ発展途上の状態だ。データベースにない希望者がいれば、査定は一応受けてもいいことになっている。私たちとしてはありがたいが、……マサキ主任、くれぐれも必要以上の接触は避けるように」「嫌だなあ、どうして睨むんだい？ 私が粗相をするとでも？」「その通りです」

ぎろり、と鋭い目つきでセンゴクはマサキを睨む。対するマサキは何のことだかわからないというように笑って肩をすくめた。

……とりあえず、OKということらしい。

「そういうことだ・か・ら」

「よろしくね、ハジメくん？」

「リョウゴくんもね！」

「おお、よろしくー！」

ニナが顔を覗き込むように近付いて、ミウが満面の笑みで首を傾げる。最後にシホがオクタの名前を呼んで手を振り、オクタはさらっと三人を歓迎した。場の空気が一気に体育の授業のような雰囲気染まっっていく。

父と母は妹たちを注意しなかったんだろうか。いや、したはずだ。したけど、頑固な彼女たちが素直に頭を縦に振るはずがない。たぶん今頃、議事堂の中で呆れながらコーヒーを飲んでいると思う。

「さあ、予定の二人から五人に増えたことだし、遅れないように終わらせてしまおうか。まずは準備運動をしつかりして、短距離走のタイムから計測するヨ」



「はーい！」と妹たちの声がきれいに揃って空に伸びていく。オクタはノリノリで肩を回していた。

「よっしやハジメ、測定のついでに勝負しようぜ！」

「気楽でいいなあ……。ていうか、おまえ俺より足遅いじゃん」

「何おう!? おまえなんか毎度持久走でへばって倒れそうになるじゃんかよ！」

「はあ? いつの話だよ」

バチバチバチと視線が空中でスパークする。

妹たちのことは仕方ない。今さら戻れと言っても聞かないだろうし。

「とうか、これはそもそも身体能力の測定だ。声をかけられた自分たちならまだしも、妹たちが異能力者というのはないだろう。たぶん。」

もうそういう話は置いておいて、今は記録の測定に集中しよう。

「……負けて吠え面かくなよ」

「こっちの台詞だつーの」

「お、なんか燃えてる！」

「頑張れー！」

「いやおまえらも走るんだよ！」

「はい、それじゃあいくヨ? 位置について! ……用意、……」

ピーツ! とホイッスルの音が響く。

「だらあああああつ!!!」

同時に雄叫びを上げて、男子二人は走り出した。

「ママ見てー！ お兄ちゃんたちが走ってるよー！ ちようはやーい！」

「あらほんと。若い子は元気ねえ」

\*\*\*

結果を端的に言うと、オクタは身体型異能力者の判定を受けた。イツキが目を爛々と輝かせて、ヒーローものの番組で挟まれる「説明しよう！」みたいなノリで語り始める。

「デストロイヤー！ ！ ！ その名に相応しい壊し屋！ デストロイヤーは異能力者の中でも体の頑丈さが秀でている。飛び抜けた筋力に体力。しっかり下地を積みめば、矛も盾もこなせる典型的なパワー型だ」

「なるほど、DPSとタンクを兼ね備えてるってことっすね。何気に最強じゃねえ？」

「うん。そして素早さは最低だな」

「最低？！」

確かに、オクタは持久力はあるけど瞬発力はあまりない。議事堂外の長距離走は負けたが、短距離走に反復横飛びはこちらが速かった。

「まあ、遅いつつても異能力者の中での話、一般人とは比べ物にならないから。それに、火力はそれを補って余りある。さらに、その重い一撃は少しの間、相手の体に余波を残すんだ。俺たちはそれを『D深度』と呼んでいる！」

「デストロイ深度！」

「デストロイヤーは攻撃の重さ、D深度が命！ 攻撃を積み重ねて超弩級の一発を当ててやれ！」

「イヤッフーツ！」

イツキの説明にいちいちリアクションをとり、最終的にテンションMAXで空アッパーをしたオクタは、数秒置いてこつちを振り返った。

「……っわけだったんだけど」

「お、おう、そうか……」

それにしても彼が腕っ節型の異能力者か。言われてみれば体格は同年代の中でもがっしりしているし、引越業者や球場でのビールの売り子など、体力勝負のバイトをいくつも掛け持ちしていた。運動ができるタイプのオタクである。

大阪から東京に移動する間、マモノに襲われたときはいつもオクタが殴り合ってたなんとか追い払ってくれたことが何度かある。思い返せば兆候はあったのだ。

「オクタ リョウゴくんだったネ。君の話は医者とミナトくんから聞いていたヨ。君の場合、元からあった素質もそうだけど、議事堂に来るまでのサバイバル生活で能力が昇華されたんだろう。これからまた細かい検査をしていくけど、おそらくA級かS級だろうネ」

「マジっすか!？」

「そんなに驚くことでもないだろう？ 武器も着けてない拳一つでコンクリートにヒビを入れられたんだから。ただ、体の使い方をしっかりと熟知していないとどれだけ頑丈でも痛めてしまうかもしれないから、そこは勉強がひつようだネ」

数分前、オクタがパンチで小さいヒビを走らせたコンクリート片をマサキは笑って小突く。そして手の中の用紙にペンで何かを記入し

ていった。

次に自分たち兄妹の方を向いて、まず妹たちに一言。

「お嬢さん方。君たちはとても元気な『普通の人』だよ。異能力者ではなかったネ」

「えー!？」

「おや、残念だったかい？ でも検診の結果では実に健康な体だったヨ。それでよしとしようじゃないカ」

「主任、セクハラすれすれだぞ」

「これでかい？ えー、で、」

「おめでどうでいいのかな？」とマサキはこっちに笑いかける。

「アサヒナ ハジメくん。君もたぶん異能力者ダ！」

「たぶん!? たぶんって何すか!？」

「そして、何の異能力かはサツパリダ！」

「え、ええ……」

「じゃあセンゴクくん、お嬢さん方を親御さんのところまで送ってあげテ」

「了解。さ、行こう」

センゴクが二ナ、ミウ、シホの背中を押す。けれど三人は素直に従わずに「ちよっと待って!」としがみついた。

「おにい、どうするの!? まさかこのままムラクモに入ったりとか……」

「いや、それはまだわかんないけど」

今の段階じゃ決められない。というか入るとしたらムラクモ試験を受けて合格しないといけないのだ。まだまだ先は不透明である。

「おとなしくしてくれ。君たちは一般人だ。ここから先は彼ら二人と私たちの話になる。ご両親が心配していただろう。さあ、戻ろう」

センゴクが駄々をこねる妹たちを優しく、しかしきっぱりと諭す。妹たちはしばらくわーわー騒いでいたが、鋭い眼光に当てられて体をすくめ、不満そうにこつちを睨みながら帰っていった。

はははとマサキが笑う。

「お兄さんのことが心配なのかな？ 優しい妹さんたちだネ」

「そう見えます？ いつもイジられてばっかなんすけど」

「私なら構ってほしいがゆえのイジリだと解釈するヨ。よし、話を戻そうか。私はさきほど、君が何の異能力者かわからないと言ったネ？

あれは嘘ダ」

「あ、はい……って、え？」

「ハツハツハ。一度言ってみたかったんだヨ、この台詞」

いや、結局どつちなんだ。

マサキは測定器具をワゴンに乗せ、議事堂へ戻りながらマイペースに話を進める。

「サツパリだなんて言ったけど、見当がついていないわけではないんだ。何から話そうかな……イツキ、ざっくりと説明をしてあげてくれ」

「了解！ 俺の出番だ！」

ワゴンを押していくマサキに続きながら、汗を拭う自分とオクタにイツキが片手を開いて指を立てる。

「いいか、よく聞けよ？ 世の中の異能力者は大きく五種類に分類される。サムライ、トリックスター、デストロイヤー、サイキック、ハッカーだ。前の三種は前衛、後の二種は後衛。さつきも話したように、

オクタはデストロイヤーに該当する。おまえが持つてる腕力と体の頑丈さはデストロイヤーの典型なんだ」

「……最低の速度も？」

「最低の速度も。まあそういう能力もしっかり鍛えていけば向上……てそうか、まだムラクモに入るとは決まってるんだったな」

イツキはもったいないと言いたげな顔で頭を掻き、「じゃあ次はおまえだ」と自分の方を向く。

「アサヒナ。体力そこそこ。腕力そこそこ。素早くて小回りがきく。体の耐久力は紙」

「紙!?!」

「最初はトリックスターに近いかと思っただが、それらしい特殊技巧や身のこなしが身に付いているわけでもないし……スピードタイプの後衛って感じかもしれないな。これから調べていくが、マナの総量やコントロール如何で結論を出そうと思う」

「マ……え、何？」

『マナ』。ゲームでよく聞く、魔法を使うときに必要になるエネルギー。

いきなり非現実的な単語が出てきて置いていかれそうになる。まばたきするこちらを見て、イツキとマサキは同時に笑った。

「やっぱり、普通の人はマナの話を知るとそういう反応するよな」

「仕方ないネ。日常生活でマナは使わない。存在そのものを知らない方がむしろ一般的なのサ」

「ま、マナってあれっすか？ ゲームで魔法に使うあの……いわゆるMP?」

「そう！ 人間は誰しもマナを持っている！ さっきも言ったように、平和な日常生活ではまったく必要ないから世間には認知されてないし、一般人が持つマナはほとんど無いに等しいけどな」

議事堂前の広場に戻ってくる。せつせと工事を進めている自衛隊やムラクモの人員に頭を下げて進み、マサキは器具をワゴンから腕に抱えた。

屋内の階段はワゴンじゃ進めない。自分たちも慎重に器具を抱えて二人の後についていく。

廊下を進み、階段を下り、居住区じゃない別のフロアに入る。壁や床は他のフロアと変わりないが、行き来するのは白衣を着た研究者がほとんどで、全員が左腕にムラクモの腕章を着けていた。

「マナっていうのはね、体力とは違う自然的・精神的なエネルギーのことサ。異能力者は皆マナの加護を受けている。マナを掛け合わせることで攻撃に属性を付けたり、相手に不利益な状態を与えることができるんだヨ。……さあ、着いタ」

研究室と書かれたプレートが下げられたドアの前に立ち、寄つてきた助手に器具を預けてマサキは振り返る。その目が妖しくきらりと光った。

「アサヒナくん、オクタくん。これから説明を兼ねて、君らの異能力の精査に入っていくつもりなんだガ……保護者の方は例外として、このフロアや研究室、我々に関する諸々を口外しないと誓えるかい？」  
「え？」

「ムラクモ機関の情報はおいそれと公にできない機密事項だからネ。君たちはムラクモのことを誰かに話さなくても生きていけるだろう？ もちろん、我々はこの検査で得た君たちの情報を他人に売ったりしない。そこは保証しよう。だから君たちも約束してほしい。自信がないなら、とりあえず異能力者であることはわかったわけだし、今日はここで解散タ」

脅しているわけではないだろうが真剣だ。マサキは長い前髪の間

から覗く片目にしつかりと自分たちを映している。

隣り合う友人と目を合わせて意思疎通を試そうとしたが、エスパーじゃないので口を開かずに会話するなんて無理だ。ただ、互いに考えられていることが同じなのはわかった。

「もちろん、誰にも言いません」

「ムラクモはおれらを助けてくれた。売るような真似なんてしないっす！」

「そうか、ありがとう。それじゃあ入ろうか」

研究室の扉が開けられる。

失礼しまーす、と言いかけて、

白衣を着てポーズを決めているミナトが視界に飛び込んできた。

「どうどうシキちゃん、私白衣似合う？ 頭よさそうに見える？」

「はいはい、似合ってる似合ってる……あ、マサキ」

「へへへー、研究員の人たちかっこよくて一度着てみたか……え？ うわあーっ!!?」

こつちを振り向いたミナトが驚いて飛び上がる。顔を真っ赤にしてうろたえる彼女にマサキは爽やかな笑顔で手を振った。

「やあ、お楽しみのところ邪魔するヨ」

「シバさん、どもっす！」

「あ、あれ!? オクタくんもいたの!? ハジメくんも!？」

手を挙げたオクタに目を見開き、次に自分を見て汗を浮かべ、ミナトはシキの後ろに回った。相変わらず無表情な女子の背中から彼女は恥ずかしそうに顔を出す。

「今さら隠れたって意味ないでしょ。バッチリ見られてたわよ」



「恥ずかしがる必要なんてないじゃないか。白衣、よく似合ってるヨ？」

「やめてください忘れてくださいいごめんなさい。穴があつたら入りたい！」

(感想は)

(控えめに言って最高)

見えないように背中に回した拳を相棒とぶつけ合う。白衣の裾をスカートのように浮かせて回っていた姿も、自分より小さな子の背中に隠れようとして身を縮める姿も網膜に焼き付け済みだ。

神に感謝しつつ挨拶してみる。ミナトは真っ赤な顔を脱いだ白衣で隠し、消え入りそうな声でこんにちはと返してくれた。

「ところで、13班はどうしてここに？」

「ミロクとミイナに怒られたのよ、働きすぎだって。リハビリも兼ねて仕事してるのに。今日はもう休めつてキリノにも言われて……休憩がてら、資料を借りてスキルの確認でもと思ってね」

「それ、休憩とは言わないんじゃないかい？」

「体を動かしてないから休憩よ。……で、」

シキがマサキの肩越しに顔を覗かせる自分たちをじろりと見る。鋭い視線が顔から下、腕あたりに向けられた。ムラクモの腕章を探してるんだろう。

それが巻かれていないことを確認してシキは首を傾げる。ミナトも続いて「あれっ」と声を上げた。

「そうだ、マサキさんはともかく、君たち二人はどうしてここに……あっ！」

「なるほど、異能力者だったわけね？」

「そうなんだ。これからランキングに入るところだよ。……君たちの手が空いているのなら色々試せたんだが……休憩を言い渡されてい

るなら手伝ってもらうのは無理か」

マサキが顎に手を当てた瞬間「やる!」「やります!」と13班の二人が勢いよく挙手する。

「まだ午前中よ、ちよつと仕事しただけで休んでたら、体力ありあまつて逆に死ぬ!」

「何かお手伝いできることがあるならぜひやらせてください! 異能力のランキング作業は見たことないですし、興味があります!」

「でも、総長にも休憩と言われているんだらう? 私が怒られてしまうヨ」

「体調はこれっぽっちも問題ない!」

「キリノさんには私たちから説明します!」

「えくどうしようかナ」

いいでしょお願いと女性二人に迫られて、心なしかマサキの頬が緩む。散々もつたいぶって、満更でもなさそうに彼は両腕を上げた。

「じゃあ、少し協力を頼もうカ。ハードなわけじゃないから、負担にはならないだらう。オクタくん」

「うつつ! なんすか?」

「シキと軽く組手をしてみてくれ。今はサムライに転身しているが、彼女は元々デストロイヤーなんだ。異能力者の中でも同じ能力を持つ者同士、より詳細なデータが取れるはずだよ」

「えっ!? 13班と!」

「へえ、あんたデストロイヤーだったの」

シキがにやりと笑う。獲物を見つけた肉食獣のような眼光がオクタを射抜き、その様子を見たミナトが苦笑いをして額に手を当てた。

「シキちゃん、軽くだよ? 軽〜く組手だからね?」

「わかってるわよ、信用ないわね」

「だって楽しそうなんだもん……戦闘でのめり込むときの顔だし」  
「それじゃあ下のフロアが空いてるから、そこで頼むヨ」

マサキが指名した何人かの研究者やシキと一緒に、オクタは移動していく。

ドアを開けて研究室から出るとき、オクタはこつちを振り向いて笑顔でサムズアップした。某映画の溶鉱炉に沈んでいく有名なシーンが脳内再生される。何死亡フラグを立てているんだおまえは。

これはただじゃ済まないだろうなと友の背中を見送る視界に、ミナトがひよいと顔を出す。

「じゃあハジメくん。こつちもこつちで始めようか」

「うあつ、はい！ よろしくお願いします！」

「あはは、そんなに固くならなくても大丈夫だよ」

穏やかに笑うミナトの後ろで、イツキが彼女とこつちを交互に見て、何かを理解したように頷き、オクタと同じくぐつと親指を立てた。ちくしょう、色々と悟られている。

マサキが次々と資料を運んできては傍にあるデスクに置いていく。その間、ミナトは人数分の椅子と小さな丸机、飲み物を用意して、長話ができる環境を整えてくれた。

「それじゃあ、君の話を開きよう。マナは精神的なエネルギーで、君たち異能力者が特殊な技を使うときに必要とされる。また、世間一般にマナの存在は知られていない。ここまででは覚えているかい？」

「はい。日常生活では使わない、でしたっけ」

「そうそう。というか、存在を知っていても一般人には使えない。自分の意思でマナを操り、一般人には成せない技術を扱うことができる  
|| 異能力者なんだ」

「イツキさんは俺はマナが多いように見えるって言いましたけど、そ

れは？」

「見えるというより推測だね。君の身体測定の結果から予測したんだヨ。異能力は万能の力ではなく、大体が限定されて突出している物なんだ。ミナトくん、君たちのデータを借りてもいいかい？」

「どうぞ。……あっ！ ちょっと待ってください！」

ミナトは慌ててマスキングテープを取り出し、彼女とシキの情報が載る資料に貼りつけた。

手渡された資料は身長の下項目がテープによって隠されている。マサキが微笑ましく「隠す必要ないじゃないか」と笑った。

「君もシキも健康的な体重だ。むしろ体を張る役割なんだからもっと増やした方が——」

「怖いこと言わないでください！ 健康云々は関係なく、なんか抵抗があるんです！」

「そう？ シキは気にしないと思うけどネ」

「いいから、このまま続けてくださいっ」

からかわないでほしいとミナトは顔を赤くする。その様子を見て、家で体重計に乗る妹たちを後ろから覗きこもうとして、全員から等しく回し蹴りを喰らったことを思い出した。

うら若き女性相手に体重は気軽に振っていい話題ではない。もし不用意に触れれば四肢爆散の勢いで攻撃されても文句は言えない要素の一つ。それはムラクモでも同じらしい。口を滑らせないよう唇を引き結んで、マサキの説明を待った。

「えー、じゃあ続きだね。この資料、シキとミナトくんそれぞれのパラメーターを見てほしい」

「おお、見事に突き抜けてる部分が正反対……」

「そう。さっき言ったように、異能力は通常限定されて突出している物。デストロイヤーのシキはドラゴンも殴り殺せる最高のフィジカ

ルを持つけど、サイキックのように膨大なマナや属性を扱うことはできない。反対に、サイキックのミナトくんは天災レベルの超常現象を起こせるけれど、フィジカルは他の異能力者に追いつかない。異能力者で身体能力とマナを扱う力が両方飛び抜けている例は極々稀なんだ。で、君のデータがこれ」

真新しい用紙で作成された資料を出される。どこの項目も平均的で、目立つのは素早さが他より秀で、体の耐久面が低いこと。あとは、まだ分析しきれていないのか空欄になっている項目がいくつかある。

「君は素早いけれど、トリックスターのような敏捷性特化というよりはバランスがとれているような感じかな。身体的特徴が飛び抜けているわけではない」

「じゃあ、これからマナを扱う検査をしてみても……後衛型の異能力者かどうか確定させるってことですね？ 後衛なら私と同じだ」

同類を見つけたことでミナトの周りの空気がぱつと華やぐ。嬉しそうな笑みにつられて自分も笑う。マサキが「微笑ましいネえ」としみじみ頷いてコーヒーを飲んだ。

「君はマモノに襲われて大きな傷を負い、致死量の血を流したけど一命を取り留め、二週間で退院できるまでに回復した。異能力者に共通する凡人離れた自然治癒力を持っている。異能力者であることはほぼ確定だ。ただ……どの職業になるんだろうネ？」

「え？ ハジメくんはサイキックかハッカーじゃないんですか？」

「え？ さつき、大方の見当はついてるって言ってなかったっすか？」

ミナトと自分の質問が重なる。

と、さらに被さってミナトが持つ通信機がピピピと音を立てた。

「はい、こちら機動13班のシバです」

『こちら10班のヒムロだ。シバ、少しいいか？ この間提出された資料のことなんだが……』

ミナトがどうしようというように顔を上げる。行っただとマサキが手を振り、彼女は眉尻を下げて手を合わせた。

「すみません、なるべく早く戻るようにします！ ハジメくんもごめんね！」

「あ、いえ、お気になさらず」

ミナトが慌ただしく研究室を出ていく。一人抜けてしまった状態で、マサキが脇のデスクに用意していた資料の山からいくつか紙束を抜き出した。

「ミナトくんが戻ってくるまでに話を済ませようか。……この間もいたんだヨ。もう一人、君に似た能力の人物が。彼と君は新しい形の異能力者かもしれないんだ」

「新しい形？」

話がさっぱり分からない。首をひねることしかできない自分に、マサキはコーヒーを飲み干し、手渡された資料を見て説明を始めた。

「竜災害で大半のデータがなくなってしまったが、2020年以前より、我々は全国の素養ある者たちの情報の更新・管理を行っていた。そして近年、君とよく似た異能力者らしい人間がぼつぼつ確認されていたんだ。調査を続けてわかったのは、マナが多いこと、身体能力だけではなく、判断能力なども含めてある程度フットワークがいいこと、……あと、失礼だけど君と同じく肉体の耐久度が紙ってことだね」

「紙!？」

「いや、バカにしてるわけではないヨ？ むしろそこが薄いか厚いかというのは、前衛なのか後衛なのか判断する重要な要素なんだ」

ここでも紙と言われてしまった。しよぼくれる自分にイツキが「紙は紙でも一般人よりずっと頑丈な紙だぞ！」と中途半端なフォローを入れる。必死な様子から悪意がないのはわかったので、丸めていた背筋を伸ばして聞きの体勢に戻った。

「えーと……そうだ、彼と君には共通点がもうひとつある。歌手だつてことだネ」

「へ？」

口につけようとした紙コップを落としそうになる。

マサキは上着の胸ポケットからスマートフォンを取り出して机に置いた。インクの付いた指先が画面をタップし音楽プレーヤーを開いて、めちやくちや見覚えのある曲名を押す。

静かなピアノの伴奏に乗って、自分の歌声が流れ出した。

「これ、歌ってるの君だろう？」

「ぶあつ」

今度こそ紙コップを落とした。バシヤンと麦茶が床に飛び散る。筋肉が緊張して、肌の内側から表に汗がにじみ出るのがわかった。

「おや、何を驚いているんだい？ 間違つてないだろう？ ほら、ソロと、男性グループと、ときどきあの妹さんたちと活動しているじゃないか、君」

「あ、は……い。そうっす」

「なんで知ってるんだつて顔だネ。君たちは全国ツアーに至った売れっ子じゃないか。メディアへの露出もある。ムラクモにも自衛隊にも君たちのファンはたくさんいるヨ」

その割には、そういう類の接触がまったくなくなかったような。いや、

自慢ではなく純粋な疑問で。

控えめな言葉を選んで質問すると、そりゃあねとマサキは笑った。

「みんな大人だからネ。ついこの間まで死にそうになっていた君たちにサインくださーいとかきゃー本物よーなんて突撃するほど非常識じゃない。ここでは無理に芸能人として過ごさなくてもいいヨ。もちろん、君の情報は伏せておくから」

……そうか。完全にプライベートな自宅ではないのに、今まで肩の力を抜いて過ごさせていたのは、この人たちがそういう風に動いてくれたからなのだ。

ありがとうございますと頭を下げようとして、ふと疑問が脳裏をよぎる。

ついさつき部屋を出ていったミナトについてだ。彼女は先日、ラジオ放送に妹たちの歌をリクエストしていた。

三姉妹アイドル「tricolor」。三つ子と勘違いされるほどそっくりな長女、次女、三女が組んでいるユニットだ。リクエストしていたということは、彼女は妹たちのファンなのかもしれない。マサキが言うように気を遣ってくれていたのか、はしやぐのような反応はまったくなかったけれど。

「あの一、シバさんは俺のこと……」

「さあ、どうだろうネ？ そんなに気になるなら、いつそ本人に訊いてみるのもありなんじゃないかい？」

マサキは相変わらず微笑を浮かべている。しかし優しさではなく漫画を読んでいるようにおもしろがる顔だ。

(……あの人は俺のこと知ってんのかな?)

知られていたら嬉しいような恥ずかしいような。知られていな



かつたらほつとするような寂しいような。

大勢の注目が自分に集まることなんて何回もあった。街中で声をかけられることだって何回もあった。なのに気になる人に認知されているかどうかでここまで悶々としてしまうなんて。

「さ、本題に戻ろうカ。今までの話のまとめだヨ」

イツキがロッカーからモップを取り出すのを横目に、マサキは話を続ける。

「サムライは身体能力。トリックスターは俊敏性。デストロイヤーは運動能力。サイキックは超感覚。ハッカーは情報技能。……以上、今までは五種の異能力者が確認されている。だけど近年、五種とはまた別の特徴を持つ者が少しずつ確認されるようになってきた。バランスが取れた後衛寄り、というぐらいまでは判明している。ただ、彼らは皆CからB級程度だったようで、失礼ながら良質なデータは……」

マサキは肩をすくめる。そして「そこで君の登場ダ」と自分を指差した。

「君と、さつき言った君に似た異能力者。二人は歌手であるという共通点を持っていて。そして今まで調べてきた者たちも、運動部で長い間主将をやってきたとか、何かの組織・団体を率いるリーダーだったりとか、ファクションモデルをやっていたとかネ。人の上に立ち、人を動かすことが得意だったり、大勢の人間を惹き付ける強い魅力……そう、『カリスマ性』のある人間だったんだヨ」

「カリスマ……っすか」

「で、中でも君と彼は総合的に能力が高く、さらに日本で広く名を知られる有名人ダ」

「それは……い、異能力？」

「何か忘れてないかい？ 『マナが多い』と言っただろう？ 君の方は

まだわからないけど」

「ただいま戻りましたーっ」

「お、ナイスタイミングだね。ミナトくん、君の出番だ。今から色々試してみよう」

小さく息を弾ませてミナトが戻ってきた。彼女はマサキから後を引き継ぎ、机と椅子を片付け、「こっち来て」と手招きをする。

後についていくと、研究室の奥、何も無い小さな部屋に案内された。分厚いガラスが張られていて、さつきまでいた場所から中を覗けるようになってる。

ミナトは自分たちが異能力者かもしれないと教えてくれた日と同じ、猫柄のネイルを指先に着けた。確かクロウと言っていたか。

「よし、続きだね。君の異能力は、物理じゃなくて特殊能力型の可能性がある。私もサイキックでマナを使って戦うから、君の能力を引き出すお手伝いができるかもしれない」

「あの、マナが大体なんなのかはわかったんですけど……ついさつきまで知らなかったわけで、使い方とかさっぱり……」

「そうなんだよね。私も最初はそんな感じだったの。まずはイメージするところから始めてみようか」

ガツシャン、と部屋の奥の壁が音を鳴らして動き始める。議事堂に来るまでに何度か見たマモノを模した的が出てきた。ミナトは一旦部屋の外に出て、数十分前のマサキのように腕に荷物を抱えて戻ってくる。

刀、ナイフ、銃、ナックル、外に刃が着いた円盤、手に着けるかぎ爪などなど。色んな武器が床に慎重に下ろされる。

「使わなくても変わらない人もいるんだけど、武器を媒体……えーと、ギターに対するアンプみたいなものかな。増幅器代わりにすることで、効率よく能力を發揮できる人もいるのね。私もそうなの。まずは

武器なしの状態で色々試して、何かつかめたら、どの武器でどんな形の力を使えるか実験してみようか」

「は、はいっす!」

「まずマナを使う感覚だけど、どう説明すればいいのかなー……」

ミナトは身振り手振り交えながら、ときどき指の上に火や氷を出して説明していく。

真剣な横顔に見入りながら、自分も見よう見まねでマナなるものを意識するところから始めてみた。

……そういえばオクタは無事だろうか。

\* \* \*

「いやーやべー! 超強かった! さっすがムラクモ13班!」

「おまえ下で何してたんだよ……組手だっけ?」

「おう、ほとんど投げられて終わったけどな」

オクタは思ったよりボロクソになっていた。バンドナが取れてシャツの襟が伸びて髪は埃まみれで膝がガクガク笑っている。まあ本人は満面の笑みだからひどいことはされていないと思う。たぶん。

「今はデータの集計中とかで結果が出るのは後日だけど、おれはS級の可能性が高いつて言われたぜ!」

「おまえがSう〜?」

「んだよその顔! そういうおまえは何してたんだよ?」

「マナについて勉強してた。マサキさんたちが言うには、俺は新しい形の異能力者かもしれないとかなんとか」

「何だそれかっけえずりいぞ」

ミナトやマサキたち曰く、人によって様々という前提はあるけれど、素質を持つている人間は何らかのきっかけで異能力に目覚め、扱えるようになるらしい。

自分の場合、病院でマモノに襲われて負った大怪我が短期間で治ったことから、その時点で異能力が発現していた可能性が高いんだとか。

さすがに今日だけでは、異能力者特有のマナを使う技、というのは出せなかったけれど、自分の体に変化が起きていることはわかった。超能力を扱うミナトを手本に言われるがまま瞑想すると、胸だか腹の奥で何かが渦巻くような……そんな不思議な感覚がある。

とりあえず異能力を持っていた結果は家族に報告したほうがいいとのことで、昼食の時間を機に今日は解散になった。

「……なあオクタ、おまえムラクモ入んの？」

「や、どうだろうなー。親父も母さんもムラクモは信頼してるみたいだけど、それとおれが入るのは話が別だって言ってたし」

「基本反対されるよな。うちもあんまい顔されなかった」

今後どう動くかはまったく考えていない。ムラクモの人間はこっちの意思を尊重してくれる。家族はもちろん心配している。

かつこよく戦うムラクモには憧れるけれど、自分は戦いたいのか？

と自問しても答えが出ない。絶対嫌だなんて嫌悪はない。でも戦いたいという意思はあるかという……結局答えは出ないままだ。

自分の異能力がどんなものかもはつきりしていないわけだし、進路はひとまず保留にしようと思う。

居住区に入ってオクタと別れる。割り振られたスペースで過ごす家族のところに向かう背中を見送って、自分たち一家のスペースに帰った。

「ただい……」

ま、と声を出そうとしたところで足が止まる。

父と母が誰かと話していた。後ろ姿で顔は見えないけど、でかい。下手したら身長二メートルはいくんじやないだろうか。その手に持っている大人サイズ湯のみがおちよこみたいに小さく見える。

「いやあ久しぶりだなあ！ あんたが死んだら俺も世も大切なものを失うところだったんだぞ？ 息災みたいで安心したぜ」

「かたじけない。そちらも家族一同無事なようで安心した。これからもよろしく頼む」

珍しくはしゃいだ笑顔を浮かべる父に武士のような口調で応える相手。青く染められ後ろに流された髪がライオンのタテガミみたいに見えた。厳つい体つきに身に着けている服はミリタリー系で、戦地帰りの軍人のような印象を受ける。

ていうか誰、と様子を伺う自分の背中に、いつの間にか二ナ、ミウ、シホがくつついていた。

「うわ、おまえらいつの間につ」

「うわって何よ。そっちこそいつの間に戻ってきたの？」

「おかえり、ハジメくん」

「おにい、あのオジさん誰？ パパの知り合い？」

「いや、知らない」

電車ごっこみたいに連なって観察する自分たちに母が気付いた。けらけら笑って手招きして、それに父たちも気付く。

「お、ハジメ、帰ってきたか」

「おかえりハジメ。あんたたちもそんなところで縮こまってないで、挨拶しなさい」

「えーと……っっておまえら押すなよ！ だあ!？」

ぐるりと厳ついオジさんが振り返る。ゴースト越しの三白眼に怯えた妹たちに思い切り背中を押されて転がる。

議事堂の冷たい床に頭突きをかました自分を、オジさんは優しく助け起こした。

「大丈夫か」

「あ、どうも、すみません……。俺、ハジメっていいいます。後ろのは順に二ナ、ミウ、シホつす」

「驚かせてしまった。すまない。我は猿鬼堂 吟路という」

エンキドウ、ギンジ。めちやくちや強そうな名前だ。

エンキドウは自分たち四兄妹を数秒見つめて、「親御によく似ている」と納得したように頷いた。

妹たちはいつの間にか母の傍にくつつくように移動していた。自分もブーツを脱いで父の隣に座る。

父はエンキドウを仕事上のパートナーだと紹介した。去年の竜災害で連絡が取れなくなっていて、ついさつきばったり出会ったらしい。

父は芸能事務所で所長兼マネージをしている。仕事上のパートナー……ということは、

「エンキドウさんは……えーつと？」

「おまえたちと同業者だぞ。こら、大声出すな。騒ぐなよ」

父の答えに驚いて叫びそうになる妹たちの口が素早く塞がれる。自分たちと同業ということは、彼も歌手なのか。

「……演歌？　へビメタ？」

「おまえ見た目で判断してるだろ。アニソン中心だよ」

「あにそん?!?!」

ギャグ漫画みたいにずっこける。妹たちも同時に転んでどがしゃん、と大きな音が鳴った。

「あ、あに、あにそんなってあの、アニメソング……?」

「それ以外にないだろ。あんま驚いてやるなよ、こいつ見かけによらず繊細なんだ」

「むう……やはり驚かれるか」

「アニソン歌手? マジで?」

「オクタはなんでここにいんだよ!?!」

「いや、アニソンって聞こえたから」

いつの間にかオクタが横であぐらをかいていた。驚いた様子のエンキドウに深く頭を下げるあたりさすがオタク、自分が好きな分野に携わる人へのリスペクトを欠かさない。

「自分が若造のときは演歌歌手を目指していた。だがなかなか芽が出ず挫折してな……そこを拾ってくれたのが、カミタカ殿だ。言われるがままアニソンの世界に踏み込んでみたが……なかなか奥が深い」  
「この声でアニソン……は、もしやあのお方では!?! マジ!? おれオクタ リョウゴっていいいます。握手してください!」

父との付き合いを説明し、オクタと握手を交わしたエンキドウは「そろそろ行かねば」と立ち上がる。脇に置いていたサポーターやグローブを身に着ける彼を、父が名残惜しそうに見上げた。

「おいおい、もう帰るのか? 色々積もる話もあるだろ」

「すまない。が、議事堂にいる間は歌手ではない。他にやるべきことがある」

「やるべきこと……? 何だ、手伝えることなら相談してくれよ」

「……相談ではないが、報告しておこう。ムラクモに入ることにした」  
家族一同、手に持っていた湯のみを落とした。

「ムラクモ……？ おまえ、異能力者だったのか？」  
「……その判定を受けた。まだ詳しくはわからないが、協力を頼まれている。自分ができることなら彼らに力を貸そうと思っただけ」  
「おいおいおい、マジかよ……」

呆ける父にエンキドウは深く頭を下げた。静かに向けられる広い背中が、もう決めたのだ、と語る。

そこで、ふと思い出した。

『この間もいたんだヨ。もう一人、君に似た能力の人物が』  
『そうだ、君との共通点がもうひとつ。歌手だったこと』

いや、まさか、まさか、  
まさか。

「あの、エンキドウさん」  
「なんだろうか」

「もしかして、異能力者だって判断されたとき、『何の異能力かわからない』とか『今まで確認されていた五種にあてはまらない』みたいなこと、言われませんでした……？」

「む？ なぜ知っている」  
「……俺も」

力の抜けた指で自分を指す。

俺も同じだったんですと伝えれば、エンキドウは驚いたように目を丸くした。

数分後、ミナトがエンキドウを探して居住区を訪ねてくるまで、自



分たちは固まっ  
たまま目を合  
わせていた。

## 幕裏4. アイドル！！！！

廃墟となっていた病院で13班に助けられてから、一か月ほど経った。

明日は東京スカイツリーが再稼働する日。連日復興作業に右往左往していた人たちはみんな笑顔で言葉を交わしている。

そんな中、相変わらずミナトとシキの二人は忙しそうに走り回っていた。竜災害のような非常時でなくても、市民からの依頼をこなすので時間があまりないのは変わらないらしい。今もスカイツリー復旧の最終準備やその他の用事で議事堂の中を行ったり来たりだ。

「やあ、13班。たまには寧子と遊んでやってくれ。あの子も会いたそうにしていたからね」

「こんにちは、アリアケさん。今から届け物をしに渋谷に行く予定なんです。何か伝言とかはありますか?」

「ミヤ、これ。頼まれてた特殊LANケーブル」

「おお、助かる」

「よく働くなあ……」

ムラクモ機関に入るのか入らないのか。決められないままなあなにあに時間が過ぎて、気付けば働く彼女たちを遠目に眺める毎日だ。

異能力者だと診断を受けた日、父がマネージしていたエンキドウが、近年彗星のごとくアニソン界に降臨した男前ボーカルだと知ってからは、自分たち二人は迷惑にならない程度に彼と行動を共にしている。エンキドウは異能力者でムラクモに協力を申し出ているので、彼が行くのならばハジメとオクタも二、三日に一度はムラクモ機関のフロアに向かうようになった。

「ハジメ、おまえたちもムラクモに入るのか？」  
「わからない。でもじつとしてんのつまらないし」

父はときどき同じことを尋ねてきては微妙そうな顔をしてあごひげを弄っていた。エンキドウがムラクモに協力すると告げた日から、色んな意味で考えを巡らせるようになって、四六時中眉間にしわを寄せている。そのせいか、眼鏡のレンズもご自慢のスーツの黄色もくすんで見えた。

母もそうだ。頬杖をついて物思いにふけている。妹たちは直接言葉にすることはないが、やめろと視線で訴えてくる。

「ムラクモの情報は口外しない」という約束のもと、マサキたちのもとに出入りさせてもらっているが、自分たちが持つ異能力の分析の結果が間もなく出るらしい。そろそろ線を引くときなのだろうか。

『ムラクモ機関はね、今こそ普通に知られているが、去年ドラゴンたちが来る前までは、国家機密の組織だったんだヨ。都市伝説として噂になることはあっても、一般人には絶対に見つけられない機関だった』  
『知識や技術を独占するために情報統制しているなんて反イヌヅカ派の方々は言っているけどネ、じゃあ、我々と異能力者のことを世間に大々的に報じたら、どうなると思う？』

『……人間は自分と違う生き物を恐れ、それが少数だった場合は大衆の力を持って排除しようとする傾向がある。自己防衛のためだから、仕方がないと思うガ。……最悪の場合、「魔女狩り」が起きるだろう』

『ムラクモの戦闘員である異能力者は、命をかけて我々を守ってくれル。そんな彼らを守るため、情報規制は必要なんだ。それが、一般市民と異能力者の間の壁になってしまおうとしても、ネ』

「もちろんこの話も他言無用だヨ」とマサキは人差し指を立てて微笑んだ。話を聞いた今なら、ミナトが自分たちに能力を見せることをためらっていたのも頷ける。

無論、ムラクモのことを漏らすつもりはない。自分たちの命を救ってくれたミナトたちを売る真似はしないと誓ったし、自分だって異能力者だから。

ただそれゆえに、一度機関に入れば簡単に脱退することはできない。組織内で何かが起こっても、悩み事ができても、家族に相談することも憚られる。平時だろうが非常時だろうが、年齢も立場も関係なく、自分という人間に責任が生じる。国家の特務機関に所属するとはそういうことだ。

「んー……」

マモノ討伐の専門家。前大戦を人間の勝利で終わらせた組織。

言葉だけ並べてみれば羨望と憧れの塊だろう。が、その最前線に立ってみたいかと訊かれれば誰もが一步後退る。

ムラクモは異能力者がいれば声をかけるスタンスらしいが、徴兵なんてことはしない。本人の意思が伴わなければ、無理やり戦場に放り込んだって意味がないのだと彼らは言った。

議事堂に身を寄せる者の大半は普通の人間。ムラクモ機関も同じく、大半が普通の人間。異能力者だって、戦わずに作業員としてサポートに回る者、マモノとまでなら戦える者、ドラゴンも相手にする13班など役割が細分化している。

竜災害の渦中にいたミナトとシキは、見る限り上司との確執はないようだし、日々東京復興のために奔走する姿からムラクモ機関は悪の組織でないことはなんとなくわかるのだが……。

「何を悩んでいる」

「あー、ムラクモに入るべきか入らざるべきかで……そもそも俺、自分の異能力がどんなものかもはつきりしてないし……ってだああっ!」

いつのまにか背後にエンキドウが立っていた。自然に返事を帰してから驚いてひっくり返る。

周囲の人々がおっかなびっくりエンキドウを見て行き来する中、彼の背からオクタが「よお」と顔を出した。

「マサキさんたちが来てほしいって言うから呼びにきたぜ。まーたシバさんのおっかけしてんのか？」

「おっかけじゃねえよ。遠目に眺めてるだけだつて」

「世界はそれをおっかけと呼ぶんだぜ」

「サ○ボマスターの曲みたいに言うな！」

いつも通りの掛け合いが始まる。そんな自分たちの周囲にいる人々がこつちに、特にハジメに視線を向けてきたことに気付き、エンキドウが「移動しよう。ついてきてくれるか」と手短かに言う。

「あまり目立つのはよくないだろう。ムラクモに移動する」

「あ、はい、すみません」

エンキドウの後ろにつき、なるべく誰とも目を合わせないようにそそくさとフロアから出た。「ねえ、あれ」「嘘、どこ？」という声から逃れて階段を下り、一般人立ち入り禁止のムラクモ管轄の階に入る。一息つくのと同時にオクタが肩に手を置いてきた。

「おまえも大変だよなあ。変装したら？ 髪染めるとか」

「そんな贅沢品あるわけないだろ。あつても髪痛むから染めない」

高校受験の終わりと同時にデビューを果たした芸能活動の名声は、世界が崩壊しても尾を引いていた。

以前マサキに指摘されたように、時にはソロ、時にはユニット、妹たちと歌ってきた自分は世間に顔を出している。竜災害で途中断念したものの、去年には全国ツアーも行った。活動は軌道に乗っていると言えた。

が、避難生活を送るにあたって、その知名度が少なからず支障に

なっている。

激しく干渉してくることはないが、別の居住区の間人間がこちらの生活スペースを遠目に覗きにくる、なんてことがたびたびあった。

竜災害当時着ていたライブ衣装は脱ぎ、普段は居住区のフリーマーケットで手に入れた服で生活しているが、自分と妹たちは目立つ地毛が特徴だ。まずそこに注目されて、次に顔を見られて「あつ」と目を丸くされる。

人に指をさされる前にその場を離れる（ときどき捕まる）のはもう日課だ。ムラクモの計らいで騒動にならずに済んでいるものの、やっぱり過ごしにくい。

親や奥田家に迷惑をかけたくないというのもあって、ハジメはほぼ毎日エンキドウについて回っている。歌に異能力という共通点もあるが、彼にはあまり人が近寄らず、その巨体の陰に隠れやすいというのも理由の一つだ。エンキドウ本人にも許可は得ている。

「カミタカ殿と同じだな」とエンキドウが父親の名前を口にし、こちらを振り返った。

「公私の線引きがしっかりしている。自分も『仕事はいつでもできる。私生活をちゃんと過ぐせ』とよく言われた」

「そうそう、家族一同、仕事とプライベートはきっちり分けようって決めているんです。ときどき思いっ切り歌いたくなるんですけど」

「わかるぞ。喉が鈍っていないか心配だ」

歌うのは好きだ。歓声を浴びるのもファンサービスをするのも好きだ。生活スペースの隅で綺麗に畳まれているお気に入りの衣装を見るたび、それを着てマイクを手に取りたくなる。

しかし、一度動いてしまえば今度こそ人が押し寄せてくる。集団生活の中で自分はずっと人目を気にして過ぐさなければいけないだろう。

中学と高校で諸々を経験したからわかる。歌手として人前に立つ自分と、ただの一個人として生きる自分。両立できてこそどちらも充

実するのだ。

防音加工がされた部屋が欲しいなんて実現しそうにないわがまを思いながら研究室に入る。

イツキが部屋の中央で仮○ライダーのようなポーズを決めていた。

「待つてたぜ、異能力者の諸君！」

「……イツキさん、なにやってんすか？」

「来たか。待つていたぞ」

イツキを鬱陶しいと一蹴し、初めて見る顔が前に出てくる。

輝く金髪に和洋折衷のような不思議な服を着た少女。かなり小さいが小学生だろうか。それにしてもなんだか威厳のある立ち姿だ。

いや、そうじゃない。なぜ幼い子どもがこんなところに？

その場で棒立ちになる自分たちを見て、幼女は「またか」とため息を吐く。彼女は鋭いまなじりを囲むまっげを持ち上げ、胸を張って存在を主張した。

「私はムラクモ機関最高顧問を務めるエメルだ。外での仕事が終わりに、この議事堂に戻ってきた。諸君ら三名が異能力者……内二人は新しい職業だと判明したと聞いてな、様子を見に来た」

「へー、最高顧問。……へ、最高顧問!？」

「ああ、最高顧問だ」

自分達のリアクションもどこ吹く風、彼女は端的に「結果が出たぞ」と言った。

「適性検査の結果だ。おまえたちの異能力の職業、及びそのランク……新しいタイプの二人は時間がかかったが、なんとか形にすることができた。エンキドウとアサヒナだったか。協力感謝する」

あどけない容姿にそぐわない存在感をまとう声に礼を言われて背

筋が伸びる。早速というようにマサキが脇から出てきて、「それじゃあ発表会だヨ！」とグラフと文字が所狭しに詰められている資料を掲げた。

「オクタ リョウゴくん。たびたび予告してはいたが、君はデストロイヤーだ。サバイバル生活の実体験もあることだし、シキとの組手のデータもある。S級であることは間違いないネ！ ムラクモ試験に呼ばれてもおかしくないだろう！」

「マジっすか!？」

「で、どうだい……受けてみる気は？」

「えっ」

「ハッハッハ、冗談サ」

朗らかに笑うマサキだが、ほんの一瞬目に鋭い光が宿ったのは気のせいじゃないだろう。彼は脇に立つイツキを軽く小突いた。

「ほらイツキ、次はアサヒナくんとエンキドウくんへの説明ダ。君がやってくれるんだらウ？」

「もちろんだ！ おまえらよく聞けよ！」

「説明……。俺たちも異能力者としての分類ができるってことっすよね」

首を傾げるハジメとエンキドウに「ああそうさ！」とイツキが胸を張る。彼は部屋の隅に置いてあったホワイトボードを引き寄せ、黒いペンをぎゅっぎゅと押し付けて文字を書く。

「身体能力のサムライ。俊敏性のトリックスター。運動能力のデストロイヤー。超感覚のサイキック。情報技能のハッカー。……この五種類に加え、俺たちムラクモが新たに発見した力。研究とデータの収集、精査を重ね定義付けた新型の異能力者！」

「それがおまえたち——カリスマ性Sランク！」



「アイドル」。

白い長方形に書かれた四文字は、自分が持つ肩書きだった。

「アイドル！　！　！　これぞ新職業！　仲間を自在に動かすワガママ☆ボーイ&ガール！」

「ワガママ……」

「アイドルのカリスマ性は、他の職業にはない離れ業をやったのける。第一の特徴……俺たちは『オーダー』と『フォーメーション』と呼ぶことにした。こういう経験はないか？　文化祭やら体育祭のイベントでまとめ役のようなポジションになって、頑張ろうなんて声をかけたら思ったよりも盛り上がった、普段静かな奴もノリが良くてびっくり、みたいな」

「え、あります」

思わずまばたきを繰り返してしまふ。イツキのたとえ話はそっくりそのまま体験したことがあるのだ。

高校入学後最初の学校行事でのことだ。制服を着ているときはクラスメイトと同じ一学生なのに、アイドルであることを引き出されてクラスのリーダーを任された。

押しつけやがってとやけくそになってあちらこちらに指示を飛ばすと、なぜだろう、普段授業で騒いでは教師に叱られる同級生たちは素直に従ってくれる。

どうせ「ちよつと男子い！」的な展開になると思い込んでいたが、高校生らしいテンションで賑やかにになりながらも作業は進む。他のクラスが追い込まれてひいひい言うのをよそに、自分のクラスだけ余裕を残して準備を終えられた。完成度も高く、いやおまえらそんなに協調性あったか？　と首を傾げたほどだ。

結果大成功という形で行事は終わり、それ以降、何かがあるたびあの時盛り上がったしとまたリーダーに任命されるようなことが続いて大変だった記憶がある。

「そういやそうだったなあと同じクラスだったオクタが領いた。」

「おまえ、それでクラス委員長にも任命されそうになってダツシユで逃げたもんな。うちのクラス騒がしかったし、先生から『君が声をかけてくれればまとまるから！』って言われて」

「委員長なんて柄じゃないって。仕事とかレッスンだってあんだから暇じゃないのに……」

「うん、まさしくそれだ！ おまえの持つカリスマ性が発揮されていた瞬間だろう。もちろん、アイドルだからという先入観はあつたんだろうが……さらにエンジンがかけられるような効果が、その『声』にはある。これがお前たちアイドルの異能力だ」

タイヤがスリップするような音を立て、イツキの持つマジックが勢いよくボードに簡易的な人の絵を描く。

「オーダーは、仲間に行動を促す技術。フォーメーションは、戦況に応じて態勢を整えるための技術。どっちも自分の指示で人を動かすものだろうか？」

「聞く限り、指揮系統の能力といったところか」  
「そう。ただ、普通の人間がやるのとは引き出せるものが全然違う。より効率よく、より良い成果へ仲間を導く、理想のコントロールがアイドルの力だ。ハッカーが肉体的な支援型だとしたら、アイドルは精神的な支援型って感じか？」

エンキドウとイツキが揃って腕を組んで頷く。

ハッカーは見たことがないが説明なら受けている。文字通りのハッキング能力を持つ、アイドル、サイキックと同じ後衛に分けられる異能力者だ。ただしその対象は生物にも及び、行動の制限から肉体の強化、弱体化さえ可能だという。

立ち位置としては似ているが、能力の使い方は明確に違う。一度その技を近くで見たい。

「基本的にはこんな感じだな。まだ確認中の内容もあるんだが……こんな都市伝説があったな……スーパースターがなんとか、ていう」「スーパースター？ こいつ結構有名つすよ。エンキドウさんもジャンルは限られるけどその界限だと……」

おとなしく説明を聞いていたオクタが不意に自分とエンキドウを指差して言った。

音楽の業界で売れているという自負はあったが、こうもさらっと言ってもらうと……癩だが照れる。

それを察してかニヤニヤ笑ってこっちを見てくる友人を小突いていると、「知名度のことじゃないぞ？」とイツキが訂正を入れた。

「異能力者としての能力のことだ。アイドルと見られる力を持っている奴らは共通して、『運がいい』って特徴もあったんだ」

「運がいい？」

「ああ。去年の竜災害で運よく大きな傷病を負わずに俺たちの拠点まで来られたとか。まあ今まで生きてこられた奴らみんなラッキーだろうけど、それ以前にも日頃から幸運と思うことが多かったとか。スーパースターとは何なのか……アイドルがその力を極地まで極めたら何が起きるのか……ここらへんは曖昧だから要研究。また何かわかったら伝えるよ。アイドルの大きな特徴は以上だが、攻撃可能、補助可能、スキルの宝石箱みたいな職業だ」

「宝石箱や……」

「オクタ彦○呂の真似やめろ」

「結論！ アイドルは『カリスマ司令官』！ オーダーとフォーメーションで敵を翻弄せよ！」

両腕と胸を広げ、スポットライトを浴びるように職務を果たした己を誇るイツキ。だが降り注ぐのはただの蛍光灯の光だ。シユールに感じながらもとりあえず拍手をしておく。

正直まだ実感できていないのだが、自分は最初から最後まで研究に協力したわけではないから仕方がないのだろう。対して、毎日積極的にムラクモに通っていたらしいエンキドウは納得がいったように頷いている。

ホワイトボードを脇に押しやり、始終黙って話を聞いていたエメルが腕を組んだ。

「うむ、指揮と補助中心の異能力者か……バランスを考えれば、前衛型の異能力者とチームを組ませる必要がありそうだな。……エンキドウ」

「なんだろうか」

「職業を定義付けられただけで、異能力者としてのアイドルのデータはまだまだ足りないのが現状だ。特に、戦闘でな」

ぴくり、と全員の動きが止まる。

戦闘。たった四つの音を聞いただけで緩んでいた空気が一気に張り詰めた。

今流れる平和な時間を築くために必要だった命のやりとり。つい一年前までは縁がなかった危険。日本に暮らす一般人のほとんどは関わるはずもなかった世界。

それを象徴するような、血潮を思わせる濃い赤の目で、エメルはエンキドウの前に仁王立ちする。

「キリノたちから説明は受けているとは思いますが、ムラクモは、『常人にはない、特殊な潜在能力を持ち、引き出すことのできる者』を異能力者だと認識している。身体能力などの基礎を含め、おまえの『声』で発揮される力が戦闘でどのように使えるのか、これからさらに研究する必要がある。……おまえは自らムラクモに参加すると言ったが、この先13班のようにマモノと対峙し、最悪ドラゴンを相手にすることになるとしても、その意志は変わらないか」

「ドラゴンと……!? ドラゴンは消えたはずなんじゃ……」

「例えだヨ。静かにしてくれ、最高顧問はいつだって真剣なんだ」

身を乗り出そうとしたオクタをマサキがそっと止める。

険しい目付きで見上げるエメルをエンキドウは無言で見下ろし、やがて慇懃に頷いた。

「若い女性の背に隠れているだけは性に合わん。助けられた恩を返す。そのために必要なら、自分はここから戦い始めよう」

「……決まりだな」

エメルが灰色の腕章を取り出して持ち上げた。エンキドウはそれを手に取り、ムラクモのマークが見えるように左腕に巻き付ける。

「猿鬼堂エンキドウ 吟路ギンジ。今からおまえを訓練生としてムラクモに歓迎する。

新しい異能力者の先駆けとして、これからも協力を頼むぞ」

「うむ。邁進しよう」

「本当は本日のムラクモ試験に参加させたかったが、知識も経験もななく戦闘に放り込むのは無理だろう。しばらくはマサキのもとでスキルと戦術の研究をしてくれ」

「え、試験？」

すっかり置いてかれている状態からなんとか口を挟む。そういえばとマサキが壁にかけてあるカレンダーを見た。

「今日は作業員の中でも素質のある三人を戦闘員に転換させるかどうかの試験があったネ。加えて市民の中から見つけた一人も受験者として参加することになったらしいけど、さてさて上手くいつているかな？」

「間に合わなかったが……ある程度訓練を積んで戦闘に参加可能という確証が取れたら、おまえにも試験を受けてもらおうぞ。いいな、エンキドウ？」

「構わない。元よりそのつもりだった」

「それで」とエメルがこちらに視線を移す。子どもの瞳が自分とオクタを映した。

「おまえたちはどうするのだ？ ムラクモに入るか、入らないのか」

同じ空間にいるはずなのに、どこか別の場所に立っているように感じる。

目に見えない壁に隔てられたこっちと向こう。

たかが一歩、されど一歩。動けば文字通り大きな変化が訪れる。

踏み出すほどの「何か」は、まだ、ない。

\* \* \*

「みんな度胸あるよなあ」

同じく誘われている身でありながら、他人事のような感想がこぼれる。

エメルの問いかけにうんともすんとも言えないまま研究室を後にしたハジメとオクタは、医務区の中庭であぐらをかいて呆けていた。

ここには土と草花がある。武装した自衛隊員が立ち、見晴らしが良いたとはいえ荒れた町しか見えない議事堂前広場よりはのんびりできるスポットだ。

変装用のキャップを目深にかぶりながら、ハジメはエンキドウを思い出していた。

「元よりそのつもりだった、か……すげえな……」

「さすがだぜ。伊達に特撮物の主題歌とか歌ってねーわ」

どつしりと構えその場でムラクモに参入したエンキドウの姿は、彼が歌う熱い曲を体現しているようだった。使命を負っているというわけではなく、元からそういう性分なのだろう。

……ますます、自分たちがムラクモに入る必要はあるのだろうかと考えてしまう。

(そもそも、俺たちはムラクモに……)

入りたいのか、入りたくないのか。今になって考えが振り出しに戻る。

オクタはS級、自分は詳細不明だが異能力者の判定をもらった。ムラクモへの参入は自由だ。

13班の女性二人が頭に浮かぶ。彼女たちの場合はどうだったんだろう。家族はどんな風に反応したのか。

(そーいや、あの人たちの家族って見てないな)

議事堂に来て印象に残ったのが、大体の人間が家族連れで行動していることだ。竜災害で身内の安否に対する恐怖が残っているのか、普段は生活スペースに一家で固まり、離れるときも細かく連絡を取り合って動いている。

そうでないのは自衛隊とムラクモの人間だ。特にムラクモのメンバーは一般とは別のムラクモ居住区に住んでいるため、家族といえるより一人か同僚と行動していることが多いように見える。13班もそうだ。

彼女たちは何のために戦うのか。家族や友人のためか。または違う目的があるのかもしれない。

一度、去年の話を詳しく聞いてみたい。訪ねていけば会えるだろうか。

よし、思い立ったが吉日だと腰を上げようとしたところで、

「リョーウっ!!」

と、甲高い女性の声が飛んできた。

「んあっ」

草の上に寝転がってまどろんでいたオクタがびくりと跳ねる。上体を起こして目をこする友人の名前と女性の声が重なり、ハジメは瞬きした。

「リョウウ? もしかしておまえのこと?」

「たぶん。つか、この声……」

オクタは慌てて振り返る。

扉のない中庭入り口、壁に開いたアーチをくぐり、一人の少女が大股で歩いてきた。

彼女とオクタの目がばちり、と合う。途端に少女は目を潤ませ、こらえるように下唇を噛んだ。

「やつ、ぱり……!!」

「……あ、アリス?」

オクタが少女のものと思われる名前を口にする。

瞬間、少女は涙を散らして走り出し――

「アリスって呼ぶなああーっ!!」

――見事なタツクルを彼の腹にかました。

「ぐふおえ!!」



「ごろごろ」と二人は団子になつて転がつていく。背中と頭を壁に打つて目を回すオクタに馬乗りになり、少女は涙を拭わず拳を振り上げた。

「この、バカ、バカ！ なにのんびり寝てるの!? なんでこっちに来ないのー!」

「あだ、いで、いで！ やめ、痛い！ やめろつてアリ……わーわー気のせい！ ユウコ、ユウコさんやめてください!!」

「バカあ!」

「げふっ!」

容赦のない肘鉄が決まる。アリスまたはユウコと呼ばれた少女は一旦脇に退き、咳き込むオクタを涙目で睨み付けた。

「一か月も前に議事堂に来たんだつて?」

「お、おう……」

「あたし、去年からムラクモさんたちと一緒にいたんだけど」

「え!? おれたちよりもずっと前じゃん!」

「だからなんで一言もくれないわけ!?!」

今度は手加減された握り拳がTシャツに当てられる。少女は声を震わせながら、オクタが議事堂にいるとついさつき初めて知ったこと、本当なら一か月前に再会できただろうに連絡のれの字もなかったこと、奥田家のことが心配すぎてこの一年でかなり痩せてしまったことをまくしたてた。

「なのに、なのに、あんた今何してたの? 何のんびり昼寝なんかして……あ、あた、あたしのこと探そうとか、ほんの一度も思ってくれなかったの?」

「い、いや、議事堂広いし、あんま出歩くなつて言われてるしよ……」

いやおまえのことはもちろん心配だったけどさ！　そうだ、おじさんとおばさんは……無事だよな……？」

「無事だよ。ムラクモさんに保護してもらうまでの間、あたし、頑張つて他の人たちと一緒に……」

脇に三つ編みを垂らした紫のポニーテールが揺れる。ジャージー素材の赤い上着を着る肩が小刻みに震え、鼻を吸る音が静かな中庭にこぼれ落ちた。

「頑張ったけど……あんた、関西行ってていなくて……ケータイ通じなくてメールもダメで……あんときの、『土産持ってくるから』って言ったのが最後になっちゃうんじゃないかって、気が気じゃなかったんだよ。なのに……こんなところでぐーすか寝てるって……心配して損した！　あたしの一年返してよ！」

「えええ、おい、」

珍しい。普段ボケまくりで人を振り回す立場のオクタが逆に振り回されている。しかも女子と話をしている。学校では自分含めいつも男同士とつるんでいたので貴重な一場面だ。

アリスと呼べばいいのかユウコと呼べばいいのか、スポーティな出で立ちの少女は睫毛を震わせて訴える。

「っ……無事でよかった、無事でよかったよお、リョウちゃあん……」

「おわ、泣くなつて……」

(ほーお……)

リョウちゃん、とオクタの意外な呼び名を頭の中で転がす。

ただの友だちでもそんな呼び方するだろうか。パーソナルスペースも近いように見えるし、これはもしかすると……。

しゃくりあげる少女の肩越しにオクタと目が合う。彼は顔をしかめて「何ニヤニヤしてんだよ」と言った。

「別に？ リヨウちゃん、そんな仲の良い女の子がいたのかー」  
「うっせえゲスい笑み浮かべんじゃねえ！ こいつはあれだ、幼なじみ！ 家が隣で付き合い長いんだよー」  
「そっかそっか。とりあえずよかったなりヨウちゃん。可愛い幼なじみに会えて」

「あああその笑いむかつく！ おま、後で覚えとけよ！」

自分たちのやりとりに少女がこつちを振り返る。目が合った瞬間「はひゃあー！」と個性的な悲鳴を上げ、二、三步後退った。一部始終を見られていた照れ隠しか、反射という感じでオクタに拳が飛ぶ。

「もう！ 誰かといえるならいるって言ってよ！」

「え、おれのせい!？」

しばらく騒いで落ち着いたらしく、少女はホットパンツから伸びる白い脚を折って中庭に座り込む。

初対面の人間相手は緊張するのもかもしれない。気まずそうに視線を泳がせ、深呼吸を繰り返してぐぐぐと頭が下げられた。

「初めまして、鴨川です。カモガワ……あ、あり、す、と言います。有利の有に子と書いて読みがアリス……です」

「こいつき、名前が恥ずかしいってんで、アリスじゃなくてユウコってあだ名で呼ぶようにしてんだよ。ほら、有子ってユウコって読めるじゃん？」

「あーそうか。でもその漢字でアリスって読み珍しいよな」

アリス。日本ではメジャーとは言えない響きの名前だ。珍しくて何度か相づちを打つと彼女は顔を赤くし、土下座するように地面に伏せてしまう。

「ひいすみませんそうですよねやっぱりおかしいですよこんな名前……親が胎教にデ○ズニー映画視てママニティーハイのファンタジー脳になってアリスなんて海外産の名前を純日本人のあたしにいい……おこがましいというか元祖アリス様に失礼というか」

「え、いやそこまでは言っていないよ！ それにアリスだって今の日本じゃ滅多にない名前ってわけでも……」

アリス、もといユウコは風船が少しづつ空気を漏らすようなうめき声をあげる。オクタが頭を横に振って「やめたげて」と呟いた。

「ときどきからかわれることがあったからさ、地雷になっちゃってんだ」

「そうか……じゃあ、ユウコちゃん、って呼べばいいのかな？」

「いいああそんな、あたしごとき苗字で充分でございます……どうぞカモガワ、いえいつそモブとお呼びください……」

「おいユウコ、ハジメ引いてるから」

いやいや腰が低すぎる。たじろぐハジメを見てオクタがユウコの肩をつかんで引き上げた。

とりあえずこっちも挨拶を返さねばなるまい。キャップを取って、なるべくフレンドリーに見えるように笑って会釈してみる。

「どうも、朝比奈 一つす。オクタとは高校で同クラで。どうぞよろしく」

「リョウちゃ……リョウゴと同じってことは年上ですね。あたしひとつ下で……、……ん？」

かしこまって下げかけた頭を止め、上げ、ユウコはハジメを見上げた。

「アサヒナ……ハジメ？ さん？」

張りのあるおでこの皮が眉間に寄り、彼女はまじまじと自分の顔、髪を見つめてくる。

ああそういえば、変装用のキャップを外してしまった。でも目深に被ったままじゃ失礼かもしれないし、なにより信用できるオクタと親しい人間だ。たぶん大丈夫だろう。

ユウコは隣にいる幼なじみにゆっくりと視線を移す。

「え？ ちょっと待って、ハジメって……」

「あー言ってなかったっけ？ あのアサヒナ ハジメ」

「……」

「そうそうハジメ、こいつおまえとニナちゃんたちの大ファンですよー」

なんの気なしに話を続けるオクタの横で、ユウコは目を見開いたまままごつちを見つめ続ける。

とりあえず笑いかけると、彼女は顔中に汗を浮かべ、まばたき一つしないうちに上着を翻した。

「びゃー……っ……っ……っ  
!!?!?!?!」

「あ」

大きな星マークの入った背中が高速で遠ざかっていく。興奮した猫のような悲鳴を上げてユウコは走り去っていった。

「あーあ、行っちゃった。あ、安心していいぜ。あいつ良識あるから、周りにおまえのこと言いふらしたりとかしねーし」

「いや、うん……わかってるけど、おまえさ、もうちよつと周りに色々伝えておけよ」

「え、何を？」

「自覚なしか!! ていうか久々に再会できたんだろ!! 追いかけるぞ！」

のんきに笑う友人を叩いて走り出す。

すぐに追いつけると思ったが、オクタの幼馴染はなかなか足が速い。ぎやあぎやあ騒ぎながら議事堂中を駆け回り、彼女の家族とも挨拶を交わしていると、その日はあつという間に夜になってしまった。

## PROLOGUE 幕裏 あらすじ

真竜ニアラを撃退し、ドラゴンが消えた2021年の東京。

風の噂で対ドラゴン戦線の存在を耳にし、関西から移動してきた一団が国会議事堂に保護された。

マモノに襲われ死にかけていた朝比奈 アサヒナ 一 ハジメ は一命をとりとめ、友人の奥田 オクタ 亮悟 リョウゴ と揃って異能力者だと診断され、ムラクモから勧誘を受ける。

命の恩人であるムラクモ13班のミナト。自分と同じ新しい形の異能力者『アイドル』であり、迷わずムラクモへ入ったエンキドウ。戦う者たちを尊敬しつつも自ら戦場に立つ気は起きず、ハジメは議事堂の保護下で新生活を始めた。

\* \* \*

### 登場人物

【朝比奈 一 / アサヒナ ハジメ】

アイドル♂ 標準カラー

男性四人組ユニットや妹たちとの兄妹ユニット、ソロで活躍していたアイドル。

2020年、全国ツアーで大阪ライブ中に竜災害に遭う。ドラゴンが消えた後は家族、オクタ、ユニットメンバーと共に一年かけて東京へ移動してきた。

命を助けられた恩もあつて13班のミナトに強く憧れる。

アイドルユニットを組んでいた他メンバーは無事だった。よかったね。

【奥田 亮悟 / オクタ リョウゴ】

オタク♂ 標準カラー

ハジメの友人。学校とクラスが一緒。

2020年、照明や音響のアルバイトとして朝比奈一家の全国ツアーを手伝って大阪にいたところ竜災害に遭う。ドラゴンが消えた後はハジメたちと共に一年かけて東京へ移動してきた。

オタクだが運動のできる陽キャであり、ペンライトを常に装備している。

竜災害でオタ活ができなくなったため割とメンタルが参っている。文明が崩壊せずウ○娘がリリースされていた場合はライ○シャ○ーのモンペになっていた。

カミタカ / エージェント♂ 標準カラー

ハジメの実の父親。被災前は芸能事務所を経営していた。

ハジメの母 / エージェント♀ 緑カラー

ハジメの義理の母親。被災前はハジメの父親と共に芸能事務所を経営していた。

ニナ / アイドル♀ 青カラー

ハジメの義理の妹。ハジメの母親の連れ子。三姉妹の長女。三姉妹アイドルユニットtricoloreのリーダー。

ミウ / アイドル♀ 黄カラー

ハジメの義理の妹。ハジメの母親の連れ子。三姉妹の次女。三姉妹アイドルユニットtricoloreのサブリーダー。

シホ / アイドル♀ 標準カラー

ハジメの義理の妹。ハジメの母親の連れ子。三姉妹の三女。三姉妹アイドルユニットtricoloreのメンバー。

【猿鬼堂 吟路 / エンキドウ ギンジ】

パワフル♂ 標準カラー

ハジメの父親のビジネスパートナー。アニソンや特撮物の主題歌を多数歌い活躍していた歌手。

ニアラ撃退後に東京都庁で保護され、13班を始め昨年竜と戦った者たちに恩を返すため、ムラクモに参加する。

【鴨川 有子 / カモガワ アリス】

パワフル♀ 紫カラー

オクタの一つ年下の幼馴染。自分の名前が好きになれず、別の読み



である「ユウコ」を呼び名としている。

2020年の竜災害時は家族と共にドラゴンから逃れ、ニアラ撃退後に東京都庁に保護された。

オクタのことを「リヨウちゃん」と呼ぶ。彼や家族以外の相手にはコミュ障でビビリ。アイドルであるハジメたち四兄妹の大ファン。

文明が崩壊せずウ○娘がリリースされていた場合はあらゆる百合CPを妄想して楽しんでいた。

【志波 湊 / シバ ミナト】

13班メンバー。母の墓参りのため訪れていた廃病院でハジメたちを救助する。

ハジメの妹たち *tricolore* のファンで、昨年全国ツアーに応募していたが抽選漏れしていた。助けた子たちがまさかの推したちで心がびよんびよんしているが理性を総動員して何事もないように振る舞っている。

文明が崩壊せずウ○娘がリリースされていた場合はアニメ2期で号泣していた。

【飛鳥馬 式 / アスマ シキ】

13班メンバー。ミナトと共にハジメたち避難民を救助した。

2021年はリハビリや13班の凍結もあつて満身に体を動かせておらず、オクタとの組手では実にいい笑顔で彼を投げ飛ばしていたと立ち会った者は語る。

ウ○娘？ 何それ。

CHAPTER 1 新たなる戦場  
Count 3. 再演 竜を狩る物語

「意識レベル、グレード1。2、1……覚醒するぞ！」

真つ暗な世界にするりと入り込んできたのは、聞き慣れた少年の声だ。

起きろと言われたわけではないが、その声で暗示がかけられるようにして目が覚める。霞む目で辺りを見回せば見知った顔があつて、隣のベッドではミナトが同じように寝ぼけまなこでまばたきを繰り返していた。

ミロクが「13班！」と顔を輝かせる。

「よかった……目が覚めて……」

「ミロク……。ここは、議事堂か」

寝起きだというのに鼓動が忙しない。早く、と急かすように脈が逸る。

そうだ、のんびり寝ている場合じゃない。自分たちは、確かスカイタワーで……。

「……そうだ、あいつ！」

ベッドから飛び降りる。が、うまく体重を支えられずにふらついてしまう。看護師のナミが体を支え、点滴が抜けていないか確認しながら怒った。

「急に起きちゃダメですよ！ 三日間、ずっと昏睡してたんですから。」

ゆっくり体を慣らさなきゃ……」

「三日……？　三日も寝てたの？」

「ここ数日、意識を失う前から今まで、何もかもが去年の再現みたいで気分が悪い。唯一違うのは、一か月ではなく三日で自分もミナトも目が覚めたということだが。」

「ミナト、あんた体は？」

「うえっ……う……たぶん、問題ないよ。ちよつとだるいけど」「よし」

とりあえず、体については万が一の事態は起きていないようだ。少し安心する。

あとは、自分たちが眠っていた間に何が起きて、今は13班が、人類がどの立ち位置にいるのかになるが……。

「ミロク、今どういう状況？」

「うん……二日前のこと、覚えているか？　あの、ドラゴンの群れ……それから『真竜フォーマルハウト』……」

真竜フォーマルハウト。ニアラではないドラゴンの名前。

自分たちだけが見ていた悪夢などではなかった。それだけで、竜災害の再来を悟るには十分だ。

「ごめん……俺、何もできなかった……。一年前と全く同じだ……世界中にドラゴンが現れてたったの三日で……世界は壊滅状態だ」「気にしないでよ、ミロク。できることをやってくれたんでしょ？」

寝癖のついた髪を整えながらミナトがミロクを慰める。緊張から少し強張った笑顔で、彼女は控えめに被害状況を尋ねた。

「ごつちは……もうめちやくちやだ。生存者たちはパニックになって、そのうえ、キリノまであんなことに——」

「え、キリノさん……？」

「何、何があったの？」

「わ、わかんない……避難する途中で何かがあったらしくって、ずっと意識不明の重体なんだ……」

意識不明の重体。

自分たちが大事に至っていないからと薄れていた戦慄がよみがえる。ムラクモ総長で、司令塔で、前大戦でドラゴン討伐の大きな助けとなったキリノが危険な状態にある。

ミナトと顔を見合わせる。

ムラクモ機関も、人類の拠点としての議事堂も、昨年より拡充が進んでいるため、都庁時代よりは余裕があるだろう。けれど、今の状況は。

こちらの思いを代弁するように、ミロクが目尻を下げて弱々しく言った。

「シキ、ミナト……こんな時、どうしたらいいんだ……？」

「戦う以外に何がある？」

凜と芯の通った声が空気を渡る。

橙の衣に象牙色の羽織。合わせて存在を主張する金髪。

数日前となんら変わらない様子で、ムラクモ機関最高顧問の女性が迷いなく部屋に入ってきた。

「エメル……」

「ようやく、目覚めたか。……状況は把握したか？」

「……ミロクから聞いた」

「またドラゴンが来たんだよね。信じたくないけど」

「ああ。そして本日よりキリノに代わって、私がムラクモ総長代理に

就任する。早速で悪いが、ムラクモ本部まで来てほしい」

エメルの表情はいつもと変わらず引き締まっているが、まとう雰囲気は触れれば切れる刃のそれ。去年の竜災害中に見せていた、怒りを根底にした強すぎる信念だ。

本当に始まってしまったのだなど今さらながらに自覚する。やることは変わらないが、時間をかけて築いてきた平穩を、皿を逆さまにするように容易くひっくり返されたのはため息をつくしかない。相変わらず、被害の規模が大きすぎる。

反省会はここまでにして、部屋を出ていったエメルを追わなければ。

ベッドから腰を上げて靴を履く。点滴を抜いてほしいとナミに告げると、彼女は複雑そうな顔で針が刺さっている箇所に触れた。

「あの、シキちゃん、ミナトちゃん。ふたりとも……怪我の手当は私たちができるし、なんならカウンセリングも可能だから、そんなに落ち込まないでね」

なんだか念の入った言い方だ。気になって視線を送ると、ナミは気まずそうにしつつ、言葉を選んでゆっくりと話す。

「またドラゴンが来ちゃったから、議事堂の人たち、焦ってるみたいなの。だから、もしかしたらあなたたちに、今どうなっているのか、とか、質問をしてくる人もいるかもしれないけれど……」

「ああ、『なんで負けてるんだ』っていちやもんつけてくる奴らもいるってことね」

オブラートに包まれた言葉を解釈して返すと、申し訳なきように目を逸らされた。

別に自分はいいい。気にしない。異能力を持たない一般人はなす術がないのだから、そういう行動に出るのは百歩譲って文句は言わない

でよく。

ただ、前線に出たことのない奴らが安全圏から飛ばす野次など受け入れる気もない。あまりにもしつこければ、守ってやるから帝竜の前に出てみると返すだけだ。

視線を向けると、案の定ミナトは血色を悪くして床を見つめていた。ダンジョンの探索で敵が出てこないか心配するように、時折部屋の出口をちらちら伺っている。

相変わらず人の視線ばかり気にする奴だ。議事堂には嫌味な議員もいるが、おそらく敵ではないのだから、精神的余裕は対ドラゴンに回してほしい。

(……それができてれば苦労しないか)

「? な、何、シキちゃん……」

「別に」

戸惑うミナトの服をくつろげ、だらしないと思われない程度に崩す。

髪を払い、袖をまくり、包帯やガーゼに保護された部分を露出させる。あとはサイズの大きい上着を肩にかければ、いかにも要介護の傷病人ですという装いになった。

実際怪我人なのだ。もし部屋の外に不満を募らせているような奴らがいれば、この姿で戦闘の過酷さを見せつけてやればいい。

「文句つけてくる奴がいれば、わざとらしく怪我が痛むフリでもしなさい」

「で、でも心配かけるのはよくないんじゃないか……」

「そもそもこの状態で一方的に文句言ってくるのが自分勝手なんだから、気なんか遣わなくていいでしょ。ほら、ムラクモ本部行くわよ」

ナミに礼を言って部屋を出た。

地下にあるムラクモ居住区から地上階にあるエントランスを進む

道に、今までの活気はない。雨雲のように垂れ込める陰気に、行き来する自衛隊員が重い装備を鳴らす音。そして、遠巻きに自分たちを囲む、ネガティブな視線。

繋いでいるミナトの手が力を込めてくる。ビビるんじゃないと念を込めて握り返す。

視界の端に何人か議員も捉えたが、これ見よがしな格好をしているためか、声をかけてくる気配はない。

ヒソヒソと交わされる声を抜け、堂々とムラクモ本部の扉を開け放つ。

「入るわよー！」

喝を入れるような入室に、部屋中の視線が一気に集まり、ムラクモ、自衛隊の面々がわっと駆け寄ってきた。

「13班だ！ 怪我は大丈夫？」

「あのーその……えつとなんていうか、ドンマイ！」

「本当に丸三日眠ってたんだな。目が覚めてよかったよ」

「ええい、話は後だ！ 全員そこをどけ！」

エメルの鋭い声が飛んで人が散り散りになっていく。

部屋の奥ではムラクモ総長代理の彼女とシズカ、そしてリンが待っていた。

「13班！ 目覚めたのか……！ ええと、ここに来るまで、大丈夫だったか？」

「私は問題ない」

ミナトを振り返って返事を促す。

ムラクモ本部に立ち入りできるのはムラクモや自衛隊の関係者だけだ。ドラゴンについての知識や戦闘経験のある面子は、不安そうな

顔をすれど、不満を向けてくることはない。この部屋は精神的安全圏だ。

叱咤ではない温かい反応に迎えられ、ミナトは肩から力を抜いてへにやりと笑った。

「え、えへへ……シキちゃんが守ってくれたので大丈夫でした。体の方も順調に回復してます」

「そうか、よかった」

「シキ、ミナト、待っていたぞ。シズカ！ 13班に状況の説明を」  
「は、はいっ！」

エメルに促され、シズカが跳ねるように背筋を伸ばす。勢い余って踵を浮かせ、危なっかしくバランスをとりながら秘書は背後のモニターを振り返った。

「三日前に現れたフォーマルハウトは、スカイタワーを根城として、世界中の都市にドラゴンを送り込んでいます……。世界の主要都市は抵抗する間も無く、再び、ドラゴンの支配下に置かれました……」

画面に浮かぶのは、町中の監視カメラや観測班によって設置された定点カメラからの映像だ。画質は粗いが、異形の花が繁茂しているのははっきりわかる。

文字通りの再現だ。2020年の繰り返し。リンが首を振ってこそ、と吐き捨てる。

「どうしてなんだ？ どうして、またドラゴンが……？ あれから一年……ようやく平穏が戻ってきたんだ！ それがこんなにあつさり……！」

「そう、たった一年で現れた真竜。そして、黒きフロワロ……」

エメルが細い指を顎に添えて目を伏せる。「たった一年」と口にし



だが、この間隔でのドラゴンの再来はありえないことなのだろうか。ドラゴンたちの常識なんぞ知る由もないからわからないが。

ムラクモ総長代理も、断言はできずに「何かがおかしい」とだけ漏らす。

「この竜災害は何か——狂っている。これが何を意味するのかは、さすがの私でもわからん……。どちらにしても、我々が為すべきことはただひとつ。この議事堂を足がかりにして、死力を尽くしてフォーマルハウトを狩る。それ以上でも以下でもない」

「……ですが現状、スカイタワーには致死性の高い黒いフロワロが茂っていて、近付くことさえできません……」

「致死性……去年見た赤いフロワロとは違った色だった」

シズカの言葉に、無意識に眉間にしわが寄る。

立つことはおろか、呼吸さえままならない環境を作る猛毒の黒花。思い出せば、自分たちはその花に囲まれた状態で気を失ったのだ。体に影響はないのだろうか。

それを尋ねると、マサキをはじめとする研究員たちが現状、異常はないと教えてくれた。

「昨年の昏睡時に通常のフロワロに対する耐性があったことに加え、シキとミナトは『竜を狩る者』。幸いと言っていいかわからないが、数日間の軽症、傷の治りが遅くなっていた、程度で済んだらしい。」

説明に戻り、シズカがモニターに出ている簡易的な東京の地図を手に示す。写真に合わせて23区や外の市が、ほぼ隙間なく赤で埋められた。

「東京はそのほとんどの地域を赤いフロワロに侵食されていて……除染ができてるのは議事堂内だけ……です」

「状況は絶望的だが、我々には星の加護を受けた『狩る者』、ムラクモ13班がいる」

「だからこそ問おう」とエメルが見上げてくる。

赤い瞳に自分たちが映った。血の海に体が沈んでいるように見え  
てしまつて目を逸らしたくなる。

けれど、自分たちを囲む世界も、彼女の口から出る問いも、全てが  
事実。

否定したいのなら——覆したいのなら、方法は一つしかない。

「今回の竜との戦争は、前大戦を凌ぐ果てのない戦いとなる。……シ  
キ、ミナト、その覚悟はあるか？」

「愚問ね。やられたらやり返すだけよ」

竜が災厄を繰り返すなら、こちらも再び取り払うだけだ。覚悟なん  
て考える必要もない。

隣に立つミナトを見る。同じくエメル、シズカ、リンが視線を向け  
る。

パートナーは寝起きのような緩慢さで脱力し、頭も支えられないの  
か首を傾げて笑った。

「あー……やっぱり、そうなるよね……」

「……強制はしたくない。しかし、あまり時間もない。覚悟を……決  
めてほしい」

「いやあ、覚悟なんて決まってるよ。去年からずっと」

歯切れの悪さにシズカとリンの表情が曇っていく。

ミナトの目はここではないどこかを見ている。空を眺めるように  
あてどもなく、何かを探してぱちりぱちりとまばたきを繰り返してい  
た。

聞き耳を立てていたメンバーもまさかというようにこちらを見て、  
何かを察知したナビたちが専用席から飛び降りて走ってきた。目も  
とを赤く腫らす片割れの手をミロクが引いている。

「ミナト、どうした？ 病み上がりだもんな、どこか調子でも悪いのか？」

「ありがとう。私は大丈夫。ミロクたちこそ無理してない？」

「オレたちはいいいよ。けど、たった数日で……この一年がなかったことに……ミイナも泣き止まないし……」

「だ、だって、キリノが……！ キリノ、大丈夫だよね……？ このままだったら、どうしよう……う……ぐすつ……」

世界がまたどん底に蹴落とされ、いつも隣にいた人が生死をさまよう状況は、冷静な双子の心も思った以上に蝕んでいるみたいだ。先日に見ていた笑顔が一転、ミイナは絶えず大粒の涙をこぼしている。彼女はしゃくりあげながら、「それに」と付け加えた。

「わ、私……シキとミナトにも、あんな風に、なってほしくないです。今回は運良く助かったけど、また似たようなことがあったら……」

「――」

ミロクが手を強く握っても、シキがおおざっぱに頭を撫でてやっても少女は泣き止まない。マサキがポケットから出した怪しい色のキャンディは突っぱねられた。

ミナトは何も言わない。次々と生まれては落ちていくミイナの涙を眺めているだけ。瞳に感情は浮かんでおらず、ただ現実を反射する鏡のようだ。

その様子によからぬものを感じたのか、シズカが切羽詰まって一歩踏み出した。

「このままでは、いずれ議事堂もフロワロに飲み込まれてしまいます……。とても重いものを背負わせてしまいますが……13班の力がなくては、ドラゴンから世界を救うことはできません。どうか……どうか、よろしくお願いします！」

「あ、いえ、大丈夫です。協力する意思はあるので。ただ……」

ミナトはぎこちなく体を半回転させた。ムラクモ本部の入口へ視線を送り、申し訳ないというように手を上げる。

「ちよつとだけ、時間をもらっていいですか？ 三十分以内には戻ってきますから」

具体的に時間を述べて許可を求める彼女に首を傾げ、まあいいだろうとエメルは頷いた。

「その程度なら問題ない。待っているぞ」

「外に出るなら、私ついていくけど」

「ううん。大丈夫。一人で行くよ」

自分の申し出に頭を横に振り、ありがとうとパートナーは笑みを作る。一人でうろつけば嫌な奴らに捕まってしまうような気がするのだが、それを承知で彼女は大丈夫と言った。なら任せていいかもしれない。

「……なんかあつたら呼びなさいよ」

「うん。それじゃあ、少しだけ席を外しますね」

いつてきます、とのんきに手を振る女が一人、重苦しい空気の中を場違いな緩さで歩いていく。

部屋にいる全員が、意図を凶りかねるといふ顔でミナトを見ていた。ある者は去年の彼女を知るがゆえに、ある者はその緊張感のなさに。

「あ……あ、み、ミナトー！」

混乱した様子のリンがたまらず声を上げた。

振り返ってきよんとするミナトに、彼女は舌を噛みそうになりながら必死に呼びかける。

「アタシは、おまえを信じてる！　一年前、世界を救った13班なら大丈夫だ！　待つよ、おまえの心が決まるまで……」

「……はあい。ありがとうございます」

返されたのは間延びした声と、脱力した笑顔だった。

今度こそ13班の片割れはムラクモ本部から退出する。

なにあれ、とどこからか困惑した声がこぼれた。

「なんか……様子がおかしくなかった？　こんな時にまで笑う子だったっけ」

うん、そうだ、と賛同する声が波紋のように広がっていく。

「そりゃ、二回目だもん。嫌になっちゃったんじゃないか。去年何度も死にかけて勝ったのに、またこんなことになったんだから」

「だとしたら、ちゃんと戻ってくるかな……ちよつと怖くないか？」

彼女の挙動に対する疑問、気遣い、不安。言動に対して気が抜けているんじゃないかという場違いな指摘まで、意味をなさないノイズが本部の中に溜まり始め、それを咎める声が生まれる。

連鎖するそれに、ため息を吐かずにはいられなかった。

はーっ、と限界まで二酸化炭素を追い出し、酸素を吸い直して、

「うるさい」

腹から発声すると同時に震脚を一発。

部屋全体が揺れ、壁に接着された大型モニターががたがた揺れる。

無駄口を叩いていた者は全員、崩れそうになる資料と機材に抱き着

くことに全神経をつぎ込んだ。当然室内は静かになって、何人かが血走らせた目でこつちを見てくる。

「くだらないことばつか口にすんな。陰口叩くんなら真夜中別のフロアとか、絶対聞かれない状況でしろ。三十分で言ってたんだから、その間待ってればいい話でしょうが」

「で、でもさあ……彼女は何をしに行ったんだ？」

「踏ん切り付けに行つたに決まってるでしょ」

恐る恐る尋ねてくる作業員を睨む。それでもなお言いたげな視線をちらほら感じたため、面倒だが声を大にして言ってる。

「人によつて食べ物好き嫌いがあるでしょ、それと同じよ。あいつにはあいつのやり方がある。いい？ あいつに文句言ってるいいのも殴ってるいいのも、同じ場所で肩並べてドラゴンと戦った奴しかない」

つまりは自分だけだと周囲に伝える。

一心同体というのは大袈裟だけれど、それなりの時間や戦いを共にした自負はある。ミナトがいない場所でミナトのことをああだこうだ言おうがそれは全てただの想像に過ぎない。

文句を言つてばかりの議員とは違い、ここにいる人間は戦う者に対する理解がある。堂々と説き伏せてやれば、やかましかった雑音は鳴りを潜めた。

これで身内……ドラゴン討伐に何かしらの形で関わる者は、余計な行動を起こすことはないだろう。

あとはあいつを待つだけだと腕を組む。するとリングが「すごいな」と隣で呟いた。

「おまえの言うとおりかもしれない。ミナトのこと、よくわかってるんだな」

「……」

「な、なんだ、アタシ余計なこと言ったか？」

「言ってるない」

リンが慌てたのは自分の眉間にしわが刻まれたからだだろう。

彼女は的外れなことはいない。ミナトのことは、議事堂の中ではパートナーである自分が最もよく知っていると言える。逆も然りだろう。

好きな食べ物、起床時の寝ぐせ、仲の良い相手、大抵のことは把握している。戦うときの呼吸だって、傍にいただけでよくわかる。

志波 湊は自分が一番知っている。

ただ、だからといって何もかもを把握しているわけでもない。

「……」

4月17日を思い返す。真竜フォーマルハウトが降臨する前の日。13班に割り当てられた部屋で、就寝する直前のひと時。

あの時垣間見た物は、それまでは知らなかったパートナーの欠片。別に驚くことじゃない。人間、自分自身のことすら完全掌握はできないのだ。ならば別の人間を解き明かすなんて無理なことだろう。

新しい一面なんて、これからもぽろぽろ表れる。

ただ、それを目の当たりにするのは、知ることは、

(……良いことなのか、それとも、)

そしてついさつき、あの笑顔が異様なほど完成度の高い作り笑いであると気付きながら、ミナトを一人で送り出した自分は正しかったのか。

勢いをつけて首を振る。傍にいたナビたちが驚いて目を剥いた。

何を余計なことを考えている。これじゃ数分前の周りの奴らと同じじゃないか。

くそ、もやもやする！

「あーっ!!」

謎の息苦しさを吐き出すために声を出す。

思いの外空気は震え、また大型モニターががたがた揺れた。

\* \* \*

「ただいま戻りましたー」

言葉通り、三十分ぴったりでミナトは帰ってきた。相変わらずの笑顔だが、今度は作り物ではない自然な表情だ。

同じく三十分前から表情を変えずにうつむいているミイナに苦笑し、彼女を優しく抱え上げる。

「ミイナ、大丈夫?」

「だ、大丈夫です。すみません、困らせてしまって……」

「困ってなんかいないよ。……ごめん、そんな顔させるなんて、13班の年長者として失格だね」

「13班は私とあんたの二人しかいないけどね。それはそれとしておかえり」

「ついでに言うとうまくモ機関と自衛隊を合わせてもミナトくんは年少寄りだよ? それはそれとしておかえり」

シキとマサキの補足に「しーっ!」と指を立て、ミナトはミイナを抱え上げたまま続ける。

「大丈夫。キリノさんはきつと目を覚ましてくれるし、この竜災害



だって乗り越えられる。ドラゴンに仕返しするために、メイナもミロクと一緒に協力してほしいな」

「……」

「だーいじょうぶ。不安なら泣いていいよ。自然に涙が止まるように、私もできることをするからさ。例えば、帝竜を倒してくるとか」

ミナトが片目を閉じてみせる。似合わない格好のつけかたとその言葉にリンとシズカの顔が綻び、伝播して落ち込み続けていた空気が静止した。

つまり、と声をかける。

「やるってことで、いいのね?」

「うん。いや、元からやるつもりではあつたんだけどね? ちよつと気持ちを追いついてなくて……でも、やっとエンジンかかったよ」

自分の気持ちどうこうではなく、人の顔色を見て動く。相変わらず面倒な性格だが、去年みたいに無理だと嘆く彼女はもういない。

無駄な心配だったなとため息をつく横で、メイナの涙を振り落とすようにミナトは回る。慌ててしがみつく少女ナビに彼女は笑い、小指を出した。

「去年、シキちゃんが私の手を引いてくれたみたいに、今度は私も一緒に先駆けになる。顔を上げてもらえるような背中を見せて……背中を、」

背中、と繰り返してミナトは目を伏せる。

背に残る禍々しい痕を思い出すように眉間にしわを寄せ、彼女は再び勢いよく自身の頬を叩いた。

「背中でも手でも顔でもなんでもいいや。とにかくやるよ! ……メイナ、一緒に戦ってくれる? ちゃんと生きて、帝竜の首を持ち帰る

からさ」

「……帝竜から採取するのは、検体とDzだけですよ」

「あつ、はい」

「……ふふ。これ、去年も言った気がする」

口に手を当ててミイナが笑う。小さく細い小指が、ミナトの小指と絡んで上下に振られた。

「シキとミナトのナビはミロクだけど、私も、私ができることをします。一緒に頑張ります」

「うん、よろしくね！」

柔らかく抱きしめあつて、ミナトはミイナを床に下ろす。ほんの少しだけ羨ましがなミロクの視線を察知して彼も抱え上げ、悲鳴と笑い声が響く中、エメルが切り替えるように咳払いをした。

「よし、それでは具体的な作戦を説明する。シズカ、続けて頼む」

「……は、はい！ 日本全土は議事堂を除いて既にドラゴンの支配下で……私たちはここから離れることさえできません……」

「ああ、なのでまずは領土を奪還する。少しでも多くのドラゴンを狩って、人類の領土を少しずつ取り戻すのだ」

「まあそれしかないわよね。まずはどこ？」

「現在、東京・丸ノ内が、最優先目標に設定されています。丸ノ内は、議事堂の目と鼻の先にあり、既に著しい異界化が確認されています。また、丸ノ内のフロワロは、日に日に、その勢力を拡大しつつあり、放っておくのは……大変危険です！」

「現状はこんなところだ。……何か質問はあるか？」

あの厄介な黒いフロワロがはびこっているのは、真竜が根城として選んだスカイタワーのみと考えていいらしい。帝竜のエリアに咲くのは去年と同じく赤いフロワロなら、活動に支障はないだろう。

それでも心配だとリンが腕を組む。スカイタワー襲撃の一件で、こちらはハンデを抱えてのスタートになってしまった。

「13班のコンディションは、思っていた以上に悪そうだぞ。うちも負傷者が多い。このままドラゴン討伐に向かうには……」

「……うむ。13班が本調子でない現状では、まともに竜と戦える戦力はゼロに近い。ゆえに、私の独断で『策』を講じた」

「策……？」

「……すぐにわかる。ムラクモ13班。これより正式に任務を通達する」

断崖まで追い詰められている今、まずは踏ん張るための足場を固めることが肝要だ。自分たちの能力は追々取り戻していくとして、それ以外でドラゴンに対抗しうる要素に「装備」がある。

戦うための武具、それを生産するための設備、その環境を整えるための資材が必要だとエメルはさかのぼって説明する。

「13班は、これから丸ノ内におもむき、ドラゴン討伐を行う。その際、ドラゴンの死体から手に入れられる汎用資材『Dz』を三単位回収する……。道中のマモノ、そしてドラゴンとの実戦を経験しながら戦闘の勘を取り戻してくれ」

「了解。三日も寝てたんじゃ体鈍ってるだろうし、まずは準備運動ね」

「去年よりはマシなはず……。任せてください！」

「おまえたちが万全のコンディションであれば……。……いや、これは言っても詮ないことだったな。まずは肩慣らしだ。無事、Dzを届けてほしい」

エメルが羽織をひるがえす。誰よりも幼い体だか、揺るぎない羅針のようにまっすぐ伸ばされた腕には迷いがなかった。

「それでは現時刻をもって、丸ノ内攻略戦フェイズ1を開始する！」

各員、議事堂広場に集結。出立の儀を行った後、作戦を開始する！」  
「新しいドラゴンが現れたのなら、こちらも新しいスキルを開発すべきだネ。ふふ……、やってやろうじゃないか！」

「よっしやー！ ドラゴンなんてまた返り討ちにしてやるぜ！」

おーっ、と各々が腕を突き上げる。

気が滅入っているのは確かだが、何もかもが未知で暗中模索をするしかなかった去年よりはいくらかマシだ。一度竜災害を乗り越えた経験をもつて事にあたれば道は拓ける。

ミナトの瞳に暗雲はない。彼女を見れば視線が返されて、互いになずき拳を合わせ、スイツチを入れた。

「またぐずつちやったらごめんんだけど……よろしくね」

「今さらでしょ」

相方の不安そうな表情を鼻で笑い飛ばす。そして扉を開けて一歩踏み出した矢先、「ハイ」と呼び止められた。

日本よりは海外を連想させる呼び方。こういうノリはだいたいチエロンだが、響いた声は男のもの。

ならば誰だと振り返る。目に映ったのはやはり知らない顔だった。

青い髪の男女一組。男はライムグリーンのジャケット、女はビビッドピンクのインナーと、攻撃的な色をまとっている。

無遠慮に上から下までこちらを眺め、男の方が口を開いた。

「ようやく、お目覚めか。……ムラクモ13班」

「……命拾いしたわね。わざわざ助けてやったんだから、泣いて感謝しなさいよ」

初対面は第一印象が最重要だと言う。ほとんどのイメージは見た目に持っていかれるが、次に決め手となるのが振舞いだ。

爪や牙を利用して攻撃をする獣よろしく、派手な色の二人組……特

に女の方は尊大さが目に余る。

助けたというからどこかで何かがあったのかもしれない。だがこの数秒で抱いた第一印象からして、下手に出る必要はないと判断する。

おまえ普段から下手に出ねえだろとツツコンでくるガトウの幻は無視して、遠慮なく棘を返した。

「あんたたち、誰？」

案の定、女の方が不敵な笑みのまま片眉を引き皺らせた。

直近で自分たちが助けられるような状況と言えばスカイタワーの時で、確かに誰かとああだこうだしたような記憶がなくもないが、うん、おぼろげでまったくわからない。悪いが覚えていないものは仕方がないのである。

宥めるように男が女の方に手を置き、値踏みするように自分を見た。

「ま、覚えてないなら、それもいいさ。この国のヒーローは、おまえたちだ」

「えーと、どちら様ですか？ 私たち仕事があるので、ご用件がないなら失礼しますけど……」

名乗りもしない二人組に、井戸端会議を終わらせるようにミナトが首を傾げる。

どんな反応を期待していたのか、女が不満そうにため息をついて肩をすくめた。

「アンタたちの噂、こっちまで聞こえてきてたから、ちよつと楽しみにしてたんだけど……。あーあ、期待外れもいいところ！」

濃い紅色の瞳が何の遠慮もなく視線の矢を放ってきた。尖った爪

が銃口のように自分たちに向けられる。

「これじゃショー兄どころか、アタシにだって指一本で殺せちやいそ  
うじゃん。アハハハッ！」

「あつ、シキちゃん！」

「おいイズミ！」

侮蔑を包み隠さずぶちまけ、抉るような哄笑が廊下に響き渡る。

甲高い声に弾かれ無意識に一步踏み出したところで、ミナトが腰に  
腕を巻いて止めてきた。

放せと言ってもパートナーは首を振って譲らない。同じく男の方  
も女を小突いて発言を咎めている。

「待つて待つて、落ち着いて！ 人間同士で争ってる場合じゃないっ  
て！」

「うるさい放せ。一発殴る」

「ここで問題起こすんじゃないやねえ！ 俺たちはまだ、ここにいちやいけ  
ねえことになってんだからな。本隊が来るまで、大人しくしてろ」

「ぐ、ごめん、ショー兄……」

悪いねと男が片手をあげる。奥歯を食いしばる自分の代わりに、ミ  
ナトが低い声でいえ、とだけ返した。

「俺はショウジ・サクラバ。こっちの血の気の多いのは、妹のイズミ」  
「ふん……」

「……志波 湊です。こっちは……んむぐっ」

「馬鹿正直に名乗るな」

こんな時でも礼を欠かさないミナトの口を手でふさぐ。男……  
ショウジが片眉を上げて疑問を表すが、答える気はない。

敬語や丁寧語と同じだ。相応の礼節を尽くす必要のない相手と判

断しただけ。ミナトが名前を呼ぶのを聞いているだろうが、こんな奴ら相手に自分からフルネームを名乗るものか。

「いい加減放して。飛びかかったりしないわよ」

「ほ、ほんど？ なら……」

ミナトががちりと絡めていた両腕をほどく。

互いに会話の姿勢に戻ったと判断したのか、シヨウジが口を開いた。

「まずはお手並み拝見とさせてもらおうよ——」

結局この兄妹は何をしに来たのだろう。重要な話ではなさそうなので、適当に聞き流す。

それよりも、聞き間違いでなければこいつらは「自分たちはまだここにはいけないことになっている」と言った。騒ぎを起こさないように、とも。

ということとは、だ。

静かに片腕を上げる。

「お互い、戦場を楽しも——」

「ふんっ！」

相手が言い終わらないうちに真横の壁、設置されていた非常用のボタンに拳を叩きつける。

指の骨がスイツチを押しこんだ直後、出番だと言わんばかりにけたたましいブザーが空気を引き裂いた。

もちろんサクラバ兄妹はぎよっと目を見開き、余裕ぶっていた顔に焦りを浮かべた。ついでにミナトも仰天して耳を押さえた。

三人の反応はお構いなしに通信機に向けて声を張る。

「ムラクモ！ 自衛隊！ 誰でもいいけど……議事堂内に不審な男女二名を発見！ それぞれ銃と刃物の凶器を所持！ うち一名から殺害をほのめかす発言を確認！ 至急応援に来られたし!!」

「し、しししシキちゃん!? 何してるの!?!」

「何って、通報」

「いやそうだけどそうじゃなくて！ なぜ!?!」

「別に間違ったことしてないでしょ？ さっきの発言、あんたがビビってた『ドラゴンとの戦いに外野からヤジを飛ばす口先だけの雑魚』じゃない。しかも見ない連中で『ここにいちやいけな』って言葉、ほぼ不審者で決まり。正しい方法で対処してるだけだけど」

「はあっ!?! アンタ今何て言った!?!」

「馬鹿、イズミ、やめろ!」

わかりやすく「雑魚」を強調してやれば、今度はイズミという妹の方が前のめりになってショウジに抑えられる。

ショウジは自分たちの様子を見て、ついでに挨拶がしたかっただけだと言う。それにしても手土産がないどころか舐め腐った態度だったのでやはり信用できない。

「ここにいちやいけなっていうのは、こっちの話だ。これでも一応、おまえたちのこと心配してたんだぜ?」

「心にもないこと言うな。用事が済んだんならさっさと帰れ。盗った物は置いていけ」

「だから犯罪者扱いしないでくれる!?! こんなしよぼい建物から物盗んだりするわけないでしょ!」

「はっ、どうだか。出会い頭に殺すだのなんだの口走った輩だしね」

四方八方から大勢の足音と声が響いてくる。苦笑いを浮かべてショウジが一步下がり、ミナトが気づかわしげに声をかけた。

「あのー……私たちもやらなきゃいけないことがあるので、このへん



で。どうぞ、お帰りはあちらになります……えっと、不審者、じゃ、ないんですよね？」

「だから、違うってば……!! わっ?! ショー兄!」

「確かに用事は済んだわけだ。忠告通り帰らせてもらおうよ。また今度な」

「不吉なこと言うな。おととい来やがれ」

これでもかと毒を吐いてやるがどこ吹く風、シヨウジはひらりと手を振り、イズミの首根つこをつかんで歩き出す。

兄妹はそのまま消えるかと思いきや、寸前でイズミが曲がり角にしがみついた。言われっぱなしではいられないのだろう、顔を真っ赤にして犬歯がむき出しにされる。

「狩る者だかなんだか知らないけど！ 実力もないのにちやほやされて……日本人ってほんつとバカ!!」

「初対面でどや顔で挑発してくる馬鹿よりマシよ！ あんたたちだつて日本の姓名でしょうが！ さっさと行けこの鮫女！」

「サメ女って何よ！ ていうか一緒にしないでくれる？ あたしもシヨー兄もアメリカで生まれて育った、純粋なアメリカ人なんだから！」

「イズミ！ 置いてくぞー！」

「ごめん、シヨー兄！ だつてこいつらが……!!」

「いいから、早く来い！」

「ま、待ってよ！ シヨー兄！」

青いポニーテールがぱつとひるがえる。

直後、先にムラクモ本部から退出していたリンたちが背後の曲がり角から飛び出してくる。

「凶器」「殺害をほのめかす」という単語が効いたのか、彼女たちはガチガチの重装備に鬼の形相で「大丈夫か!!」と叫びながら陣形を組んだ。

「警報装置を増やしておいて正解だったな！ ドラゴンが来て大変だって時に……、……ん？ 不審者はどこだ？」

「悪い、逃げられた」

一応謝罪の言葉と経緯を述べてもう大丈夫だと告げる。自衛隊員たちは安心したような肩透かしを食らったような顔で銃を下ろした。

情報提供を求められたので、一連の出来事と外見的特徴を共有し、任務だからとこの場を離れる。

警報は議事堂の人間たちに平等に聞こえていたようで、外へ続く出口に立っていたエメルも怪訝そうな顔をしていた。さらに自分を見て首を傾げ、訓練はほどほどにしておけと見当違いの注意をされる。

この息切れは運動ではなく言い合いによるものなのだが、馬鹿正直に告げるのもなんだか嫌なので、わかったとだけ返しておいた。

「これより出動する。……準備はいいか？」

「ん、平気」

「いつでもいけるよ」

「よし、では、これより出立の儀を始める。ついてこい」

外に出る。広場には自衛隊員、ムラクモの戦闘員はじめ前線に立つ面々が列をなしていた。背後の屋内や窓からは物珍しげな一般人の視線が集まっている。

片手を上げて自分たちを入り口に留め、エメルはそうそうたる顔ぶれを見回した。静まる広場で、すう、と息を吸う音が口火を切る。

「これで全員、集まったな。ムラクモ13班。そして、自衛隊の諸君。これより、我々は再び竜と戦うことになる。状況は絶望的かもしれないが、何も恐れることはない」

皆がエメルを注視する中、見送りに来ていたナースたちだけが、自

衛隊員のひとりひとり、そして自分たちを悲痛な顔で見つめる。横でミナトがわずかに動き、大丈夫ですよと呼びかけるように手を振っていた。

「我々は一年前も勝利を手に行っている。竜を狩る知識と経験が既にあるのだ。恐れるな、立ち向かえ！ 輪廻に抗え、因果を断ち切れ！  
そして……」

「全ての竜を狩り尽くせ！」

幼子の姿からは想像できない、怒りによって極限まで研がれた声が響き渡る。

体に染み付いた動きで自衛隊が敬礼を返し、装備の揺れる音が法螺貝の代わりに戦いの始まりを報せた。

Count 4. 必然Ⅱ始まりの2人

—— 丸ノ内／亜空断層 ——

現在地は異界化が確認された地点、東京駅丸ノ内駅舎前。

目の前に広がる文字通りの「異界」を見て、うわつとミナトがのけぞった。

「何これ……東京駅が……！」

『七色のいばら……!? フロワロによる侵食率、65.7%……駅全体が亜空間に引きずり込まれてる』

東京駅の丸ノ内駅舎と言えば、一昔前の洋風を思わせる外観で人気のスポットと聞く。

ビルと同じ無機物といえど、コンクリートではなく赤レンガが重ねられ、直線ではなく曲線を織り込んだ姿。電子ではなくアナログの時計が中央に埋まっている。銀灰色の摩天楼の中で唯一、温かみが映える建物だ。

けれど、今日を奪っているのは駅舎を中心に一帯を呑みこむ極彩色である。激しい地割れで地面は失われ、本来バスターミナルがあるはずの駅前には底の見えない闇が広がっている。その中には波のような揺らぎと光の線が、色を変えて流れていた。

踏み出せば、落ちるのではなく吞まれて別の世界へ引きずり込まれてしまうような。死への恐怖ではなく未知に対する嫌悪感がにじみ出てくる。

目前にある駅舎は、ミロクが言うように鮮やかな虹色のいばらに覆われている。形作っているのは植物ではなく宝石で、消失しているアスファルトの代わりに巨大なそれが橋となつて駅舎へ続く道になつていた。

『この光景……一年前を思い出すな……』

自分たちの視覚越しにミロクが思い出しているのは逆サ都庁のこ  
とだろう。ウオークライに支配されていたかつての拠点も、この丸ノ  
内も、異界化した姿は陸上の孤島だ。崩れているというより、地表ご  
と地球から引きはがされてしまっている。

ミナトが深く息を吐いて首を振った。まだ突入してもいないのに  
グロッキーになっている。体調でも悪いのだろうか。

「異界化見るのは初めてじゃないでしょ、何へこんでんの」

「だって、一度は行ってみたいなって思ってた場所なのに……ほら、こ  
の写真、綺麗でしょ？」

そう言っただけで突き出されたのは彼女のスマートフォン。画面はアル  
バムを表示し、平時の東京駅駅舎を映している。

写真と今の姿を比べれば、なるほど確かに。整頓された部屋を荒ら  
された、または美術館に並ぶアートに蛍光塗料をぶちまけたような、  
混沌と台無し感が目立つ。

帝竜を倒せば多少はマシンになるかもしれないが、去年異界化から元  
の姿を完全に取り戻したのは東京都庁だけだ。あまり期待しない方  
がいいかもしれない。

『おい、13班！ もう一度、作戦を確認しておく。今回の目的は、ド  
ラゴン資材Dzを三単位回収すること。まだ万全じゃないんだから  
な。無理せずミツシヨンを実際にこなそうぜ』

「了解。異界化は私たちじゃどうしようもないわよ。自分のことだけ  
考えて」

「はーい……」

架け橋となっている大きないばらを渡って駅舎へ侵入する。

入り口付近では先行していたムラクモが進路確保のため瓦礫を撤去していて、ヒムロが手を上げるだけのあいさつをした。試験である却不合格となった候補生三人もついてきていたらしく、大して進んでいないのに既に音を上げている。

「何だこれ……無理……マジで無理……」

「教官！ 限界であります！ 戦略的撤退を提案します！」

「まだ来たばかりだろうが。まずは異界化に慣れるところからだな……」

異界化に圧倒された新人たちがヒムロに縋りつこうとして、すげなく突っぱねられる。

教官と環境の厳しさにひいひい汗を流す彼らを、試験会場にいなかったミナトがあいさつがてら介抱し始めた。去年の自分自身を見ている気分なのか、わかりますわかりますとうなずく彼女の目は生温かい。

「ヒムロ、お疲れ。ドラゴンは？」

「ここ周辺ではまだ見てないな。だが鳴き声は聞こえた」

会話に割り込んで、駅の奥から嚙猛な咆哮が響いた。マモノたちの共鳴まで聞こえてきて、ヒムロは苦々しげに眉を寄せる。

「病み上がりで悪いが、ドラゴンはおまえたちに任せるしかない。注意して行けよ」

「……なんか、目が覚めてからどいつもこいつも体のこと心配してくるんだけど」

「あたりまえだろ。よく考えれば去年のドラゴン討伐はほとんど13班と10班がこなしてたんだ。それは今も変わってない。充分すぎるくらい慎重になれよ。おまえのパートナーもそう………いや……あいつは……」

ヒムロはなんとも言えない顔で明後日の方向に目を逸らした。

そういえば、去年こいつとのファーストコンタクトでミナトは「遅刻防止、命綱なしバンジーでも大丈夫」とトンチキな解釈でテレポーター能力を褒めちぎっていた。

消極的と冷静は同じ意味ではない。ミナトは基本ビビリなだけで、ある程度精神に余裕があるときは抜けている。哨戒や索敵など、集中力や頭の回転が求められることにはそこまで向いていないかもしれない。

……自分で分析しておいてあれだが、割と致命的な気がしてきた。

「まあ、なんだ……大変だとは思いますが、頑張ってください」

「哀れみの目で見るとやめろ。あんただって新人のお守りがあるでしょうが。……ミナト！」

「はい！ それじゃあ私たちは先に進みますね。頑張ってください」

手を合わせて拝む新人たちに手を振ってミナトが戻ってくる。

何の話をしていたのか尋ねられたのであんたが能天気なことと返せばえへへと笑われた。褒めてない。

ヒムロたちと別れて駅構内を探索する。マモノはムジナやカエルといった比較的対処しやすい個体が多く、やけに殺気立っているようだ。おそらくはドラゴンが付近にいるからだろう。

竜とフロワロの存在は切っても切り離せない。ここ東京駅は帝竜の巣ということもあってフロワロがかなり多い。毒花の数に応じて瘴気は濃くなり、それに刺激されてマモノはより凶暴性を増す。

「気を付けなさいよ。こいつら、普通のマモノよりタフかもしれない」「うん、なんか原型をとどめていないというか……より異形化してるよね。強そう」

体を動かす感覚もミナトの超能力の具合も、スカイタワーの一件から弱体化しているということはないが、逆に成長しているわけでもない。

この調子では全盛期とはとても言えない。駅構内の探索で一年前……いや、それ以上にまで成長しなければ。

周囲を警戒しつつマモノとの戦闘を何度か繰り返す。そのまま進んでいくと、甲高い吠え声の中に、地鳴りのような唸りが混ざって聞こえた。

曲がり角の壁に背を付け、息を潜めて先を覗く。

複数の出口や改札へ繋がる、駅舎の中でも広いエリア。その中央に堂々と立つ二本足。

マモノではないと判断すると同時に、同じく敵影を確認したミロクから通信が入った。

『おい、13班。前方にドラゴン反応を確認した。歩行型……肩の部分から生えてる角が危ないな……戦闘には能力を惜しまず戦ってくれ』

「うん、わかった。……どうする？　ここ開けてるから、立ち回りには困らないと思うけど」

「とりあえずいつも通りで。雑魚が乱入してきたら始末頼むわよ」

「了解……あっ！」

ミナトが自分の肩をつかんで身を乗り出す。

気付かれるだろうかと怒るよりも先に、か細いうめき声が駅構内に響いた。

広間を挟んで向こう側、通路の影から細い足首が覗いている。肌の色も足のサイズも、身に付けている靴下も人間のそれ。生存者だ。

同じくそれに気付いたドラゴンが、顎を開けて唾液を飛ばし、一直線に突っ込んでいく。ひゃああと老人の悲鳴が聞こえた。

「まぎすいまぎすいー」



「突撃！」

ミナトを押しつけて飛び出す。

抜刀する間も惜しい。全力で広間を疾駆し、人影に飛びかかったドラゴンに勢いのまま蹴りを見舞う。

すぐ目の前には壁が広がる。宙を突き進む体は止められない。腕で急所をかばい、竜の巨体と一緒に衝突した。

「うわあああシキちゃん!!？」

「いいから、生存者保護!! っ！」

体を起こす直前、砂塵の中から竜の頭が現れた。

ぐぱりと開いた顎には隙間なく並んだ牙。なんとか剣を滑り込ませて受け止める。

小石と砂粒が降る音の中、ミナトの誘導に従って人影が離れていく。派手に突っ込んだので心配だったがぎりぎり巻き込まずに済んだらしい。

安堵するのも束の間、剣で牙を軋ませる相手、ツインホーンドラグが肩から生えた角を持ち上げた。

「っのー！」

二メートルはある凶器が叩きつけられる。地面を板チョコのように容易く砕くそれから身をひねって逃れ、噛まれたままの剣を振り抜く。

相手も素早く飛び退き、刃は口角を数センチ広げただけにとどまった。

睨み合い、輝くいばらの光を剣身で反射させて相手を誘う。狩猟本能のみで活動するドラゴンは迷うことなくこつちを見て吠え狂った。逃した獲物はすっかり忘れ、自分にもみ眼光が向けられる。

(！ 頭を下げた)

ツインホーンドラグは血混じりの唾液を流す顎を地面すれすれまで下げる。

降参の姿勢ではないだろう。足を何度も地に蹴りつける動作。蹄で勢いをつける鬪牛を思わせた。

『突撃姿勢だ、気を付けろ！』

キーボードを叩く音と連動し、流れるように視覚情報が更新されていく。

力を溜めて膨張する筋肉の動き、一直線に伸びてバランスを取る尾、体の上下運動、全ての要素から分析されたカウントダウンが始まる。

3、2、1――、

「来るぞー！」とミロクが言うのと同時に、爪で石畳を砕いてドラゴンが飛び出した。

翼の膜が退化した代わり発達した脚力で、まばたきの間に彼我の距離が埋まっていく。

受け止めはしない。脚に多大な負担がかかるだろうし、この速さではクロスカウンターも難しい。

「――はっー！」

ギリギリまで引きつけて真上に跳ぶ。ドラゴンは勢いを殺せず体の下を過ぎ去り、壁に衝突した。

駅全体に振動が響く。着地して振り返れば、案の定、角が深々と壁に埋まって動けなくなっているトカゲが一匹。

「シキちゃん、大丈夫ー!?!」

「もう終わるー！」

ミナトの声とマモノたちの断末魔が重なって届く。生存者を庇いながら戦っているのなら、早く加勢に行かなくては。

幸い、相手の表皮はワニの皮に似ていて、強固な鱗や甲殻に覆われてはいない。自分の拙い斬撃でも通じるだろう。

「倒……れるー！」

首に狙いをつけて大上段に振り下ろす。刃は粘り気があつて固い皮も、密度の高い筋繊維も骨もまとめて断ち切った。

Dzの回収は後だ。すぐに転進してミナトのもとへ向かう。

氷の壁に群がるマモノをまとめて斬り伏せ、駅構内に反響していた咆哮は鳴りを潜めた。

振り返れば一面が獣の死体だらけだ。余裕を取り戻した途端、血と埃臭さが鼻につく。これで人間も死んでいたらもつとひどかっただろう。

生存者の治療を行うミナトを覗いて様子をうかがう。

「ここら辺の敵はもういない。そっち無事？」

「うん。ね、この人たち覚えてる？」

ミナトが手当をしているのは老婆と若い男の組み合わせだった。

どちらも見覚えのある顔ではある。主に都庁の大浴場のフロアで……。

気付いた自分と相手二人がああ、と声を上げたのはほぼ同時だった。

「番台とボイラー技師か。久しぶりね」

「久しぶり。元気そうでよかったよ。迷惑かけてすまないねえ」

大浴場の番台をしていたトミコと、ボイラーの点検を担っていた夕

ツジ。職業柄、都庁でよく一緒にいた男女だ。

二人はムラクモの拠点移動を機に、一度家に帰りたいたと外へ出たと聞いている。自ら死地に飛び込むタイプではないから、こちらへ戻ってくる途中で異界化に巻き込まれたのだろう。

「家に帰れたまではないんだけど、ここを通り抜けようとしたらいきなり迷路みたいになっちゃまって、揃ってずっと立ち往生してたところさ」

「……道に迷っただけだ。別に、遭難していたわけじゃない。だが、あえて言おう。助かったぞ」

「意地張るんじゃないよ。素直じゃないね」

ドラゴンに襲われていた恐怖はどこへやら、ぶっきらぼうな技師と世話焼きの番台はマイペースに言葉を交わす。どちらも体に問題はなさそうだ。

『現在位置、捕捉……座標固定。オツケー、脱出ポイント生成可能だ！』

「ありがとうミロク。トミコさん、立てますか？」

「恐怖で腰が抜けちゃまってねえ……タツジ、ちよいと手を貸しておくれ」

ミナトが手早くガーゼとテープを貼り、脱出キットを使って脱出ポイントを出現させる。

議事堂でも設備が整えば大浴場が使えるようになるだろう。その時は貸し切りという形で礼をすると手を振り、トミコとタツジは光の中をくぐっていった。

「ドラゴン任せちゃってごめんね。どこか怪我してない？」

「問題ない。少し背中打ったくらい」

竜災害後も開発班が改良を重ねてきた装備のおかげで、体への衝撃は緩和されている。大きな傷は負っていない。

刀剣での戦いに慣れないのと、脚に気を遣わなければいけないのと、敵を倒すのに時間はかかるが……周りがうるさいので剣を放り出すわけにもいかない。それに、あいつが扱えていて自分ができないというのも癪に障る。

皮肉ではあるが、平和が奪われたこの状況は訓練にはもってこいだ。ドラゴンたちは修行相手として有効活用させてもらおう。

背を打っているなら打撲かもしれないとミナトが背中を手を当ててくる。キュアの光を浴びながら装備のゆるみを直す中、通信機の向こうでなるほどとエメルが相槌を打った。

『負傷明けでも、なおその力。やはり狩る者は伊達ではないか……』

『さすが13班！ この調子で、どんどん進もうぜ』

「了解」

「目標はあとドラゴン二体だね。油断せず行こう！」

鮮やかないばらが血管のように張りめぐる東京駅を探索する。

都内の大きな駅は地上から地下にかけて広大な通路が作られていることが多く、東京駅もそのうちの一つだ。トミコやタツジのように移動経路として使っていたのか、異界化に巻き込まれた生存者がちらほらと発見される。いずれも非現実的な現象やドラゴンに怯えて身動きが取れず、ひどく混乱した者は亜空間に飛び込めば現実に戻れるのではと身を投げようとしていた。

手当たり次第に首根っこをつかみ脱出ポイントに放り込めば、たっぷり持ってきていた脱出キットは自分たちが使う分しか残っていない。

ドラゴン、マモノとの連戦で疲労の溜まってきた手首をほぐし、ミナトのヒップバッグにD ZとA Zを詰め込む。

議事堂出発時に比べればポケットはずいぶん膨らんだ。そろそろ潮時だろう。

「D zはさつき倒したドラゴンでちょうど三個か」

「脱出キットももうないし、補充も兼ねて一度戻ろうか。よし、今回は吐かなかったぞー!」

「そこ?」

去年と比べれば大きな進歩だとパートナーは誇らしげに最後の脱出キットを起動する。

緑色の光をくぐれば東京駅の景色が議事堂前広場に移り変わり、入口を警備していた自衛隊員がおかえりと声をかけてくれた。

さつさと部屋に戻って休憩したいが、フロワロの近くで活動していたためそのままでは上がれない。外に設置されている自衛隊と共有のテントで身を清めて服を着替える。

回収してきた物資も同じだ。自分たちの体ついでに、素手で触れても問題ないよう除染して、血や泥を落とす。

自衛隊にもムラクモの作業員にも女性はいない。加えてD zを扱える人材は一握りだ。体と装備の除染、物資の管理はその都度自分たちで行わなければならない、けっこう手間がかかる。

念入りに作業を行い、結局議事堂に帰還してからムラクモ本部に戻るまで二十分はかかってしまった。

「13班、帰還しました!」

「待たせた。ミッション通りD zは三つ。あとは必要ならA zもあるから」

ビニールシートを広げてD zとA zを転がす。大量のA zもそうだが、特にD zはドラゴンからしか回収できない希少な資源だ。資材に飢えた各部門の人員が我先にと突っ込んでくる。

「こらー! 勝手に持っていこうとするんじゃない! 今回の用途はすでに決めている! 手を出すな!」

研究員たちを蹴散らし、エメルが鶴の一声で荒ぶる奴らを沈静化させた。

積まれた資材を満足げに見下ろし、ご苦労だったと彼女は頷く。

「おまえたちの戦いぶりは見させてもらった。この分なら、完全復帰もそう遠くはないだろう……少し、安心したぞ。よし……ではさっそく、D Zを使つて武器を開発する。おいそこ、静かにせんか。他から苦情が来るだろう」

聞き耳を立てていた開発班のメンバーたちが湧きたって万歳をし、直後にエメルの睨みで姿勢を正した。

議事堂は去年の東京都庁よりも人が多く集まり、市民の居住区を中心にスペースや物資不足が目立っている。

加えて今は竜災害下。必要とされるものは何か、誰に我慢を強いなければいけないのか。慎重な運用が必要になるだろう。

「今回は惜しみなく開発班につき込む。……とはいえ、D Zは貴重な物資だ。無計画に使用するわけにもいかない。今後、D Zの用途に関してはムラクモ会議によって決定する」

「会議？」

「ああ。ムラクモやそれ以外の組織からも有識者を集めて会議する。復興計画で怒鳴りあっていた人間たちだ、紛糾するだろうが……そこは上手く決めてくれ。周りのことばかり考えてドラゴン対策が進まない、ということはないようにな。シズカ！」

「は、はいっー！」

エメルの小さな手から何かが放られる。明かりにきらめくそれは指先ほどの大きさのピン。ムラクモ機関のシンボルを模した金色のバッジだ。

慌てて手を広げて受け止めるシズカに向け、左腕を触る動きで腕章

につけるようにとエメルは示す。

「本日より、おまえをムラクモ総長補佐官に任命する！ 資材運用の都度、ムラクモ会議を招集しろ。13班のサポートを頼んだぞ」

「ううっ……私なんかこんな大役……なんて……言ってもらえませんよね……。せ、精一杯、頑張ります！」

「開発班は作業に移れ。13班は準備ができるまで休んでいるように。ではな」

会議は早々に終わって解散する。自分たちが除染作業を行う時間よりもスムーズだ。

エメルは「ドラゴン殲滅」の目的のもとに突っ走っているため、今のときばきとした指示然り、良くも悪くも迷いが無い。彼女のような者が議員にいれば、日頃の復興作業の会議ももっと早く終わるのではないだろうか。

とりあえず、今はエメルの言った通り部屋に戻って休もう。

自分もミナトも、以前よりも疲労がたまりやすくなっている。この調子では非常事態が続いた場合に体がもたない。

なるべく早く調子を取り戻せるよう、オーバーワークにならない程度に鍛錬をしなければ。

訓練メニューを練り直す必要があるなど考えながら、立ったまま船を漕ぎ始めているパートナーを引きずって部屋に戻った。

\* \* \*

行かないでと縋りつかれる。

見下ろせば、拠点に残ることになった友人が目には涙をためてこちらを見ていた。

震える声が絞り出される。ここで命を投げ打つ必要はない。捨て



駒になる必要はない。いつそのこと逃げてほしいと懇願される。

元より死ぬつもりなどない。しがみつく手をそつと離して背を向ける。

この戦いが勝ち目の見えないものだとしても、どんな結果になろうとも、自分は生き残る。だから悲嘆せず待っていればいいとだけ告げた。

扉が開かれる。なおも追ってこようとする友は周りの者に捕まっ  
て止められる。放して、お願いと響く悲痛な声を背で受け止め踏み出  
した。

目に飛び込んでくるのは、血に染まった世界。陸も空も、すべてが  
分けへだてなく赤黒く濁っている。

左右に並ぶ仲間と視線を交わす。得物を抜き、次々と降り立つ竜た  
ちに切っ先を向けた。

ここは今からお前たちの墓場になるのだ。餌場にさせてたまるも  
のか。

「いくぞ!!」

鬨の声を上げて走り出す。

目前に迫る憎き竜が、大口を開けて自分たちを迎え撃ち――

――、

――。

――……

\* \* \*

パンツ、と扉が開く音がした。同時に、広がっていた血生臭い戦場  
が薄れて消えていく。

また変な夢を見た。気持ちがいいとは言えない、後味の悪い光景。首すじが大量の汗をかいていて、サイドテーブルに置いてあったペットボトル飲料を飲み干す。隣のベッドではミナトが耳を押さえ、うめいていた。

「おはようございまーす!!」

「おいレイミ、いきなり入るなよ!」

「……レイミうるさい」

「ううう、頭がキーンとする……」

浅い夢をかき消したのは開発班の三人組の声だ。同性であるため、めらいが薄いのか、ノックしたからいいだろうと言わんばかりにレイミが飛び込んでくる。メイド服を着ているのにメイドらしい振る舞いを一切しない彼女に、後ろに続くケイマとワジは呆れ顔だ。

「きゃーん☆ 13班様、貴重な資材をファクトリーに配給していただいて、ありがとうございます!」

「これで、ちよつとはマシな武器が作れるようになったぜ」

「丸ノ内攻略の助けになるはずだ。役立ててやってくれ」

改良した装備の試着も兼ねてと自室から引きずり出される。

起こし方は乱暴だったが、時計の針は解散した時から一周回っている。休憩はこのまま一区切りしていいだろう。

身支度をしつつムラクモ本部に入ると、落ち着かない空気に包まれた。

研究員たちが床に流れるケーブルの配線を調整し、仕事のない者はあちこちに視線を飛ばしてはそわそわと腕や肩をさすっている。

非常事態とはまた違う空気だ。剣を抜く必要はないだろうが、居心地がいいわけでもない。振り払うように大股で進み、奥で話しているエメルとリンに声をかける。

「騒がしいわね。なんかあったの」

「ああ、13班か。ちょうど良いところに来た。これから、アメリカ臨時政府の代表……デイヴと連絡をとる。おまえたちにも同席してほしい」

「……誰？」

「デイヴ……？ ……前アメリカ大統領、ミュラーの秘書官だったデイベッド・グレイフィスカ」

「ほら、去年の通信で大統領の隣にいた」とリンが補足してくれる。

そういえば、エメルとはまた別に、ジャック・ミュラー大統領の脇に誰かが控えていたような、いなかったような。

ミュラー大統領の顔は覚えているが、それ以外は画面越しに姿を見る以外に接点もなかったもので、いまいちピンとこない。

でも、とミナトが首を傾げた。

「詳しくは知らないけど、アメリカって去年、人竜ミツチの襲撃か何かで……消滅した、なんて聞いたよ。無事だったってこと？」

そうだ。忘れもしない、去年の竜災害の折り返し地点。五体目の竜を討伐し、けれど人竜ミツチが出現して、たくさんの犠牲が出てしまったあの時。

ミツチはアメリカがどうこうと口にして姿を消した。その後、帝竜スリーピーホロウを討伐して都庁に戻ってきたタイミングで、マキタが血相を変えて飛んできたのだ。

「アメリカが消滅した」。場の空気が地獄に叩き落とされたように重くなったのを覚えている。

半分正解といった様子でエメルは首肯した。

「アメリカは前大戦で国土の70%を消失し、人口の90%を失う甚大な被害を受けた。だがデイヴをはじめとする政府高官たちが、ワシントンの壊滅直前に生き残りの市民を連れ、空母で洋上に脱出して

な。今はロサンゼルスで、小規模ながら臨時政府を運営している」「そうだったんだ、よかった……消滅なんて聞いたから、てっきり、もう跡形もないのかと……」

「エメル総長！」

人一倍汗を流してシズカが声を裏返す。

壇上にいる彼女が指差した大型モニターは、暗闇と砂嵐の向こうにぼつりぼつりと色を映し始めていた。

エメルがよしと頷いて壇上へ駆ける。同席してほしいと言われたので自分たちも後に続いた。

「か、回線、つながります！」

ブツンと音を立て、画面が異国の部屋に切りかわる。

昨年見たホワイトハウスの一室と似た厳かな雰囲気、窓から差し込む斜陽、艶と年季のある重厚な木のデスク。

画面中央で手を組むのは、体格のよかったミユラー大統領と違い、荒地の木を思わせる細身の男。

頬がややこけているものの、過労や不健康といったふうには見えな  
い。むしろ碧い瞳に宿る眼光には、エメルと似通った鋭さを感じた。

『……無事のようなな、エメル女史』

「そちらもな、デイヴ」

『日本政府の方々……そしてエメル女史。会議をする機会を持って  
幸いだ。まずは、お互いの無事を神に感謝する』

男の低い声と少女の高い声。それぞれが流暢な英語を交わし始める。  
る。

うっ、と隣でミナトがうめいた。しわが刻まれるくらいに強く目を閉じて耳に意識を集中させているが、流れる汗が彼女のキャパシティが限界であることを告げている。

シズカをつつき、無言でパートナーを示して翻訳をするよう頼んだ。そちらは大丈夫かと目線で問われ、掌を向けて問題ないと示す。英語はわりかし慣れている方だ。研究で海外へ行くことも多いナツメの監視下で、研究員たちのカタカナの専門用語を聞き流して育った。通わされていた学校が教育に力を入れていたということもある。専門分野の討論会レベルでなければなんとなくわかる。

画面の中を見る限り、アメリカの拠点中枢にはドラゴンの牙は届いていないらしい。ひとまずは安心というように深呼吸し、エメルは改めて海の向こうの戦況を尋ねた。

「こちらは、まだ持ちこたえられる。……そっちはどうだ？」

『辛うじて侵攻を食い止めてはいるが……それも時間の問題だ。……だが、約束を違えはしない。我々アメリカは、日本への支援を正式に決定した。エメル女史の要望通り、「SECT11」<sup>セクトイレブン</sup>の44名はアメリカを発つて日本へと向かっている。あと数時間でそちらに到着する手筈だ』

「SECT11……？ 何だ、それは」

自分と同じように問題なく英会話を聞き取れていたリンだが、聞きなれない組織名に首を傾げる。

「おまえたちと似たようなものだ」とエメルはリン……を通り過ぎて、自分とミナトに視線を向けた。

「……アメリカ軍所属の、異能力者だけで組織された特殊部隊。いわば、アメリカのムラクモ機関だ」

「そいつらが援軍として来るってことか……！ だとしたら、かなりの戦力になるぞー！」

「ああ、まあ、海外にもいるか、異能力者」

「うん……でも」

ミナトと目を合わせる。

考えていることはたぶん一緒だ。リンの言う通り助かるが、ずいぶんと親切すぎる。

今年の戦いでほとんどの軍備を失い、エメルもない。自分たちと同じように竜災害を乗り越えたとはいえ、アメリカは2020年よりも厳しい状況にあるのではないか。なのに日本への援助を行うなんて。

やけくそになっているようには見えないから、何か考えがあるんだろうが……。

「協力感謝する、デイヴ。SECT11は前大戦で帝竜を倒した実績もある機関。対真竜戦においては、13班と並ぶ強力な戦力になるだろう。しかし……この状況だというのに、SECT11をそっくりこちらに派遣するとは思わなかったな」

エメルも同じく疑問を口にした。対して大統領の椅子に座るデイビッドは静かに笑い、余裕を崩すことはない。

『ふふ……水臭いことを言う。そもそも前大戦でSECT11を指揮していたのは、エメル女史、貴女では？』

「……そんなこともあったな」

『それに、真竜の居城は東京にある。前大戦通りならば、真竜を討てばすべての竜は消滅するのだろう。この状況を理解できないほど、私は愚かではないつもりだ』

「……その通りだ。懸命な判断、感謝するぞ」

帝竜は原則自分が作ったダンジョン<sup>巢</sup>より外には出ない。雑魚竜とマモノをやり過ぎして待つだけなら、戦力の要を送っても問題ないと判断したということか。

『……部隊が到着し次第、こちらからまた連絡をする。世界は今度こそ、手に入れるだろう。真の勝利を……』

モニター越しの青い目がムラクモ本部を眺める。

最後にはその双眸が自分たちを捉え、アメリカ代表の姿はかき消えた。

「通信、切れました……」

「はー、緊張した……！ すみません、教養なくて……」

助かりましたとシズカに礼を言いつつミナトが顔を隠す。翻訳がなければ話についていけなかっただろう。パートナーは耳まで赤くなり汗を流していた。

勉強が苦手というのは初耳だ。そこまで恥じるレベルなのだろうか。

「あんた、去年竜災害が起きた時は大学入学直前だったんでしょ。一番一般教養が頭に詰まってそうなタイミングだと思うけど」

「座学好きになれないの……私がしてきたのは試験に受かるための勉強で、全然身になるやり方じゃなかったし……去年の竜災害で全部頭からふつとんじやったよ」

「それでよく受験通ったわね。何大？」

「えーと、ほら、都内のあそこ……」

もごもごと歯切れ悪く口にされたのは、座学が苦手という割には意外な医大の名前だった。

医大はどこだろうが倍率も難易度も並より高いだろう。しっかりと学を積まなければ通用しない。

なるほど、今年に入ってから医務区で医療の勉強を始めたのもその延長か。

地球人でないエメル以外が感心して目を丸くする。

「すごいじゃないか。そんなに謙遜しなくてもいいのに」

「いえ、あの……たぶんほんとギリギリで滑り込めたんだと……ビリから数えた方が早いくらい……面接でも猫かぶってましたし……」  
「それでも合格できたのは実力ですよ！ お医者さんか看護師さんを  
目指されていたんですよね？ 外科とか内科とか、目指す分野は決め  
られていたんですか？」  
「……形成外科、とか……」

ほーへー、とリンとシズカが盛り上がる。ミナトは依然顔が赤いま  
ま、いたたまれないというように身を縮めていた。

アメリカとの会議から一転、今度はエメルが置いていかれる番に  
なった。今する話ではないだろうと幼女は鼻息を荒げて手を叩く。

「話がずれているぞ！ ……応援部隊の目処は立った。彼らの到着を  
待つて本格的な作戦を開始する。その間、自衛隊と13班は丸ノ内の  
実地調査を継続する。応援が合流するまで少しでも情報を集めるの  
だ。……いいな？」

「了解！」

リンの敬礼に続いて頷く。ミナトも顔の熱を冷ますように繰り返  
し頭を振った。

「頼んだぞ……！ では、各自散開！ 目標任務を達成しろ！」

\* \* \*

風が荒廃した都会をなであげ、埃臭さと一緒にフロワロの香りを運  
んできた。

町には血を振り撒いたように赤い毒花が咲き乱れている。スカイ  
タワーを覆う黒いフロワロではないものの、長居し続ければ体に異常



が起きるかもしれない。

自分たちのバイタルとフロワロの群生率、瘴気の濃度が視界の隅に表示される。ミロクが気合を入れるように息を吐いた。

『今回のミッションは異界化した丸ノ内の調査だ。自衛隊の一個師団がすでに潜入しているはずだ。無理せず、慎重に行こう。……あ、リン……ドウジマ陸将補から通信だ。つなぐぞ』

『13班！ 聞こえるか？ 今は駅周辺を索敵中だ。ここはまだ安全だから、先へと進んでくれ』

「了解。ドラゴン見つけたらすぐ呼んで」

「まだ奥の方まではマモノの討伐も進んでないので、気を付けてくださいね」

「お互いにな」と言われて通信が切れる。

今回の目的は探索によるダンジョンの分析。正直、帝竜がいるのなら今すぐにも突っ込んで討伐したいが、この体でどこまで戦えるのかはわからない。

逆サ都庁攻略の時も一か月かけて進めていたというし、討伐隊壊滅の轍を踏まないよう、石橋を叩いて進むべきだ。思う存分体を動かせないのでもやもやするが仕方ない。

ぼんやりと町を眺めるミナトに声をかける。

「入るわよ。何ぼーつとしてんの」

「……ねえ、シキちゃん」

「何」

「アメリカから応援の人たちが来てくれた時のためにさ、今から英語勉強しても遅いかな」

「あほ」

平手で後頭部を叩いてやれば小気味いい音が響いた。

えへへとミナトは笑い、やつと切り替えができたのか腕を広げて伸

びをする。

「今考えてもしようがないか！ 言葉が通じなくても目的は同じだもんね。そろそろキリノさんも起きてくるだろうし、翻訳ツールとか用意できないかお願いしてみよつと」

『ははっ、うん、キリノはここしばらくぐっすりだからな。もう少ししたら寝るのに飽きて起き上がってくるだろ。その時までにはネットの翻訳ツールとかいじって搭載してみるよ』

「よーし、それじゃあ駅に進も、」

う、までは言われなかった。

発音しようと口をすぼめたまま、ミナトは駅を見て固まっている。

「ちよつと、今度は何よ」

彼女の視線を追って駅を振り返る。同時に強い風が吹き、砂塵を巻き上げた。

かすむ視界の中に広がるのは、虹色のいばらに絡めとられている東京駅舎。その上空には複数の鉄の塊が浮かぶ。

おそらく自衛隊のヘリだ。人力では通れない場所があつたため、別経路からの探索に切り替えたのか。

プロペラの回転音と、細長い機体が一、二、三……。

そのさらに上、雲の中にもう一つ。

ヘリのような直線ではなく、岩塊のような鋭い凹凸の輪郭。

金属のモノトーンではなく、フロワロとよく似た暖色。

無機物のプロペラではなく、筋肉と骨の蠢きで脈動する一対の翼。

「あれって——！」

雑魚のワイバーンではない。もっと大きく圧倒的な影が、嵐となつて東京駅に舞い降りようとしている。

「ミナト！」

「うん！」

思考も迷いもなく、足は地を蹴り駆け出していた。

探索と整備が済んでいる駅入口を突っ切り、とにかく影が見えた方向へ突っ走る。

そこまで進まないうちに、駅全体が大きく揺れた。天井が軋んで頭に砂が降る。

『……!? おい、13班！ 巨大なドラゴン……いや、帝竜反応を検知

！ とんでもない反応だ！ カウンターが振り切れてる！』

そこら中から不規則に上がる、ビキビキという耳障りな音。遅れて広がり始める壁の亀裂。

ああ、覚えのある悲鳴だ。久しく忘れかけていた蹂躪の音。ズタズタに引き裂かれていく大地の声。

鉄筋や石が押し潰され、駅全体が悶えるように軋んでいる。根を張るいばらが土地の生命力を吸い取るように肥大化した。

「ミロク！ 帝竜の居場所わかる!？」

『ああ、場所は……、っ！』

視覚情報とエネミーリーダーにリアルタイムで地図が更新されていき、これでもかというほど目立つ赤丸が表示される。

帝竜であろう巨大な反応を確認して、ミロクが息を呑んだ。

『まずい……まずい、まずい！ 13班！ 走れ！』

焦りを表すようにキーボードを叩く音が無秩序になる。

まだ声変わりしていない少年ナビの喉が上擦っていき、耳を塞ぎた

くなる金切り声が最悪の事態を告げた。

『帝竜反応、 駅上空100メートル！ 自衛隊の進路の真上だ！』

\* \* \*

竜災害での最優先事項は真竜の討伐。その手がかりを探り、拠点付近の脅威を排除する意味でも、七体の帝竜の攻略は迅速に進めなければいけない。

そのためにまず必要なのは、帝竜の居城である異界の探索。13班なら単独で攻略可能だと昨年証明されてはいるけれど、それでは効率が悪いしシキとミナトに負担がかかりすぎる。

少しでも力になるために、自分たち自衛隊が丸の内攻略作戦の足がかりになるのだ。

駅上空、いばらと瓦礫によって無秩序に形成された空中の舞台に風が吹く。

ヘリの駆動音に負けないよう部下たちが「クリア！」と声を張り上げる。プロペラがかき混ぜる空気にあおられながら、リンは慎重に降り立った。

「よし……全員いるな？ ここから下層へ降りていく形で探索を再開するぞ」

「了解。しかし、今回の戦場もまためちやくちやだな」

マキタがナイフでいばらを小突く。返ってくるのはコンクリートとも金属とも違う、清濁が溶けあった音と感触。何の素材でできているのかは知らないが、建造物を破壊する硬度を持っているのは確かだろう。

リンは舞台の端へ進んで周囲を見回した。

「駅入口はあそこか……うん、ここなら定点カメラの設置にも適してるだろう」

ここは異界化した東京駅の中で最も高い場所だ。高層ビルには届かないものの、フロワロが繁茂した街並みを把握できる。丸ノ内一帯の情報を得るのには最適だ。

「隊長、観測用カメラ三台の設置、完了しました！」

「わかった。これから屋内に入っていく。危険な個体や進行困難な場所を発見したらすぐマッピングしてムラクモ本部に共有していくぞ」  
「了解！」

世の摂理や物理法則が捻じ曲がる異界にはいつまで経っても慣れないが、未知の危険地帯を探索する術は2020年の経験で嫌というほど身に付いた。隊は阿吽の呼吸で隊列を組み、慎重に駅舎内へ向けて進み始める。

「去年を思い出すつすね」とサスガが言った。

「去年は都庁がひっくり返ってたんすよねえ。いやーありやしんどかった。ドラゴンに会ったら逃げるしかないし、マモノもめっちゃくちゃ弾撃ち込まなきゃ倒れてくんないし、オレたちすぐにばてちまうて」

「さすがに一か月はかからないだろうが、今回も難しそうだな。幸いこの最上層にはドラゴンもマモノもいなかったが、屋内にはたぶんわんさかいるぞ……」

サスガとカマチの会話を聞いて、リンは踏み出そうとしていた足を止める。目ざとくマキタが振り返った。

「隊長、どうした？」

「……いや……そうだ、ここにはマモノがいない……」

部下たちが確認したので問題はないだろうが、なぜか嫌な予感がぬぐえない。リンは反転して舞台を見回す。

「ここも帝竜の巣の一部であることには変わりないのに、なんで一匹もマモノがいないんだ？」

「なんでってそりゃあ……あー……？」

反射で口を開いたマキタも首をひねった。

ムラクモのようなマモノの専門家ではないのだ、習性も何も知らない自分たちでは考察もままならない。

考えるだけ無駄かと思考を打ち切ろうとしたとき、ざっ、と周囲を闇が覆った。

「!?!」

ほぼ無意識で銃を持ち上げ、直感のまま銃口を頭上へ向ける。

そのまま引き金に指をかければ寸分狂わず弾は標的を捉えるだろう。

けれど、

「な、なんだ……!?!」

重い。銃も体も、肌に触れる空気さえもすべてが重い。たった指一本を動かすことすら無理難題に思えてしまうほどの重圧が足を地面に縫い付ける。

フロワロが火の粉に似た瘴気を放つ。銃を向ける先、遙か上空に闇が集まり、繭のように形を成した。

この舞台にマモノがいない理由が分かった。考える必要などなかったじゃないか。

マキタが後退りつつ、途切れた言葉を続ける。

「そりゃあ、あれがいたからだろうな——！」

鼓膜が痛むほどの破裂音が響く。

暗雲が産み落とした渦巻く繭を破り、それは巨大な翼を宙に広げた。

燃えるような紅の表皮。目の冴えるターコイズの皮膜。戦車でさえ軽くすり潰してしまうだろう、巨樹のような手足。

「ドラゴンだ……それも、とんでもなくデケエ……」

「十中八九、帝竜だろうな。……全員聞こえるか!! こつちに戻ってくるな、今すぐ駅からの離脱準備を始めろ！」

振り向かずに背後に指示を飛ばす。こちら側に戻りかけていた部下たちは一瞬だけ逡巡し、身をひるがえして駅舎に戻っていく。

赤い帝竜は駅全体を揺らして舞台に着地し、巨体を持ち上げた。雷鳴もかすむ咆哮がビリビリと空気を引き裂いていく。

相対するのはリン、マキタ、サスガ、カマチの四人。示し合わせずとも足は開き腰は落とされ、いつでも動ける体勢をとる。

「大将、どうする!?!」

マキタに答えるより先に耳の中で通信機が暴れた。エメルの甲高い声が響く。

『コール、堂島陸将補! すぐにそこから撤退しろ!!』

「言われるまでもない! 撤退だ! サスガ、カマチ、誘導を頼む!」  
「任せろ!」

「了解!」

「撤退完了まで対竜グレネードで煙幕を張る! マキタは補佐を!」

「おう、準備はできてるぜ！」

目的を見誤るな。自衛隊の戦いは、帝竜を倒すことじゃない。守ること、生き抜くこと、命を取りこぼさないこと。そのために、全力で立ち向かえ。

「逃げ切るまで持つてくれよ……砲撃、開始！」

銃口から一斉に弾が飛び出し、一帯が白い煙幕に包まれる。

東京駅の空中舞台で、帝竜にとっては取るに足らない殺戮が、人間にとっては全身全霊の抗戦が始まった。



\*

急げ、急げ。と頭の中で警鐘が鳴り響く。

目指すのは帝竜の反応が確認された場所。そこにこの異界の主と、そいつと対峙する自衛隊がいる。

リンたちは信頼できる仲間だ。彼女たちが何を思い、どれだけの覚悟で前線に出るのかを、自分たちは去年の戦いで知っている。けれど、雑魚竜ではなく帝竜が立ちはだかった場合、脳内で再生されるのは理不尽な暴力と血の海なのだ。

間に合え、もう少し粘れ。すぐに駆け付けるから。

早く帝竜のもとへ、自衛隊のもとへ辿り着かなければ。

足は踏み出すたびに速さを増していく。そうして息を切らして階段を駆け上がったところで、視界に飛び込んできた影と衝突しそうになった。

素早く構えると、影はぎやあと情けない悲鳴を上げて飛び退く。

「あんた、自衛隊の……」

「あ、と、トネリって言います！…じじじゅ13班の方ですね!」

自衛隊の新人隊員は汗と涙を浮かべて脱力した。何があつたかを尋ねる前に顔を上げ、すがる眼差しで自分たちを見上げてくる。

「ドラゴンが……ドラゴンが！ みんなが早く逃げろって……でも、僕だけ逃げるだなんて……そんなの……できないよ!」

『シキ、ミナト！ 自衛隊が帝竜と接触、撤退開始した！ 堂島陸将補が時間を稼いでるけど……このままじゃ……急いで救援に行ってくれ!』

「了解！ トネリさん、帝竜はこの先にいるんですね？」

「はい！ お願いします、隊長たちを助けて——」

『待て！』

エメルが制止をかけた。

『この反応……この強さでは……今の13班に勝ち目はあるまい』

「……だったら何」

時間がないため先を促す。

ムラクモの最高顧問は冷静に、淡々と命令を口にした。

『……自衛隊は諦める。13班は一旦、退却だ』

目の前でトネリ隊員が絶句する。開かれた瞳孔が発言者の正気を疑っていた。

シキは通信機に指を当て、彼の代理としてエメルに問う。

「……本気？」

『ああ』

「ずいぶんあっさり言うわね」

『おまえたちを失うわけにはいかない』

「あんたは私たちがドラゴンに負けると思ってるのね？」

『信用していないわけではない。だが今は駄目だ、万が一があってはならない。真竜を討てるのはおまえたちしかない。私はキリノの代理として、おまえたちをフォーマルハウトのもとまで導く』

『必要な選択だ。13班、退却しろ』

なるほど、必要以上に怖気づいているというわけではないらしい。

部下の命を預かる司令官としては妥当な判断かもしれない。

アイテルやエメルが揃って求めていた「狩る者」。星に選ばれた戦

士。その存在がなければ竜は倒せないという。

狩る者に当てはまる自分とミナトは、何を犠牲にしても守るべき戦力。それを必要な時まで保持するためなら、他は切り捨てても構わないと。

否。

「論外、却下！」

「トネリさん、他の方たちと一緒にそのまま撤退を！」

『な——』

帝竜の居場所目指して躊躇なく駆け出した。エメルが息を呑むが知ったことではない。

通信機の向こうからエメルとミロクの言い争いが響いてくる。

『おい、待て！ 退却だと言っているだろう！』

『そんなことできるわけないだろ！ 13班、そこ上がって右だ！』

『おまえも誘導するんじゃない！ わからないわけではないだろう、今のおまえたちでは無理だ！』

「無理って言われると余計さからいたくなるわね。自衛隊を捨て石にするなんて選択肢ハナからないわよ」

「今ここでリンさんたちを見捨てれば、どんな意味でも絶対に後悔します！ 帝竜に勝てなくても、撤退を支援するぐらいならできる、はず！」

『エメル総長、聞こえてるだろ？ 自衛隊は見捨てられない……再考を！』

マモノを片付け、邪魔な石を蹴飛ばし、発見した生存者をすれ違う自衛隊員に任せる。

絶え間なく響く声と音と鼓動に混ざり、ふっとため息が聞こえた。

『……仕方がない。おまえたちの意思を尊重しよう。自衛隊の救出を最

優先目標に変更！ 時間との勝負だ、急げよ』

『よし！ もう時間がない！ 急ごう、13班！ 交戦地点はこの先だ。注意して進んでくれ！』

「了解。もう着くよー！」

「見えた、あそこね……！」

プラットホームに出る。ウエハースのようにバラバラに砕かれた瓦礫が道を成し、数十メートル先の駅舎屋上へと続いている。

ここまでくればマモノはいない。この先は変貌した東京駅の主、帝竜の巣だ。

雷鳴も霞む咆哮が轟く。同時に破壊の音が響き渡り、飛び散るコンクリート片とよろめく人影が見えた。

「やばいぞ、大将！ 擲弾、残り五発！」

「撤退状況は！」

「負傷者の収容に手間取ってるらしい！ まだ安全圏には達してない！」

「くっ……なんとか、全員無事に……っ！」

「13班現着！」

リンたちの間を走り抜けて前に出る。

全員疲労で息を切らしているが、大きな傷はないようだ。汗にまみれ強張っていた顔がほんの少しだけ緩む。

「13班!? 救援、感謝する！ こっちはもう弾が……っ！」

「いいから、撤退急いで！」

素早く踵を向けて自衛隊の4人が駆けていく。

逆サ都庁とは対照的な青空の下の舞台。薄れる煙幕を振り払い、帝竜の巨体が露わになる。視界の中のメーターが振り切れ、**“DANGER”** **“WARNING”** とアラートが入り乱れる。ミロクやエメ

ルが言う通り、一筋縄ではいかなさそうだ。

『わかっているな、13班……その帝竜は今のおまえたちの手には負えん！ 倒そうなどと考えるな！ 時間を稼ぐことだけに集中するのだ！』

「わかってるわよ。腹立つけどね」

去年ウオークライと遭遇した時とは違う。彼我の実力の予測ぐらいはできる。

故に、雷に打たれたと錯覚するほどの威圧感に肌が悲鳴を上げた。

「……シキちゃん」

「スカイタワーの時と比べればマシ。やるわよ」

「うん、サポートも妨害も得意だもん、任せて！」

ミナトの力強い返事に背を支えられ、真正面から相手に対峙する。自分たちの戦意を汲んだように、視覚支援で情報が更新されていく。身体の造りやエネルギーの反応パターンがウオークライに似ていること、そこから強力なブレスを吐いてくるだろうこと、2020年の帝竜たちと比べても純粋な「力」が飛び抜けていること……。

ただでさえおびただしいほど繁茂していたフロワロが、燃え上がるように花開く。一斉に放たれた瘴気が空気を赤く染め、異界を支配する王をたたえた。

その個体識別名称、「ティアマツト」。

恐れ知らずにも原初の女神の名を冠するドラゴンは、宣戦布告のように天に向かって吼えた。

「いずれ倒す相手、時間稼ぎついでに手の内を探る！ 援護頼んだ！」  
「了解！」

舞台を走る。拳で戦っていたときは威力を出すためにその場で踏

ん張っていたが、今は足を止めない。

相手の腕が届くギリギリの距離で進路を変え、死角である脇へ。

昨年、一直線にウオークライに斬りかかったであろうガトウの背を  
追ひ、剣に手をかけた。

(まずは足！)

「——っせえ!!」

駆ける勢いそのまま斬りつける。半月を描く天叢雲剣は確かに帝竜  
の片足を捉えた。

けれど、得られたのは振りぬいた右腕のしびれのみ。

ギ、と耳障りな金属音の直後、イイインと鋭い響きで天叢雲剣が震  
える。金の剣とティアマトの甲殻は互いに押し負けることはなく、  
故に互いに弾き合った。

剣身が陽光を反射して目を射る。もっと丁重に扱えと怒っている  
みたいだ。

「うるっさいわね、実戦であんたを使い始めてからひと月しか経って  
ないのよ！」

ひと月もあって何をしていたと文句が飛んだような気がしたが、  
きつと空耳だろう。

斬りたかったのは柔らかそうな白い表皮部分だ。だが狙いがずれ  
て、剣の切っ先よりも柄に近い刃が、帝竜の鎧である赤い部分に当  
たってしまった。

長物での戦闘は常にゼロ距離だった格闘とは勝手が違う。もっと  
間合いを考えなければ——

「シキちゃん！ 警戒！」

注意を促すように冷気が乱舞する。振り下ろされようとしていた

ティアマトの腕の関節が凍りつき、生まれた隙で射程外まで飛び退いた。

「大丈夫？　今ので手首ひねった？」

「問題ない」

ミナトから見てもさっきの一閃はハズレだったらしい。タイミングも正確さも欠けた一撃など、帝竜は痛くもかゆくもなかっただろう。

一矢報いることもできないなんて歯痒くて仕方ない。フォーマルハウトを前に膝をついてしまった時を思い出す。

（……落ち着け。今すべきことは撤退の支援。倒すんじゃないで足止めするだけ）

自分たちはしんがりだと自身の胸中に刻み込む。

戦場に立つのが自分一人だけなら好きならだけ暴れさせてもらうが、これは撤退戦だ。後ろには守るべき自衛隊、横にはパートナー。勝負の賭け金として盤上にいるのが自分だけではないことを忘れるな。

波立つ気持ちを鎮め、剣を握り直した。

去年、ほんの少しだけあいつから受けたレクチャーを思い出す。親指は中指に付け、人差し指は鏢に添えて。

（構えるときは力みすぎず、腰も足もそこまで曲げない。低くしすぎたらいざつてときに出遅れる）

大丈夫、ちゃんと覚えている。

勝利条件は死人を出さず、生還すること。適するのは攻勢ではなく守勢。なら、

「ミナト、とにかく範囲攻撃で攻めて。あんたはあいつの意識が自衛

隊にいかないように、私はあいつの意識があんたにいかないように動く」

「わかった。……気を付けてね」

後ろでミナトが息を吸った。導かれるようにしてマナが渦を巻き、火炎が幕となって自分たちと帝竜を舞台の中に閉じ込める。

熱気に背を押され、視界に捉えやすいよう真正面から飛び込んだ。無意識にカウンターの構えを取りそうになる体を叱りつけ、剣に意識を集中させる。場合によっては昨年のような格闘も使うとムラクモ試験でミロクに宣言したが、今はその時じゃない。

あの重量の一部をまともに受けてみる、せっかく回復してきた体がまた使い物にならなくなる。

ここで求められるのは、とにかく帝竜の意識を自分に向けさせること。そして後ろにいるリンたちにまで届くような範囲技を使わせないような立ち回り。

(さつき足を狙ったのは悪手だった。少しでも体勢を崩したらバランスを取るために翼を使って飛ぶかもしれない)

相手の射程内で跳び回れ、できるだけ派手に。視認しやすい距離と鈍さで。そうすれば、

『シキ、帝竜が右足踏み出してくるぞ!』

「シキちゃん、今度は左上!」

帝竜は自身の手足で害虫を潰せると思うし、潰そうと動くだろう。そうして持ち上げられた足や腕が届く直前、全力で加速する。ミサイルの弾頭のような爪が容易く地面を抉るが、自分の体には触れられない。

避けた後はまたのろのろと漂う。ティアマットが捉えようと動いたら再び飛び出す。



捕まえられそうなのに捕まえられない。さぞやもどかしくて戸惑うだろう。

飽きが来ないように不規則に動いて時間を稼ぐ。その間に離れた場所ではパートナーが着々とマナを練り上げていた。

「……よし！ シキちゃん、大技いくよ！」

「狙うなら翼にして！ 飛ばれちゃ困る！」

「了解！」

空が曇る。いや、空と地上の間を薄い膜が隔てている。人為的に生成された霜の天蓋が、舞台の中央を覆う。

「目眩ましに範囲攻撃なら……私の十八番！」

得意技である氷の属性を惜しみなく放出させ、サイキックは天に向けていた指先を振り下ろした。

氷が収束して帝竜に降り注ぐ。あられなんてかわいいものじゃない、武骨な氷槍を弾としたガトリング砲だ。冷気を放つ人間大程度の氷塊が殺到し、刺突と粉碎の音が何重にも重なって舞台を揺るがす。氷同士がぶつかって砕けても問題ない。無限に細かく散るそれはダイヤモンドダストとなって舞台全体に立ち込め、煙幕として機能する。

赤い帝竜は絶対零度の豪雨を浴び、ついには薄青に呑みこまれて消えた。

「ごめん！ 翼っていうか全体になっちゃった！」

「これだけできんなら上出来！ リン！」

構えは解かずに後ろに呼びかける。

ほんの少しの間を置いて、自衛隊隊長が「よし！」と声を張り上げた。

「丸の内庁舎に入っていた隊員全員の撤退が完了した！ あとはあたしたちだけだ！」

『今だ！ 13班、堂島陸将補、撤退を！ 足場が崩れるぞ、急げ！』

緊張が最高潮に達したサスガがぎゃーつと叫んで走り出す。カマチ、マキタ、リンもそれに続き、舞台の中央で膨張していく帝竜の気配を肌で感じながらシキとミナトも踵を返した。

一分にも満たないわずかな間に橋を駆け抜ける。直後、火山の噴火もなまやさしく思えるほどの咆哮が響いた。

ティアマツトの姿はもう見えないから十分に距離は離れたはず。なのにその距離を越えて衝撃波が届き、背中をぶん殴られてプラットフォームに転がり込んだ。

「はあ……はあ……はあ……はあ……ここまで来れば……。ま、マキタ、いるか？」

「ああ、いる」

「カマチとサスガは？」

「います、無事です……」

「い、命からがらって感じっすけど」

「逃げ切った、か……？」

「ミナト、生きてる？」

「……調子乗って、マナ使いすぎた……もう立てない……」

リンたちがのろのろと点呼をする横で、シキは地面と同化するように伸びているミナトをつついた。擦り切れそうな返答だが、マナ切れだけなら休息を取ればまた動けるようになるはずだ。

自衛隊も13班も、誰も大きな傷は負っていない。あーつと全員が情けない声で脱力した。

「た……すかった……13班。……ありがとう」

「お互い様。駅の探索してもらってるしね」

「みなさん無事で、よかったです……」

『負傷者は多数だけど、殉職者はゼロだ。よかった……』

ミロクのアナウンスを聞き、改めて息を吐く。

ティアマツトには傷ひとつ付けられず、厳しい見方をすれば尻尾を巻いて逃げたことになるが……昨年と比べれば「帝竜相手に犠牲を出さずに情報を得られた」という大きな成果だ。ひとまずここは喜んでいいだろう。

遠隔で戦闘を見守っていたエメルがまったく、とため息をつく。心なしか安堵したような声音だった。

『……肝が冷えたぞ。結果的に犠牲がなかったのはいいことだが。13班、それに堂島陸将補。一度情報を整理する。帰投次第、ムラクモ本部に来てくれ』

「え、帰投次第……？ 私たちへろへろなんですけど……」

『最低限の作戦会議は済ませておくべきだ。もちろん休息は重要だが、現地で帝竜と相対したおまえたちからの情報は必要不可欠。迅速に報告を行うように』

「……ぐう」

「ちよつと、諦めて寝るな！ ああもうっ」

さっきの大技で予想以上のマナを消費したみたいだ、ミナトは埃にまみれたまま安らかに目を閉じた。

叩き起こそうかと思っただが、彼女の額には尋常じゃない量の汗が流れている。立てないというのは冗談じゃないだろう。しかたないので脱出キットでゲートを生成し、ミナトを引きずって議事堂へ帰還する。

待機していた衛生兵に誘導され、フロワ口瘴気の付着した全身を洗浄してムラクモ本部に戻る。部屋には出発前と同じ面子が揃っていて、エメルがシズ力を伴い進み出てきた。

「帰還したな。それではさっそく——」

「13班!」

「シキ! ミナト!」

「うわっ」

口火を切ろうとしたエメルを脇から追い抜き、ミロクとミイナが弾丸になって飛び込んでくる。ミナトの体を支えているところに小さな体が突撃してきて危うく転びそうになった。

「怪我とかしてないよな? 大丈夫だよな!」

「無事でよかったです。シキとミナトにまで何かあつたら、もう、もう……」

「全員無事であることはおまえたちがバイタルデータで確認しているだろう。これから情報共有だ、13班から離れる」

動揺をたしなめるエメルに「そういうことじゃない!」とナビが抗議する。

不満気に自分たちを放そうとしない双子にため息をつくも、話す分には問題ないと判断したのか、エメルはこちらに向き直った。

「皆、ご苦労だった。しかし……このタイミングで帝竜が現れるとは……」

口ぶりからして、昨年アメリカでは1体目の帝竜との戦いまでそれなりに時間がかかっていたのかもしれない。ムラクモと自衛隊の共同作戦でも逆サ都庁の攻略には数十日かかっている。

しかし今回は様々な段階をすっ飛ばしていきなり本命が現れた。討伐目標の帝竜が確認できたことは大きな成果だとシズカがフオローを入れるが、こちらはまだ討伐のための準備が追い付いていない。分析に加えて攻略作戦の見直しが必要になるだろう。

「13班、帝竜との戦闘、おまえたちの感触としてはどうだった」  
「雰囲気としてはウォークライやゼロブルーに近いと思います。ドラゴンらしいドラゴンというか、力押しで全部捻じ伏せる感じ。……私がまだ力を出し切れてないっていうのもあるけど、撤退前の最後の攻撃、たぶんほぼ通じてなかった……」

ミナトが自虐的に目を伏せる。マナ水で精気を潤したため立てるまでには回復したが、漏らされた笑い声は渴いていた。

印象としては自分も同じだ。あの帝竜は純粋に力が飛び抜けている。創作や神話に登場する世界樹のように、ただそこに在るだけすべての上に立つ。どこにしようかと存在を意識せざるを得ない絶対の芯。

数十分前に剣を振りぬいた右手を見下ろす。帝竜を直接殴ってやりたい衝動を堪えて率直な感想を述べる。

「硬い。強い。ロアIIアールアとかスリーピーホロウみたいな搦め手は使わないかもしれないけど、反対に私たちが小細工しても通用するかはわからない。やるとしたら純粋な殴り合い。火力勝負になるわね、あれ」

「殴り合い……単純だが想像がつかないな……」

自分が生きることが信じられないとでもいうようにリンが自身の胸に手を置く。彼女を労うシズカも、モニター越しに帝竜を見たのか、同様に生気が削げ落ちていた。

「丸ノ内の帝竜……識別名称『ティアマツト』か。とんでもない強さだったな……」

「……はい。一年前の帝竜たちと比較しても、一、二を争うレベルだという分析です……」

「そんな相手、どうやって倒せば……」

竜に現代の銃火器は通用しない。有力候補の狩る者13班は体の回復と能力開発が進んでいない。

いつそティアマトの攻略は後回しに……いや、フロワロが町中に広がり続けているから第一の攻略対象となったのだ。放置は間違いない。悪手。

誰も言葉を発さずに黙り込む。諦めではなく思案の沈黙だ。けれど出口が見つからずに空気は停滞していく。

「……」

一歩進んで二歩下がる雰囲気。苛立ちが降り積もる。

自分たちは確実に竜を倒すために地道な探索を繰り返し、敵前逃亡さえしたのだ。なのにこの雰囲気は何だ。壁にぶち当たるどころか八方ふさがり、完全に燃料が切れている。これじゃどこにも行けやしない。

握り拳を見つめて2020年を振り返る。あの時の自分は何を考えてウオークライを殺すことができたのだったか。

……そうだ、資源がなく、どこもすり切れた苦しい状況で、死ぬ寸前ではあったが13班は逆サ都庁の攻略を成し遂げられたじゃないか。

いける。やれる。調子が悪かろうが苦戦しようが、13班ならドラゴンに殺せる。

ドクンと体が脈打つ。暴れる鼓動が脳の思考を上書きしていく。殺せ。剣が通じないなら使い慣れた拳を突き入れろ。この手なら、心臓を直接握りつぶして抉り出すことだってできる。

ならこのまま突っ込んだって――

(シキちゃん)

自分にしか聞こえない小さな囁きで我に返る。

「っ」

クロウを着けた白い手が拳を包んでいた。その指にほぐされ、血の気が失せて蒼白になっていた手から力が抜ける。

爪が食い込んで血が滲んでいる肉を治癒術の光が癒す。ようやく視線を上げると、眉を下げたミナトの顔がすぐそこにあった。

「シキちゃん。……大丈夫？」

「……ああ、別に」

平気、と手を下げて息を吸う。ミナトは安堵の息をついて、両手で自分の手を握った。

血の流れが速度を落として頭が冷える。今度は空いている片手を軽く握りこんで自分の額を小突いた。

(バカ、去年の攻略は犠牲が多すぎたでしょうが)

結成されたばかりの13班が帝竜と対決することになったきつかけ、討伐部隊の壊滅。構成員だった自衛隊員は過半数が命を落とし、ムラクモはナガレを亡くした。

忘れるな。地下シエルターから都庁へ拠点を移す際、壁や床、天井に血痕が飛び散っていたのをさんざん見ただろう。ひび割れた屋上で、ナガレが倒れていた場所を自分とガトウで掃除しただろう。

青い空の下、モップとたわしで彼の名残りを何度も拭いた。こびりついた人型の染みの上で腕を上下させるたび、言い知れない息苦しさが生まれた。

ガトウが「この姿勢はキツイ」と何度か立ち上がったっては腰を叩いて、なんとか屋上から戦いの爪痕を拭い去って……それから、居住区からガラスのコップを持ってきて、水とそこらへんでつんだ花を入れて。

どこから調達したのか、傷だらけのガトウの手にはワンカップの焼

耐が二つ。瓶と瓶を当てて、チン、という音が風に乗って飛んでいった。

『墓も建てられなくて悪いな、ナガレ。全部片付いたらきちんと寺に骨持っていくからよ。ほれ、乾杯』

『昼間から酒飲まないでよ』

『けちけちすんな。……おう、シキ』

『何』

『東京からちよつと離れてんだが、臥藤家が代々使ってる墓があつてな——』

『バーカ』

『な、おまえ、馬鹿とは何だ！ まだ最後まで言つてねえだろうが！』  
『バカでしょ。自分が死んだらなんてくだらないこと話すキャラじゃないくせに。ナガレが弱気になるなつてたしなめてくるのが目に見えるわ』

『……』

『私に骨拾ってもらいたいなら、老衰以外で死なないこと。じやなきや線香も上げてやんないから』

『……生意気だなあ、相変わらず』

ナガレもガトウも、それ以外の者も、個人が識別できる骨はそれぞれ瓶に詰めて議事堂の一室に保管されている。

東京はまだ、墓地や寺院の修理・清掃が済んでいない。毒花だらけになった地球の地面に埋めるのは供養にはならないだろう。

体温が消えて肉塊になった死体を拾うのも、それを山のように積んで一度に火葬するのももうごめんだ。

横で自分の手を握るパートナーが、アオイを亡くした時のように冷たい体に縋りついて慟哭どうこくするのも、もう二度とごめんだ。

「犠牲は出さない」

「え？」



口からこぼれていた声を全員が拾った。視線が集中する。

「わかっていると思うけど、玉砕覚悟で突っ込むなんて作戦はごめんだから。最初の帝竜でバタバタ死人が出るなんてやってらんない。力不足だろうが鈍かろうが、捨て石も犠牲も出さずにあいつを倒す」

「捨て石」を強調してエメルに向かい合う。駅でのやりとりを思い出し、ぼつが悪そうに彼女は口をすぼめて腕を組んだ。

「今からおまえたちの治療やスキル開発に集中するとしても、間に合わないのはわかるだろう。時間制限付きの攻略作戦だ。決定的な何かがあれば、あの帝竜を倒すことは——」

「それは俺たちに任せてもらおうか」

聞きなれない声……聞きなれないけれど、どこか覚えのある声が響く。

扉が大きく開いて注目を集める。黒いアーマーで全身を固めた、一目で軍属とわかる集団が入ってきた。

肌の色、目の色、髪の色、いずれも日本とは違う空気をまとった闘入者にぎわめきが広がる。

「な、なんだ、おまえたちは!?!」

議事堂防衛の頭であるリンが真っ先に声を荒げた。見慣れない武装集団が拠点の中枢に踏み入ってきたのだ、非常事態時同様の焦りが顔に浮かぶ。

しかし集団は咎める声に耳を貸さず、我が物顔で緑の絨毯を踏みならし、左右に開いて敬礼を作った。

その中央を堂々と歩いてきたのは、思い出したくなかったライムグ



「ねえ、シキちゃん」

エメルとシヨウジが互いの近況を報告しあう傍ら、ミナトが小さく袖を引つ張つてきた。

「……あの人たち、敵じゃない、よね？」

疑問とほんの少しの恐れを含んだ言葉だった。SECT11が怖いのではなく、これから嫌なことが起きるのではないかと恐れる声。こいつらはファーストコンタクトからして最悪だったが、仮にも同じ人間同士、協力者としてアメリカから派遣されてきた戦力だ。竜災害下という非常時に、同じ人間に害を及ぼすなんてことはしないだろう。

ミナトが心配しているのはまた別のこと。そして自分も抱いている嫌な予感。

「敵ではないでしょうね。敵では。ただ、」

断言できる。こいつらはあてにできない。

にこやかに対話しつつも、シヨウジはエメルの言葉に一度も頷いていない。

何も気付いていない様子のエメルは「これで戦力が揃った」と満足げに頷いた。

「SECT11には着任早々悪いが、丸ノ内攻略に向けた作戦会議を始めたい。さっそく——」

「あー……悪いけど、」

勢いに乗ったムラクモ最高顧問の弁が途切れる。シヨウジが苦笑いで挙手したためだ。

「俺らはそれには参加できねえな」

「なに？」

「ハハッ……おつかしい！ ミュラー元大統領の右腕……氷の女参謀、エメル女史も日本じゃすつかり平和ボケしちゃうのね」

「……どういうことだ？」

雲行きの怪しさに眉を寄せるエメル。対して笑い声を上げたイズミは、背の高さ、自らがまとう棘をアピールするように胸を張る。

「……あたしたちはアンタの指揮下に入ったわけじゃない。SECT 11のボスは、ショウジ・サクラバだ。こっちはこっちで動かせてもらおう」

「何だと……？」

言葉通り、こちらの指揮下に入る気は微塵もないらしい。ショウジは背後の部下たちを振り返り、本来であればエメルが下すはずだった号令を口にした。

「SECT 11は、これより第一次東京攻略作戦を実行に移す！ 目標地点は丸ノ内一丁目！ さあ……戦場を楽しもうぜ！」

『イエッサー!!』

ああ、やっぱりか。

シチュエーションは違えど、去年も似たようなことがあった。ただ今回はより性質が悪い。

海を越えて助勢に来てくれたはずが、彼らはムラクモの拠点での真ん中で、堂々と単独行動を宣言したのだ。

さっそくぼろが出始めたドラゴン戦線に、ここ一番のため息が出

た。

「そんなことは認められん！ 過信は身を滅ぼすぞ！」

今にも部屋から出ていきそうな彼らにエメルが待ったをかける。

対してSECT11のリーダー格であるサクラバ兄妹は余裕綽々の笑みのまま、まさかと肩をすくめた。

「データ通り、あの帝竜は強い。そのへんのドラゴンなんて比じゃない。だからこそ……足手まといがいられちゃ困る」

「そーゆーこと。仲良しごっこでできる余裕はないの。こっちでなんとかするから、アンタたちは隅で震えて待ってなさい」

聞き捨てならない言葉に言い返すよりも先に、リンが一步前に出る。

ティアマツト相手に撤退で精一杯だったことを突かれたようで悔しかったのかもしれない。その頬は淡く紅潮していた。

「言わせておけば……！ おまえらだけで帝竜を倒せるつもりか!？」

「ま、うまくやるさ。文句言うなら結果見てからにしてほしいね。J SDFのカワイコちゃん」

いきりたつリンにショウジが宥めるように片目を閉じた。

女性ということで気を利かせたのかもしれないが、敬意は一切感じられない。同じ土俵に立つ者として見られていないのは明らかで、ちやらかした言葉選びに自衛隊の面々が青筋を浮かべた。

再三の説得にも耳を貸さず、SECT11はさっさと退室していく。

台風一過のように静まり返った部屋の中で、エメルの歯軋りだけが嫌に響いた。

「これでは戦力増強した意味がない……！ 13班！ 堂島陸将補！  
SECT11に続け！ 奴らに好き勝手をさせるな！」  
「ちよつと待つてよ、このまま突っ込めつてこと？」

帝竜と接触し、議事堂に帰還してからまだ一時間程度。具体的な対抗策はなく、自衛隊は負傷者多数。実質こちらは出発前より消耗しただけだ。

SECT11の独断専行は予想外だが、この状態でまた帝竜に突撃するなんて自殺行為である。

今度こそ死人が出かねないと物申す。しかしエメルはだからこそだと主張した。

「SECT11はおまえたちと同じく、昨年の戦いですべての帝竜を倒した貴重な戦力だ。それを失うことは考えられん」

「私はいないほうが清々するけどね」

「シキちゃん、それは言っちゃダメ……」

「とにかく、彼らの独断を許すな。一刻も早く追いつけ！」

幼女らしい柔肌に不釣り合いに刻まれたシワが問答無用だと語る。ムラクモ本部から蹴り飛ばされる勢いで追い出された。

あの様子では説得しても無駄だろう。数時間前まで冷静に指示を飛ばしていたエメルはどこへ行ったのか。

「はあ……面倒だけど、やるしかないわね。ミナト、いける？」

「ううう、いけるけど休ませてー……」

休息を訴えるパートナーを引きずり、とんぼ返りで東京駅へ戻る。通信機からはあちこちに指示を出すエメルと、観測データをぶつぶつ読みあげるミロクの声が流れていた。続いて聞こえてくるのは「帝竜のデータどこ!?」だの「こつちに回せ！」だの煩雑な会話ばかり。ムラクモ本部も行き当たりばつたりの展開についていけないの

だろう。今まで問題なく發揮できていた連携は見る影もない。

「ミロク、そつち大丈夫なの?」

『だ、大丈夫なはずだ! 伊達におまえたちのサポートしてきたわけじゃないよ、任せてくれ。それより……どうやらSECT11はかなり先に進んじまってるみたいだ。俺たちも、先を急ごう!』

視界のマップには固まって行動している生体反応が多数。SECT11の面々だろう。確かに進行が速い。餌場を見つけたようにモノやドラゴンの反応が群がっていくが、数分もしないうちに次々と消えていく。

異界化した駅の中で見られるのは、ツインホーンドラグをはじめサラマンドラやエンシエンタス。帝竜には遠く及ばないが吹けば飛ぶような雑魚でもない。

そんな敵を掃除でもするように片付けていく手際。そしてきれいにDZがくり抜かれた死骸。ドラゴンとの戦いに慣れているのは間違いない。

「これさ、すでに回収されちゃったDZって……」

「譲ってくれるなんてことはないんじゃない。つたく、ただでさえ資材不足だっというのに」

打ち捨てられた死骸を辿り、血と硝煙の臭いがこもる駅舎を進んでいく。

まだ狩られてないドラゴンを探そうと歩を早めた矢先、前方、通路の奥にばらばらと人影が踊った。

『あれは……SECT11だ!』

ドラゴンも、とミロクが付け加える。

牙を剥き、捕食の宣言でもするようにドラゴンが吠える。

天井に届く巨体に対し、先頭に立つ男女は不敵に笑ってみせた。

「イズミ！」

「オツケー！——ハッ！」

銃を構えつつショウジが妹を呼ぶ。

シユラツと鋭い音を鳴らして抜刀し、イズミは鮮やかな刃を縦一文字に振り下ろした。

天叢雲剣よりもずっと薄い紅の曲刀。女でも振りやすそうなフォルムは花弁のような軽ささえ感じさせるが、刃は竜の肉を水のように斬り払う。

脅威にもならなかった相手を見下し、イズミは自慢げにショウジを振り返った。

「どう？ この程度なら全然余裕！」

「よし、まだイケるな。おまえたち、ここは任せた！ 俺たちは先行する！」

「オーライ、ショウジ！」

気軽に交わされるあいさつに、クラッカーでも鳴らすように発砲する兵士。異界の環境下だというのに曇りひとつない笑顔。

ダンスパーティー感覚で戦いを楽しむ部下にショウジは笑い……ちらりと、視線がこつちを向いた。

ゆるく下がるまなじり、曖昧に持ち上げられた唇の端、そして肩をすくめる仕草。

「お留守番してなきやだめだろう」とでも言いたげな、間違いなく自分たちに向けられたそれ。

「あいつ……」

曲がり角に消えた背中を追って無意識に足が前に出ている。ロー



ファーが足もとの砂利を蹴散らし、小石が転がる。

ばらばらな方向を向いていた兵士たちが瞬く間に銃口をこちらに向けた。ついで、目を丸くして引き金から指を離す。

「おいおい、なんで子どもがいるんだ？　ここは遊園地じゃないぞ」

「し、シキちゃん、あの人なんて？」

「あんたのこと子どもだって」

「ええ!？」

流暢な英語にびびってひつついてくるミナトは適当にあしらう。

相手が言った「子ども」が自分たちのどちらを指すのか、あるいはどちらも指したのかは不明だが、銃火器をひっさげた彫りの深い軍人と比べれば若く見えるのは道理だろう。いや今はそんなことどうでもいい。

「Hey, young ladies.」と声をかけてきた兵士は無遠慮にこちらを観察し、左腕の腕章に目を止めて肩から力を抜いた。

「ん？　おまえらは……、ああ知ってるぜ、ムラクモ13班って奴だろ？　本当に女の子の二人組なのかよ。ちよつと若すぎないか？」

体を揺らしてガス漏れのようにこぼれる笑い。どうせ通じないだろうと垂れ流されるスラング。ショウジやイズミと同じく、格下の相手だと見下してくる態度。

血管が浮きそうになる額をなでつける。こいつらの態度はむかつくが仕方がない。なぜならムラクモもSECT1も、互いについては伝聞でしか情報がないのだ。

共に作戦に臨む以前にチームワークもなっていないのだから、評価の材料は第一印象しかないだろう。

去年の自分なら返礼として拳を一発くれてやったが、そんなことをしても得られるものはない。ここは流してやろう。

「ハハッ……どうだよ、フレッド？ こいつらが、ニッポンのエースなんだとき」

流して、

「オレたちには関係ないさ。放っておけよ」

流し、

「へい、頼むぜジャパニーズ。オレたちの邪魔はするなよ？」

なが……、

「へいへいへい！ あとは、俺たちSECT11に任せとけ！ 貧弱ジャパニーズじゃ、頭からガブリと喰われちまうぜ？」

……、

「ずいぶん、遅かったじゃねえか。道にでも迷ったのか？ それとも、怖くて震えてたのか？ このまま俺たちに任せておうちに帰ったっていいんだぜ？」

ブチッ。

堪忍袋の緒が切れる音をここまでのはっきり聞いたのは初めてな気がする。

問答無用で剣を抜き、振りかぶって投擲する。

目の前のアホ共の頬をかすめ、剣は十数メートル先にいたドラゴンを穿った。

獲物ごと壁に突き立つ長剣と、そこから広がるヒビ。駅を揺らす音

と震動。力を入れすぎたかもしれないが、SECT11の笑い声が止んだので結果オーライだ。

「Get over yourself, idiots.」

ミナトには通じなくとも自分は聞き取れるし意味もわかるぞと、間拔けたたちの間を歩きながら教えてやる。

こいつらには頭を冷やしてほしいが、あいにく付近に水道はない。壁から剣を抜いて斬り上げ、絶命したドラゴンを兵士たちの中央に蹴り転がして返り血を浴びせてやる。野太い悲鳴や抗議が飛ぶが聞くに値しない。

「When in Rome, do as the Romans do.  
Didn't your mom tell you that?  
ここは日本だ、最低限の日本語と礼儀を勉強してから出直せ、デク」  
「なあっ……!?!」

親指を下に向ければ意図はばっちり伝わったようだ。黒いアーマーを赤く汚した兵士たちはさつきよりも棘のあるスラングを叫んで銃を構える。

『ちよ、シキ! 喧嘩売ってる場合じゃないだろ!』

「売ってきたのはあっちよ。やっすい挑発買ってやったんだからむしろ感謝してほしいわ」

『こら、構えるなーっ!』

相手は四人。こっちは(ミナトもやる気があるなら)二人。人数では負けるが、それをカバーできる実力くらい備わっている。

まずミナトが銃弾を防ぐために広範囲に火か氷を放つだろう。相手が怯んだ隙に誰か一人の懐にでも飛び込めば銃の射線は切れる。

武器を叩き落として蹴りでも殴りでも峰打ちでもねじ込めば制圧は簡単だ。

『シキー！ 本来の目的を忘れるな！ ショウジとイズミを追わんか！  
……おい、誰だ野次を飛ばす奴は、火に油を注ぐんじゃない！』

エメルの制止は正しいものだが、聞く気はない。他の誰かの「いけ、やっちやえ！」という声援だけ受け取り、通信機を耳から外す。

ドラゴン討伐の邪魔だなんてのはこっちのセリフだ。というか、我が物顔でのさばる奴なんてほぼドラゴンと変わらない。人間同士だろうがぶっ飛ばしていいだろう。

「ミナト、やるわよ！」

「え、ええ!?!」

兵士を挟んで向こう側にいるパートナーに声をかける。名前を呼ばれた彼女はフリーズ状態から解放され、あちこち視線を巡らせては後退った。

「いや、ダメだよ、喧嘩なんて……」

「ぶっ飛ばすのは私がやる。あんたは援護だけでいいから」

「いやそういう話じゃなくてね!?! あああつ、もう!?!」

汗をかいていた手がぐっと握り拳を作る。ミナトは唇を引き結んで顔を上げ、こっちに向かつて一直線に走ってきた。

そうだ、二人で戦えば時間もかからない。ここでどちらが上かをはっきりさせれば、相手も鼻につくような態度はとらないはずだ。

ミナトが走る。歴戦のサイキックは兵士の間をすり抜け自分のもとまで駆け付け、体を反転させた。

彼女の武器である指先が突き出され、全員が腰を落とす。

ミナトは開戦の合図として、そのまま氷を――

「すみませんでしたーっ!!」

——放つことなく、体を折りたたんで地面に伏せた。

「……はっ。」

でしたー、したー、たー……、と声が壁や床に反響して消えていく。  
平伏。平身低頭。つまりは謝罪。

破裂寸前だった空気がしほみ、思考と一緒に体が止まり、SECT  
11側はUFOでも目撃したような顔で後退った。

「うおっ、何だこの珍妙な動きは!？」

「まさかこれは……! ジャパニーズDドO—GゲE—ZザA!？」

「ドゲザ? ニンジャとハラキリに続くニッポンの三大なんとかって  
ヤツか!」

「聞いたことあるぜ。確かスライディングDドO—GゲE—ZザAとかジャ  
ンピングDドO—GゲE—ZザAなんて派生もあるらしい」

「……で、これはどういった儀式なんだ? オレたちバカにされてる  
のか?」

「……あんた、何してんの?」

「ちゅ、仲裁のつもり、です……一応……。とにかく、喧嘩ダメ、絶対  
!」

三つ指揃えて無駄にきれいな土下座を披露していたミナトががば  
りと体を起こす。言葉でのコミュニケーションが図れない分ボデイ  
ランゲージに全力を注いだ彼女の額には砂利がくっついていていた。

「アホか! なんで加害者でもないのに謝ってんのよ!」

「だって収めてもらうにはこれしかないかって……私たちが戦う場所はどこじゃないでしょ？ 十分な休息も取れてない状態で本来協力するはずの相手と戦うのは違う気がする！ 冷静になって！」  
「私は最初っから冷静よ！ 誘ってきたのはあいつら——」

ドンツ、と視界がぶれる。

五感が麻痺する轟音と震動が駅全体を揺らしたためだ。危うく舌を噛みそうになって口を閉じる。

周囲を見回すが、目立つ敵影はない。もつとずっと離れたどこから、断続的に衝撃波が届いている。

全員が口をつぐんで震源を探る中、ミロクの声が耳に届いた。

『13班、まずいぞ！ SECT11がティアマツトと交戦に入ったらしい！』

「は!? もう!?」

「む、向こうは何人で戦ってるの?」

『たぶん、シヨウジとイズミの二人だ！ 急いで救援に向かってくれ！』

「了解! ……そういうわけで、喧嘩は中止!」

ミナトが白い手を合わせる。言葉の壁の前であたふたしていた姿はどこへやら、切り替えて背筋を伸ばす様は問題児をいさめる教師に似ていた。

「本来の目的通り、ティアマツトのところに向かおう! それじゃあ SECT11の皆さん、私たちは失礼しますさようなら!」

「ちよつと! 手を引つ張るな! おい!」

SECT11の面々の呼び止めるような声も自分の声も聞かずにミナトは走り出す。普段は頭も体も人よりローペースのくせに、逃げ足だけはやたらと速い。

帝竜討伐が優先なのはもちろん自分だって承知している。けれどこれじゃあまるでとんずらこいたみたいじゃないか。種族関係なく嫌な奴は下さなければ気が済まないのに。

気に入らない気に入らない。何だこの、全てが自分を振り回してくる展開は！

「ああもうくそ！ 離せーっ!!」

手を振り払って逆につかみなおし、八つ当たりで地面を蹴りつける。

ぎゃーっとミナトが上げる悲鳴は無視し、ミロクが表示するルートをひた走った。

Count 6. 赫灼として紅く― VS ティアマット ― \*

瓦礫が持ち上がり、野ざらしになった舞台。見晴らしのよかったそこは、今は砂埃と硝煙の幕が垂れ込めている。

激しい攻防によって亀裂が走る硬い音ばかりが響く中、ぼたり、ぼたりと液体が弾ける音が混ざり始めた。

徐々に晴れていく視界に影が浮かぶ。天を覆うほど大きな翼は割れ、凶悪な鋭さを持つ角は砕け、ぞろりと牙が並ぶ顎は、弱い吐息を漏らすばかり。

全身に切り傷と銃創を刻み、体液を垂れ流しながらも立ち続ける竜ティアマット。

刃にこびりついたその血を振り払い、イズミは軽く舌打ちをした。

「これだけやってまだ倒れないわけ？ しぶといな……」

「イズミ、油断するなよ。まだ余力がありそうだ――つと！」

ティアマットが爪を振り下ろす。ショウジとイズミは即座に回避し、巨大な爪は空の地面を捉えた。

帝竜は血走った眼で宙を探り、イズミに向けて拳を振り抜く。

桁違いの膂力が放つ衝撃波を、けれどもイズミは軽やかに身をひねって避ける。

「つつあ!!」

返礼とばかりに紅の剣が振り下ろされる。捉えた、と思った一撃は先ほどの帝竜と同じく空振りに終わった。ティアマットが翼で舞い上がったためだ。



半壊している皮膚でその巨体を持ち上げられるとは大したものだ。  
思わず舌を巻く。

だが逃がす気はない。

「忘れてもらっちゃ困るな」

瓦礫の合間を縫うようにショウジが駆ける。手に握っているのは  
愛銃ではなく手榴弾だ。

帝竜に向かってそれを放り、跳躍して銃口を向ける。

「オラアッ！」

飛び出した弾丸が手榴弾に吸い込まれ、がちりと歯が噛み合うよう  
な音が鳴った。直後に拳大の鉄の実が弾け、爆発と鉄片がティアマツ  
トを襲う。

全身に走っていた亀裂がより広がり、帝竜は赤い体を血でより赤く  
染めて墜落していく。

「よっしやヒット！ イズミ、トドメだ！」

「オツケー！ って、もう！ こいつまだ動くよ！」

大役を任されたイズミが怒りを込めて剣を握る。

身を起こしたティアマツの目はまだ二人を映していた。揺らい  
でいるのは諦めではなく燃え尽きない敵意。一矢報いようと、その口  
腔から光が溢れ出す。

「……来るッ！」

身構えると同時にブレスが吐き出される。宙を染める光を追って  
巨大な水晶がそりたち、地面を割って殺到した。

弾丸でも刃でも相殺できない超硬度の嵐。サクラバ兄妹は左右に

分かれて回避する。

ティアマツトが天に向かって咆哮を飛ばした。世界中を震わせる轟きは、一度は揺らいた帝竜の命の炎をより激しく燃え上がらせる。まだまだやる気充分のようだ。シヨウジは銃を構えて引き金に指をかける。

仕留めるつもりで引いた人差し指だが、伝わってきたのは発砲の衝撃ではなく、ガチリという空虚な感触。

弾詰まりではない。強敵との交戦で夢中になっていたが、今になって銃身が軽いことに気付いた。

素早く手を滑らせて全身を探る。内ポケット、ポーチすべてに指を突っ込んだが何もつかめない。

「ちっ！」

「シヨウ兄!?!」

「さすがに簡単にはいかねえか……! あいにく、今のでこっちは弾切れだ」

「……どうする?」

「一旦引くしかねえな」

あつさりと後退の意思が告げられる。

煮え切らない展開にイズミは歯噛みするが、それはシヨウジとて同じだ。ティアマツトを見つめる目には闘志がくすぶっている。

けれどSECRETリーリーダーが退却というのなら退却だ。ダメージを与えられる武器がない今、剣一本で押し切るのは難しいかもしれない。

「わかったよ。じゃあアタシが殿するから、シヨウ兄は——」

先に、という言葉は届かない。

二人の間を鋭い光が切り裂き、遅れて空気が爆発した。

弾丸、疾風、あるいは真昼の流星。それは何もかもを置き去りにし

て空間を駆け、ティアマットの片目に直撃した。

「な、何?！」

帝竜の絶叫が響き渡る。空に亀裂さえ入れそうな叫びに耳をふさぎ、つられて閉じてしまった目を開く。

映ったのは痛みに悶え、激しく体を震わせるティアマット。そして、その片目に突き立つ……、

「あの剣……!！」

忘れもしない。つい先日自分の首に突きつけられた、星の輝きを放つ長剣だ。

次いで、裏返したような漆黒が視界を横切る。

目を浴び濡羽色につやめく髪。白いセーラー、赤いスカーフ。

日本の学生服を着た少女が真っ直ぐ飛び出し、ティアマットに刺さった剣をつかむ。

「っ、だあぁっ!!！」

ザツ、ゴリツ、と痛々しい音が鳴る。眼窩ごと眼球を抉り、黄金の剣は振り抜かれた。

片目を潰されたティアマットが叫ぶ。けれどただ斬られただけでは終わらない。目の前の華奢な体を喰らってやろうと巨大な顎が持ち上がる。

唾液を散らしながら隙間なく並んだ牙が少女に迫る。が、

「待ってー!!！」

甲高い声と一緒に押し寄せた氷塊がティアマットの横つ面をはたいた。狙いのずれた顎はガチンと空を噛み、その隙に少女は帝竜を蹴

りつけて離脱する。

「し、シキちゃん待って、早い……」

足もとに霜を降らせながら女性が走ってくる。猛スピードで突っ込んできた少女とは対照に足取りは鈍く、滝のような汗を流していた。

「13班……!?!」

「あいつら、ここまで追っかけてきたの!?!」

「ああ、怪我はしてないみたいですね、よかった……ここでキュア使うことになったら倒れてたかも……」

13班のもう一人、真竜ニアラを撃退した狩る者の片割れ。……とてもそうは見えない女性はぶつぶつ呟きながら汗をぬぐう。確かミナトと言ったか。

一方、シキと呼ばれていた少女は剣を担ぎ、自身を睥睨する竜と相対する。

真紅の巨体と小柄な子ども。まるで象と蟻の対比だ。ものともせず仁王立ちする少女の肝の据わりっぷりには感嘆するが、あれが帝竜を倒す姿は想像できない。

「無茶だ、下がってろ!」

忠告はすっかり耳に届いただろう。けれど少女は振り返りもせず、むしろ鬱陶しそうにしつしと手を払うだけだ。

帝竜と睨み合いながら、彼女は通信機に指を当てた。

「エメル、追いついた」

『目の前にいるのはティアマツトで間違いないな? あれをここまで追い詰めるか……なるほど、言うだけのことはある。13班、作戦内』

容を変更する。ティアマットは弱っている。ここで一気にケリをつけるぞ！」

「ええ……？でしょ、そんな無茶な……」

「結局、具体的な作戦もないまま戦うことになったわね」

膝に手をつけて息を整える女性が顔を青くする。少女は肩をすくめ剣を構えた。

「ミナト、あんた回復しきつてないでしょ。しばらく押さえておくからさつきとマナ溜めておいて」

「一人で大丈夫？」

「問題ない」

「りようかーい……ふう」

ミナトがティアマットのブレスが生んだ水晶に寄りかかり、ずるずると座り込んだ。

帝竜を前にして就寝前のような気の抜きよう。そして病み上がりらしい人間がたった一人で帝竜を相手にする暴挙に、思わず目が丸くなる。

彼女たちが昨年の竜災害を駆け抜けた戦士だということは知っている。決して驕りではないだろうが、それでも無茶があるだろう。

スカイタワーで保護した際、応急処置のために確認した少女と女性の体には竜の爪痕が刻まれていた。その柔肌だけにとどまらず、筋肉や血管、骨まで一度は破壊されただろう傷跡だ。

自分たちと同じく軍のバックアップを受けていたとは言いが、日本はダンジョン攻略から帝竜討伐までのほとんどを13班が請け負っていたと聞く。戦車も装甲車も通れない異界の中、たった二人では隊列も組めるはずがない。気の遠くなるような世界を身一つで駆けずった道程が、無数のつぎはぎとして彼女たちの体に残っていた。

医者ではないから彼女たちの体の仔細はわからない。けれど五体満足でいられていることが奇跡であることは間違いない。

そんな状態で微塵も怯えを見せず、繰り返して死地に飛び込もうとする姿勢に正気を疑い、思わず制止が口から飛び出した。

「おい、本気か？ 確かにあの帝竜は弱っちゃいるが、女の子一人で相手するのはキツすぎるぞ」

「大丈夫じゃないですか？ シキちゃんは見栄を張ったわけじゃないですし、慢心なんてする子じゃないし……あと、」

「……あと？」

先を促す。ちらりと自分を見るミナトの顔には不満が浮かんでいた。

「シキちゃんがただの女の子かどうかは、見てればわかると思いますよ」

言葉使いこそ丁寧だが、声音には野薔薇が自身のいばらを強調するようなとげとげしさが滲んでいる。

のんきに上着を脱いで尻の下に敷きつつ、彼女は視界からティアマットを外さない。体をほぐし、水分を補給しながらその指先はパートナーと標的に向けられている。いざという時は飛び出すつもりだろう。

彼女が見守る先で、少女が得物を持ち上げ振り払った。

残光が宙にきらめき、彼女を中心に旋風が生まれる。立ち込めていた瘴気や砂塵が巻き上げられていく。

視界の中で、少女の背中が一瞬ぶれる。

妹のイズミよりも小柄なそれに何かが重なった。大剣を持った大柄な男、または銃を構える女性、または、

「……？」

青いマフラーをなびかせ、同じく金色の剣を握った男の背中。

東京駅の空中舞台が青空同様晴れ渡る。太陽の下、決戦地の中央に立つのは少女ただ一人だ。

年も背格好もばらばらなたくさんの誰かの影は消えている。フロワロの瘴気が濃いため幻でも見たのだろうか。

目をこする中、少女が籠手を調整し、スカーフを締め直す。

次いで払われた黒絹の髪には、年季の入った紫のリボンが結ばれていた。

『帝竜ティアアマット。弱点の属性は氷。吐かれるブレスは見ての通り固体になる。殴る斬るで碎けるような硬さじゃないぞ、直撃しないように気を付けてくれ』

「了解。……状況が状況だしね、さっさと終わらせるわよ！」

金色の切っ先がティアアマットに向けられる。

帝竜はもうサクラバ兄妹を見ていない。新手にして乱入者、片目を奪った小さな嵐を捉えて牙を剥いた。

\* \* \*

相手は体力の八割は消耗しているだろう。まだ踏ん張る気概はあるようだが、それもあと少し。

対して、こちらは無傷からのスタートではある。けれど余裕はない。どこかの無茶苦茶な司令官の無茶苦茶な指示で、まともに準備ができていないからだ。

双方底が見えてきているこの状況。取れる選択肢は一つ。

「速攻！」

出し惜しみはしない。全力でぶつかり、相手がすべてを出し切る前に無理やり押し切る！

母指球で地面を蹴り上げる。対する帝竜は足の爪を地に突き立て身構えた。

飛ぶ気配はない。というより、もう飛ぶことはできないだろう。先ほどのショウジの攻撃が決定打となり、翼の青い膜は見る影もなくぼろぼろだ。

であれば狙いは絞られる。相手の武器として警戒すべきは、未だ健在な牙と爪。そして自分が狙うべきは、大きく抉れている胸急と腹所。

(鮫女が頭上から仕掛けた攻撃は避けられてた。こいつは勘がいいし、ごついくせして素早い)

カウンターを警戒して一撃ヒットごとアンドに即離脱アウェイをするより、避けきれない間合いで食らいついたほうがいいだろう。

つまりは肉弾戦になる。その展開に持ち込むためには……、

『ティアマツト、右腕の筋肉が膨張！ 爪での攻撃が来るぞ！』

最初にして最大の難所、ティアマツトの近接攻撃をしのがなければならぬ。

SECT11の二人との戦いぶりを見てわかった。この帝竜は今まで戦ったどの竜よりも戦士然としている。

ロアIIアIIルアのような嘲笑はなく、スリーピーホロウのような趣味の悪さもなく、ニアラのような高慢さもない。己に限界が近付いていることには気付いているだろう。

残された片目の奥には轟々と炎が燃えている。こちらと同じく残った力をすべて解放するつもりなのだ。

命が燃え尽きることもいとわず戦いに臨む、潔い戦士の目。

ああ、本当に、この状況に腹が立つ。



「あんたみたいな奴嫌いじゃないわ。どこかのバカ共が暴走しなけりゃ、お互い準備万端なままやりあいたかったのにね！」

同意だろうか、否定だろうか。ティアマットは唸りながら右腕を持ち上げる。ミロクの分析通りだ。

左に避ければもう片方の腕が来る。外側から背後に回りこもうとすれば大木並みに太い尾が飛んでくる。どこを狙っても必ず一撃と衝突するなら、余計なことは考えず前進するのみ。

瞬きの間に肉薄する。案の定、帝竜は好都合と言わんばかりに雄叫びを上げて腕を振りかぶった。

「シキちゃん！」

『上!!』

ミナトとミロクの声が重なる。すぐ真上から凄まじい圧がギロチンのように落ちる。

臆するな。止まるな。加速しろ！

踏み出せ！

「——っ!!」

周りの景色が置き去りになる。

踵を何かがかすり、コンマ数秒前に通過した地点を巨大な爪が粉碎した。

帝竜の拳打を紙一重でくぐり、目の前にはがらあきの胴。ありがたいことに、大きな傷が剣筋の道しるべになっている。

これなら、剣術に慣れていない自分でも問題ない。

「っせえ!!」

掌底の要領で切っ先を傷口に叩きこんだ。

傷のさらに奥、まだ開かれていない内臓の部分へ刃を埋める。肋骨にでも当たったのか、長い剣身は半分ほど進んで止まった。

振り抜くために握る手に入力を入れるが、易々とさせてくれるほど甘い相手ではない。ティアマットの左手の爪が左右を取り囲んだ。

「つくそー！」

剣を抜くことも後回しにしてとにかく伏せる。身の丈はある巨大な爪が髪をかすり、何本かが無理やり引き抜かれた。

瞬きをするたび即死級の物理攻撃が迫る状況で脳があつという間に熱される。けれど距離を離してクールダウンする余裕はない。

獅子も獲物を捉えれば息の根を止めるまで喉笛に喰らいつく。今は標的の命が手の届く距離にあるのだ。このまま懐に張り付け、

斬る間も与えないというなら、

「突きならどうだ!!」

剣を引き抜き、再び胸の中心を狙って突き入れる。

抜いてもう一度。さらにもう一度。適当ではなく、最も深く骨肉が抉れている箇所、一撃一撃全力で。地道ではあるが急所の傷は徐々に深く広がっていく。

もちろん自分を引き裂こうと帝竜の爪が迫るが、今は互いの皮膚が一メートルの間もなく接近している状態だ。本気で叩き潰そうとすればティアマット自身の傷を巻き込むだろう。その手はほんのわずかに減速せざるを得ない。

そうして生まれる一瞬で剣を滑り込ませて爪の直撃を防ぐ。

(重い……っ！)

トンは軽く超えるだろう巨体から放たれる一撃を防ぎきることなど

不可能。剣の全面で掌を受け止め、体全体を傾けて受け流す。そのたびに足や腕に爪が届いて肉が裂かれるが、致命傷でなければ構っていない。

間を置いてミナトのキュアを浴びながら絶え間なく足を動かす。ティアマツトが後ろに下がるのならその分踏み出し、横に移動するなら揃って跳ぶ。柄に手を添え正面から、下から、隙さえあれば剣先をねじ込む。

負荷のかかる手首が痺れてこようが構うものか。愚直に牙を突き立てるのが今できる唯一だ。

削れ、削れ、削れ！

「だあああああっ!!」

剣、爪、剣、牙、繰り返される斬撃と刺突の応酬。相手の体を削れば自分も切り裂かれ、衝撃波さえ起こす相手の咆哮に意識が持っていられないよう犬歯で唇を貫く。カウンターを剣で受け、腕の感覚が薄れてきても止まらない。どろりとした体液が降り注ぐ中、赤く染まった視界でさらに血肉を抉っていく。

喰うか喰われるかの関係でしかない二種を、噴き出す血潮が確かにつなぐ。広い舞台の中央を赤で浸し、ひたすらに互いを切り刻んだ。

寄り添うような近さで殺し合っただのくらい経っただろうか。

かすれた喉で気合の一声を叫んで天叢雲剣を振り下ろす。数十センチは削れた胸部からさらに切断された肉片が宙を舞う。

相手の返り血も自分の血も等しく混ざって全身が生温かく濡れた時、目の前の傷口がドクンと跳ねた。

(心臓……！)

間違いない。生命の象徴となる核の臓器だ。土砂崩れが起きたようにぼろぼろに露出した肉と骨、それを脈打たせる鼓動がすぐそこにある。

ティアマツトの胸部はクレーターと化している。おそらく、あと一度か二度。突きでも斬撃でもいいから、浴びせれば届く！

剣を振りかぶる。何度も繰り返した攻撃だ、感覚はつかめているし無駄な動きはもうしない。

「とどめっ!!」

渾身の突きで剣を打ち出す、が。

つかみかけた勝利の確信は、横から殺到した風圧にさらわれた。

「シキちゃん避けて!!」

ミナトの絶叫と同時に冷気が体を包む。

同時に、脇腹に硬くて冷たいものが埋まる感触。

「」

声が出ない。体が持ち上げられる。

ぐるりと視界が回った。脇腹に埋まっていた冷たい物は腹部を横断して自分の体から何かを抜いていく。

目の前に浮かぶのは氷の欠片と、たぶんさっきまで自分の体に入っていたティアマツトの爪の先。そしてそれに引っかかっている、拳大の人間の肉。

自分の一部だと悟ると同時に、帝竜と鏡合わせになったように腹と口から血が噴き出した。

「シキちゃん!!」

ミナトが叫ぶ。走る足音と、自分の横を通り過ぎていく冷気の群れ。硬い何かが衝突して割れる音。

ずっと意識が遠のく。一瞬視界が暗転して、背中を受け止められ

て、首筋に小さな痛みが走った。

「大丈夫!? 辛いだろうけど寝ちゃだめだよ、間に合わなくてごめん……!」

「あ……っぐ」

喉に血が詰まって返事ができない。ミナトに受け止められて仰向けになっていた体を反転させ、口の中のを地面に吐き出した。

体には血と混ざって赤くなつた氷が貼りついている。おそらくミナトのゼロ℃ボディだ。ティアマットの爪が当たる直前に自分を保護してくれたのだろう。帝竜相手に完全な盾としての働きはできないが、氷が体の厚みを増してくれたおかげで胴を切断されずに済んだ。

とはいえ脇腹は大きく挟れている。氷とキュアで応急処置が行われているが血が止まらない。胃腸の一部でも持っていかれたかもしれない。

ティアマットも無事ではない。キスでもするくらい密着していたのだ、自分をはねのけた爪は帝竜自身の傷も巻き込み、あばらも筋肉も完全に挟れ、心臓が露出していた。

押し切れると思っていたが、相手も戦士。己の核をさらけ出すリスクを捨て、敵の排除を取ったか。

「……ナノエイド効いてきたね。まだ動かないで、血が止まってないから」

首筋から気付け薬の管が抜かれ、腕がされた上着で腹部が締め上げられる。

帝竜は追撃を仕掛けてこない。向こうも向こうで血を流しすぎているし、文字通り虫の息なのだろう。

ミナトが放った氷に四肢を絡めとられたティアマット。その胸には天叢雲剣が突き立っていた。紙一重で心臓からは外れ、血まみれに

なりながら自分を呼ぶように輝いている。

「……あとちょっと、だけど。どうする?」

「今さら心臓以外狙ったって遠回りになるだけよ。柄に手さえ届けば、それで決まる」

『……心臓に刃が届いたとしても、難しいかもしれないぞ。筋肉と同じで硬さと弾力がありそうだ』

ミロクの声と共に、視覚支援の操作によつてティアマツトの胸がズームされた。規則的に脈打つ臓器は付近の胸筋に似て、ワイヤーを思わせる繊維が幾重にも絡んで編み上げられている。おまけに人間の何十倍はあるかという大きさだ。確かに、一撃でいけるかどうかは怪しい。

となると、狙う場所は。

ミナトを見る。彼女も帝竜の同じ場所を見つめてこくりと頷いた。チャンスは一瞬。この体で、またあいつの懐に飛び込む必要がある。

「囿になるよ。マナもなんとか足りると思う」

「悪い」

「ううん、私のせいだもん。目立たないところに下がっててね」

脇腹の傷ごと自分を抱きしめ、もう一度ごめんねと言ってミナトは立ち上がる。怯えはなく、瞳の奥には静かな炎が燃えていた。

細い腕が振り払られれば、マナが従い炎へと変換される。火炎はぐるりと舞台の淵をなめ尽くし、壁となって自分たちとティアマツトを閉じ込めた。

「今度の相手は私。でも絶対に捕まらないから!」

力強く宣言してサイキックは走り出す。フェイントをかけるでも

なく、緩急をつけるでもなく、一直線に飛び込んでいく。

舐められたとでも感じたのだろう。今までとは違う低い唸り声をあげ、ティアマツトは正面から爪を振り下ろした。

黒光りする凶器はミナトの体を容易く両断し……直後、引き裂かれたはずの彼女はずれた位置から姿を現す。

ティアマツトは潰れていない片目を見開いた。間髪入れずにもう片方の手でミナトを捕えて握りつぶす。

が、今度はその拳の下から新しい彼女が飛び出した。

グフウと帝竜は息を呑む。何度も振るわれる手に、爪が届かないなら牙でというように噛み合わされる巨大な顎。そのたびひき肉のように原型をなくしては生まれるミナト。

なんて無茶を、とミロクが叫ぶのを堪えて声を絞り出した。

『ミナト！ 戦わないオレが言うのもなんだけど、普通デコイミラーはそういう使い方しないと思うー！』

「ごめ、わっ！ 今集中、っしてる、から！ ナビして、っ!？」

『バカ、しゃがめ！ 次左！』

デコイミラー。盾にもなる術者の虚像を作り出す術。昨年の竜災害の中、臆病なミナトが真っ先に習得した身を守る術だ。

攻撃には一切使えないが、属性攻撃よりマナの消費はずっと少ない。肉体が他より劣るサイキックの心強い味方で、今では予備動作なしに発動できるミナトの得意技だ。

そしてもうひとつ。

モグラたたきのように繰り返すミナトを襲っていたティアマツトの手がぎしりと鈍る。

武器でもあり、無傷な部分でもあつた帝竜の掌。けれど今は胴と同じように軽いとは言えない傷が生まれている。

対象の体を包み、触れてきた敵に牙を剥くセロCポデイとヒートボデイ炎の鎧。避けるばかりでは相手は倒せないが、サイキックのこの術に限っては例外である。実際、何度もミナトの虚像を捕えたティ

アマットの手は炎症で皮が溶けてはがれ、氷によって切り刻まれている。

体を保護しつつあえて攻撃を誘う。一撃でも本体に当たれば即死だが、回避できればできるだけダメージを与えられるカウンター。術中にはまった帝竜の手は目に見えて弛緩し、指の一本一本が痙攣を始めていた。

『よし、これだけやれば……!』

「ううん、まだ!」

ティアマットから離れ、ミナトは自分から距離を取るように走り出した。

合わせて体を回すティアマットだが、追いかけてようとはしない。

触れられることのできない敵、使い物にならなくなりつつある両手。この状況を覆せるものは何か。ティアマットはそれを思考している。

自然の物とは違う光が帝竜の口からあふれ出す。

巨体が胸を反らして天を仰ぎ、小さな竜巻が起きるほど大量の空気を吸い込んでいく。

砲身となった自身の体を一気に倒し、ティアマットは渾身のクリスタルブレスを吐き出した。

「つ~~~~!!」

パートナーは死に物狂いでとある地点へ走る。

その視線が捉えるのは、彼女を呑みこもうと迫るそれとは別の陰。

——自分たちが到着する直前、ショウジとイズミに向けて放たれていたブレスによって生まれた水晶の群れ。

ミナトの体が滑り込む。

直後、新たに生み出された水晶の津波が到達し、地球が割れるような轟音が丸の内を揺さぶった。



『シキ、走れ！ 体を四十度左に回してまっすぐ！』  
「っ……い！」

鉛のように重い体を起こして走る。

視界が白い。目が眩む。けれどそれは負傷のせいじゃない。

13班とSECT11。そして帝竜ティアマット。四人と一体しかいない東京駅最上層の舞台は目が痛むほどのまばゆさに包まれていた。

クリスタルブレスの水晶は、すでにそこにあつた同じ水晶たちと衝突して派手に砕けた。宙に飛散した無数の欠片は太陽光を吸って乱反射しあい、極彩色の閃光で空気を塗りつぶす。

方向感覚を狂わせる環境をさらにかき乱すのが、ミナトが放つた炎の壁だ。今も燃え盛るそれは舞台を熱して陽炎を生みだしている。

環境を最大限利用して相手を呑みこむ。範囲攻撃を多用する後衛だからこそ思いつき、ティアマットを瀕死まで追い詰めた今だからこそ実現できた策。

光、空気の揺らぎ、不快な熱。この場に立つ者は自身の位置すらつかめない。無理に目を凝らせば光で潰され、水晶の欠片が刺さってしまうだろう。ティアマットはもちろん、自分たちもだ。

けれど、13班にはナビという武器がある！

『熱源探知に切り替え！ 方向は合ってる！ そのまま——右に跳べ！ いったん止まって、左に大股三步分！ よし進め！』

まぶたを下ろし、ミロクの声だけを頼りに突き進む。降り注ぐ鋭い破片が四肢に刺さるが、こんなものかすり傷だ。

『いけ、いけ、もう少し！ ……今だ！ 手を伸ばせ!!』

少年の叫びと同時に巨大な気配を感じ取る。手の届く距離に奴が

いる。

手を突き出せば、指先が骨とは違う硬い物に当たった。剣の柄だ。もう放したりするものか。指が軋むほど強く握って、地を踏みしめる。

ぐおつ、とすぐ傍で空気が払われた。

さつき腹に一撃もらった時と同じ感覚。自分に気付いたティアマットが腕を引いたのだ。

『まずい、間に合わな——！』

「つなあああ——っ!!」

別の声が近付いてくる。

薄目を開けると同時に、全身切り傷だらけのミナトが突っ込んできた。水晶の破片が食い込むのも構わず、パートナーはずたずたの四肢でティアマットの腕に飛びつく。

「止まれええええええっ!!!」

がらがらの叫びに呼応し、分厚い氷が一瞬で腕から半身までを喰らう。

体の半分を氷漬けにされたティアマットは、それでも腕を振りかぶった。

だが遅い。

大きく目を開く。

シャンデリアを敷き詰めたようなまぶしさの中、自分の剣が一際強く、やれ、と輝いた。

「ふっ——!!」

右手でグリップを押し込み、左手で柄頭を引く。

刃を滑らせるのは、ティアマットの心臓——を、繋ぎとめている血

管。

体全体で右に回転し、脈も繊維もすべてまとめて引き千切った。

赤い噴水と化した巨体から心臓が切り離され、すぐ真横に迫っていた帝竜の手が止まる。

「」

目と鼻の先に、牙の生えそろった顎がある。

帝竜は血の色に染まった眼球に自分を映していた。大口を開け血と唾液をたらし、他には目もくれず、自分だけを見ていて。

ふつ、と、その目から光を消した。

「……あなたの負け。私たちの勝ち」

互いに万全の状態で戦えなかったことだけが口惜しい。いつか再戦したいものだ。

舞台を中心に光の波が東京駅を包み、フロワロの花が散った。

\* \* \*

『帝竜ティアマット、沈黙。生体反応、消失。……東京駅及び丸の内一帯のフロワロ濃度の大幅減少を確認！ 討伐完了だ！』

ミロクの宣言を皮切りに、通信機の向こうで歓声が爆発する。

やったーと年甲斐もなくはしゃぐ大人たちの声はしばらく止まらなさそうだ。通信機を耳から外し、セーラーの襟に入れた。

ああ、体が重い。全身を濡らす血が乾き始めて殻みたいにまとわり

ついてくる。

ため息をつくのも億劫で、立ったまま死んでいるティアマトの前で座り込む。マナを枯渇させて顔を青くしたミナトがひいひい喘ぎながら駆け寄ってきた。

「シキちゃあああんごめんねええ！ 私がもつどじつがりじでればこんな大怪我じながったのにいいいっ」

「あんたはマナがすっからかんだっただでしょうが。今だつて限界でしよ、使いどころ間違えなきやそれでいい。あーくそ、血が足りない……」

「うわああ倒れないでえー！」

『シキ、ミナト、やったな！ 医務室は準備万端だぞ、早く帰還しよう！』

『よくやった、13班！ 少々予定と違ったが……丸ノ内の攻略は完了だ。帝竜の屍から検体を回収しろ。検体は今後のドラゴン研究の役に立つ』

エメルの指示を無視するつもりはないが、まずはこの場でできる治療が優先だ。ミナトが鞆をひっくり返し、片っ端から治療道具を開けていく。

「よし、お腹はとりあえずこんな感じで……ああ、足の傷も結構ざっくりいってる。こつちも、……え、嘘、もう包帯がない！」

「ほらよ」

晴れた空の中、放物線を描いて何かが飛んでくる。狙ったようにミナトの膝の上に落ちたのは清潔な包帯だ。

目を丸くして振り返るミナトと血まみれで転がる自分に手を振り、トロフィーの代わりだとショウジは言った。

「とことんハデな奴らだな。ま、今回の金星は譲っておくぜ」

「何言ってるんのショー兄？ あそこまでティアマットを削ったのはあたしたちだよ!? それを後からノコノコ来て、いいとこだけ持って行ってさ……」

ぎろりとイズミがねめつけてくる。竜が見せる捕食の意思とはまた別種の、心底憎たらしいという視線。

弁慶のような死を遂げたティアマットを見、次いで自分と天叢雲剣を見、彼女は自身の剣が収まる鞘に爪を立てる。

「余計な手出ししてくれてありがと。だけど、大きなお世話だから」  
「あっそう。鮫一匹じゃ竜に喰われて終わりだと思って割り込んだんだけど、そこまで言うなら余裕で倒せたんでしょね、悪いことしたわ」

「はああつ？ だからサメって何よ舐めてんの!? 剣の使い方もなっていないド素人が出しゃばって死なれたっていい迷惑だって言ってるの！」

「は？ 死ぬわけじゃないでしょばっかじゃないの。どっちが勝つかの判断もできないって、その歳でもう耄碌もろろくしてるわけ？」

「なんだと、このチビ！」  
「うっさい鮫女rowdy midget」

言葉のナイフが乱れ飛ぶ。ミナトとショウジが同時にため息をつき、駄々っ子を押さえるように間に割り込んできた。

「シキちゃーん、怪我に響くから静かにしようねー」

「突つかかってきたから返しただけだし」

「おいイズミ、相手は怪我人だぞ」

「わかってるよ！ ミッション完了！ もう行こう、ショー兄！」

イズミが踵を向ける。迎えに来た仲間たちを無視して歩いていく妹にショウジは肩をすくめ、もうひとつ包帯を取り出した。

おかわりは、と尋ねるように揺らされるそれに、ミナトが微笑んで首を振る。

「もう大丈夫です。後は議事堂で治療を受けるので。ありがとうございます」

「……今回の作戦は無謀だったと思うぜ？ エメル女史は相変わらずだな」

「それについては、まあ、同意します」

「ま、とりあえず、今回は見直したぜ、13班。ただの女の子扱いするのもやめるよ」

「ただの女の子？」

最後の言葉が理解できなくてミナトに尋ねる。

こつちの話だとパートナーは笑い、自分の背に手を回す。脇から支えられて立ち上がるのと同時に、エメルが再び労いの言葉をかけてきた。

『SECT11と議事堂へ帰投しろ。この状況でよくやってくれた。……胸を張って帰ってこい！ 今日この時より、我々の反攻は開始される。すべての竜を再び、狩り尽くすまで……！』

竜を狩り尽くす。その通りではある。ドラゴンを一匹残らず掃討しなければ人類に明日はない。

だが、先ほどショウジが言ったように、今回のような考えなしの戦いでは体が持たない。帰還したらエメルには物申さなければ。

ほぼ無傷のサクラバ兄妹と満身創痍の自分たちを見た、SECT11メンバーの反応は様々だった。何が起きたのかわからず首を傾げる者、獲物を横取りされたと憤慨する者、なんてザマだと笑ってくる者。騒々しい兵士たちに囲まれながら、最も近い脱出ポイントへ入って議事堂に到着する。広場ではエメルにシズカ、拠点防衛のために待機となっていたリンたちが待っていた。

そしてバックに見える議事堂は何やら騒がしい。聞けば帝竜討伐の歡喜がムラクモ本部から伝播して、議事堂中がちよつとしたお祭り騒ぎになっているのだとか。敗北から始まった戦いということもあって、鬱憤がたまっていたのだろう。

真つ先に自分とミナトの身を案じてくれたのは、血相を変えて走ってきた看護師とナビくらいだ。他のムラクモや自衛隊、一般市民はティアマツト討伐の事実には浮かれ気味で、乾杯を交わす者さえちらほら見られた。二度目の竜災害だからある程度順応しているのかもしれないが嫌な慣れである。

「……じゃ、俺たちはここでバイバイだ」

一緒に祝福モードの議事堂に入るかと思いきや、SECT11はあつさりと背を向ける。

「ちよつと待て！ どこに行くつもりだ！」

「あたしたちはステイツの部隊なの。日本の施しなんて受ける気はない」

ムラクモ本部での邂逅の時と同じくエメルが待ったをかけるが、イズミがふんつと鼻を鳴らして一蹴した。

「俺たちのベースはこの近くだ。次の帝竜が現れたら、またこつちに顔出すよ」

「だから待てと言っておろうに!!」

「総員、ベースへ帰還する！」

「イエッサー!!」

「~~~~~!!」

エメルの声はBGMのように流される。かつての指揮官とその指揮下にあった部隊という関係が嘘に思えるほどだ。

馬耳東風とはこのことだろう。あつという間に遠ざかっていく背中に齒軋りしかできない幼女の肩に手を置き、リンが首を振って代弁する。

「落ち着け、最高顧問。まったく、勝手な奴らだ……」

「くそ……これでは救援に呼んだ意味がないではないか……！ デイヴにはこちらから抗議しておく！」

「シズカ、私たちはもう行っていいのよね？ ていうかいい加減休ませて」

「あ、はい、もちろんです！ と、とにかく……13班も自衛隊の皆さんも、お疲れ様でした！ 今日はずっと休みで、今後のことは、また明日！ と、いうことで……いいですよ、エメルさん……？」

「勝手にしろ！ 私はしばらく、研究室にこもるからな！」

小さな背中では水干をひるがえして議事堂に戻っていく。あの様子では穴だらけの討伐作戦については反省していないだろう。

文句の一つでも言いたかったが、看護師たちの手によってストレッチャーに寝かされてしまう。仰向けになった自分たちをミロクとミイナが上から覗き込んできた。

「シキ、ミナト、おつかれ。見てたからわかるけど、やっぱぼろぼろだな」

「去年の戦いの影響が残っているのに、また大怪我するなんて……私たちも頑張りますから、あまり傷は負わないでくださいね」

「今回は全部作戦のせいよ。……て言いたいけど、」

「私たち、力不足だったね……」

「剣の使い方がなっていない」とSECT11のサブリーダーに指さされたことを思い出して唇を噛む。あの女の甲高い声も、鮫肌のように触れた空気を荒らしてくる雰囲気も癪に障るが、指摘されたことは事実だ。隣ではミナトが助けに入るタイミングが遅れたことを繰り返



返して深く息を吐いていた。

ティアマツトが帝竜の中でも随一の力を持つ個体ということもあるだろうが、自分たちの力はほんの少し戦っただけで底が見えてしまった。2020年の最後の戦いの時よりずっと劣ってしまっていることを痛感する。

「助けになってくれるはずのSECT11はあんなだしな。あいつら……オレはどうにも好きになれないよ」

「実力は確かみたいですけど、SECT11の人たちは、ちよつと怖いです……」

「わかる……。私も土下座通じるかどうかすごく怖かった……」

「いや、土下座は関係ない」

集中治療のため扉が閉じられる直前まで、双子は手を握って付き添ってくれていた。

表に立ち入り禁止の札がかけられ、医務室は看護師と彼女たちに指示を飛ばす医者の声で騒然とする。

この空気も一年ぶりだ。懐かしいけれども味わいたくはなかった。

「……シキちゃん」

「何よ」

「私、次からはちゃんとするね」

ミナトが名前を呼んでくる。声を返せば彼女はまた腹の怪我のことでごめんと呟き、少しだけ潤んだ目で天井を睨みつけて宣言した。

「たられば言っても仕方ないのはわかってるんだけど、でも、あの時はもっとマシな動きができたはずなんだ。帝竜との戦いだっていうのに、気が抜けてた。ごめんなさい」

「だから、もう謝らなくていい。前衛が傷を負うのはあたりまえのことでしょ。あんただってあのブレスで全身ザクザクじゃない」

「……私はいいの。シキちゃんみたいに深すぎる傷はないし、体のだるさはマナが足りないからで怪我じゃないし。だから、ちゃんと、するよ。……ちゃんと……戦、う……」

言葉が尻すぼみになっていく。横を見れば、ミナトは口の動きだけで「ちゃんと」を繰り返して半分寝ているようだった。治療のために投与された麻酔は局部的なもので意識が落ちる量ではないから、おそらく疲労だろう。

「ちゃんと」って何だ。手を抜いていたわけではなからうに、自己暗示のように繰り返して。

あほ、と呟き、同じように疲労に身をゆだねてまぶたを閉じた。

\* \* \*

夜の静けさに包まれたムラクモ本部。人のいない大部屋では、息遣いの一つでさえいやに響く。

研究者や技術者はティアマットの骸から回収された資材の取り合いで、ムラクモや自衛隊は警備と休息で出払っている。大部屋にいるのはエメルだけだ。

「SECT11がこれでは、協力に来たのか邪魔をしに来たのかわからんではないか！ まったく……デイヴめ……」

『あの、エメル最高顧問、どうされましたか？』

「こちらの話だ」

怒りが頭の中で轟々と吹き荒れ、細かな説明をする余裕さえない。恐る恐る尋ねてくる通信相手の部下を突っぱねる。

それで口を挟む気はなくなったのだろう。進捗状況の確認に対しては予定通り進んでいるとだけ簡潔な答えが返ってきた。

「なるほど、順調か……それは何よりだ。だが、こちらで問題が発生していてな。予定していた戦力がアテにできなくなった。もはや、手段を選んではいられない」

『と、言う……』

「一刻も早く、例のものを完成させる必要がある。……使えるものは全て使え！」

『ま、待ってください！ 作業は順調と言いましたが、こればかりは早めるのは危険が――』

「……泣き言を言っている暇はないぞ！ おまえたちは言われた通りものを作ればいいのか！ ……全ての責任は、私が取る」

しばらくの沈黙の後、わかりましたと返されて通話は終わる。

「負けは許されない。必ず勝ってみせる。貴様らが何度来ようが、我々は戦うぞ、ドラゴン……！」

モニターやコンピュータの駆動音を聞きながら、固く握り拳を作る。手の中の通信機がぎしりと嫌な音を立てた。

\* \* \*

薄暗い部屋の中、光源となっているモニターに事の経緯を伝える。帝竜ティアマット討伐の結果を告げ、シヨウジは報告に区切りをつけた。

「……報告は、以上だ」

『……ふむ。到着初日で帝竜一匹か』

モニターの向こう、祖国であるアメリカの地はまだ明るい。大統領の椅子に座り陽光を背負うデイヴィッドはよしと頷いた。

『悪くないペースだな。だが、本来の目的を忘れてもらっては困る』  
「わかつてるさ。仕込みは万全、あとは相手が動くのを待つだけだ」  
『ならオーケーだ。SECT11の働きには皆が期待している。頼んだぞ』

会話は必要最低限。2020年にアメリカを率いていたジャック  
|| ミュラーとは別の厳かさを漂わせ、臨時政府代表は通話を切る。

暗くなった画面に肩をすくめてみると、イズミが勢いよく駆け込んできた。

「ショー兄！ ウイルが議事堂の無線傍受に成功したって！ やっぱりあの女、隠し玉仕込んでるみたいだね……」

「大統領の読み通りってわけか」

嫌なものだと頭を振る。竜との戦争は、もはや命のやりとりだけではない。権謀術数、様々な立場の思惑が絡んで、本来シンプルなはずの戦いは姿を隠してしまった。

「みみっちい真似はしたくねえが……本国の命令を無視するわけにもいかないからな。さっさと片付けて、俺たちは俺たちで楽しもうぜ」  
「もちろん！ 今度こそ、誰にも邪魔されず、あたしたちのやり方でドラゴンを倒してやろう！」

「ああ。またムラクモ13班が突っ込んできた場合はオレたちが追っ払ってやるさ」

「もう横取りなんてさせねえ。二度と舐めた態度できないよう鉛玉を喰らわせてやる！」

イズミを始め、幾多の戦場を共にしてきた仲間たちが盛り上がる。

それを尻目に暗い天井を見上げ、シヨウジは数時間前の戦いを思い出していた。

血の雨を浴び、自身も血肉を飛び散らせながらも竜を屠った少女。帝竜すら頭から呑みこみかねない気迫。

ミナトという女性は途中参加だったためまだ未知数などころはあるが、少なくともシキという少女に関してはある程度わかった。

『シキちゃんがただの女の子かどうかは、見てればわかると思いますよ』

ああ、「ただの女の子」でないことは充分すぎるほど感じ取れた。

イズミは彼女に対して剣の扱いがなっていないと憤慨していた。実際その通りで、少女の剣技は拙い。成長の余地はあるが、開花するのはまだまだ先だろう。ただ、最も印象に残ったのはまた別。

そのうち剣を放り出して喉笛に喰らいつきそうだった勢い。瞳孔を開いてティアマットの心臓を抉り出した姿。あの可憐な容姿からは想像もできない鬼の影がそこにあった。

日本には修羅という言葉があるが、少女を表すならまさにそれだ。

「……<sup>バーサーカー</sup>狂戦士だな、ありや。自滅しないといいが」

悪寒さえ感じた自身のうなじを撫でさすり、シヨウジははしやぐ仲間たちの輪に加わった。

CHAPTER 1 | e n d |

幕裏5. まずは一歩

2021年の4月21日、水曜日。

天気は晴れ。平均気温は20度を下回っていて、湿度は22%で空気がカラカラ。

国会議事堂の空気は、最悪。

「よい、しよつと……」

傾斜のついたピラミッド状の屋根に登る。

議事堂の中央塔。文字通りこの拠点の真ん中だ。

平時であれば人に指差されるだろうし逮捕ものだろうが、今の町に人影などない。眼下の広場にいる人々から隠れるように動けば誰にも気付かれやしない。ここは一人でんびりできる秘密の場所だ。

体を伸ばして屋根に背を預ける。流れていく雲を眺め、ミナトは長く息を吐いた。

(さすがに一人で出てきたのはダメだったかな……)

少し前を思い出す。

「二度目の竜災害」「振り出しに戻った東京復興」「13班の敗北」。議事堂全体が沈没船のような雰囲気になる中、戦場に戻るかを問いてきたエメルの赤い目。

鉤爪に首根っこをわしづかみにされたような悪寒が止まらず、下手な作り笑いをしてムラクモ本部から逃げ出してしまった。一人になるにしても、もっとうまい誤魔化し方があっただろうに。

『どうか、どうか……よろしくお願いしますー!』

『アタシは、おまえたちを信じてる!』

シズカの震える声やリンの励ます声が何度も響く。まさか、という目で自分を見つめてきた人たちの表情が焼き付いて離れない。

「……わかってますよ……ちやんと戦いますって」

「ドラゴンを殺せるのは13班だけ」。事実を口の中で転がしては何度か呟いてみる。

わかっている。シキと自分にしかできないことだ。2021年現在、近代兵器はあの怪物たちには通用しないと証明されている。

さすがに核なら大打撃を与えられるだろうが、タイミングや条件を誤れば人間側も滅びかねない。そもそも海中にもマグマにも咲くフロワロが繁茂している環境で正しく動作してくれることはないだろう。結局は、狩る者の力でなんとかするしかない。

でも、ちよつとは。ちよつとくらいは。

『また戦わせるなんて』って、正面から反対してくれる人がいてくれる、とか（

そんな風に考えて、どうしようもないところで立ち止まってしまおう自分が少し嫌になった。

誰も心配してくれていないわけじゃない。ミイナなんて目を真っ赤に腫らして泣いていた。大怪我をしてほしくないと、自分たちを思っただけ涙を流してくれた。

目の前でそれを見たというのに、戦うためのスイッチが入りきらなかった。

自分から大切なものが抜けかけている気がする。このままでは去年みたいに戦えない。シキの足を引っ張るだけだ。

だから外に出た。竜災害の中に自分を突き動かしてくれる何かを見つげるために。あとは気分転換も兼ねて。

「…………いい天気だなあ…………」

晴れた空はきれいなパステルカラーだ。雲も影のない白一色で、雨が降りそうな気配はない。

陽を浴びていれば嫌な気分も紛れるかもなど目を閉じかけたとき、甲高い声が周囲に響いた。

「そんなことないっ！」

驚いて屋根からずり落ちそうになった。慌てて体勢を直し、こっそり議事堂前広場を見下ろす。

広場中央には幼い少年がいた。いつも他の子を率いて、ドラゴン退治ごっこをしているやんちゃな子だ。今日も笑顔で駆け回っているのかと思いきや、彼はたった一人で大人たちと相對している。

遠目でもわかるほどの大粒の涙を流して彼は叫んだ。

「もうダメなんていわないですよ！ ドラゴンになんて負けないもん！」

「でも、あの13班さえ敵わないんなら、もう誰も——」

「かなわなくない！ 13班はふいうちされたって聞いた！ ちゃんと戦ったら13班のほうがつよいんだ！ 13班がケガしてたたかえないなら、ボクがドラゴンをやっつけてやる！」

目の前の大人たちを吹き飛ばさんばかりに少年は声を張り上げる。宥める言葉が四方から降り注ぐたび、ちがうちがうと彼は抗議した。

甲高い声を浴びせられた大人はぼつが悪そうに謝罪と同意を繰り返した。

ごめんね。その通りだ。悪かった。もう言わないよ。13班を信じるよ。

言葉のどれもが子どもを落ち着かせるためのもので、心底からの不安はぬぐえていない。その場しのぎの、いくらでも口にできる響き



だ。

「……」

広場にいる大人、少なくとも自衛隊員でもない一般人の彼らは、自分たち最前線に出る者の辛苦を真には知らない。

また、自分たちをかばってくれている子どもも、戦場の血生臭さや、己の無力を味わい辛酸をなめた経験などない。

あたりまえだ。知らなくていいし、経験しなくていいものなのだから。

重かった体は少しだけ軽くなっていた。よしと立ち上がって息を吐く。

去年、奮い立つきっかけになったのは、シキの言葉と一人の女の子だった。戦う力を持たず、両親を竜に喰われてしまったという、暗い瞳の女の子。

『無辜の民』って言うんだっけ」

罪なき人々という意味の言葉らしい。

議事堂にいる人間は罪人ではなく、神でもない。

彼らにあるのは無力な四肢。大切な人と手をつないで、一緒に歩むための、真つ当に生きるためだけの手と足だけ。

それが今、悪意にさらされ、蹂躪されようとしている。

戦う理由なんてそれで充分。……充分だったじゃないか。充分だったはずなのに。

卑屈で弱い自分すら、守らなければと思わせられるくらいの「無力の塊」。そんな誰かに会いたかった。

その人が成すすべなく恐怖に震える姿を目にすれば、自分が戦うしかないと決心がつくかも、なんて。

要は、自分より弱い者を見つけて自分を慰めたかっただけだ。

はは、と乾いた笑いが漏れる。

「なんだ、私、」

最低じゃん。

唇を動かすだけで終わらせた。

声に出してしまえば、言葉通り自分が最低な人間だと判が捺されてしまうようで怖かった。

「……戻らなきや」

いつまでもものんきにしてはられない。戦いは始まってしまった。いい加減、誰かの涙ではなく、自身で自身を奮い立たせられるようにならなければ。確固たる芯がなくても、今は前に進まなければいけない。

ドラゴンの脅威は戦うことでしか退けられない。後ろを向いたつて逃げ場はない。

戦<sup>か</sup>わ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>自<sup>分</sup>が<sup>い</sup>た<sup>場</sup>所<sup>所</sup>は、もう存在しないのだから。

\* \* \*

「嘘でしょ!?! またドラゴンが来たの!?!」

「おれたち、どうなっちまうんだよ……」

声や身を震わせる人々の嘆きが壁や床に染みこんでいく。

雨雲が流れ込んできたような陰鬱とした様子を窺い、朝比奈<sup>アサヒナ</sup>ハジメ<sup>ハジメ</sup> 一と奥田<sup>オクダ</sup>リョウゴ<sup>リョウゴ</sup> 亮悟は静かに顔を見合わせた。

「……マジかよ」

「……マジっばいな」

ドラゴンがまた攻めてきた。13班が負けた。

4月18日、血を流す少女と女性が運び込まれ、復興途上の街に見覚えのある赤い花が咲き乱れるのを見た瞬間、世界が一変した。

静かなパニックがさざ波のように広がり、あの日から今日まで、ひどく怯えた市民がムラクモや自衛隊に押し寄せる事態に陥っている。

「つーか、13班が負けたって……相手たぶんドラゴンだろ？ シバさんたち大丈夫なのか……？」

「それが全然情報入ってこねえんだよ。13班を出せって騒いでる奴がいて、今は関係者以外面会謝絶になってんだって」

「13班を出せ？」

「……なんで負けてるんだ、って声が聞こえた」

「……なんだよそれ」

そういえばこの三日間、ムラクモや自衛隊の関係者しか出入りできないフロアや部屋に誰かが近付いて咎められる、というのをちらほら目にした。13班を探していたのか、自力で情報を得ようとしていたのだろうか。

不安になるのはわかる。自分だってそうだ。竜災害を終わらせた戦闘員が負けたという事実は、そのまま人類とドラゴンの戦力差を表している。13班が敵わない相手に、自分たちが敵う道理もなし。

けれど、自ら危険に向かった彼女たちを責める権利なんて誰にもない。傷を負って帰ってきた13班を不安の捌け口として引きずり出そうなんて。

「……大丈夫かな」

薄暗い地下で死にかけて自分の手を握り、「絶対助ける」と言ってくれたミナトの笑顔が浮かぶ。

彼女とパートナーの少女は、まだ医務室のベッドの上なのだろう

か。最後に見た二人の姿は議事堂を飛び出していったときの背中だ。姿を見て声を聞きたい。けれど自分はムラクモではない。エメル達に声をかけられているとはいえ、会うのは許されないだろう。でもせめて、怪我がひどくないかだけでも確認できれば。

「ミナトさんたちに会えないならさ、他のムラクモの人たちから様子聞けないかな」

「つつても、今てんやわんやだし捕まるかどうか……マサキさんから『しばらくは忙しくて相手になれそうにない』って伝言来ただろ？

ムラクモ本部に行ったらって追い返されるだろうし……」

「うーん……となると……」

自分たち部外者でも自由に出入りできて、ムラクモの人間がいそうな場所。いろんな立場の人が行き来するような……。

「……議事堂前広場とか？」

「おい、マジで探しに行く気か？」

眩くのと同時に無意識に歩き出していた。オクタが後ろから慌てて追いかけてくる。

「やめとこうぜ、おれたちになんてできることなんてないって」

「できることないからって何もやらないのは違うだろ」

「そりやそうだけだよお……じゃあどうすんだよ、ムラクモに入るのか？」

「それは……」

手足を重い何かにからめとられた気がした。歩みが少しずつ遅くなっていく。

ああ、まただ。憧れの人に恩を返したいという気持ちは確かにあるのに、想いのまま進もうとすると見えてくる壁。

何だこのくらいと飛びついても見上げてみればとても高く、指が根元まですり減ったって登れる気がしない。

(……ダメだダメだ！)

頭を思い切り横に振る。止まりそうになった足を持ち上げ、もう一度大きく踏み出す。

(何もやらないのは違うって自分で言ったばかりだろ！ 秒で諦めようとするな！)

壁があるなんて認識しているのは頭の中だけだ。実際にはまだ何の障害にもぶつかっていない。

何度も当たって碎けるならともかく、やる前から手をくるくるさせるなどみつともない。

まずは踏み出せ、たとえ13班のように戦う力がなくとも、この足には力が有り余っている。

歩く速さを上げようとすると、オクタがブレーキをかけるように肩に手を置いてくる。

「ハジメ、おい、」

「何だよ！ 何回言われたって……」

「いやそうじゃねえって！ ほらあれ！」

「え？」

振り向いた視界を横切るオクタの人差し指。導かれるまま首を回すと、議事堂の出入り口と目的地である広場が見えた。

そこに立っているのは、一般市民と、重装備で体を固めた自衛隊員たちと、左腕に腕章を巻いた男女が四人。

「あ、あれ！」

「ムラクモの人だ！ 話聞いてみようぜ！」

赤、または灰色の腕章はムラクモの関係者の印だ。どこかへ行ってしまう前に広場に飛び出して声をかける。

「すみません、あの！」

「……ん？」

暗い色の髪を揺らし、四人の中で唯一赤い腕章を巻いた男性が振り返る。

失礼にならないように会釈して名前を告げるが、13班のことを話題に出した途端、彼の眉間にはぐつとしわが寄った。

「今は面会禁止だ。依頼があるならクエストオフィスに行つてほしい」

「いや、そうじゃなくて。もう三日経つてるけど体調とか大丈夫なのか知りたくて……」

「……関係者以外面会謝絶と報せが出ているだろう。そんなに13班に文句が言いたいのか？」

「これで何回目だ」とため息が吐かれる。言い方からして、同じようなことを他からも尋ねられたらしい。

13班への文句も垂れ流されていたのだろう。その人間たちとひとくくりになされたことが頭にきて、顔に熱が集まった。

「違います！ ただ——ただ、……大丈夫かなって」

「……おまえ、最近マサキと一緒にいた……」

「ヒムロ教官。そろそろ出撃時間じゃないですか？」

紅一点、腰に銃とナイフを下げた女性が男性に声をかける。

「東京駅に先行して探索を開始するんですね。準備はできていますから、早く行きましょう。……ふん、こんなにかくさんの人を不安にさせるなんて。やっぱり、13班じゃなくて私ならもつとうまく……」

「そういう大口は成果を出してから叩け。おまえはまだ試験にも合格してないんだぞ」

ヒムロと呼ばれた教官は女性の言葉を切って捨てる。思うところがあるのか女性は唇を噛んで押し黙った。横に立つ男性二人がとげとげしい雰囲気なでつけるように宥めるが、プライドが高そうな彼女はそっぽを向いて腕を組む。

ヒムロは悪いがと自分たちに向き直った。

「おまえたちはムラクモのメンバーじゃないだろう。関係者……いや、関係者であつても不用意にムラクモの情報は漏らせない。心配する気持ちはわかるが、——シバ？」

「えっ」

視線が上げられ、13班の彼女の苗字が彼の口から飛び出す。

反射的に体を反転させると、つい先ほど自分たちが出てきた議事堂の入口に、今まさに探している女性がいた。

頭に巻かれた包帯や頬に貼られたガーゼが痛々しく、心なしか顔色が青い。いつも見ていた柔和な雰囲気とは違うけれど、間違いなく彼女だ。

怪我が痛むのかおぼつかない足取りで議事堂に入っただろうとするミナト。加えて視界に飛び込んできたのは、彼女に早足で近付いていく政治家や市民が数名。

げっ、とオクタが顔を青くした。

「やべえ、あれ13班を出せって騒いでた人たちだ！」

「はあ!? 冗談じゃなくて本当にいたのかよ！」

「こんな状況で冗談言うかよ！　って言ってる場合じゃねえ！　あれ絶対シバさんに絡もうとしてるぞ！」

遠目でもわかる、肩を怒らせ冷や汗を流し、目を見開いた鬼気迫る形相。老若男女は獣に追われる草食動物のように焦りを駄々洩れにしてミナトへ迫る。

エスパーではないけれど、あの様子では穏やかな話し合いにならないことだけはわかる。ミナトにとっては針のむしろだろう。間に合わないが、無理やりにも割り込まなければ。

「ああ、くそつ。おまえたちはここで待機だ」

「ちよ、教官!？」

後ろから悪態が聞こえる。

走り出そうとしていた自分とオクタの肩にヒムロが手を置いて指を食い込ませた。

「飛ぶぞ。動転するなよ」

え、とか何が、という言葉は喉の奥に引っ込んだ。体全体がねじつてしぼられるような錯覚に襲われたためだ。

足の裏から地面の感触が消えて、視界を光が満たす。宙を漂うような、凄まじいGで縫いとめられるようなちぐはぐな感覚。

何だこれ、気持ち悪い。重力が二転三転している。自分がどこにいるのかわからない。

えづいてしまいそうになり、まぶたを閉じて耐える。  
次にまつ毛を持ち上げると、目の前にミナトの背中があった。

「え？　うえっ?？」

「あれ、シバさん!？」

「……………え?？」



びくりと肩を震わせてミナトが振り返る。呆けて瞬きをする彼女に、自分たちの肩をつかんだままのヒムロが声をかけた。

「シバ、こんなところで何してる。起きたとは聞いていたが……」

「あ、ヒムロさん……？　ハジメくんにおクタくんも」

後ろから息を呑む音や小さな悲鳴が聞こえる。位置的に考えてミナトと彼女を捕まえようとしていた人々の間に割り込んだ形になるのだろうが、ぶつちやけ自分たちにも何が起きたのかわからない。

思わず後ろを振り向こうとして、がしりと頭をつかまれた。余計なことはするなという念を、力強い指先から感じる。

頭皮をわしづかんでくるヒムロとわしづかまれている自分とおクタを見て、ミナトは首を傾げた。

「えっと、三人とも何を……」

「こつちのセリフだ。その様子じゃ、怪我が治りきってないんだろう。どこに行くつもりだったんだ？」

「あ、あーっと、ちよっと、外の空気を吸いたいなと思ひまして。怪我はほぼほぼ治っているので問題ないです！　ほらこの通り」

ガーゼのついた口角を上げてミナトが腕を振る。肩にかかる上着が揺れてバタバタと落ち着かない音を立てた。

「今、ムラクモ本部に戻るところなんです。この後すぐに作戦が始まるでしょう？　もちろん、私たち13班も参加するので！」

「……わかった。なら本部まで送る」

「え、すぐそこなので大丈夫ですよ？」

「いいから。ほら、おまえたちも行くぞ」

乗り物のハンドルのように頭を押される。このままミナトと後ろ

の人々の壁になって進めということだろう。

背中にながながと声を浴びるが、怪我人に追い討ちをかけるような真似は到底看過できない。

罵声を彼女の耳に入れるわけにはいかない。何か話してかき消さなければ。

とにかく声を張り上げて賑やかしながら、半ば強引にミナトをムラクモ本部まで誘導していく。

「やーそれにしても暖かくなってきましたね！ 議事堂の周りにちびっ子たちが面倒見てる猫がいるらしいんですけど、だいたいいつも決まった時間に日向ぼっこしてるんですよー！」

「そうなんだ。今はちよつと危ないから、保護できるなら議事堂の中に来てもらったほうがいいかもね」

「あー、えと、そういうばあ、町にめちやくちや赤い花咲いてるじゃないすか！ 去年も見ましたけど、あれ紅葉みたいできれいですよねー！」

「赤い花……フロワロのことかな？ あれはドラゴンが咲かせる花で毒性もあるから、近付かない方がいいよ」

ビシリと空気にひびが入る。気を紛らわすことが目的なのに、口にした話題はきれいに地雷原に飛びこんでいった。人と話す、気遣うなんて初めてではないのに、素人がスケートリンクですつ転ぶような醜態を晒してどうする。

「おまえたちなあ……」

「わーすみませんすみません!! おめーのせいだぞオクタ！ あの花がドラゴンに關係あるなんて去年見ててなんとなくわかってただろ！ 地雷踏み抜いてんじゃねえ！ それでも陽キャか！」

「ああん!? 人になすりつけてんじゃねえよおめーだつてうまいこと言えてねえじゃねえか！ 肝心な時にコミュ障になりやがって、芸能活動で磨いたトーク力発揮しろや!!」

ヒムロの指がこめかみに食い込む。焦りやら恥ずかしさやらで頭が茹だり、反射的にオクタに拳が飛んだ。またオクタからもグーが飛んできて頬に埋まる。

失言へのフオローも忘れて小突きあいを続けていると、ふつと息が吐き出される。

恐る恐る横を見ると、ミナトが口もとを隠して肩を震わせていた。くすくすと息が漏れているから、たぶん笑っている……のだと思う。

「ごめんなさい、ちよつと、つい。ふっふ……っけほ」

「だ、大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫」

胸を押さえて何度か咳き込み、ミナトは静かに背筋を伸ばす。顔に落ちていた影はさっぱり洗い流され、梅雨明けのような明るさが漂っていた。

血色の良くなった唇がよしと言葉を紡いで、彼女は肩に羽織っていた上着に腕を通し、ムラクモ本部の扉の前に立つ。

「それじゃあ、私は戻るの。ヒムロさん、ハジメくんにもオクタくんも、心配かけてごめんなさい。声をかけてくれてありがとう」

ああ、先日まで見ていた背中だ。しなやかな芯が通ったように自然と伸びて、すっかり前を見据えて踏み出していく背中。

この笑顔で、彼女はまた戦場に向かっていくのだろうか。

「あの、大丈夫、ですか？」

腰を折ってしまうとは思う。いけないことだとわかっている。それでも尋ねずにはられない。

「怪我、まだ完治してないでしょ？ その状態で戦うって……」  
「平気平気。もうほとんど痛まないよ。体は丈夫なほうだしね」

片腕を上げて力こぶをつくるジエスチャーがされる。しかしミナトは肉体派というようには見えないし、ずり落ちた袖から覗く細い手首にも包帯が巻かれている。

見れば見るほど、この状況すべてが追い討ちをかけているようにしか思えない。

負のオーラが出てしまっていたのだろう。ミナトが顔の目の前まで手を持ってきて払うように指を左右させた。

「大丈夫だよ。……今度は負けない。負けられない。まずはリベンジとして、議事堂周りの不安を解消するために動くから。説得力ないかもしれないけど……ムラクモを信じて待ってて」

信じていないわけじゃない。一年前、彼女とシキの13班は確かに世界を救った。世界中の人間に、もう来ないかと思われていた明日を与えてくれたのだ。13班を、マサキやイツキを、キリノ総長やエメル最高顧問を、身近にいる自分たちが信じないでどうするのだ。

数分前、彼女を探して歩き出した時の想いが再燃する。戦えなかったって、何かしたい。

「あ、あのー！」

「うん？」

「いってらっしゃい、気を付けてくださいー！」

「うん、ありがとう。いってくるね」

守衛と挨拶を交わし、ミナトはムラクモ本部へ入っていく。大きな扉が世界を隔てるようにバタンと閉まった。

自分にできることなんてたかが知れている。やったところでもたらされるのは微々たるものかもしれないけれど、何もしないままでは

いたくなかった。

ムラクモに入るかどうかは置いておいて、とりあえずは一步。

「……みんながみんな、おまえみたいな奴だったらいいなだがな」

頭からヒムロの手が離れた。彼はやれやれとかぶりを振って背を向ける。

「ムラクモの仕事に必要な以上に触れてくる奴は突っぱねるしかないが、応援ならまあ、問題ないだろう。おまえたちは13班に不安をぶつけるような真似はしないでくれよ」

「そりやもちろん……ていうか、さっきの何だったんですか？ 俺たちの肩つかんで、こう、瞬きしたらシバさんのすぐ後ろにいたんですけど……」

「企業秘密だ。おまえたち、ムラクモじゃないんだろ。じゃあな」

「ヒムロきようかーん!？」

「今行く!」

部下の呼び声に声を張り返し、ヒムロは適当に手を振って去っていく。

とりあえず、トラブルは回避できたみたいだ。オクタと顔を合わせて息を吐いた。

「……あ、そういや、あの文句言おうとしてた人たちどうしたんだろ」  
「あーそういえば。もう騒いでる声は聞こえないけど……なんか、静かじゃね?」

妨害したことで恨まれてはたまらない。たつた今来た道に戻り、忍び足で通路の角に身を潜める。通りすぎる人々から訝しげな目で見られているのは気付かないふりだ。

そつと顔を出してみる。ミナトを追いかけていた者たちは一人も

いない。代わりに大きな背中が銅像のように議事堂入口に佇んでいた。

「あれ？ エンキドウさん？」

青いたてがみに声をかけると、男性がゆっくり振り返る。鍛えられた体が少しのぶれもなく回って、太い首を前に傾け自分たちを見下ろす動きがなんだかアンドロイドみたいだ。

何をしているのか尋ねると、自分もよくわからないと彼は呟く。

「何やら騒ぎが起きていたようなのでな、気になって来てみたのだが」  
「あー、騒ぎというか、なんというか」

「何人かが集まっていたので急いで声をかけたが、何でもないのだと早々に解散してしまった」

タイミングからしてエンキドウが声をかけたのは、ミナトを追っていた人々のことだろう。かなり騒がしくがなりたてていたのに、彼の話聞くには蜘蛛の子を散らすように去ってしまってしまったらしい。何が起きていたか気になるのか、エンキドウのゴーグル越しの目もとははいくつかシワが刻まれている。ある程度からの人となりを知る自分たちから見てもかなりいかつい。

「……ちなみに、どういう風に声をかけたんですか？」

「む？ 何をしている、とだけだか」

目を閉じて想像してみる。二メートル近い筋骨隆々の男性がこちらに向かって早足で向かってきて、鋭い目つきで見下ろされて「何をしている」と低い声で一言……。

……うん、まあ、うん。

何とも言えずに黙る自分たちを見て、葉がしおれるようにエンキドウは尻尾を下げた。

「……もしや、怖がらせてしまったのだろうか」

「い、いやそういうんじゃないと思いますよ!? な!？」

「そーそー普通に問題解決したから解散しただけっすよ！ たぶん！  
きつと！」

結果的に言えばエンキドウに気圧されて逃げ出したのだろうが、見るからにしょんぼりしている彼に向かって事実を告げるのは躊躇われる。

後にムラクモからエンキドウに招集がかかるまで、ハジメとオクタは語彙力を振り絞って空回り気味のフォローを続けた。

\* \* \*

指先で頬をかく。

大仰な壮行会の後の、丸ノ内に向かう道中。少し前のことを思い出し、ミナトは羞恥心に襲われていた。

隣を歩くシキが怪訝そうな顔で振り返る。

「何変な顔してんのよ」

「ん、いやちよつと。思い出し笑いというか、思い出し恥ずかしさ？  
というか……こつちの話なので気にしないで」

怪我ではないし、戦闘に支障があることでもないから大丈夫だと告げる。シキはならいけどと前を向いた。

去年ならチクチク小言をもらっていたかもしれないが、今は最低限のことを伝えればシキが無理やり突っ込んでくるということはない。そのくらいは信用してもらっているのだ。

けれど、

『……なんかあつたら呼びなさいよ』

『あの、大丈夫、ですか?』

(……心配かけちゃってるなあ……)

シキやハジメ、ムラクモ機関の仲間、遠くから自分を見る議事堂の人々。みんながみんな、眉間にシワを寄せているか八の字眉だった。それほど自分はしょぼくれてしまっていたのだ。しかもたくさんの人にそんな姿を見られて……情けないったらない。頬を叩いて気を引き締める。

病は気からだ。これからはまた戦いの日々なのだから、ぶつくさ言いながらではなく、少しでも前向きな姿勢で進まなければ。

(こんな調子じゃ、またあの人が化けて出てきちゃう)

腰砕けになっていた自分を叱咤してくれた先達を思い出す。彼の名残りを追うように、無意識に右手が自分の腕章に巻かれている紫の布に触れた。

あ。

「そうだ!」

喉から飛び出した声は思いの外勢いよく響く。シキが耳を押さえ、てこちらを睨んだ。

「今度は何よ?」

「えつとね、ちよつと待って……」

腕章から布を外す。

去年の戦いで散ってしまったベテランの形見とも言えるスカーフ。何かしら装備としての効果が望めるかもしれないから着けておけと



シキから預かっていた物だ。

実際、2020年から今に至るまで、大きく破れもせず自分の左腕に在り続けてくれたのだ。少なからずご利益があると見ていいだろう。

ただ、自分だけがこれを身につけているというのはいらない。ヒップバックに手を突っ込む。確か包帯やまとまったガーゼを小分けにするための小さなハサミがあったはずだ。

「あ、あつたこれこれ。シキちゃん、ちよつと止まって。そのまま前向いてて」

なるべく切断面が荒くならないよう、慎重に布を切っていく。想像の中で何してくれてんだと怒る彼に謝りながらそれを折りたたんで、しっかりと撫でつけ、シキの髪に触れる。

首を傾げる代わりに視線と瞬きで疑問を示すが、シキは拒否せずされるがままで。警戒心の強い山猫が気を許してくれているみたいで嬉しい。

手触りのいい髪を一房すくう。雪解けのようにさらさらこぼれ落ちる髪一本一本を丁寧について、三つに分けて、順に重ねていって……。

（楽な戦いなんてない。きっと、また去年みたいに、ひどく心を折られるときが……考えたくないけど、来るかもしれない）

もし、自分が地べたに這いつくばって、シキだけを苦境に立たせてしまうようなことがあったら、その時は。

（頼ってしまうようでごめんさい。でも、どうか）

力を貸してほしいと祈りを込めて、あとは少しのマナも込めて、リボンに見立てた布をしっかりと結ぶ。

「できた！」

手鏡で仕上がりを見せると、シキはぱちぱち瞬きをした。

「何これ」

「お守り。願掛け的な……嫌だった？」  
「別に」

三つ編みにまとめられた髪に少しだけ触れて、何事もなかったかのようにシキは歩き出す。

よかった、気に入ってくれたかどうかはわからないが、少なくとも不評ではなさそうだ。聞こえないように息を吐く。

「何してんの、行くわよ」

「うん！」

残った布を腕章にしっかり巻いてシキを追う。

牙と爪、絶望と血ばかりの厳しい道のりではあるけれど、独りではないのなら、どれだけ傷付いたって踏み越えていける。

きっと大丈夫だと胸に刻んで、遠くに見える東京駅へ向かった。

## CHAPTER 1 あらすじ

第五真竜フオーマルハウトが降り立ち、東京は2020年同様、竜災害の最前線と化した。

13班のシキとミナトは前年の戦いで身体にハンデを負いつつも戦いに身を投じる。まずは丸の内 東京駅の攻略を進めるが、そこに君臨するのは強大な帝竜ティアマツトだった。

支援としてアメリカから異能力者の特殊部隊SECT11が派遣されるが、シヨウジ・サクラバ、イズミ・サクラバ率いる彼らはムラクモとの合流を拒否し、単独で帝竜攻略作戦を始めてしまう。

13班はSECT11を追って丸の内へ急行。シヨウジとイズミによって追い詰められていたティアマツトに挑み、苦戦するも勝利を収める。

キリノの不在にエメルの強引な指示、連携を取る気のないSECT11など、波乱の展開に振り回されるムラクモ機関。シキとミナトも、二人に近しい人々も、それぞれ気になることがある様子。

2021年のドラゴン戦線は早くも雲行きが怪しくなっていた。

\*\*\*

13班メンバー

【飛鳥馬 式 / アスマ シキ】

スチューデント♀ 標準カラー / サムライ・デストロイヤー  
ボイスタイプG (佐藤 利奈 様)

主人公その1。比較的穏やか(?)に過ごしていたが、ドラゴンの再来と最初からクライマックスのイズミのヘイトに負けず嫌いのスッチがフルスロットルになった。イズミのことはいつか殴ろうと思っっている。

天叢雲剣は業物ではあるものの、使い手であるシキはまだ未熟なため思ったように戦えない。かといってドクターストップがかかっているため本来得意な殴り合いにも持ち込めず、フラストレーションが

溜まっている。

脳筋に見られることもあるが、ナツメを始めムラクモの研究者たちのもとで育ったため勉学は優秀。英語は得意科目で日常会話なら支障なくできる。

【志波 湊 / シバ ミナト】

スタイル未定・なし ♀ / サイキック

ボイスタイプC（堀江 由衣 様）

主人公その2。また竜災害??? また???

攻撃から支援まですべての属性、多くのスキルを扱えるが、リハビリ中の体ではマナを上手く練ることができない。収束・放出に時間がかかる上にマナを消費しやすい。マナ水の飲み過ぎで舌がバカになりそうで怖い。

勉学は苦手。強いて言うなら現代文が得意科目。医大の入試はマジでギリギリのギリで合格した。頭に詰め込んだ教養は2020年の竜災害ですべて吹っ飛んだ。

SECTIIについてはガラの悪さよりも言葉の壁にビクビクしている。リーダーのショウジたちは日本語を使ってくれるようにほっとした。

INTERMISSION 11の面影  
Count 7. 厄日は続くよどこまでも

最悪続きの日々だ。ドラゴンが地上に降り立ってから、今日までずっとだ。

『コール、13班！ おい、起きろ！ 寝てる場合じゃないぞ！』

帝竜討伐後でしばらく任務もないはずが、緊急事態を告げるミロクの声が今日の目覚まし代わりになった。

自分は朝の鍛錬後の小休止中だったが、ミナトは疲労もあつてぐっすり眠っていたらしい。寝ぼけ眼の彼女と顔を合わせる。

緊急時の動きなんて歯磨き感覚で日常に溶け込んでいる。体を起こしてから戦闘用の装備を身に着け、ターミナルの画面をタッチするまでは秒で済んだ。

何があつたと応答すれば、画面に映ったミロクが「キリノが！」と繰り返す。

『キリノの意識が戻ったらしい。医務区で待ってるから来てくれ！』

「キリノさんが!?!」

「わかった、すぐ行く」

桐野 礼文。ムラクモの研究者にして現総長。2020年では情報支援を始め、ドラゴンクロニクルの解明まで成し遂げた男だ。名実ともに竜災害の第一線に共に立つ戦友とも言える。

そんな彼は、自分たちがフォーマルハウトに敗れた日に意識不明の重体になってしまったと聞く。二度目の竜災害が始まり、帝竜ティアマトを倒して議事堂中が湧いても、さらに日が経ってもキリノが目

覚めることはなかった。

嫌な想像をしてしまうこともあったが、ドラゴンを殺すには彼の知恵という武器が不可欠だ。仲間としても戦力としても、目覚めてくれたのは僥倖である。

空腹を訴える腹の虫はゼリー飲料で黙らせる。眠気は冷水を顔に浴びせて殺し、意識が冴えていく中、階下の医務区へ駆け込んだ先で双子と合流した。

「キリノが起きたって聞いた。入るわよ」

「キリノさん、大丈夫ですか!？」

足音と音量をユキとナミに注意されるが、構ってはいられない。目指すのは重傷者用のベッドだ。

自分たちも何度も世話になっているが、スカイタワーが占拠されてからは最奥のひとつが埋まったまま。墓場のように静まり返っているけれど、キリノがいるとしたらそこだろう。

ベッドを囲うカーテンを跳ね退ける……のはさすがにはばかられるので、許可を得るためにナース達へ顔だけ向ける。

慌ててこちらへ手を伸ばしていた彼女たちはほうつと息を吐いて、気遣わしげに声を潜めた。

「シキちゃん、ミナトちゃん、キリノさんのお見舞い？」

「そう、意識が戻ったんでしょ？ 今どんな状態？ 顔合わせてもいい？」

「ええ、容体は落ち着いているんですけど、今はちよつと……」

ナース二人は奥の机でカルテをまとめる医師と視線を交わし、頷く。

白衣の天使だなんて呼ばれる職のくせに、なんだその念を入れた動作のひとつひとつは。安堵どころか不安を煽るからやめてほしい。

「13班なら大丈夫よ。……気をしっかりね」

「……それってどういう——」

「……13班………?」

か細い声がどこからかこぼれる。

目の前のカーテンから確かに漏れ聞こえた男の声。薄い吐息は今にも切れてしまいそうな蜘蛛の糸を思わせた。

「キリノ！」

「ミロク、ミイナ——?」

それまでずっと脇で控えていたミロクとミイナが飛び出し、カーテンにしがみついた。

看護師たちの注意も耳に届かないようで、やや乱暴にベッドが暴かれる。マットレスには空気に溶けてしまいそうなほど生気の削げたキリノが腰かけていた。

腕を広げて飛びつこうとする少年少女。キリノは驚きながらも二人を迎える、はずが。

「……ッ………!」

バスツ、と乾いた音が響く。

「え……っ?」

白衣の袖が弧を描いて双子の頬を打っていた。

なんのことはない。キリノの体に振り回されたそれが偶然当たっただけだ。目の前の男が髪を振り乱して、その動きに引きずられた袖がたまたま、というだけ。

故意ではない。見ればわかる。痛くもかゆくもない、蚊に刺されるよりも些細なこと。それでも、時間を止めるには十分な衝撃だった。

くしゃくしゃに髪が絡まった後頭部と、しわだらけの白衣が見えるばかりで、トレードマークの眼鏡と優しい気な目は雲隠れしている。キリノはまるで、自分たちから逃げるように背を向けている。

笑顔を貼りつけたままミロクとミイナは固まってしまふ。キリノははっと肩を震わせ、ほんのわずかに体をこちらへ向けた。

「す……まない、まだこの体に慣れなくて……」

「この体って……?」

「キリノ、いったい何があったんだ?」

「ハハ、見ての通りさ……」

渴いた笑いが漏れる。いつもの朗らかで穏やかな彼らしくない、なおざりな声。

緩慢な動作で、キリノは少しだけ体を回す。目を合わせようとはしてくれない。世界を見るのが怖いとでもいうように。

さつき双子に当たっていた右の袖の動きがやけに軽い。腕を通していないのだろうか。

……いや、腕が、

「キリノ、どうしたんだよ。……腕? 腕が、——」

彼の肩に手を置こうとしたミロクが止まる。どうしたのと歩み寄ろうとしたミイナも、足を踏み出しかけたまま静止した。

「腕が……」

腕がない。

文字通りだ。指先から肩まで、キリノの右腕はどこにも存在しない。中身のない袖がむなしく潰れて、空調の風に震えている。

全員が言葉をなくす中、どうしようもなかったとユキが静かに言った。



「ここに運ばれた時には、すでにキリノさんの右腕は壊死してて……切断するしかなかったの」

「え、壊死って……!?」

「……黒いフロワロ」

君たちも見ただろうとキリノが呟く。メガネのレンズが保護する両眼は、色こそいつも通りであるものの、暗い澱みが潜んでいる。どこに焦点を合わせているのかもわからない。

「スカイタワーから脱出する時にそのフロワロに触れてしまった。そしたら……この有様さ」

「言い訳をするつもりはない。しかしどうしようもなかったんだ」

切断する判断をしたのは自分だと、医師が足音を立てずにやってくる。片手にはキリノの名前が書かれたカルテがあつて、クリップで留められている写真には、燃え尽きた炭のように崩れた……人間の腕、らしき何かが写っていた。

「瞬く間に壊死が広がってね……悩む暇すらなかったよ。放っておけば全身が同じ状態になっていた」

「全身が……?」

隣にいるミナトがぶるりと震えて自身の体を見下ろす。フォーマルハウトとの邂逅を思い出しているのだろう。

キリノの全身を腐らせかけた黒いフロワロ、その猛毒に囲まれた状態で、自分たちは気を失っていたのだ。何分、何時間かは不明だが、おそらくキリノよりも長い時間接触していたとは思う。

今のところ、体に壊死の兆候は見られない。自分とミナトが狩る者だからか、それとも別の理由があるのか、はたまた、表には出てこないだけで、水面下では病状が進んでいるのか……。

「シキとミナトくんは……問題ないみたいだね」

こちらを見て、キリノは虚ろな顔でよかったと自分たちの無事を喜んだ。

蛍光灯に照らされる五体満足の自分たちと、影に滲む隻腕のキリノ。異能力者とそうでない者。持つ者と持たざる者。失った者と、失っていない者。

違いをまざまざと見せつけられて尚、自分たちに向けられる笑みにひどく息苦しくなる。

「黒いフロワロは触れた者を死に至らす。生きてるだけ僕は運がいい方だ。いや……利き腕が使えないなら、科学者としては死んだも同然かな……」

「そ、そんなことないです！ キリノさんは……」

「……そうだよ！ キリノは科学者である前に、オレたちの仲間だろ」「早くキリノが復帰しないと、私たちが困ります！」

途中で詰まってしまったミナトの言葉を引き継ぎ、ミロクとミイナが声をかける。

ありがとうと応えこそすれ、キリノの目は相変わらずどこを向いているのかわからない。確かに言葉を交わしているはずなのに、違う世界に立っているような、薄い膜で隔てられているような。霞をつかむ感覚と似て、互いの意思が噛み合っていない気がする。

「僕にやれることがあるかはわからないけど……また復帰できるように——……ッ!？」

キリノの体が不安定に傾ぐ。なくなってしまった右腕を探して、左手が何も無い宙を掻きむしった。

「はぐ……あ……あ……あ……」

「キリノさん！ 落ち着いてください！ 幻肢痛ね……早く、鎮静剤を！ 13班、悪いけど面会はこのままでにして」

有無を言わず医務室の外へ追いやられる。押しのけられたことにも、急すぎる面会の中断にも文句は言えなかった。言ったとして、今は誰にも受け止められないだろう。

閉じた扉の向こうから、ベッドが軋む音と看護師たちの掛け声が絶え間なく響き続ける。

「う……あああつ！ や、焼けるっ……腕が……僕の右腕が……！」

「……クソ！ なんでキリノがこんなことに……」

「……………」

「……ミイナ」

ミロクが悪態をつく横で、ミイナが歯を食いしばって下を向く。

顔を真っ青にして絶句していたミナトが少女を引き寄せて包み込んだ。ほんの少しして、嘔みしめるような嗚咽がこぼれだす。

「キリノ……うう……ぐすっ……」

「大丈夫、大丈夫だよ。大丈夫だからね……」

努めて穏やかな声で頭を撫でてはいるものの、パートナーの顔は青いままだ。平静を保っている振りができているだけマシかもしれないが、視線は重力に引かれて地べたを向いている。

「……治せる方法はないのね」

「近代兵器がドラゴンに通じないのと同じだ。現代医療では……ましてやこの災害下では、なす術がない」

ついてきていた医師を横目で見上げる。彼は医務室の扉を見つめ

て頷いた。

「医者として正しい判断だったと思うが、本人にとっては……現実を受け入れるのに、時間がかかると思う。その間はそつとしておいてやってくれ」

「……」

「利き腕を失ったのなら、残った腕を使えばいい」。

医務室でキリノに向かつて、そう口走りそうになったのを抑えたのは正解だった。

たとえば戦いのさなかに片腕をドラゴンにもがれたとして、それだけですぐには退けない。まずは脅威の排除が最優先だ。もう片方の腕でそいつを屠り、応急処置をしてから一度下がる。

腕が切り離されてからそこまで時間が経たず、ミナトの強力な治療術があれば……自分の体なら、繋がる可能性はある。

ただ、今回はそういう話じゃない。

医務室で、五体満足の自分がキリノにかけられる言葉はなかった。かけたとして、それは彼を失意のどん底から救い上げるようなものにはならなかった。引きずって振り回して、残った腕すら千切つてしまいかねない。

だからずっと黙っていた。何も言わず、彼のなくなった腕から視線を外し、腕を組んで、何もせず。

『どうしてそんなに平気なの？』

問いかけが頭に響く。

昨年、アオイを亡くし心の折れたミナトが自分に尋ねてきたことがある。なぜ、世界が崩れ死体の山ができて涼しい顔のまま進めるのだと。

記憶の中のミナトの眼がこちらを見ている。友人の遺骸を焼きつけただろう網膜が、波風立てない自分の顔を映す。

『どうしてそこまで平気でいられるの?』

『悲しくないの? 苦しくないの、ほんの少しも?』

『これだけ仲間が傷つけられているのに……死者が出ているというのに……そう』

「ははっ、そう」

「おまえは——」

『コール、13班』

「……っ!?!」

ばちん、と視界が弾ける。

国会議事堂の中、医務室前の廊下の中央、白くて硬い床の上。

目の前にはやりきれないというように首を振るミロクと、涙を流すミイナと、その背中をなで続けるパートナーの姿。

「……? シキちゃん、どうしたの?」

棒立ちしている自分をミナトが見つめてくる。邪気など一切ない、いつも通りの瞳で。

「……」

「シキちゃん?」

「なんでもない」

今のは白昼夢だ。きつとそうだ。ミナトの顔も、声も、あんな風に歪んだりしない。

なんだってこんな時にこんなものを見る。自分まで暗い空気に浸りすぎるな。

ちっ、と舌打ちが漏れるのとエメルが再度呼びかけてくるのは同時

だった。

『おい、13班、聞こえているか?』

「聞こえてるわよ、何?」

『至急、ムラクモ本部に集まってくれ。話したいことがある』

それだけ言って通信は終わる。一緒に聞いていたミナトたちも、このままではいけないと体を起こした。ミイナが赤い袖で濡れた目もとを拭う。

「……次の任務が始まるのかな。私たちも、仕事に戻ろう……」

「……ああ……」

不安を分かち合うように、双子は手を繋いで一足先にムラクモ本部へ向かう。

後を追って大部屋に入れば、部屋の空気は医務室とは別の気まぐさで満たされていた。研究員や作業員の往来で騒がしいのは相変わらずだが、全員がちらちらと部屋の奥へ視線を送っている。

今にも破裂しそうな空気をさらに刺激するのは、モニター越しに向かい合う男女二人の声だ。

「……SECT1ーが優秀であることはよくわかった」

パスン、パスンと小さな音がする。エメルがつま先を持ち上げては床の上に叩きつけているのだ。

厚い絨毯が衝撃を吸収するため大したことはないが、それすらこの空気の中では起爆剤になりかねない。後ろに控えるシズカの髪が、音に合わせて竦んでいる。

「だが、こちらに来たからにはこちらの作戦に従ってもらわねば統率がとれない」

『……貴女は何か勘違いをしているようだ。SECT11はあくまでもステイツの軍隊。日本の真竜討伐に協力はするが、指揮権はあくまでも合衆国にある』

エメルはこちらに背を向けているから顔は見られないが、声音は明らかに苛立ちを孕んでいる。そのうち発火でもしそうな雰囲気だ。眉間には深いしわが刻まれていることだろう。

対して、通信相手であるアメリカ代表は涼しい顔のまま、どこ吹く風といった様子で冷たい笑みを浮かべた。

『我が国の国防長官であつた貴女ならともかく……ムラクモ総長の命令に従う義務は、我々の兵士にはないので、エメル女史』  
「バカ者！　今はこの星の危機なのだぞ!!　国単位で話をしていてどうするのだ!」

『人間の世界は、何かと複雑でね。貴女には理解できないかもしれないが……』  
「な、何かケンカしてるっぽい……?」

「ムラクモに従う義理はないし、人間じゃない奴は口出すなって」  
「え、え?　ほんとにそう言ってるの?」  
「こんな時に堂々と種の差別発言するって、大物なのかバカなのかわからないわね」

「しーつつつ!　聞こえちやうよ!」

と言いつつも、ミナトの顔はフロワロに枯らされた植物並みにげんなりとしている。視線は明後日の方向へ飛んでいるし、こいつもこいつで呆れを隠せていない。

それも無理はないか。エメルの言う通り、今は地球全体の危機であるのに、画面の向こうにいる男は竜災害に通じているエメルを爪弾きにしたのだ。遠回しに種族のことまで口に出して。竜災害前の世なら多様性だの協調性だのを重んじていたから、目の前の男には世界中

からバツシングが飛んでいただろう。

だが生憎、今は声を上げる余裕すらない世界だ。アメリカの臨時政府代表はこの機会を活かして思う存分羽を伸ばしているようである。こっちとしては親指を下に向けてやりたい。

『……世界の平和を守るという意思是、我々もあなた方と変わりなく持っている。我々はアメリカ流で、あなた方は日本流で……ドラゴンの駆逐に向けて、精励しましょう』

支援とは名ばかりの、好き勝手させてもらおうという宣言を最後に通信は終了する。

途端、エメルが小さな拳を上下に振り抜いた。もしその手に割れ物が握られていたら床に叩きつけられ粉々になっていただろう。

「デイヴの奴め……！ 先の大戦では忠実さだけが取り柄の男だと思っていたが、とんだ食わせ者だったな」

「言い方があれだけど同意するわ。アメリカは戦力外ね」

「ああ、来たな、13班……」

壇上のモニター前に進むとエメルからノコギリのような視線を向けられる。怒りの感情がいつもより増し増しだ。

「ヒュプノス」というのは彼女とアイテルの故郷である星の名前だったか、種族の名前だったか。竜に滅ぼされたヒュプノスの巫女で怒りの化身だという彼女は、その肩書きに違わない怒気をまとっていた。今の顔を見せればたぶん熊やイノシシも追っ払えるだろう。

触らぬ神に祟りなし、というようにモニターと向き合ったまま、ミロクがキーボードを弾く。

「だけど大統領の言う通り、SECT11の指揮権がこっちにないのは事実なんだよな……。リーダーの二人はああだし……」

「貴重な戦力って思ってたけどアテが外れたわね。無視よ無視。あい



つらは放っておいたほうがいい」

「……うむ。デイヴがああの調子では共闘は難しいだろう……そうするしかないさそうだな」

部下が部下なら上司も上司か。なんとなく予想はできていたが、やはりSECT11始めアメリカ側はムラクモの手を取る気は一切ないらしい。

舐めた態度を隠そうともししていなかったデイビッドにはなんだから既視感を覚える。そうだ、昔話などによく出てくる悪役のキツネだ。そう思うとどンドンそれっぽく見えてきた。

「悩んでも答えが出ないことだ。SECT11のことは、とりあえず捨て置く」

象牙色の水干をひるがえし、エメルは数秒前まで抱えていた怒気を払う。伊達に長い間戦ってきたわけではなく、ドラゴン討伐という目的がしっかり見えていれば切り替えは早い。

「シキ、ミナト。今日集まってもらったのは他でもない。今後の方針について話をしたいと思つてな。来るべき竜戦争に備えて、かねてから用意していた策がある」

「策？ SECT11とはまた別の？」

「ああ。前にも言っただろう、各国に残る殺竜機関と連携して次へ向けた研究、開発を進めていると。それは……」

「み、みなさーん！ きききき、緊急事態ですー！」

シズカの高い声が響いて話が中断される。

周囲から注目とエメルからの睨みを一身に受けてもシズカは止まらない。縮こまりながらもハキハキとした声で用件を述べた。

「さきほど、フォーマルハウト襲来以来孤立していた都庁から救難信

号が届きました！ 議事堂への拠点移転後も、都庁の居住区に残っていた一部の市民が発信したものと思われれます！」

「都庁から？」

東京都庁。懐かしい名前が出てきた。

二つの高い棟が繋がれた特徴的な建築物は、自分とミナトが出会い、かつての竜災害で人間の拠点となった場所だ。

拠点の機能としては完全に国会議事堂へ移管したものの、数少ない人間の生活圏だ。最低限の管理のための人員がいて、個人的な事情や思い入れでたまに都庁に向かう者も少なくない。

けれどそれも、ニアラを倒してからフォーマルハウトが来るまでの話。一度地上から払ったフロワロは懲りもせず東京を覆った。帝竜がいらないなら異界化はしていないだろうが、都庁も例外なく侵食されているだろう。

「……そこに残っている者たちの名簿はあるか」

「はい、こちらになります！」

バインダーを受け取った時こそ仏頂面だったが、資料をパラパラめくるにつれて眉間のしわが少しずつ消えていく。竜対策に役立つ情報でもあったのか、ほう、とエメルは呟いた。

「いい報せだ。現在、議事堂は深刻な人手不足だ。都庁に残っている者の中には研究者も含まれていると聞く。今後の対竜戦に向けて、彼らとの合流は必須と言えるだろう」

仕事だと言って資料が手渡される。名簿には一般市民の名前がちらほら、中には竜災害前から付き合いのある研究員も少し。

都庁は人類の第二拠点として物資が貯蓄されている。昨年のように異界化もしていないなら死傷者が出ている可能性は低い。

孤立していてもしばらくは持つだろうが、フロワロと敵性体はあそ

ここにも発生しているはずだ。早く行かないと、とミナトが声に不安を滲ませる。

「議事堂前の駅から丸の内線の鉄道を走っても30分以上はかかっちゃうよね。誰かに車を出してもらえないかな」

「救助の補佐も必要だろう。自衛隊に出動要請を出しておく。彼らの車に乗っていい」

方針がまとまったことでムラクモ本部が一気に騒がしくなった。ミロクたちを始め手の空いている者がそれぞれ都庁へ連絡を取ろうとしているが、繋がる様子はない。

フロワロの花粉……瘴気は電波の通りも阻害する。帝竜を一体倒しただけでは東京中のフロワロはほぼ駆除できていない。アメリカとは耐災害性のある衛星通信を使っているため問題はないが、それ以外だと単純な信号の送受信以上のやりとりは難しくなっているみたいだ。

自衛隊への要請を手短に済ませたエメルが振り返る。

「昨年同様、マモノはもちろん、ドラゴンがいる可能性もある。緊急作戦行動を発令する！ 東京都庁にいる市民を救出しろ！ ……話の続きはその後だ」

次々と移り変わる状況に振り回されて拠点から送り出される。竜災害なんてこんなものだと思いつつも、人の都合もお構いなしに押し寄せる理不尽と忙しなさは大嫌いだ。

ああ、何もかもが煩わしい。

「……めんどくさい」

これぐらいは許せと吐き捨てた愚痴はミナトの耳に拾われて、苦笑と柔い手が優しく背中をなでた。

\*\*\*

「すみません、私が去年の春休みに車の免許取ってれば……！ 通学通勤は電車で済ませるつもりだったので……っ！」

「気にすんな！ 免許取ってたってその年で車買うのは難しいだろうし、都内には乗り捨てられた車がごろごろあるが盗難するわけにもいかないだろ！ 道が荒れてるから揺れるぞ、舌噛むなよ！」

運転席のマキタが大きくハンドルを切る。予告通り大きく車体が揺れて、前のめりになる体をシートベルトがギツチリと押さえつけた。

最優先事項の人命救助を始め、利用可能な物資の回収、道中に議事堂と都庁間の通信状態を改善する補助装置の設置も実施するのとことで、都庁への出動は思ったよりも規模が大きくなった。自分たちが乗る車が先導し、後ろにリンを含む戦闘部隊の車両が列となつて続く。

助手席に座り双眼鏡を覗いていた隊員が無線機を手に取り、「注意！」と部隊に通信を飛ばす。

「前方百メートル、都庁前に小型のドラゴンを発見！ 周辺には小規模なマモノの群れがいくつか確認できます！」

「ドラゴンは避けられないな、ここは開けてるからマモノたちにも気付かれそうだ。隊長、どうする！」

『各班分かれてマモノに対処しろ！ 13班、ドラゴンは一体だけだ、任せていいか！』

「もちろんです！ ドラゴンを倒したら私とシキちゃんは都庁に入ります！」

リンの声に返事をしたのはミナトだった。隊員に無線機を返し、双眼鏡を借りて敵影を確認する。足の裏にばねがついているようにビヨンビヨン跳ねるシルエットは小型のドラゴンのものだ。

「あれはリトルドラグかな……？ このまま真っ直ぐ走ってください、攻撃するので窓開けますね！ シキちゃん、腰支えてもらってもいい？」

「わかった」

開かれた窓から風が叩き込まれて髪が暴れる。ミナトがシートベルトを外し、身を乗り出して腕を伸ばした。バランスを崩さないように抱きつく形で体を支えてやる。

クロウを装着した人差し指がドラゴンに向けられる。少し遅れて、ぶわりとマナが彼女の体からあふれだ。

「ダメだ、マナがこぼれちゃう……ベイちゃん！」

『呼んだか、小娘』

自衛隊員でもパートナーの自分でもない名前が呼ばれると、ミナトの影が音なく蠢く。トランペットが出すような高音から地割れのような低音まで混ざった不協和音と共に、どす黒くなった影から赤い目玉がいくつか浮き出た。

ミナトに密着している自分はグロテスクなそいつとの距離も極めて近いのだが、文句は言わないで置いてやる。邪悪な見た目でも一応……かなり癩だが、一応味方なのだ。

煙なのかスライムなのかよくわからない不定形なこいつは、自身のことを邪神だなどとうそぶいている。正式名称は「邪神インヴェイジョン」らしいが、

「これから長丁場になりそうなの、帰ったらパンケーキ作ってあげるから力を貸して！」

『ばんけーきとはあの柔らかな狐色の菓子か。何枚だ』

「……………さ、三枚！ とつておきのメープルシロップもつけますー！」  
『うむ、よかろう』

この通り、甘味に釣られてミナトに飼われることになった、使い魔みたいな奴だ。「長いから『ベイちゃん』って呼ぶね」と宿主であるミナトにあだ名まで付けられ、もはや威厳も何もないペットである。

緊張感のない会話から一転、赤い目玉の影は不気味な霧となりミナトを包む。

ニアラとの戦いで酷使され、「パンクした」という彼女の体は練り上げたマナを外に漏らしてしまう。邪神はそれを絡め取ってミナトの中に流し返しているらしい。ホースに空いた穴をふさぐ補修材のよくな役割だ。

「ていうかスライム、あんた動けるんなら最初から働きなさいよ。なんでティアマツトとの戦いの時には出てこなかったわけ？」

『スライムとは何だ、小娘其の二め。対価の用意がなかったからに決まっておろうが。神をただ働きさせるなど何度も説いたはずだぞ。貴様の頭には穴でも空いているのか？』

「塩 茹 で に す る ぞ」

『ピギイツ!!? 貴様いつの間に塩を!』

「ごらー！ 二人とも喧嘩しないでー！」

赤い目玉をわしづかみすれば気色悪い悲鳴が上がり、ミナトが今はやめたと抗議する。そうこうしている間に還元されたマナが彼女の指先に収束し、助手席の自衛隊員が標的との距離を告げる。

「ドラゴン接近、残り三十メートル！」

「了解、撃ちますー！」

引き金を引くように、重なっていた親指と中指が弾かれる。

同時に、こちらを向いたドラゴンにマナが殺到し、極限まで凝縮してバツンと弾け飛んだ。エナジーピラーと呼ばれる純粋な魔力の弾丸だ。

体の大部分を丸く抉られ、リトルドラグはその場に転がった。

「ミロク、どう!？」

『敵個体から生命反応消失! 問題ない、倒せてるぞ!』

「よし、さすがだ! このまま都庁の広場に停車する!」

列になっていた後続の車両が左右に分かれ、エンジン音に反応して集まってくるマモノに隊列が展開される。マモノの叫びと発砲音が飛び交うのを尻目に都庁前広場に滑り込んだ。

久しぶりの東京都庁。だが湧いてくるのは懐かしさではなく焦り。自己主張をする赤い花が、この地も例外なく汚染されているのだと語っている。

『クソ……こんなところでまでフロワロが入り込んでやがるぞ。すぐに生体反応の検出にかかる。みんな……無事でいてくれよ……!』

「フォーマルハウトが襲来した日に、都庁には俺たちの仲間も何人かいたんだ。13班、すまないがそいつらを見かけたら頼む!」

マキタたちに礼を告げて広場から一階のエントランスへ駆け込む。物資やら通信やらは他に任せ、まずは都庁での敵性体排除だ。

「ミロク、屋内のスキャン頼める?」

『ああ、ちようど今……、ん……?』

どうしたのかと尋ねるより先に、視界に都庁の地図が広がる。

ここに戻るのは議事堂へ引っ越しした年始以来だ。日付が新年で止まっていた見取り図がナビによって更新されていく。

広さや家具の位置など大部分は変わらないため、事前情報通り異界

化はしていないと見ていいだろう。何よりも注視すべきは敵性反応だが……それを示すアイコンの数がやたらと少ない。

「ドラゴン反応はなし？ マモノもほとんどいない……本当にこれだけ？」

『一通りスキャンはした。一度異界化してる土地だから、もう少しひどいかと思ってたけど……予想よりも少ないな』

「議事堂と都庁は真竜が来てからまったく連絡できてなかったんだよね。まだ通信不良が起きてて、スキャン漏れがあつたりとかは？」

『いや、回線は問題ない。シズカが都庁の方からSOS信号が届いたって言うてた？ あのタイミングで通信状況は改善が始まってたんだ。何がきっかけだったのかはわからないけど』

「それは、自衛隊の人たちが街中に通信の中継装置を設置するって……」

「この作戦の中ででしょ？ なら都庁からのSOSが届いた時はまだ何もできてないわよ」

答えが導き出せず、しんと静寂ばかりがエントランスを包む。表で自衛隊がマモノたちと交戦する音がよく聞こえるほどだ。

帝竜の力により人智から切り離されるのならともかく、ただフロワロが侵食しているだけなら、自分たちから身を隠すなんて知能を持つマモノは発生しないと見えていい。たまたま屋内よりも屋外での発生が多かったのか、都庁の人間でも対応できるほど弱い個体ばかりだったのか。

（何だ、違和感が……）

ぐるりと辺りを見回してみる。

使う人間がいなくなったためか、床や皮張りのベンチには埃が積もっていた。天井から降り落ちる砂埃はフロワロの瘴気で赤く染まり、去年自分たちの家として賑わっていた記憶が幻のように霞んでし



まいそうだ。

ただ、床には人間の存在を保証する痕跡がくつきりと刻まれていた。

「足跡がある。埃も舞ってるし、さつきまで誰かがここにいたんじゃないの？」

「二人二人じゃないよね、でも向きも数もあちこち行ってるバラバラさじゃないし、グループが隊列組んで動いてる感じ……？ ミロク」  
『残ってた人たちのものじゃなさそうさ。そのまま視線合わせてくれ。……オツケー、撮れた。ミイナ、解析頼む。オレたちはこのまま救助活動開始だ、急ごう！』

エレベーターは止まっているみたいだ。階段を使って二階に上がる。

都庁に入った瞬間からマモノ数体との取っ組み合いは覚悟していたが、未だに遭遇する気配もない。静かな空間に自分たちの足音が嫌に響いて、前進する体がよんだ空気を押しのける感触を拾う余裕すらある。

不穏な何かを拭えないままフロアへ入った途端、血臭と硝煙の匂いが鼻いっばいに広がった。

「何よこれ、煙い！」

「つわあ、マモノがたくさん……」

2020年のムラクモ試験を思い出す光景だった。廊下にはマモノの姿がそこら中に沸いていて、けれどどれもが四肢を投げ出している。極めつけにはドラゴンの死骸まで転がっていた。

その死骸と血溜まりと同じくらい、小さな金属がそこら中できらめいている。硝煙の発生源はこれか？

「薬莢？ 誰かが戦ってた？」

「ま、待って！ それより生体反応がある！ 生存者がいるよ！」

その声は、とそれぞれの部屋から人間たちが顔を出す。いずれもリストに載っていた民間人だ。みんなが一樣に怯えてへっぴり腰だが、怪我は負っていない。先客たちには人間と獣の区別をつける知性はあつたようだ。廊下は荒れに荒れているが、人的被害はないと言つていいかもしれない。

派手に暴れても人は傷付けず、マモノとドラゴンの敵性体のみ屠る技量。そして、ドラゴンの巨体からDzとなる部分がちやつかりくり抜かれているあたり経験者だ。

なら、答えは自然と絞られる。

民間人の保護を進めつつ聞き込みを試みる。揃つてあげられた特徴は「黒ずくめの武装」と「英語」の二点。

一気に肩から力が抜けて天井を仰ぐ。こんな面倒事確定じゃないか。

「……ねえ、帰つていい？」

「ままま待つて待つて、気持ちわかるけど！ まだ都庁の探索終わってないから！ 別の階に残ってる人もいるかもしれないし！」

『要救助者の生体反応、検出完了。ミナトの言う通りだ、10階のフロアに生体反応多数！ すぐに救助に向かつてくれ！』

「くっそ、面倒！」

『こら、人命救助だぞ！』

「面倒なのはそつちじゃないわよ！」

改めて敵性体の気配がないことを確認し、リンに現在位置と状況を報せる。マモノの群れはそろそろ片付くようで、何人かが既に都庁に入つてこつちへ向かつてくれているらしい。

民間人を集めて自衛隊を待つよう告げ、作業員が稼働させたエレベーターに乗り込んだ。軋んだ音を立てる箱の中でGを感じながら、剣に不調がないかを確認する。

「どう考えても、いやどう考えなくてもあいづらね。場合によっては戦闘になるかもしれないから、準備しておいて」

「戦闘にならないのが一番だけどね。でもなんで都庁に……？　ここに協力する気はないって断言してたのに。嫌な予感がするなあ……」

チン、とベルが鳴り、目的階への到着を告げる。

「ミロク、ドアの外に生体反応は？」

『すぐ近くにはない。けど気を付けろよ、フロワロの影響で通信は完璧じゃないからな』

「了解。準備は？」

「大丈夫、できてるよ」

左足を引いて剣を持つ右腕を構えておく。ミナトが指先に溜めた冷気がこぼれ、床に小さな霜柱が立つ。

唇を引き結んで目を合わせる。

「行くわよー！」

ドアの隙間に左手を突っ込み、一息でこじ開けた。

\* \* \*

救助活動のサポートはナビたちがいれば十分。マモノの駆除や通信回線の補強作業も順調に進んでいるようだし問題はなさそうだ。

あとのことは皆に任せて大丈夫だろう。エメルは踵を返してムラクモ本部を出た。

なぜ子どもがムラクモ本部から、という周りの視線にはもう慣れっこだ。自分も子どもの姿になったばかりの時は取り乱したし、しばらくは慣れなかったけども。今となっては些事だ。

「私だ。……ああ、作業は以前に言ったままの内容で構わない。あの点には注意して進めるように。それから——」

部下からの通信に指示を返しながら、あまり世話になったことのない医務区に入る。

機動班を危険な前線に送る立場ゆえか、自分は医療従事者たちに要注意人物として見られている節がある。顔を合わせるたび傷病人に無理をさせないようにと言われるほどだ。

(今回も説教をくらうかもしれないが、悠長に足踏みもしていられん)

見舞いの品も持たずに悪いが、現状、山のごとく障害が積み上がっている。解決のためには彼の協力が不可欠だ。一刻も早く戻ってきてもらわなければならぬ。

医務室の扉を開き、ナースたちに手を挙げて最低限の挨拶をする。照明も空気も薄暗くよどんだ一角、ベッドの上では男がぐにやりと背骨を曲げていた。

腰から根が生えたように微動だにしない彼に向け、通信機を持った手を伸ばす。

『中継器の設置と動作確認、80%まで完了。通信状況、改善されつつあります』

『最高顧問、解析に回していただきました帝竜ティアマトの検体について——』

『13班が都庁内十階まで到達したようです。物資回収、施設点検のため作業班も都庁内へ入ります！』

『港区周辺のフロワロ反応、及びマモノの活性化が機動班の出動基準

を超えています。出動の検討をお願いします」

『一般市民からフロア改修の要望が多数寄せられています。先日のムラクモ会議ではファクトリーが優先されていました……』

ひっきりなしに声が飛び出し、無数の報道相がラジオのように流れていく。重要な内容から、わざわざトップのエメルに聞かせるまでもない枝葉末節まで様々だ。

「……おまえの代わりに総長に就任したものの、雑事が多すぎて大事な仕事を手につかん」

2020年までは極秘組織だったムラクモ機関だが、昨年の竜災害で表舞台に立ったことで、規模も活動範囲もうんと広がった。

世間の目に触れないようにという縛りが消えたのは良いものの、その分仕事は爆増だ。組織を回すための人員の配備に、本来の畑であるドラゴンの研究や装備・スキル開発もある。だから人手が欲しい。キリノのように実力のある人間ならなおさらだ。

「もう、傷は治っているのだろうか？　なら早く前線に復帰を——」

「無理ですよ、こんな体じゃ……」

「私だってこんな子どもの体だ。だが、口さえ動けば指示は出せるぞ」

自分ひとりだけではムラクモ全体を動かす頭脳として不足している。キリノとて理解しているはずだ。

それでも彼は振り向かない。

乾燥して傷んだ髪が、細かく左右に揺れる。白衣を羽織った肩が震える。歯軋りすらできないと思わせるほど弱々しい声が絞り出される。

「違う……僕だって、動きたい……みんなの力になりたい……！　だけど、今の僕に……何ができるっていうんですか！」

薬も機材も作戦も、全てを自由に生み出せるはずの体は完全に停滞していた。あとはわずかな吐息がこぼされるだけだ。

「キリノ……」

肉体の一部を削がれ、同時に意思も砕かれてしまった人間を見るのは初めてではない。業腹ではあるが、ドラゴンの力に対して人間の存在は紙くず同然だから。

芯を失った背中が、記憶の中にいる数多の面影と重なる。生まれ育った故郷で、滅ぼされてしまった星々で、辿り着いた地球で、同じようにドラゴンに立ち向かっては蹂躪されていく人々。日常を打ち壊され、当たり前を奪われ、摘み取られていった命たち。

希望の火があっけなく吹き消される場面には幾度も立ちあつてきたが、こればかりは慣れやしない。

大きなハンデを負ってしまったキリノには何が残っている。折れてしまった意思が何を為せる。

そんなもの、答えなど、言えることなど。

「……おまえに何ができるかを真に理解しているのは、おまえしかないだろう」

ひくり、とキリノが一瞬止まる。

けれどそれだけだ。もう反応はない。

諦めるつもりはないが、彼のために紡げる言葉はすべて出した。それでも動かないのなら、動けるようになるまで自分が代わりに戦うだけだ。

腹を括ったエメルは「また来るぞ」とだけ告げ、医務室を後にした。

\* \* \*

「――よし、敵影なし」

「気配もない、進もう！」

研究員が資料保護のために死に物狂いで除染したのか、十階のフロワロの浸食は最も軽微だった。おかげで息がしやすく、幾分体が軽くなる。

積み上げられた段ボールと資料棚の間を縫って研究室を目指す。戦いを予感して過敏になった神経がそうさせているのか、一歩進むたびに血の臭いがしてくるような気がする。

いや、気のせいじゃない。下の階よりも一段と濃い、鼻を刺す鮮血の匂い。

ぞぐんっ、とうなじが粟立った。

「戦闘準備！」

曲がり角の壁をつかんで無理やり体の進行方向を変える。

飛び出したことで激しく揺れる視界に映ったのは、マモノの死骸と血だまりと、

「おわっ!?! ちょ、ストップストロップ!?!」

「――っ!?!」

開かれていた扉からひよっこり顔を出したバンダナ男。

慌てて足裏を床に着けて上体を反らす。違う素材同士が不快な摩擦音を響かせ、それでも勢いは殺せず血だまりに足が突っ込む。

ぎりぎり衝突こそしなかったものの、盛大に飛び散った血が目の中のバンダナへ降りかかる。防ぐ術もなく、彼は直立不動で的となった。

「ぶっ……ばあっ!! まっず! マモノの血まっず!」

「……」

「あ、あれ? もしかしてオクタくん?」

後ろから来たミナトが名前を呼ぶと、全身血まみれになった男は顔を拭いながら目を輝かせる。

「おおっ! シバさんともうひとり、13班来た! もう大丈夫だろこれ!」

「えっ、シバさん!」

ミナトの苗字が呼ばれた途端に誰かが廊下に転がり出てくる。勢い余って血だまりに触れ、ぎゃあつと叫んだのは金髪の男だ。今度はミナトが「ハジメくんも!」と名前を呼んだ。

次いで白衣の研究員が一気に数人、さらには廊下の壁から(なぜだ)ポニーテールの女子がぬるりと出てきて、オクタと呼ばれた男の惨状を見て悲鳴を上げる。

わあ助かっただのちよつとその血どうしたのだのなんで君たちここにいるのだの四方八方から声が飛び交う。

戦闘に備えて全開になっていたエンジンが一気に冷却されていく。頭の中のブレーカーが落ちそうだ。

ダメだ、まだ任務中だろう。まずは現状確認をしなければ。

「……その研究員。とりあえず、周りに敵がいるかないかだけ教えてください」

「あつ、さつきまでいたと言えはいいのか……今はいいはず、です。私たちだけで判断するのは危険かもしれないませんが」

『敵性反応はない、けど。その三人、リストにない一般人だぞ……うち二人はこの間異能力者の適性検査受けてたオクタとアサヒナだろ! なんでここにいるんだよ!』

「あーそのそれはアレっすアレ。マリアナ海溝より深いわけがあるの



な……」

「ちよつとリヨウ！ それマモノの血だよね!? あんたの血じゃないよね!? ねえ!？」

「と、とりあえず人数を確認したいので、皆さん集まってもらえますか? 怪我をしてる人がいたら手当てするので教えてください」

「あれ、ちよつと待て、あいつどこ行った!? いつの間にか消えてる!」

「……」

マモノはいるにはいるがたった数体だけで、どれもが死んでいても血を流している。非戦闘員がわあぎやあ騒いでも新手が来る気配はない。ミロクの本皮でも敵性体は感知されないなら戦闘の必要はないだろう。

ただ、先に都庁で暴れていたらしい姿を見せなかった先客に、リストにはいない一般人がこの場にいることなどなど、ややこしい事態になっているのは確かだ。面倒くささが輪をかけてさらに面倒になった面倒オブ面倒が波になって押し寄せている気がする。

キリノの負傷から海の向こうの奴らとのごたごたもあるし、ものすごい勢いでタスクが積み上がっていやしないか。そのひとつひとつが厄介な割に、剣も拳も振るえていないからガス抜きすらできていない。

張り詰めていた糸はすっかり緩んでふつりと途切れてしまう。ベッドに入る直前の倦怠感が波のように体を包んだ。

「……もう頭使うだけなら、後任せる」

思考を投げ出してパートナーの背に寄りかかる。「まだ困るよシキちゃん!」という呼び声は聞こえない振りだ。

頭を空にして窓の外を眺める。スリープ状態の脳では空が青い、程度の感想しか出てこなかった。

Count 8. 殺竜兵器

どすどすどす、と地割れを起こす勢いで絨毯を踏みしめ進む。ぎりぎりぎり、と齒軋りの音も添えて、エメルは議事堂内を突き進んでいた。

先日決行された東京都庁での救助作戦はつつがなく、……人命救助「は」つつがなく成功した。リストに載っていた人間全員が無事だったのは幸いだ。

手放しで喜べないのは、人命以外の点で損害が発生していたからである。

13班からの報告によれば、研究室内のPCからは手当たり次第という形でデータがぶっこ抜かれていたらしい。救助された研究員の証言が確かならば、犯人は「黒い戦闘服」を着た連中で、「英語」を口走っていたとか。あてはまる集団なんてひとつしかない。

「SECT11め……舐めた真似をしよって……！ ドラゴン討伐以外に何が目的で東京へ来た!？」

まあ、百歩譲ってデータはいいとしよう。損害は出ているが、それに対する補填はできているから。

『なんで外に出たーっ!!?』

『すみませんごめんなさいごめんなさいーっ!!?』

都庁から議事堂へ帰還してくるなり、エメルよりも先に民間人が飛び出して拳骨を食らわせた少年少女……奇しくも、異能力者と判明している三人の子どもが、記憶媒体を確保していたのである。鴨川という姓を持つ少女が半べそで差し出してきたそれには、SECT11に抜かれる前のデータがしっかりと収められていた。

目を白黒させている間に受けた説明によれば、都庁に残っていた研究員の中には、異能力の検査をきっかけに鴨川嬢と懇意にしていた者がいて、鴨川嬢はその研究員の身を案じるあまり、私物の空気銃を抱えて都庁へ向かったらしい。残りの二人、朝比奈家と奥田家の少年たちは、彼女の動きに気づき、その後を慌てて追ったそう。

『それで……都庁について、研究員と合流し……SECT11が来るよりも前に、データを保存していたと？』

ドラゴン討伐に役立つ貴重な研究データだ。正直、一方的に奪われることを防いだ行動についてはでかしたと言いかけたが……片やプロの戦闘集団、片や異能力者がいると言えど、場数など踏んでいない素人たちである。よくSECT11を出し抜けたものだ。驚きと安堵と疑わしさを整理できず、本当におまえたちだけでやったのかとこぼれ出た問いには、異様に力強くうなずかれた。

ちなみに、議事堂を出る際にムラクモや自衛隊に声をかけなかったことについては、

『帝竜討伐直後なのに迷惑をかけるのは……』

『忘れてました……まじでうっかり……』

『右に同じです……まじでうっかり……』

『結果冗談じゃない迷惑かかってるんだけど、馬鹿じゃないの』

最初が鴨川、次が奥田、その次が朝比奈、最後にばつさり切り捨てたのがシキである。

直後にミナトがシキの口を押さえて頭を下げていたが、馬鹿げているという意見には同意だ。彼ら三人は議事堂で生活しているはずの民間人だ。……全員共通して、異能力の検査でB〜S級の能力を持っていると診断はされたけれども、ムラクモには参加していない一般人なのである。

そんな未成年が物騒な事件に巻き込まれたと知れ渡ってみろ、何か

にかこつけてこちらを批判するだけの政治家連中が何を言い出すか。万が一のことがあれば、将来の戦力足り得るかもしれない若者を失っていたかもしれないのだ。いずれにせよ命綱なしの綱渡りだったのである。

文句の一つも言つてやりたいところだったが、彼らの働きでデータが失われることはなかったし、死傷者は一人も出ていない。説教は子どもたちの身内に任せ、エメルは早々ムラクモの指揮に戻った。

……のだが。

『コード・アルファに問題発生？ どういうことだ!』

『はっ……はいっ! 富士からの搬送中に、反応がロストしてしまいまして……』

『なんだと……? あれが人類にとってどれほど重要なキーかわかっているのか!?!』

数日後には部下に向かって口から怒声が飛び出していた。一難去ってまた一難とはこのことだ。

「ちよつと任せておくとすぐこうだ! これでは体がいくつあつても足りんぞ!」

すれ違った誰かが肩を驚いてこちらを振り返ってくるが気にしている場合じゃない。

現状、対ドラゴン戦線はしつちやかめつちやかで何もかもが噛み合っていない。経験も知識も手探りの状態だったという昨年のムラクモ機関の方が、まだ落ち着いて対応できていたのではとすら思う。ナビに13班への言付けをしていたが、腹の底から怒りが噴火している体でじつと待つことはできなかった。自身の小さな歩幅に舌打ちしながらムラクモ居住区へ突撃し、彼女たちの部屋へ駆け込む。

『13班! 緊急呼び出しだ。すぐに――』

「ええい、いつまで寝ている！ さっさと起きろ、任務だ！」

ナビのコールが響くのと扉を開け放つタイミングはほぼ同時だった。

ターミナルの画面の中でミロクが目を丸くする。頼みの綱の女二人は休息中だったらしく、頭を押さえてベッドから跳ね起きた。

「うるっさいわね！ その起こし方やめてくれない……!?!」

「な、なになに、何……任務、緊急？」

「緊急事態だ。ムラクモの研究施設から議事堂に向かって輸送していた殺竜兵器が、都内でロストした！」

さつりゆうへいき、と目の前の戦闘員たちは緊張感のない活舌で復唱する。そういえば説明をしていなかった。そこからか。

あまりの面倒くささに漏れそうになった舌打ちを抑え込む。シキとミナトは身支度を進めつつ聞く姿勢になっていたので、逸る胸中を深呼吸で風がせ、努めて冷静に語りかけた。

「以前、言ったな。この戦争に勝つための『策』がある、と……その策こそが殺竜兵器だ。次なる真竜の襲来に備えて、一年前から着手し、密かに作らせていた」

「何で密かになのよ、私たちにも共有しなさいよ」

「いいや、そう簡単に生み出す、増やすことができる代物ではない。それほど貴重で、真竜討伐の決定打となる武器なのだ。おいそれと情報は漏らせない」

それこそ自分たちも輸送隊に加えるなりしろとツツコんでくるシキをひと睨みする。文句も確認も全て、今ばかりは後回しだ。とにかく説明、把握、行動が第一の事態である。

「この殺竜兵器が破損したり、第三者に奪われるようなことがあれば、

フォーマルハウトへの対抗手段は永遠に失われる。事の重大さが分かったか……？」

「永遠に……替えなんてきかないくらい大事なものってことだよね？ 行かない理由はないし、もちろん協力するけど……」

「よしなら行動開始だ最後に反応があったのは地下鉄の北戸線八王子駅だ13班は直ちに出勤だ殺竜兵器を発見回収しろ殺竜兵器については絶対に口外してはならん肝に銘じておけ！」

「いやちよつと待って話をー!?」

「服をつかむな！ 伸びるでしようが！」

ミナトがうなずいたのならこれ以上留まる必要はない。13班の二人の襟首をつかみ、一息で要点を伝えて議事堂から叩きだす。

「頼むぞ、傷のひとつでもつけてくれるな……!! あれは人類の命綱そのものなのだからな……!!」

比喩でも誇大でもない。すべてはドラゴンに勝利するためだ。そのため欠けてはならないピースが、敵性体が跋扈する東京のどこかにある。

念に念をこめて伝えれば、文句を言いかけていた13班は口を閉ざし、顔を見合わせて出発した。

前回の大战で人類を勝利へ導いた二人だ。大丈夫だとは思いたい、が……。

「ええい、こうしてはおれん!!」

殺竜兵器の無事を確認するまで気など抜けるはずもない。ムラクモ本部で作戦の動向を確認するため、エメルは息をつかずに踵を返した。

\*\*\*

車を走らせてくれた自衛隊員へ手を振り、太陽から逃れるように地下に踏み込めば、陽を浴びていない湿った空気が体を包む。

風が吹いていないため、ここにはフロワロの香りが溜まっている。一步進むたびに地面で淀んでいた砂埃と毒の花粉が舞い上がり、思わず口を押さえた。

『殺竜兵器は巨大なカプセルに収められているはずだ。必ず見つけ出し、無傷で持ってこい。失敗は許さんぞ！』

自分たちとナビの呼びかけよりも早く、殺気すらまとったエメルの声が通信機から響いた。フロワロが咲いてからまだ探索の進んでいないエリアで大きな音声を出すな、マモノやドラゴンが集まってきたらどうする。

『フロワロ濃度は……何だ、他エリアより高いな……？ ティアマツトが支配してた丸の内からはかなり離れてるから、あいつを倒してもこのフロワロは大して減らないだろうけど……』

『去年、ザ・スカヴァー討伐を中心に探索したのは至台場の地下道だから、ここはほぼ手が入ってない場所ですね。ただでさえ、地上の探索と整備で手いっぱいだったし……ミロクは13班の支援に集中してあげて。地形把握と分析は私が』

怒鳴り声を浴び続けた耳を双子の声が優しく撫ぜる。ミナトがだらしなく表情を崩してミロクとミイナをかわいがっているところをよく見るが、ストレスが降り積もる今の状況ではあながち馬鹿にできない。実際、普段何とはなしにコミュニケーションを取っている彼らの声で今安心を感じているのだ、自分がどれだけ苛立っていたのかよくわかる。

通信機の向こうから流れる声と打鍵音に双子ナビの姿を思い浮かべつつ、自分が先頭、剣の届く範囲より少し距離をとってミナトが後ろから続く。

目標は巨大なカプセルに入っているとのことだが、はてカプセルと言われても、飲み薬やらおもちゃが入った手のひらサイズの物しか思い浮かばない。兵器そのものの外観についてさえ共有されていないのに、見つけられるのかどうか。

ダメ元でミロクたちに尋ねてみるが、彼らも自分たちと同じく何も知らされていないらしい。殺竜兵器か、とミロクがぼんやり呟いた。

『兵器っていうくらいだから、巨大な爆弾とか、大砲とかか？ 想像できないけど、エメルがこっそり作らせてたくらいだから、すごいんだろうな……』

『そんな物を輸送中になくすって、マジで何してたのよ輸送隊は』『エメル、すごく怒っててちよつと怖いです……なんだかピリピリしてる……』

もちろんエメル本人には届かないよう、13班とナビの間だけに限定された通話で小声を交わす。

ぱつと見、フロワロの繁茂による異界化のパターンは、昨年散々走り回った地下道と同じだ。脱線して転がる車両に、壁に大きく穿たれた穴。地下帝竜は都内の地下を這いずってここも通っていたのかもしれない。

となると、ここ一帯も迷路のように入り組んでいる可能性が高い。ただでさえ暗闇の中、手持ちのライトだけ視界が狭くて歩を進めにくい。未知のエリアということもあってミロクたちもできる支援が限られている。兵器に何かあってはいけないし、時間との勝負ではあるが、このままのペースではちよつとまずい。

「シキちゃんどうしよう、灯りつけようか？ 電気を通す装置は見当たらないから、火を照明代わりにすることになるけど……ここ地下だ



から、酸素が尽きないように加減すると、ちよつとしか使えないかも」「ライトみたいに一瞬で消灯できるならいいけど、そうじゃないんでしょ。マモノが寄ってくる可能性もあるし……、……いや、それだ」「え?」

「ナビ、ガスとか粉塵とか、一気に引火するような危険がないか確認できる? あとできるだけ敵性体の位置をマップに反映して。よし任せる。……視界を確保するための光源はライトのまま。火が使えないなら、それは困にして」

「あつ、なるほど……頭いい!」

どうしたってマモノもドラゴンもないことにはならないのだから、やり過ぎして先に進むしかない。火を灯すことで事故が起きてしまわないかだけを念入りに分析し、問題ないと確認してからミナトにOKのハンドサインを向ける。

サイキツクの腕が、そこそこ開けた何もない場所を捕捉する。

攻撃手段ではなく、目印として炎が浮かんで数十秒。息を殺しながら見守る中、あちこちの物陰から次々とマモノが這い出てくる。四足歩行の獣からうねうねとシルエットを変える異形まで、灯りを覆い尽くすほどの大漁だ。嬉しくないが。

唇は結んだまま、ほとんど這うようにして移動する。急いでいることもあって焦りと共に心拍が加速するが、いつの世も急がば回れだ。音を立てず、停滞している空気を乱さず、慎重に。

ある程度地下道を進んだところで、改めてナビへ周辺の反応検知を頼む。手持ちのレーダーも使って探るが、めぼしい反応はない。ライトで周辺を照らしても、浮かび上がる影にカプセルらしいものはない。

この先は瓦礫と電車の車両が積み重なった壁で行き止まりだ。無理に崩せばマモノたちが集まってきて大混乱になるだろうから先へは進めない。となると。

(……残ってるのは……)

『穴』ね。そのの)

状況とアイコンタクトで互いの思考はすぐに読めた。

電車を通るために丸く大きく掘られた地下鉄道。その壁面に大きく空いた、蛇の巣穴を思わせる洞。奥に広がるサイケデリックな苔が埋め尽くす空間。

ザ・スカヴァーの発生で生まれたのだろう異界だ。あいつは帝竜の中でも最大の体長だったが、神奈川付近のここまで活動範囲にしていたとは。

『……よし、壁に空いた穴から奥に侵入してみよう。……今度は、ちゃんとナビゲートするからな、信じてくれ』

「大丈夫、信じてるよ。ミロクのナビだもん」

ガトウに叱責された昨年を思い出したのか、ミロクの声はいつもより低くて慎重だ。必要な言葉はミナトが小声で返したので、自分も相槌だけしておいた。

ミナトが灯していたむき出しの炎に知能のないマモノが触れ、耳障りな悲鳴が響く。一気に騒がしくなったマモノたちの騒音に便乗し、線路の上から壁の向こう側に駆け込んだ。

懐かしくも嬉しくない一年振りの景色に迎えられる。緑と青の渦巻き模様とフロワロの赤が目にも痛い。

『……このあたりまで前大戦の影響が残ってるな……。ん……。ちよつと待てよ?』

「何、異常でもあった?」

『いや、一瞬、多数の生体反応を感知した』

「は、何? 多数?」

わざわざ声に出してアナウンスしたのだ。ただのマモノやドラゴンとは別の反応なのだろう。なら、考えられるのは人間だが……。

『こんなところに、生存者集団が……?』

「集団……」

なぜだろうか、本来喜ばしいはずの生存者の存在を聞いて苛立つてしまうのは。

『ごつちでもう少し解析を続けてみる。13班は先に進んでくれ!』  
「こんなところで人間の生体反応……? 多数……? 集団……?」  
「し、シキちゃん? うわすごい眉間のしわ……」

自分たちの活動範囲内に現れる複数人の人間。この情報だけで嫌な気分になってくるのはなぜだろう。

つい最近嫌なことがあったからだと自分自身で答え合わせをする。ぼんやり浮かんでくるのは銃と英語と黒づくめだ。

嫌な予感しかしない。気付けば頭を抱えるようにして髪をかきむしりそうになっていた。

「……頭痛くなってきたんだけど、気のせいよねこれ。生存者っていうのもきつとただの民間人のことよね。どこかの誰かさんじゃなくて」

「き、気にしすぎだよ大丈夫大丈夫! ほら顔上げて……わあ、あれは何だあ……フライドラゴニカだあ……!! 久々にDZが取れるぞお……!!」

「戦闘だ……っ!!」とやけくそ気味な明るい声にブブブという羽音が反響しあう。

巨大化したトンボを思わせるドラゴンは今まで確認されている敵性体の中でもかなり素早い。が、向こうがこちらに狙いを定めるより前に、ミナトの指が鳴った。

空気に湿り気があるためか、普段より遠い射程でも問題なく氷が出

現する。亀の甲羅のように羽と背を固められたフライドラゴニカは呆気なく苔むした地面に落ちた。

「ほらシキちゃん、これであとは煮るなり焼くなり……ぶわっ!」

「あつ、馬鹿!」

ミナトがこつちの手を引いて呑気に踏み出した瞬間、フライドラゴニカの大きな目玉が発光した。

視界を狂わせる強烈な紫外線を浴びてのけぞる背中を受け止める。抜刀の勢いで剣を振り上げ、頭と胴を繋ぐ節を切断する。ドラゴンの首がぽんつと宙を舞った。

「……あんた思いつ切り油断してたわね?」

「い、一応デコイミラーはかけてました……」

「そういう問題じゃない。ソルマネル使って。DZは回収しておくから」

わかりやすくしゅんとしたミナトを壁に預け、首をはねてもわずかにのたうっているドラゴンの胴にナイフを入れる。

去年の今頃は戦いに不慣れで反応の遅れが目立ったが、今も今で気が緩みすぎだ。フライドラゴニカの武器である羽を封じていたから大事に至らず済んだが、他のドラゴンだったら致命傷をもらっていたかもしれない。いつになっても手のかかる相棒だ。

(いや、今のは……)

そもそも、ミナトがあんな風に動いたのは自分の動きが鈍っていたから。ドラゴンを発見するのも後衛の彼女の方が早かった。

五感が優れ、何かあればすぐに飛び出せる自分だからこそ先陣を務めているのに、注意力散漫にもほどがある。

体調が悪いわけじゃない。自分で把握ができていない異常があつ



もごもごしているエメルの声はミュートし、ミロクとミイナの指示に従い地面に空いた大穴へ飛び込む。U字になっているトンネルを這いあがった先には、へたり込んだ女性と、今まさに飛びかかろうとしているドラゴンがいた。

『シキ、相手の左脚、上がったタイミングで狙え!』

視界に入れた一瞬で標的の分析が済んだらしい。全身が鉱石で覆われたドラゴンの後ろ脚、地面を蹴りつけて勢いを付けようとしている左にミロクがマーカーを表示した。

背後から巨体の下に滑り込む。通り抜けざま、地面から離れた相手の左脚に剣を引っかけ掬い上げれば、ドラゴンはバランスを崩して横転した。

女性の保護は穴から飛び出してきたミナトに任せた。カバのような頭を持つ二足歩行の竜、アルマノスは外殻が強固で打撃も斬撃も効きにくい。今のうちに急所を突いて追い詰めないと、戦闘が長引いてしまう。

狙うのは口の中か目玉。ワンパターンになりつつあるが、実際の部位より柔くてダメージを与えやすいのだから、狙わない理由はない。ウオークライだつてこの手で倒した。

「起きるな、そのまま寝てろ!」

立て直そうとする体に突進し、頭の横から剣を突っ込む。切っ先は狙い通り目玉に突き刺さつてアルマノスはしわがれた悲鳴を上げた。

そのままもう片方の目まで貫通できればと思っていたが、天叢雲剣は途中でギシリと止まってしまった。頭蓋骨のどこかに引っかかったのか、単なる自分の力不足か。

歯噛みする暇もなく、アルマノスが馬鹿力を発揮し全身で大きく跳ねる。振り払われたはずみで剣が目玉ごと頭から抜け、残った片目が

忌々しそうにこちらを睨んだ。

『覚えてるか？ こいつ岩を吐くのと全身で転がって轢こうとしてくるぞ、気を付けろ』

「大丈夫よ。それじゃあね」

ミロクにはなく目の前の敵に向けて手を振る。アルマノスは鼻息荒く反撃に転じようとして——真横から来た氷の散弾にもう片方の目も潰された。

パワータイプのドラゴンは知能が低い個体も少なくない。痛みを与えてきた相手に怒りを覚えれば、相手が複数いることなんて意識の外に放り出してしまう。

そうしてまんまと視界を奪われた巨体を今度は火炎の檻が襲う。業火に炙られ外殻が柔くなったのを確認し、首に一太刀を叩きこんだ。

血と煙を噴き出して倒れたドラゴンから生体反応が消える。戦闘終了だ。追撃で援護してくれたミナトへOKサインを送る。

「そっち、怪我は？」

「こっちの人はちよつと衰弱してるけど大丈夫——」

「キヤアアアアアア——」

二度目の悲鳴がこだました。何だまたドラゴン化と身構えそうになつたが、声を発したのはミナトが保護していた女性で、彼女がギラギラ光る目で捕捉しているのはまぎれもなく自分だ。彼女は「13班！」と自分たちを連呼して突進してくる。

「13班!! 今度こそ13班!! あの! 憧れの! 13班が! 私を助けに来てくれるだなんて! 夢なら覚めちゃダメ! 覚めないで、絶対!」

「……………これ、衰弱?」

「……鎮静剤、打った方がいいかも」

興奮気味の女性は熱烈なコミュニケーションを取ってこようとす  
る。邪険にされるよりかはましかもしれないが、ここまで執心されて  
も喜んでいいのかわからない。

というか、彼女が今口走った言葉の中に引つかかるものがあつた。

『今度こそ13班』って言ったわね。私たちより前に誰かと会つた  
の？ それともドラゴンのこと？」

「ほわあっ!! もももしかして私に話しかけてます!? ええつとです  
ね、仰る通りさきほど他の方々を見かけたんですが、なんだか物騒な  
雰囲気だったので、私は隠れてました!」

「……黒い装備に銃火器を抱えた、英語を喋る奴ら?」

「えええ、なんでわかつたんですか、さすが13班! エスパ!」

「違う。エスパはこっち」

「エスパっていうかサイキックだけど……そうじゃなくて!」

これは、と顔を見合わせる。

脱出キットを起動させてナビと観測班に座標固定を頼む。その間  
にぎつと周辺を見て回つたが、まだ熱の残るドラゴンやマモノの死骸  
と、真新しい空薬莖が発見された。

女性が嘘を言っているようには見えないし、もう確定でいいだろ  
う。

生成できた脱出ポイントに未だ興奮状態の彼女を放り込む。「せめ  
て握手を——」という声が途中で途切れ、洞窟の中は一気に静まり  
返つた。

「……さすがにおかしくない? なんてこうも行く先々でかち合うわ  
け?」

「今回ばかりは……偶然とは思えないよね……帝竜がここにいるわけ  
でもないのに」



考えるのは後にしよう。もし、ここにいる目的が同じだとすれば、人数の多い向こうが先に探し物を見つけている可能性がある。

顔を合わせるのはこれで二度目か三度目か。どちらにせよ、平和に交流できたことは一度もない。

装備と道具の点検、ミロクによるバイタルチェックを済ませてさらに奥へ進めば……案の定だ。

『本当にSECTーじゃないか、どうしてここに……！ さっきの生体反応はこいつらか！』

見慣れてきた装備のアサルト兵が三人。自分たちに気付いても驚くことなく立ち話をしている。

リーダー格の兄妹を含めた他メンバーはいない。目標であるカプセルらしい影もない。ならこの三人がここにいる意味は。

「……なあルーシー、退屈しのぎにいつちよ賭けようぜ。何手であいつらを倒せるか、さ」

「ああん、ゲイリー。それって素敵！ なら、アタシは五手に賭けるわ」

まあ、そういうことだろうなとため息をつく。

現在地は大きな遮蔽物もない道だ、ある程度距離があっても向こうの英会話はよく聞こえる。

ついでに、別方向から近付いてくる四足歩行の足音も。

『警戒！ 大型のドラゴンが一体、接近中！ この反応はグラナロドなんだ、クソ、こんな時に……！』

「……ミナト、あんた一人でドラゴンと戦える？」

帝竜やよつぽど強力な個体の竜相手でなければ問題ないとは思う

が、一応確認しておく。

パートナーはやや混乱したように瞬きをしながらもはつきり頷いた。

「た、戦えるけど……余波はそっちに行くかもしれないよ？ いや待って、シキちゃんもしかして……」

「どっちもこっちの都合なんて考えない連中だし、同時に相手するしかない。どうしてもって言うなら交代してやってもいいけど、あんた対人戦苦手でしょ」

「いやいや、片方は人間だから、話せばわかるから！ きつと、たぶん……！」

なんて言いつつ、語尾が尻すぼみになっていくあたり自信がないのだろう。丸ノ内攻略の時のように断固反対と言い始めないうちに、それじゃ頼んだとミナトの背を押し、自分は踵を返す。

「ちよっ、シキちゃん！ 相手は銃なんだからね！ 無茶しちやダメだよ!」

念押しする声と足音が遠ざかっていく。わかっていると手を振って、未だにヘラヘラと言葉を交わしているおちゃらけ共の前に進み出した。

つま先で地面を叩いて急かすと、唯一顔があらわになっている金髪が他の二人をたしなめる。

「……おい、よせよ。敵には常に敬意を払う。それがステイツの勇敢なるソルジャーだろ……」

「ククク……また出たぜ。お決まりの『勇敢なるソルジャー』だ。どうせショウジの受け売りなんだろう？」

「ショウジはこうも言ってるわよ。戦場を楽しもうってね。わざわざ極東まで来て、ドラゴン狩りも自由にできないんだから、少しくらい

お楽しみがあってもいいじゃない」

「へへっ……ま、そーゆーことだな。じゃあ俺は……三手に賭けるぜ！　って、あん？」

ドゴン、という重い振動と、気合と悲鳴が混じったミナトの叫びが後ろから響く。

ようやくこっちへ向き直ったゲイリーと呼ばれていた奴が、マスクの下で眉をひそめた、ような気がした。

「何だあ？　おチビちゃんだけかよ。もう一人は……おいおい、ドラゴンと遊んでやがる」

「ええ？　それじゃあ三手もかからず終わっちゃいそうじゃない、つまんないわ！」

『シキ、落ち着け！　血圧上がってきてるぞ！』

ミロクの声にミナトの念押しを思い出して、眉間に寄っていたしわをほぐす。

そうだ、落ち着け。相手は人間。同じ異能力者ではあるが、ダイゴやタケハヤのように頑丈な体かどうかはわからない。本気で殴る蹴る斬るをしたら死んでしまう可能性だってあるのだ。

自分の頭と口はお飾りではない。本能で殺し合うのは知性のないドラゴンと同じだ。まずは対話だ、対話から。

「……言っても無駄なのわかってるけど、私はあんたたちより理性があるから前置きしてあげる。大人しくどいて、そこ通して」

向こうに合わせて英語で話しかけてやる。言葉の壁をこちらから超えて同じ土俵に立ってやるという出血大サービスだ。

だというのに、

「チツチツチ、ダメだぜおチビちゃん。この先は俺らの仕事場なんだ。

遊びたいなら他へ行きな?。」

だのに、

「ほら、向こうでお友だちが遊んでるじゃない。混ぜてもらえば? ああ、恥ずかしいなら一緒に声をかけてあげましょうか?。」

こいつら。

「よせって。彼女たちは丸ノ内の帝竜を倒していたんだぞ。実力はあ  
るはずだ」

「倒したって、シヨウジたちにお膳立てされたうえででしょ? 去年  
の竜災害でも帝竜はこの子たちが倒していたって聞くけど、きつと丸  
ノ内の時みたいに大人にレクチャーしてもらってたんじゃないの」  
「困るぜリトルガール。どうしてもこの先に進みたいなら、パパかマ  
マを連れてきな!。」

『血圧180mmHgオーバー!! シキ!!』

ミロクが悲鳴を上げた直後、洞窟が大きく揺れる。次いで頭上で硬  
い物が碎ける音が聞こえた。

遅れて聞こえるミナトの焦った声。グラナロドンが地震を起こし、  
自分の真上、洞窟の天井が崩れたというところだろう。

自分を中心に、地面に直径数メートルの影が落ちる。ただでさえ薄  
暗い場所なのに視界がさらに暗くなり――鬱陶しくなつて拳を振り  
抜いた。

つむじに迫っていた大岩は思ったよりも派手に碎け散る。大小入  
り混じる欠片が降り注ぐ視界の中、減らず口を叩いていた輩はおもし  
ろいくらい静かになっていた。

「ねえ」

改めて話しかけたところで、自分の口角が不自然に上がっていることに気付いた。そういうえば、人間は怒りが一定を超えると笑うことがあるとどこかで聞いたことがある。

靴底から髪の毛の先まで満ち満ちていた憤怒が、炭酸飲料の缶を開けるように体外へ排熱されていくのを感じる。

今は一周回って晴れやかな気分だ。やることはつきりして、遠慮する必要がなくなったからかもしれない。

「さっき賭けてたわよね。私も混ぜてくれない？ そのあんたが  
五手、そっちのあんたは三手だったっけ？ あんたは？」

「あ、え？」

金髪に尋ねれば青い目が戸惑いがちにしばたかれた。通信機の方  
こうからは「ミナト！ 早く！ シキが人殺しになる！」「人殺し??！」  
とかなんとか聞こえてきたが右から左へ流しておこう。  
!!

「賭けないの？ じゃあいいわ。あんたはなしね」

うっかり剣の身が鞘から抜けないよう、紐で鯉口をきつく縛っておく。防具に緩みがないか最終点検もして。

さて、誰が賭けに勝つのか答え合わせだ。おっといけない。自分も賭けなければ。

それじゃあ、と拳を合わせる。

「——おまえら、二手で潰す!!」

## Count 9. 地面下での小競り合い

シキは激怒した。必ず、かの邪智暴虐なメリケン共を除かなければならぬと決意した。

シキにはアメリカンジョークがわからぬ。シキは狩る者である。竜を殴り、竜を斬って暮して来た。けれども売られた喧嘩に対しては、人一倍に敏感であった。

呆れた奴だ、生かして置けぬ  
「——おまえら、二手で潰す!!」

シキは単純な女であった。剣を担いだまま、どすどすメリケン共に走り出していきたかった。

だが、こちらは近接主体、相手は飛び道具所持の一对三だ。多勢に無勢である。彼奴らはその両腕に抱えられたアサルトライフル以外にも、大型ドラゴンに使うような兵器まで備えているように見える。よく考えれば不利であった。

なので使えそうな要素は使わせてもらうことにしたのである。まずは牽制からだ。

「好き勝手暴れてたみたいだけどね！　ここは去年の帝竜の行動範囲で地盤が緩んでるから、でかい爆発物なんて使ったら一緒に生き埋めになるわよ！」

はったりではあるが、ここは自分たち日の本の国だ。海の方こうから渡来した異国の人間相手であれば、すわ真かと思うであろう。

案の定、三人のうち、頭領らしき金髪の動きがわかりやすく鈍ったのだ。爆発物は彼奴の得物か。

生まれたわずかな隙に、鞆に納めたままの剣を渾身の力で足もとに叩きつける。抉れた大きな土塊は縦向きにして障壁に。舞い上がっ

た土埃とフロワロの花粉は煙幕代わりに。

相手は同じ異能力者である。具体的な能力は不明だが、常人よりも反応は早いはずだ。一度の目くらましで戦力差は埋められぬ。もう一工夫必要である。

響き始めた発砲音の雨が障壁を削っていく中、先ほど砕いた大岩の欠片を集める。空気が濁ったことで、その中を飛んでいく銃弾の軌跡が見えてとれた。それをよく観察して、

(一番薄いのは……ここか！)

弾と弾の隙間が最も散っているところめがけて飛び出した。

「銃弾なんて当たると思った奴から当たっていく」のだと、都内の本屋から回収された漫画とある剣士が言っていたが、いい言葉である。制服の裾や耳もとをかすめていく鉛弾など、無視すればどうということはない。

冷静に、迅速に。脇に抱えていた岩片たちを宙に放り、ベースボールを真似て煙幕の向こうへ打ち飛ばす。

発砲音は依然鳴り続けているが、こちらに飛んでくる弾は目に見えて減った。間髪入れずに土煙をかくぐり、浮かび上がった人影に向けて剣を振りかぶる。

視界が晴れた瞬間、三人のメリケン共のうち一人が目の前に現れた。岩片につられて銃は上を向いている。見開かれた目だけが一足早くこちらを向いたが、

「Shit——！」

「遅い」

銃を引き戻そうとしていた腕を弾く。鞘に納められたままの剣であるため血は流れぬが、目の前の腕はまっすぐ跳ね上がって銃を手放した。

ゲイリーと呼ばれていたそいつはバンザイのポーズになりながら

くぐもった呻きを漏らす。しばらくは得物を握られぬだろう。

次だ。ゲイリーの背後に回り、残り二人の射線を防いで、目の前の背中を蹴り飛ばした。

弾除けになって吹き飛ぶ男の後を追ひ、彼奴を受け止める金髪の男の脇へ走る。

「なっ、」

「ヘルメットしてなくて助かったわ」

むき出しの頭は格好の的である。加減をして裏拳でうなじを殴ってやれば、二人分の体重を支えていた膝からがくりと力が抜けた。これで二人目だ。

「このっー」

「っと、」

嫌なものを感じ首をひねると、頬を銃弾がかすめて飛んでいった。目の前にいる三人目の女である。

腰を落として銃口から逃れ、足払いをかける。

さすが同じ異能力者、素早く受け身を取ろうとするが、体勢を立て直されぬよう、手足を絡めて関節を極めてやった。

「イッ——!?!」

「ミロク、何分かった?」

『え? ええっと……一分五十二秒』

「二分切ってるから二手以内ってことでいいわね」

『いや、ちよつと違うと思う……そのまま首をゴキツてやつたりしちゃダメだぞ?』

「しないわよ。殺さないでやってんだから感謝しなさいよね」

もがく隙もないほど固く締め付けて、三人目に話しかける。たしか



ルーシーと呼ばれていたか。マスクの下の顔はわからないが、漏れてくる高い声からして同じ女であろうか。

「ここに来た目的を言え。武装のついでに関節まで外されたくないでしょ」

「ハッ、誰が!」

「あっそう。じゃ、まず利き腕から」

「……を」

「あ? 何?」

「何を……勝った気になってるのよ!!」

わずか一瞬の光と浮遊感が体を包む。湿った地面の匂いが鼻についた。

しっかりと捉えていたはずの女の体が見当たらぬ。視界から消え失せた女の代わりに、苔の絨毯がシキだけを受け止めていたのだ。

(——<sup>テレポート</sup>瞬間移動!?)

『サイキック!? ヒムロと同じ——』  
『<sup>のろま</sup>slug!』

頭上から女の声が降った。見上げた先で、黒光りする銃口と指がかかった引き金が見えた。

まずい!

(撃たれ——)

頬を張った時のような、乾いた音が響き渡る。

シキは撃たれていなかった。ルーシーの体が吹き飛んだのだ。

肩に手が置かれたかと思えば、<sup>セリステンティウス</sup>竹馬の友、ミナトが逆さによきつと顔を生やしてきたのである。

この間、わずか数分の出来事であった。

——と、ここまで某文学作品風に13班の行動録を文面に起こしていたムラクモのスタッフは、ふと我に返って手を止めた。

ムラクモ本部ではモニター越しに我らがエースの活躍を見守る仲間たちが、仕事を放り出してやんややんやと声援を飛ばしている。

こうしている間にも彼らの仕事は溜まっていく一方ではあるのだが、何せ仕事を増やしている一因が、今13班が対峙しているSEC T11でもあるのだ。声に熱もこもるものである。

「うおおどうだ見たかああーっ!!」

「でも、こいつらリーダーの兄妹じゃないよな?」

「うるせえいいんだそんなことは。13班舐めんな!」

「24時間営業のコンビニみたいなチーム名しやがって!」

「それセ○ンイレブン」

「おらどうした、必殺シュート打ってみろやあ!」

「それはイ○○マイルブン」

血湧き肉踊って言いたい放題である。戦闘開始前まで彼らが抱えていた資料は、握り潰されているかメガホン代わりに丸めて振り回されてくしゃくしゃになっていた。紙は限られた資源なのだから大事に扱え。

まあ仕方ない。各々ストレスが溜まっていたのだ。ただでさえ安全な屋内にこもって過ごすしかない環境では、誰かの外での活動が世界の今を知る唯一の手段となる。

腕つぶしで昨年の危機を乗り越えた13班に対する信頼が厚いのもあってか、彼女たちの戦闘は良くも悪くもムラクモ本部のエンタメの位置に収まりつつあった。現に自分も、大暴れするシキとあの作品の登場人物を重ねて楽しんでいたし。

とりあえず、報告書の内容がパロディだなどと知られたら最高顧問が雷を落とすだろうことは想像に難くない。やれやれとため息をつけて、スタッフは修正を始める。

やることそつちのけで騒ぎ続ける仲間たちは、ナビの双子が「うるさーい！」と叱つて静かにさせる。

モニターの中では、いつものようにミナトがシキを心配して顔を覗き込んでいた。

\* \* \*

「シキちゃん、大丈夫!? 怪我してない!？」

「……してないけど」

「つよかったあゝ……」

頭上の額から落ちた汗が頬に当たる。よく見れば顔色が悪い。大急ぎでドラゴンを始末してマナを消費しているのだろう。

さつき響いた音はミナトが圧縮した風を放つて空気が破裂した音だったのか。そういえばサイキックは風も操れる。パートナーはそれを利用して氷を弾のように撃ちだしているのだった。

今さら思い出して器用な奴だなど思うのをよそに、ミナトは風の塊で遠くに吹っ飛ばした女に駆け寄っていく。

「すみません、咄嗟のことなので加減ができなくて……! あ、日本語通じるかな……もういいや。とりあえず、危ないので武器は回収させていただけますね。治療もすぐにしますから!」

吹っ飛ばされた先で壁に衝突し、ルーシーは気絶こそしていないものの武器を手放して呻いていた。

危なっかしい手つきで相手の武装を解除していくミナトを見て、こっちもこっちで残りの二人から武器を回収しておく。目を回していた金髪は思っていたよりも早く意識を取り戻し、ゲイリーはキョーンシーのように何も握っていない両手を突き出してわめいていた。

「クツソが！ まだハンドガンもつかめねえ、この腕折れてんじやねえだろうな!？」

「あ、れ……ルーシーは？ 何がどうなって……」

「やっと起きたなウィル、一発もらっただけでおねんねしやがって!」  
『SECT11、もう一度聞くぞ。おまえたちは何が目的でここにいるんだ?』

三者三様で悶えている黒づくめたちに向けてミロクが尋ねる。翻訳機を通したのか通信機のスピーカー越しに流れる英語に、しかし答える者はいない。まあ素直に答えられる人間性を持っているなら、最初からこちらの邪魔もしていないか。

「ゲイリー、ルーシー！ これ以上は危険だ……！ 撤退しよう……！」

「シット……！ 覚えてやがれ!」

「おとといきやがれ三下」

「こらっ、シキちゃん!」

回収しておいた銃火器はそのまま放置、伸びている仲間だけ素早く回収し、SECT11のスリーマンセルは洞窟の暗闇に溶けていった。

「まだ治療の途中だったのに……あの女の人サイキックだったんだよね? じゃあ治療術も使えるかな。……それより、」

瞬きの間に消えてしまう背中を見送っていたミナトが、不意に両手で自分の頬を挟んだ。治療術の淡い光を灯しながら、指先がもにもにと頬をこねる。餅になった気分だ。

「本当に怪我してないよね? 銃火器持ち三人相手は無茶すぎ……」

あと、相手は人間だから、下手なこと言ったら逆上して何をしてくるかかわからないよ。口は災いの元ってことわざがあるでしょ」

「大丈夫だって言ったでしょ。あんたも他の奴らも、最近過保護になつてない？」

「だって、シキちゃん最近調子悪そうだし……そうでなくても私たちまだリハビリ中なんだから。本来はドラゴンとの戦闘に集中するべきなんだよ？ そうだよ、なんでこんなことになってるんだっけ……なんかどつと疲れてきちゃったな……」

ミナトはMana水の瓶をくわえながら、光の消えた目を左右に揺らししている。タバコで一服している中間管理職のようなくたびれ具合だ。

さすがに大型ドラゴン相手を一人でさせたのは無茶だったか。彼女の指は自分の頬を揉み続けているが、気晴らしになるならしばらくは触らせておいてやろう。

エメルが声のボリュームを上げて殺竜兵器の回収をせっついてきたため、前進を再開した。けれど曲がりくねった洞窟には人口の目印もなければ太陽もない。方角を見失わないようナビと現在地を確認しながら進めば、地上の異界化攻略よりも時間はかかる。

荒れた穴の中をえつちらおつちら行軍し、ようやくメトロ講道へ出る。

泥にまみれた自分たちを迎えたのは、数メートル先にある人間大のポッド……と、その前に立つ派手な色のジャケットだった。げーつ、と反射的に舌が出てしまったが、相手が相手だ、これくらい許されるだろう。

『あつた、この反応はカプセル……とSECT11！ クツ、先を越されたか……！』

「うーわ……一匹見たらもつといってるって本当ね。ゴキむぐぶ」

「ひー！ やめてー！」

会いたくなかったのにと吐きかけた啖呵はミナトがまた頬を揉ん

できたことで途切れた。悪口をたしなめるといふより、害虫の名詞を聞きたくないというような力強さで唇がつねられる。

声を潜めるつもりはなかったからもちろん向こうにも聞こえている。特別驚く様子もなく、眉をひそめてイズミが、今まで通りの気楽さでシヨウジが振り返った。

「やっぱり来た。悪いけど、コレはあたしたちのモノだから」

「よオ、13班。ウイルたちが息を切らして報告してきたんだが……その様子じゃ、おまえらを楽しませることもできなかつたみたいだな」

「なんであんたたちがここに居るわけ？ 何の目的もなしにこんなところで散歩してたわけでもないでしょ」

「ああ。できることなら今度は共同戦線で会いたかつたんだけどな。本国からの命令でね」

わかるだろ、とでも言うようにシヨウジがカプセルをノックする。その瞬間、耳にはまる通信機からドラゴンも尻尾を巻いてしまいうるなエメルの唸りが漏れた。

『狙いは最初からそれか……！ だがおまえたちにもその存在は伏せていたはずだ、どこから情報をつかんだ!？』

「悪いが、企業秘密ってことにしてくれ。これは……殺竜兵器は、アメリカが有効に活用させてもらおう」

『そうか、ならば貴様らは人類の敵だ!』

『13班、構わん! 殺してでも兵器を奪還しろ!』

「ちよつ、ころ……!?! 何言ってるの!?!」

講道の中に過激なオーダーが響き渡る。去年にも人間相手に似たような指示を受けはしたが、明確に殺生の有無まで言葉にされるのは初めてだ。

司令官から飛び出したイエスキルゴーキルの命令に、できるわけが

ないとミナトが抗議の声を上げる。一方、サクラバ兄妹は肩をすくめながらのんきに目の前で作戦会議中だ。かといって隙があるわけでもない。先刻戦った三人組と同じ装備のアサルト兵たちが、いつの間にか銃を構えてこちらを牽制している。

「おお怖。イズミ、後は頼んだぜ」

「オーケー、シヨー兄」

シヨウジは固く閉ざされたカプセルを暴くことに専念したいようだ。背を向けて怪しい工具を取り出す彼と合わせ鏡になるようにイズミが進み出て、ビビットピンクの刃を抜き放つ。その両脇をアサルト兵が並んで固めた。

「殺してでもってことは、逆に殺される覚悟くらいできてるんでしょ？ 帝竜の前にお邪魔虫を仕留められるなんてラッキーじゃん」

薄い暗闇の中でもわかる眼光が、自分たちを逃がすまいと捕捉している。狩りを喜ぶ肉食獣みたいだ。得物は剣なのに、気を抜けば喉元に牙が突き立ち血を吸われそうな気さえする。

プレッシャーはこっちに向けられる銃口や剣の切っ先と遜色ないが、負けてやる気はない。相手を思い切り捻じ伏せることができる機会を待っていたのは自分も同じ。いい加減、ストレスが溜まって体が爆散しそうだったのだ。

手加減が必要な相手ではない。今度こそ、鯉口の縛りをほどいて抜刀する。

「ミナト、やるわよ」

「あああもう、戦いたいわけじゃないのに！ エメルってばなんで煽っちゃうのー！」

「サンドバッグが殴ってくださいって名乗り出てきたと思えばいいでしょ。わかったら早く構えて」

「いや、相手人だよ！　なんでみんなそんなにノリノリになれるの!？」

平和を尊ぶミナトの意見はこの場では圧倒的少数派なので脇へポイしておく。今は戦って白黒つける。いつの世も結局シンプルイズベストなのだ。

イズミの両隣のアサルト兵が引き金に指をかける。こちらに照準を合わせた銃口だが、「止まってー!」というミナトの声と共に氷漬けにされる。皮肉にもその制止が戦闘開始の合図になった。

残りの二人はパートナーに任せて、自分は目の前の鮫女に集中しよう。

「さあ、どこからでもかかってきてよ。ミンチにしてあげる!」

「されるわけないでしょ。先に三枚おろしにしてやる」

荒野の狩りであれば身を伏せて待ち伏せでもするが、標的とはとっくに向き合っている。待つという選択肢は互いになかった。

線路の枕木を蹴り上げて肉薄する。

イズミが跳び上がり、紅色の閃きが頭上から落ちた。反射で天叢雲剣を振り上げれば鋼同士がぶつかる音と火花が散る。

難なく弾くことができたから小手調べの一太刀だったのだろう。それでも膂力はこちらが上だとわかった。逆に速さは――、

「ツシー!」

「――っ!」

器用に身を捻って突き出される切っ先に思わず体を引く。引き寄せた黄金の剣が鋭い連撃を受けて小刻みに震え、ピリリと頬に痛みが走った。

裂けた薄皮から伝う血を舐めるついでに舌を巻く。着地までのコンマ数秒で繰り返された三段突きは正確に急所を狙っていた。

やや身が短く振り回しやすそうな薄い刃。それを手足のように扱



う相手の練度。対するこちらは自分の背に届きそうな厚めの長剣だ。使い慣れていないこともあって、切り結ぶ中では後手に回らざるを得ない。

最優先は殺竜兵器の回収、相手を叩きのめすことではない。そうとわかっていても、目の前の標的を倒すのが難しいと悟ってしまう自分の勘が、少し憎い。

「あのさあ」

不意にイズミが口を開いた。まっすぐ伸びていた相手の切っ先が弄ばれるように左右に揺れ、口角が不快な角度に吊り上げられる。

「その剣、元は他の奴の物だったでしょ」

「……」

「まず体格からして合っていない。あんたみたいなチビはナイフでも振り回してた方がまだマシ。手首が固すぎ、体は沈みすぎ。なんだけ、あんたたちの国のスポーツ……スモウだっけ。それでもやるわけ？ 本当に剣を振る気ある？」

「高説」苦労様。何、思ったよりも強かったからビビって口喧嘩で仕切り直したいってこと？ 鯨って知能低くて衝撃には弱いっていうし、怖がらせちゃったみたいで悪いわね」

薄暗闇に映える白い肌に朱が差するのが見える。舌戦は自分が優勢なようだ。

「ほんつとむかつくガキ。フォーマルハウトに伸されてたくせに、自分がどれだけ弱いかまだ気付いてない？ そんなハリボテが周りのイエスマンにちやほや持ち上げられてるのもマジでキモいし、我が物顔で最前線に参加してきて恥ずかしくないわけ？ 犬死にしないように身の程を知れって言ってるの」

「今ムラクモがドラゴン討伐に苦労してるのはね、どっかのかまって

ちゃんが足を引つ張ってくるからよ。こつちはただでさえ限りのある労力を、あんたたちみたいなお問題児の相手するのに使ってやっつてんの。レベルの低い挑発するより先に、わがままに付き合ってくれてあげることがございますって言うべきでしょ？ ……ああ、誰にも教えてもらえなかったのか。その性格、ちゃんと向き合ってくれるような相手なんていなさそうだもんね？」

「つこの……い！」

相手の呼吸が昂るのが分かった。地雷でも踏んだか？

それならそれで好都合。調子に乗って喧嘩を売ってきた奴の鼻っ柱をへし折るのは気持ちがいい。そのままじだんだでも踏むか、涙ぐんでくれれば胸に溜まつている鬱憤も少しは晴れ――

「はーいー！」

パンツ、と小気味いい音がトンネルの中に響く。

場違いに明るい声を出したのは自分のパートナーだった。一本締めのように手のひらを合わせ、砂と汗まみれのグロッキーな笑顔でこの場の注目を集めている。

「あつ、ミロクかミイナ、スピーカーにして翻訳お願い。えーそこまで！ そこまでにしましょう！ 喧嘩なんてお互い痛いわ疲れるわでいいことないでしょう！ こんなに暗くてじめじめした場所にいたら気分もどんどん暗くなっちゃう。いったん深呼吸して、外の日差しでも浴びてリフレッシュしませんか!？」

「……ミナト、邪魔。今やることの優先順位ぐらいつけてくんない」「それははい、とりあえず他のお二人には大人しくしてもらいまして」

どうぞとひっくり返された手が示す先には、二メートル程度の氷の山が二つ。イズミの横に控えていたアサルト兵たちだ。分厚い氷に丁寧に包まれ身動きが一切取れない中、息だけはできるように露出し

た頭から情けないスラングが垂れ流されている。

やけに周りが静かだなとは思っていたが仕事が早い。目の前の相手に集中していたから気付かなかった。若干驚くのと同時にイズミもぎよつと目を見開く。

「な、いつの間に……!」

「まあ拘束するだけなので、初動が押さえられれば割とスムーズに……いやそうじゃないや。一度冷静になりませんか？ ドラゴンを倒す目的は共通しているのに、人間同士でこんな風に潰し合うのは向こうの思うつぼじゃないですか。お互い消耗するだけで不毛だっというのは、精鋭の皆さんなら誰よりも理解されていると思うんですけど……違います?」

……それは、まあ、考えればそうか。感情を横に置けば、意見として最も理にかなっている。

聞き慣れた相棒の声は耳に優しい。罵り合いで悦に浸りそうだった意識がすうつと冷め始める。

ミナトは相手をリスクトしての言葉遣いではあるが、SECT11側には雑音としてしか響かないようで、つい先ほど自分が怒りを着火させたばかりのイズミは声を振り払うように頭を振った。

「だから、あんたたちが諦めてくれればいい話でしょ！ あたしたちのほうがもつと上手く真竜討伐のミッションを達成できるってわかんない!？」

「優劣の問題じゃないんですよー。ワンマンプレーじゃなくて、お互いに役割分担して臨むのが一番効率がいいって話をですね……」

ニコニコ笑顔は崩さないまま、ミナトは自然な歩みですぐそばまで寄ってくる。落ちていていますよアピールのように自分の肩に手が置かれた後、「十秒」という小さな声が耳に滑り込んできた。

「十秒だけ足止めできると思う。そのうちに兵器をお願い」

「……わかった。回収できたら洞窟に飛び込んであいつら撒く。ミロク、誘導して」

『了解、任せとけ！』

向こうに悟られないよう、なんとか最小限の唇の動きで意思疎通をする。その内腹話術でも習得しておくべきか。

場の中心は自分の体を隠して前に出たミナトに移ったようだ。イズミの金切り声とアサルト兵から漏らされるブーイングも彼女はお得意の「まあまあ」でいなしていく。その足もとの影が不自然に揺らめくことには誰も気付かない。

「本当に、傷付きたいわけじゃないし、私たちも傷付きたくないんです。心も体も、痛いのは嫌でしょう？ ……ベイちゃんもそう思うよね？」

「はあ？ いきなり誰——」

地面が黒一色に染まる。

一瞬で前後数十メートルに伸びて空間を埋めた漆黒が、音もなく空気も揺らめかせずにイズミとアサルト兵を呑みこんだ。

一帯からすべての光を奪う勢いで広がった闇に赤い眼が浮かぶ。

『まったく、神使いの荒い奴め。代価を忘れるなよ！』

ああそうか。太陽の光が届かず風も吹かず、気温も低いここでもら、フィジカルクソ雑魚の黒スライムもいきいきと活動できる。

「シキちゃん！」

「そういえばあんたもいたわ、ねっ!!」

前に傾いて跳躍する。混乱した三人分の悲鳴を飛び越えて、視界の

中心がシヨウジとカプセルにスライドした。

「止まれ！」

「！ おっと……！」

ガチャンと鳴ったのは自分の剣か、相手の銃か、スライドしたカプセルの外殻か。おそらくすべて。

首に突き付けた切っ先と眉間を捉える銃口。腕を伸ばせば届く距離にある……中身のない青いガラス。

自分の口から疑問符が漏れるのとシヨウジが眉を寄せるのもまた同時だった。

「ああもう、何、この黒いの……！」

「おい、そこまでだ！」

「シヨウ兄!? なんで止めるのよ！」

ミナトが邪神の名前を呼んでからきっかり十秒。地面へ引っ込んだ影からイズミたちが顔を出してシヨウジを振り返る。

全員の視線がカプセルに移り、えっ、だのは、だの間抜けな反応が地面にこぼれた。

近未来的なデザインの大きなカプセル。いかにもといった風の容れ物でありながら、中身は空気のみ。

頭のいい者にしか見えない品、なんて童話めいた物ではないだろう。つまり真正正銘、殺竜兵器はロストしている。

「積荷の中は空っぽだ。おまえら、それをわかっててここへ？」

「んなわけないでしょ」

「……だろうな」

耳にはまった通信機からは、「な、は……はっ？」としか口にできなくなったエメルの戸惑いが漏れ聞こえている。完全に戦意をなくし

たシヨウジは誰よりも早く肩から力を抜いて銃を仕舞った。

「女史の焦り方といい、ブラフとは思えねえ。つてことは……別の誰かが持ち去ったってことだ」

「誰かって、誰よシヨー兄！」

「俺が知るかよ！ クソっ……帰るぞ、作戦会議だ！ おまえらも早く出てこいー！」

「待ってくれよシヨウジ、無茶言うな！ こっちは冷凍保存されてんだ！」

「あ、すみません、今氷溶かしますね……！」

イズミはともかく、他の二人はまだ小さい氷山の中だ。ミナトが慌てて駆け寄り、ナイフと炎で人の体を発掘していく。

「そういえば……SECTIIにフランクさんという方はいらっしやいますか？」

「ああん？ 俺っちが何だよ」

「あ、ご本人でしたか……すみません、氷はもう少しで崩せるので……はい、これ」

忌々しそうに舌打ちしたアサルト兵の上半身が自由になった。銃は氷の中に埋まったままで、手ぶらになった両手にミナトは何かの包みに乗せる。

「議事堂で保護した方からの贈り物です。ドラゴンに襲われていたところを助けていただいたお礼だと」

「おいおい、ついさっき上司が殺せつて言つてた相手にか？」

「いえ、それとこれとは話が別です。殺すつもりもないです」

「秒で氷漬けにしてきたくせによく言うぜ……」

危険物でないか確認する意図もあるのか、文句を言いつつ一人のア

サルト兵は包みを開く。白くて四角い何か——保冷剤だろうか——がカランと線路の上に落ちて、ソフトボールサイズのアルミホイルが顔を出した。

「そういや、俺つちを天使だなんだ言ってるふざけた女を助けた気もするが……。そりやD z集めのついでだ、人助けなんかじゃねえよ。……これは返すぜ」

「え、いらねいんですか？」

「こんなカチカチのライスボール食べられるわけねえだろ！ 礼ならバーボンとタバコを寄越せって、そのイカれた女に言っておけ！」  
「え、これ食べ物だったんです……？」

放り返されたアルミのボールがミナトの手で剥かれ、無数の米粒が集まり固まった握り飯が顔を出した。……思わずといった顔で彼女からパスされたが、岩石のような重さと硬さがあるのはなぜだろう。

石を彫つたと言ったほうが自然な逸品を観察する中、氷の戒めから解放されたフランクはもう一人の氷を予備の銃で撃ち砕き、シヨウジたちと共にさっさと去っていった。

やっとカプセルをじっくり調べられそうだ。といっても中身がないが。

シングルベッド程度の大きさの容れ物にはそこそこの量の武器が詰められそうではあるが、塵ひとつ入っていない。青いガラスを小突いてもただむなしく音が響くだけ。

「ほんとに何もないね。……カプセル自体は壊れてないし、シヨウジさんの言う通り、誰かが持っていったのかな」

「……それか、足でも生えて自分で出ていったとかね。いずれにせよ、収穫なしか」

冗談めかして言ってみたものの、殺竜兵器搜索はふりだしだ。中途半端に戦闘が打ち切られたこともあって、胸の内がもやもやしてしか

たない。

『なんとということだ……いったい、誰が持ち去ったのだ……。まさか——！』

遠慮せず吐いたため息に、途方に暮れるようなエメルの声が重なった。

真竜に対する切り札と称していた兵器が消失したのだから無理もない。けれどすっかり怒気が抜けて動揺することしかできないでいる彼女はかなり珍しい。

その重いわななきは鼓膜を揺らし、空気を揺らし、次いで地面も揺らして……。いや。

「ちよつと、揺れてない？」

「え？ うわ、地震？」

『な、なんだ……。ち、地下からエネルギー反応！』

体の下、地面のさらに奥深くから伝わってくる不気味な振動。ザ・スカヴァーに呑みこまれそうになった一年前の悪夢がよみがえるが、あいつの息の根は間違いなく止めた。

ならこの揺れは自然現象で、帝竜がいるわけでは——

『これは……。帝竜反応だ！ 反応はここから、百メートル直下！』

「はあっ!! 帝竜!!」

『エネルギー波、来るぞ！ 耐ショック体勢！』

ナビのカウントはたった三つだけの無茶なもの。それでも数々の修羅場を潜り抜けてきた体は反射で動いた。

背を丸めてしゃがみ、目と耳を塞いで口は開く。

直後、地面が消えた。

爆音が飽和して鼓膜がパンクする。大地に突き飛ばされ宙でシエ



イクされ、重力が知覚の外に飛んでいく。自分が五体満足であることしかわからない。

『13班！ 無事か、無事だよな!』

ミロクの声聞いてようやく嵐が過ぎ去ったことに気付く。地面に落ちた衝撃さえ感じ取れなかった。麻痺していた五感が再起動するのと同時に鈍い痛みがやってくる。

周囲に敵影はない。帝竜は気まぐれに暴れただけで、こちらへ乗り出してきたわけではないみたいだ。

直前に耳にした情報で考えるなら、足の下から来た衝撃に吹っ飛ばされたと考えるべきか。粉塵と細かな瓦礫が舞い飛ぶ中、隣で地面にへばりついているミナトを引きずり起こした。

「……生きてる?」

「…………うう……みみが……」

「……突然すぎるでしょ! 何よ帝竜って……、——!?!」

体を支えるために踏んばろうとして、足が宙を空振り体が傾いた。慌ててバランスを取り直し、数十センチ先からの地面が消えていることに初めて気付く。

つい数秒前までそこにあったカプセルが、講道ごとごとっそりなくなっている。倒壊して潰れているのではない。底の見えない広すぎる空間が目の前に広がっている。地面も壁もカプセルも、すべて吹っ飛ばされてここに落ちていったのだ。

「……ミロク、これ見えてる?」

『ああ、見えてる……けど……ここ、これは遺跡……なのか?』

遙か遙か下。地面の見えない大きな奈落がそこにある。ずっと向こうには長大な塔が無造作に連なり、現実こゝこと非現実向こゝうを繋げるように、

たった一つの線路がぽつんと宙を走っていた。

明かりもないのに不自然に浮かび上がる光景は、自分たちの視界を通してナビにも共有されているはずだ。それでも通信機からは呆けた呼吸の音だけが返ってくるばかりで、分析が始まる気配すらない。考古学あたりを専攻している研究者が空を飛んで喜びそうだが、こんな土地、現実に存在するわけがない。ミロクが言った通り帝竜がいるのなら、異界化で作りに出された世界だろう。

「これどうすんの。探索の準備は整ってないけど」

『そ、うだよな。総長！……エメル総長！』

『……聞こえている。その異界に帝竜がいることは把握した。だが、目下の最優先事項は殺竜兵器の奪還だ。……13班、一度議事堂に戻ってこい！ 確実な殺竜兵器の探索を行うためには、本部にあるリーダーの強化が急務だ！ 帰還次第ムラクモ会議を招集して、研究区を改修しろ！』

「は？ あ、ちよつと！」

『……す、すみません、エメル総長、行ってしまった。代わりに私は伺いますね。ムラクモ会議の準備も進めさせていただきます』

エメルに代わってシズカの控えめな声が届いた。ため息が止まらない。

弾丸のようにあちこち飛び交って忙しない総長だ。やることが多いのはわかるが、頭が飛び出すだけでは周りについてこれないのを理解してほしい。

(……それは私も同じか)

自分にもたれかかりながらまだ目を回しているミナトを見る。

エメルがムラクモを引きずり回しているのであれば自分はこのパートナーを振り回している。さっきは戦いに前のめりになりすぎて、イズミをどう下すかしか考えていなかった。最も冷静に状況を把

握っていたミナトに邪魔だと言ってしまうほどに。

途中で冷静になれたからいいものの、あのまま戦闘を続けていれば、下手すれば全員が崩落に巻き込まれていたかもしれない。

SECT11はどうなつてもいいが、シヨックに備えられていなければこちらに万が一が起きていた可能性もある。自分の体はまだ耐えられるかもしれないが、ミナトは……。

人の振り見て我が振り直せ、か。

「うー……やつと耳鳴り収まってきた……えっと、議事堂に帰るんだっけ？」

「そう。このまま運んでいくから体重預けてて」

「あはは、助かります……」

「シズカ。今からそつちに戻るから、このまま遠隔でムラクモ会議も進めてくれない？ どうせ研究区の改修以外、エメルは許さないだろうし。今日はこれ以上できることないでしょ」

『わかりました。最終決議だけ確認して、建築班に研究区の改修を申請しておきますね。あとは今の状況を整理しておきましょう。移動しながらでいいので聞いてください』

また洞窟の迷路を通るのかとうんざりしかけたが、さっきの衝撃波で講道を埋めていた車両や瓦礫が崩れて道ができていた。ラッキーなことにマモノたちも巻き添えになって沈黙している。帰りは講道をつ突つ切つて地上に出られそうだ。

『まず、SECT11の件。彼らが殺竜兵器の奪取を目標にしていることが判明しました。意図はわかりかねますけど……』

『奴らは都庁のデータも盗んでいつてる。狙いはムラクモの持つ対竜戦の技術力つてところか……』

『……ですね。とにかく、SECT11の動きは今後も十分注意が必要と思われまます。それから、この地下鉄の下に広がる異界化された遺跡と、そこから観測された強い帝竜反応。こちらも気になるところで

すが――』

『調査はこつちで進めておくよ。ここからじゃ距離があるから、正確な観測はちよつと難しそうだけど……。こんな時、キリノがいてくれたら助かるんだけどな……。』

「さすがに観測までは手に負えないわよ。ていうか、人事の見直しがあつたはずでしょ？　なのになんで去年より忙しくなってるのよ」

『確かに……。エメルも人使い……。いや、13班使いが荒いよな。後で特別手当、請求しておいてやるよ！　ミイナ、手が空いてたら13班の出勤記録まとめておこうぜ』

『うん。でも、13班は本当に休む暇もないですね。もう少し余裕を持って回したいけど、13班以外に頼れる人がいないから……。』

通信機越しの会話に適当に相槌をしながら歩いて行く。

帝竜反応は相変わらず視界に表示されているものの、圏外となって消えるまで動くことはない。

そのまま自分たちが倒しに行くまで大人しくしててくれと念じ、眩しい日差しが満ちる地上へ顔を出した。

\* \* \*

『……。それでは、殺竜兵器は何者かに持ち去られ、行方不明、と……。？』

拠点の薄暗い一室に、デイビッドの声が淡々と響く。

窓のない部屋の光源は目の前のモニターだけ。ミッションを完遂できなかった旨を伝えた今の空気は明るいとは言えない。しばらく前までいたメトロ口講道に戻ってしまったようで、危うく漏れそうになる苦笑いを噛み潰す。

報告を聞いた我らが司令は、片眉を一度動かしただけで表情を変えない。が、満足していないということは画面越しにでもひしひしと伝

わってきていた。

「俺の失態だ。責任は——」

『君の首なら結構。死体は十分間に合っているのね』

ムラクモもこちらも、上司は揃っておつかない。シヨウジは肩をすくめた。もちろん頭の中で。

『それより、諜報活動はどうなっている?』

「無線の傍受に成功した。どうやら向こうは兵器を探知するレーダーを持つてるらしい」

『……なら、君たちのすべきことはわかるな』

「……………」

『ドラゴンを倒すことはもちろん重要だ。だが、SECT11のミッシェンは、それだけではない。……期待しているよ』

思い出したようにお粗末な激励を付け加え、通信はあっけなく終わった。

「…………どうやら本国は俺たちに、ドラゴンと戦う勇敢なソルジャーじゃなく、コソ泥になれて言いてえらしいぜ」

首を振ってこぼせば、部屋の奥で様子を窺っていた仲間たちがちらほら歩み寄ってくる。靴音の重さも響きもバラバラだが、不満が込められていることだけは共通していた。

「デイヴのヤツ……正式な大統領でもないくせに、フザケてる！ ショー兄を……SECT11を何だと思ってるの!?!」

「シヨウジ、どうする? 僕らは君についていく。一年前の戦線を生き延びた時から、SECT11は君の部隊なんだから」

「……………そうか」

憤るイズミとウイルの言葉に力強くうなずくメンバーを見て、引き締めていた口角が崩れてしまう。

瞬きの間に祖国を荒していったドラゴン。市民が所持する銃はおもちゃのように薙ぎ払われ、警察は蹴散らされ、機動隊の攻撃も通じず。こちらにお鉢が回ってきた時は、正直悲観的になった。

目には目を、厄介者には厄介者を。異能力と大人の都合故にもてあましていた自分たちをここで捨て石にする気なんだろうと思っていたが、今振り返れば、あの戦いがあつたからこそ手に入れられた財産仲間がある。このタイミングで大統領に逆らえば、それもまた泥にまみれて失われてしまうかもしれない。

「……今はまだ、従うさ。実際、究極の殺竜兵器つてのが本当だとしてら、それがどんなものかは興味がある。ただし、最優先事項はドラゴンの討伐だ。帝竜反応を観測次第、現場に向かう！」

「オーケー、ショー兄！　それがショー兄の選択なら……！」

大切なことは神様が知っていればいい。そう言い聞かせて辛抱する人生に、ようやく陽の光が当たってきた。

あとは心のままに走り出すだけなのだ。誰にも邪魔はさせない。

\* \* \*

水の音が聞こえる。

すべてを包み彼方まで運ぶ潮の流れ。星のように生まれては夢のように弾けてしまう泡。

目を開ければ、青い世界いっぱい広がる、命の――

「……？」

ない。

命はない。誰もいない。

ならば、さつきまで見ていたものは？ あふれる水も、光を弾く鱗と珊瑚の群れも、笑ってこつちに手を振る誰かも……。

泡沫の夢だったのだろうか。目の前に広がるのは、闇と苔の緑と岩の黒だ。まぶたを下ろして集中すれば、地下水のようなわずかな水の気配を感じ取れるけれど、もつと深く地盤を掘らねば顔を出してくれないだろう。

「……………？」

水がない。誰の声も聞こえない。それだけで胸が締め付けられるのはなぜだろう。

試しに知っている誰かの名前を呟いてみるものの、応える声は返ってこない。

覚えているのは、その人と、その人の言葉。あとは、恐ろしい咆哮と、直後に世界を揺らした衝撃。

やらなければいけないことがある。行かなければいけない場所がある。

でもここからどうやって？ どこへ？

「……………」

途方に暮れて空を見た。

岩に塞がれて見えない宙を探す。世界から切り離されてしまった体を導いてくれる星はどこにもない。

感じるのは、湿った空気と土の匂いと……どこか遠くで蠢く、大きくて嫌な気配。

右も左もわからない。

けれど、このままではいられない。

あまりにも頼りない足取りで、何かは先の見えない暗闇へ消えた。

I N T E R M I S S I O N | e n d |



## INTERMISSION 1 あらすじ

13班が帝竜ティアマットを討伐した後、キリノの意識が覚醒した。が、黒いフロワロと接触していた片腕は切断され、キリノは意気消沈。呼びかけもむなしく戦線から離脱してしまう。

ムラクモ総長代理となったエメルの指揮下でドラゴン戦線は動き出す。人命救助や人材の確保、対真竜戦に備えて開発されていたという「殺竜兵器」の回収に奔走する13班だが、行く先々でSECRET1が暗躍し、作戦には支障が出ていた。

地下道のさらに深部に現れた地下遺跡と帝竜反応。消失した殺竜兵器。ますます事態が混乱していく中、東京のどこかで、人知れず何かの影が動き始める。

\* \* \*

13班メンバー

【飛鳥馬 式 / アスマ シキ】

スチューデント♀ 標準カラー / サムライ・デストロイヤー

ボイスタイプG (佐藤 利奈 様)

主人公その1。一年前と比べて自身の行動をちゃんと省みるようになってきている（改善できるかどうかはまた別）。

最近怒ってはミナトに宥められて反省するのループで、これはこれでストレスがたまる。そろそろ思い切り暴れて発散しないと頭の血管が切れそう。東京地下道では瞬間最高血圧を記録して帰還後強制的に健康診断が行われた。

銃撃にさらされたとしてもコンディションが整っていれば見切つて回避できるかもしれないフィジカルSランク。その気になればトリックスターにも転身できる可能性はあるが、銃で照準を合わせて撃つというプロセスが面倒。離れた敵を狙っても当たらないかもしれないのでナイフ主体かガンカタで戦うことになるが、銃弾の装填が面倒で最終的に放り出す。殴るか斬る方が早い。そこ、暴れん坊照準と

か言わない。

【志波 湊 / シバ ミナト】

スタイル未定・なし ♀ / サイキック

ボイスタイプC（堀江 由衣 様）

主人公その2。周りの血の気が多すぎてブレーキ役としてひっぱりだこ。やることが多い……やることが多い……!!

マナを流す回路や神経は少しずつ回復しているがまだ本調子ではない。邪神インヴェイジョンのアシストで動いているが、その度におやつを要求されるのが地味にキツイ。とはいえ助けられているのは事実なのでなんとかデザートを確保する。その過程でナビと一緒におやつ作りをするようになり、甘味限定でクッキングスキルが鍛えられてきた。

銃はマジで強力かつ危険なので、戦闘前から周囲にこっさり冷気を流し、離れた相手も瞬時に拘束できるようにしていた。SECT11にも女性のサイキックがいると知ってちよつと嬉しい。

幕裏6. 出張！ 東京都庁の修羅場！

『ハアイ！ モーニングチェロンの時間だよ！ トーキョーのみんなはもうウェイカップ？ ドラゴンたちがカムアゲインしちゃったけど、ドンウオーリイ！ ここ議事堂にはヴェリヴェリ頼れるかつこいいヒーローがいるもんね！』

朝の8時、スピーカーから飛び出す声でまぶたが持ち上がる。

『今これをリスンしてるキミも、きっとエニワンのヒーローになれるはず！ 復興ヴォランティアはエヴリタイム募集中だよ！ お問合わせは世界救済会まで。カモンジョイナスー！』

「ハジメ、そろそろ起きたらー？ ニナたちもう朝ごはん済ませてるわよ」

「んー……」

母の呼びかけに続いているんな音が聞こえてくる。あくびに布団をたたむ音、誰かが着替えているのか衣ずれや、活発な子どももの笑い声。周りにあふれる十人十色の生活音。

「……平和だなあ」

平和じゃないけど、いやどつちだ、と自身にツッコみつつ起き上がる。

竜災害下の、比較的平穏な議事堂の朝。ぐっすり眠れたことに感謝しつつ、ハジメは大きく伸びをした。

DJチェロンのラジオを目覚まし代わりにしているのは自分だけじゃないようで、寝ぼけながら洗面台へ向かうとオクタとかちあう。寝ぐせが目立つ互いの髪をつかんで争い、なんとか歯磨きの順番を勝

ち取った。

帝竜が討伐されたこともあり、ここ数日の議事堂は雰囲気明るい。配給される食料もいつもより豪華な気がする。一度目の竜災害が起きる前に比べればどうしたってさもないが、三食食べられるだけありがたい。

議事堂内で栽培されたというトマトをハムでくるんで口に放り込む。うん、うまい。

一方、眠気に対抗してか冷水をがぶ飲みするオクタは、喉仏を上下させるたびに周囲を見回していた。気になることでもあるのだろうか。

「朝から何きよろきよろしてんの？」

「いやあ……ユウコいないなと思って」

「ユウコちゃん？」

鴨川 カモガワ 有子、 アリス もとい有子 ユウコ。オクタの幼馴染である女の子だ。

初めて会って挨拶を交わした日からたびたび顔を合わせることはあったが、最近は姿が見えない。ばりばりの緊張しいのユウコは付き合いの長いオクタとは気兼ねなく話すようだし、彼や彼女の家族と過ごしているものかと思っていたのだが、どうやらオクタもあまり顔を合わせていないみたいだ。

ケンカでもたのかと茶々を入れてみるも、首を振ってうんにやとだけ返される。いつもならボケのひとつかますところなのに、なんだか覇気がない。というかさっきの洗面台争奪戦もだが、オクタに最近元気がない気がする。今の会話からしてユウコのことか心配なのかもしれない。

「あいつ、最近元気なかったんだよなー。近所の帝竜も倒されたつてのにずーっと暗いままでさ」

「んー、まあ、まだ全部解決したわけじゃないっぽいし、他にも気になることがあったとかじゃね。帝竜って確か全部で七体いるんだろ？」

丸ノ内の帝竜が討伐されたと報告が舞い込んだ時の議事堂はお祭り騒ぎだった。ムラクモ居住区に在るといふバーテンダーが出張してきて酒宴が始まったくらいである。とはいえ帰還した13班は傷だらけで医務区は大わらわだつたらしいし、用心深かつたりネガティブな者は浮かれている者を冷ややかに見つめていたが。

オクタが言うにはユウコは後者で、盛り上がる人たちとは反比例するように思い詰めたような顔をしていたそう。

「おれも最初は残りの帝竜のことで気が抜けねーのかなって思ったんだけど、なんか違うっぽいんだよな。声かけてみても細かいことは教えてくんねえし、ずっとスマホ握りしめて……、——」

「……なんだよ？ おい、どうした？」

「あ、リョウちゃん？」

目を見開いて固まっていたオクタが飛ぶように振り向く。

機敏すぎる動きにびくりと肩をすくめたのは鴨川家の夫人、つまりユウコの母親だった。ユウコがオクタのことを「リョウちゃん」と呼ぶのは知っているが、彼女の母も同じように呼んでいるらしい。

おはようございますと挨拶を交わした後、ユウコの母は娘を見ているか、と尋ねてきた。

「朝起きた後、朝食ついでに散歩して、議事堂を見て回ってくるって言ってたのよ。いつもより早い時間だったから、リョウちゃんたちと一緒に食べる約束でもしてたのかなって思ってたんだけど……違うみたいね」

「……そつすね。もしかしたら、どこかですれ違ったのかもしれない。あ、おれらもうすぐ食べ終わるんですけど、おばさんたちのところに寄ってもいいですか？ あいつに貸してたものがあつたんだけど必要になつて」

鴨川夫人は快く頷いて朝食の配給を受け取りに行く。  
彼女を見送ってからこちらに向き直ったオクタは、朝の鈍さを感じさせない勢いで朝食の残りをかきこみ始めた。

「うおつ、がつつくなよ、喉に詰まらせるぞ」

「おめふつ、ひよつほはひはめはいほほがあつて」

「確かめたいこと？」

「ぶはつ、ごつつあんでした！」

「おい、待って！ あ、ごちそうさまでした！」

空になったプレートを回収用の台車に置いてオクタを追う。食べ物を含めたばかりの胃がぐらぐら揺れて気持ち悪いが、いつになく真剣な顔をしている友人に自分の足も床を蹴る力が強くなる。

オクタが向かったのは鴨川家の生活スペースで、彼はスリッパを脱いで飛び込むように奥へ進んだ。

そういえばさきほど夫人との会話で貸した物が必要になったと言ったが、それを探しているのだろうか。にしたって探し物の手つきがなりふり構わずで穏やかじゃない。

「おい、そんな風にしていいのかよ、ユウコちゃんが戻ってくるの待つ方がよくない？」

「いや、たぶん戻ってこない……っ」

「どういうこと？」

「あいつ……まさか、……やつぱり！」

人目につかないような隅、まとめられた荷物の奥の奥からオクタが引っぱり出したのは二つのハードケースだ。旅行用のスーツケースではない、工具のような専門的な道具を入れるような、平たく横に伸びたタイプの物。

太い両腕でそれを持ち上げ、オクタは重さを確かめるように体を下させる。

「ロツクされたまままだ………けど、やっぱ軽い。中身入ってない………かもしれない!」

「待てよ、話が見えてこないんだけど」

「……ユウコが銃撃してるって話はしたよな?」

「え? ああ、射撃で活躍してたんだっけ」

ユウコと初めて顔を合わせた日だ。悲鳴を上げて逃げる彼女を追いかけるついでに親御さんと挨拶を交わし、あの子恥ずかしがり屋なのよと本人に代わって紹介を受けた。

彼女とオクタの地元は自然豊かで、猟師が出入りする山が近くにあるらしい。祖父も猟師だった影響か、ユウコは小さい頃から射撃を始めて大会にも出場していたのだとか。

「年齢制限あるから実銃じゃなくて空気銃なんだけど、」とオクタが続ける。

「実銃とそんなに重さ変わらないらしくてずっしりしてんだよ。ケースに入れるとけっこう重くて、練習見学させてもらう時に持ち運び手伝ったことある」

「ただ、今持つてみる分には軽いと。……ユウコちゃんが持ち出したってことか? でもなんで?」

「あいつ、ムラクモが都庁を拠点にしてた時に家族一同で保護されて、そこでよくしてくれた人が議事堂には移動しないで都庁に残ったらいいんだよ。前までは携帯で連絡取れてたみたいだけど、今は電波全然飛ばねえじゃん」

「——あ、」

今まで聞いた話から要点を抜き出す。

最近、ユウコには元気がなかった。

彼女と仲の良い人物が都庁にいる。

その人とは竜災害が起きてから連絡が取れていない。

そして銃が持ち出されていて、

『朝起きた後、朝食ついでに散歩して、議事堂を見て回ってこると言っていたのよ。いつもより早い時間だったから、リヨウちゃんたちと一緒に食べる約束でもしてたのかなって思ってたんだけど』

「そんなん、十中八九……！」

「こつそり銃持ち出して都庁に行ったんだよ、くそ！ 外にはドラゴンもマモノもいるんだぞ！ エアライフルでどうにかできるわけねーだろ、普段は引きこもりのくせに変なところで根性出しやがって！」

勢いのあまり唾と一緒に飛び出した憎まれ口が、朝の居住区にむなしく響く。楽観的な親友がここまで焦る姿なんて、マモノやドラゴンと遭遇したとき以外は見たことがない。

赤みの消えた肌に流れる冷や汗が、死にかけている自分に必死に呼びかけていた妹たちを思い起こさせた。もし、ユウコが自分と同じ目に遭ったら、もし万が一があったら。目の前の親友は泣き叫んでしまふのだろうか。想像がつかないけれど、きつと今以上に……。

そこまで考えて、慌てて頭を振った。悲劇を如実に想像するなんて趣味が悪すぎる。

ケースを元の位置に戻したオクタと共に生活スペースを後にする。毎日早朝から活動している自衛隊員に加え居住区から市民が顔を出し始め、議事堂の中は少しずつ賑やかになり始めていた。

「でも、なんで一人で。自衛隊とかムラクモに相談すればよかったのに」

「慌てて頭が回らなかつたのもあるだろうけど……遠慮したんだと思う。あいつ、13班とか自衛隊の人見ていつも大変そうって言うから」



ちらりとオクタが視線を巡らせる。目に入るのは医療従事者やムラクモの作業員など、議事堂を「守る」側にいる人間たちだ。

丸ノ内の攻略、帝竜討伐でムラクモと自衛隊には多数の負傷者が出た。彼らを治療するには医務区の整備と薬や包帯の補充が不可欠で、フロワロとドラゴンが減った丸ノ内から物資を調達する作業が開始されている。

ある程度日が経っている今も、蓄えは十分とは言えない。けれど職業柄なのか、自衛隊は余程の重傷者を除いて市民に診察の順を譲るのだ。

繰り返し怪我を負い、なおも危険な仕事に向かう者たちがいる。それを支えるために奔走する者たちがいる。

そんな現状を見聞きして、彼らを駆り出すのは忍びないとユウコは考えたのかもしれない。オクタは苦い顔をした。

「表の広場には人がいるから、たぶん裏から出たんだ。電車なんて動いてねえから歩きで……今なら追っかければ捕まえられるかもしれない」

「議事堂周りのマモノは倒されてて、道は拠点移す時に整備されてるだろうから、そこを辿って探せば……！」

よしと頷きあつて踏み出す。

一度広場へ出てから新宿の方角を確認し、議事堂裏側に回る。以前、自分たちが異能力者なのかの検査で利用した場所だ。

「……ところで徒歩だと、向こうまで何分かかるんだろうな」

「そういうことは考えんな、大阪から東京まで徒歩で戻ってきた足を信じる！ あーでもバイクがあれば多少は楽になるけどよおー！」

そういえば、オクタはバイトや通学でスクーターに乗るため、バイクの免許を取っていたんだっただか。

乗り物があれば道中マモノと遭遇した際の逃げ足にもなるだろう。

希望は薄い、人命が関わる事態だ。迅速に、けれど入念に備えをしておかなくては。

少しずつ遠ざかっていく人々の声を背に、自衛隊や市民の車両がまとめて停めてある駐車場に入る。カーキ色の高機動車に、迷彩模様が施された装甲車、戦車が整然と並んでいる様は圧巻だ。運転できるはずもないので今回は素通りさせてもらうが。

あとは一部市民が自宅に帰って回収してきた物なのか、普通の乗用車が固まるエリアがある。平時に政治家たちが使っていたのだろう。リムジンは土煙をかぶって輝きを失っていた。

バイク、バイク、バイク、二輪でも三輪でもいい、なんなら自転車でもいい。徒歩や走りよりも早く動ける物を。

「あつ、自転車……くっつそパンクしてる！」

「こっちはサドルがない、ブレーキも壊れてんな……やっぱり、ないか……」

視線を巡らせて歩くたび、この場にあるはずのない時計の秒針の音が聞こえる気がする。嫌に時間の流れを早く感じてしまう。……これ以上は時間の無駄かもしれない。

諦めて踵を返そうとしたところで、  
ブオンツ、という軽快なエンジン音と、

「おいジイさん、バイク動いたぞ」

探し物の名前が確かに聞こえた。

「バイク!!?」

天啓のように耳に届いたかすれ声を追って駐車場の奥に飛び込む。

車両の影になっていて入口からは見えなかったスペースに、確かにバイクが二台並んでいた。どちらも透明な風よけがついた大きいスクーターで、同じ型の色違い。年季はあるがしつかり手入れされた車

体が乗り手を待つようにエンジンを吹かしている。

そしてその手前には、人影が二つ。

「……」

「んー？ おまえさんの友だちか？」

「んなわけねえだろ」

気のよさそうな老人と、鬱陶しそうに自分たちを睨みつける青年。かすれ声の主は青年の方だった。

同い年くらいだろうか。黒いタンクトップ姿で、伸びる腕は白くて細い。髪はさらに真っ白で、対照的に眼は鮮やかな紅だ。なんだか白うさぎを連想させる。

彼はこちらに背を向け、タンクトップの上からブルーの上着を着直す。バサリと響く乾いた音も、長い裾が大袈裟に揺れるのも、明らかに拒絶の意思表示だ。

けれどそれに怯むほど繊細な神経はしていない。オクタが構わず青年に歩み寄る。

「いきなりごめん！ おれたち都庁に行きたいんだ、本当に悪いんだけどそのバイク貸してくれ！」

「嫌だね」

間髪入れず、バツサリなんて幻聴が聞こえるくらい呆気なく切り捨てられた。心から絞り出した願いに、彼はちらりとでもこつちを見ようとしなない。

初対面の相手だ、好き嫌いではなく単純に興味を持たれていないし、厄介ごとの気配を感じて関わりたくないと思ったのかもしれない。オイルとすすで黒く汚れた頬を拭いながら、どこ吹く風というように青年は伸びびをする。

「議事堂が嫌になって出ていくなら好きにすりゃいいだろ。協力して

やる義理はねえよ」

「違う、そうじゃない！ 人探し！ 知り合いが都庁に向かったかもしれないなくて、距離があるから移動手段として借りたいつつーか！ もちろん借りたままになんてしないしちゃんと返すから！」

「それはあたりまえのことだろ。そもそも貸し出しなんてしてないつつつてんだけど。こっちに何のメリットがあんだよ」

お願いしますとボールを投げては即却下と打ち返されるばかりで取り付く島もない。見返りを用意できれば態度も変わるかもしれないが、議事堂で取引をする際に使われるのは日本円ではなくA zという資材になっている。ここに来て日の浅い自分たちはほぼ触れる機会がないため無一文だ。対価として渡せる物なんてない。

「第一、向かったかもしれないつつうことは断定できないんだろ？ ちゃんと議事堂の中探せば。互いに移動してすれ違った可能性の方が高いだろ」

「そ、それは……！」

そうかもしれないが、実際銃が持ち出されている。いやケースの中身を見たわけではないのでこれも可能性だが、オクタが間違っているとは思えない。

淡々と現実的な選択肢を提示していく相手は近付けさせる気もないのか、自分たちとバイクを隔てて退こうとしない。これではますます時間が過ぎていくだけだ。

頭の中の秒針の音がまた大きくなり始める。ユウコは今どこにいるのだろうか。もしどこかで危険な目にあっていたら、傷を負っていたら……。

「くっそ、罅があかねえ……！ こうなったらライブの手伝い特権でもらったハジメと二十ちゃんたちの激レアサイン色紙を出すしか、」  
「色紙？」

オクタが齒軋りをしたとき、間の抜けた声が駐車場にこぼれ落ちた。それまで自分たちを見守っていた老人からだ。

青年とは対照的に、誰でも声をかけやすそうな柔和な雰囲気のある老人は、こちらを上から下まで観察してもしゃと続ける。

「金髪の子。あんたあれかい。なんて言っただけな、最近うちゅうか前に話題になってた、あの、アイドルの……」

ヒゲを蓄えた口から出てきたのは自分が所属するユニット名だった。

偽る必要もないので素直にはいそうですと答えると、老人はやつぱりと破顔する。そっけない青年とのやり取りでメンタルが削れているので、場を和ませてくれる笑みがあるがたい。

「婆さんがあんたたちのファンでなあ。いい歳して写真載ってるうちわまで買ったりして……ライブに行きたいだなんて言ってたっけか。嫌じゃなければ、サインもらってもいいかい？」

「も、もちろんです。それで喜んでもらえるなら」

「ありがとなあ、夢を叶えられそうでよかったよ。お返しうちゅうのは変だが、バイク使っているよ」  
「えっ」

オクタと顔を見合わせて、次いで青年に視線を向ける。  
彼は眉間にしわを寄せて老人を振り返った。

「おいジイさん、正気かよ」

「わしゃまだボケてないぞ。いいんだよお、せつかくまた動くようにしてもらったんだから、試運転せにゃ」

「……あのー、そのバイク2台って、誰の……？」

「こっちはわしの。もう1台は婆さんの」

「どつちもおまえのじゃないじゃん!! 偉そうにメリットがないとか  
言いやがつて!」

「つせえなどつちも修理したのはオレだよ。直したそばから見ず知ら  
ずの他人の手垢つけられてたまるか」

「気持ちにはわかるけどさあ!」

「わしはいいよ。悪い子たちじゃなさそうだしな」

オクタが怒って青年が吐き捨てる様子を老人は微笑ましげに眺め  
ながらヘルメットを持ち出した。

出会って数分の相手が自身の作品に触れるのが耐えられないのか、  
隠しもせずに睨みつけてくる青年に「おまえさんも行けば?」と彼は  
言う。

「最近暇そうにしてただろ、バイクが気になるなら、一緒についていっ  
てやればいいんじゃないか」

「はあ? ああまあ、暇だけど……、……じゃあ、監視ついでについて  
いくか」

「え、まじ? 手伝ってくれんの?」

「誰もそこまで言ってるねえ。バイクはジイさんが許可出してるから貸  
してやるけど、年代物で予備のパーツなんざ見つからないから壊すな  
よ。……あと、オレがおまえらと一緒にいる、いたってことは人に話  
すな。ジイさんもだからな」

「あいよ」

「お、おう? わかった、極力気を付ける。よしハジメ、後ろ乗れ!」  
「よっしや!」

改めて議事堂から都庁までのルートを確認し、ユウコが通りそうな  
箇所を目星をつけて走り出す。手を振る老人があつという間に小さ  
くなっていく。

徒歩では感じられない風を浴び、無事でいてくれと祈って崩壊した  
東京を見回した。

\* \* \*

「結局……！」

「都庁近くまで来ちゃった……！」

空を背にした二又の高層ビルを仰ぐ。

人命がかかっているのだから気も手も抜いたりしていない。ユウコの性格上、マモノやドラゴンに挑むこともないだろうから、オクタの意見を参考に進路も絞ることができた。

それでも進む道のりに人の気配や痕跡は見つけることはできず、ユウコの搜索は東京都庁付近の中央通りまで及んでいた。

「ユウコちゃんもバイクか自転車見つけたか、運動ができて俺たちより早く移動したっていうのはありそうだけど、それでも追いつけないもんか？」

「いうておれたちエンジン全開にしてたわけじゃないし、マモノ避けてたから進むの遅かったし、ありえねーことはない、と思う……！」

どっしりとした建材に極太の有刺鉄線が組み合わされた、おそらく自衛隊が用意したのだろうマモノ避けの壁に身を潜めて通りを進む。

ところどころが陥没、ひび割れた道路は絆創膏を貼るように最低限の舗装がされているが、そのコンクリートにもフロワロの花が根付いている。少し前まで落ちていた地上はすっかりドラゴンたちを上書きされてしまったのだ。

人っ子一人いないどころか、目の前に広がるのは音も温もりも消えた銀灰色の廃墟の群れ。ゲームのシチュエーションでならわくわくできていたのに、現実には喪失感が内臓を冷やして、ひどく息苦しい。

生まれ育った都会の惨状に、埃っぽい風と一緒に無力感が体に沁み

ていく。今度の真竜……フォーマルハウトと呼ばれていた気がする。あとは去年地球をめちやくちやにしてくれた真竜。あいつらさえいなければ、世界がこんな風にひび割れてしまうことはなかったはずだ。

無意識に悪態を呟きかける口を、「止まれ」と後ろから流れてきた声が止める。

黙って自分たちについてきていた青年が都庁をじつと見つめている。出発前の言葉通りユウコの捜索に協力することはなかったのに、今になってしきりに周囲を見回し、どこにしまっていたのかおもむろにタブレットを取り出した。

なぜ待ったをかけたのか、何をしているのか話してくれる気はなさそうだ。細い指先でカツカツ画面を弄り続けたかと思えば、また何の前振りもなく彼はバイクの首を回す。

「戻る。都庁に入るなら目立たない所にバイク停めて、あとは歩きで行け」

「え、いきなり!？」

「ついていくのは人探しの手伝いじゃないつつただろ」

エンジンがかかる音と同時に、背を向けた青年は何かを宙に放る。

排気ガスに煽られるそれを確認することもなく、彼は通りを抜けてビルの角に姿を消してしまった。

「結局、何だったんだろなあいつ……バイクはいいのかな」

「さあー、よくわかんねえ……つうかそれ何？ さっき投げられたやつ」

「ああ、これ？」

曲げていた指を伸ばす。ちくちくと手のひらを刺激しながら転がるのは丸められた紙だ。

青年が投げたのを咄嗟にキャッチしたのだが、もしやただゴミをポ



イ捨てただけなのではなからうか。

何かの筆跡が見えたため確認しようと広げてみると、線と文字と記号で形作られた何かの見取り図が顔を出す。紙は何枚か重なっていて、隅には1Fや2Fと記載があった。

「……これ、建物の地図？」

「……もしかして都庁じゃね？」

手書きの簡易的な見取り図はところどころがかすれている。紙もほんの少し黄色く焼けているし、つい最近作られた物ではなさそうだ。

大きな通路や部屋は数本の線でぎつくりとしか描かれていないのに、非常階段や消火器や重要施設、壁や床に空いた穴なんかは細かく描き込まれている。屋内の全てを把握するというよりは、万が一の事態で役立ちそうな要素をまとめた内容だ。まさに今から役立つくれそうな。

もしかすると、あの青年はユウコのように都庁で生活していたのかもしれない。彼が何を考えて行動しているのかはわからないが、この地図を貸してくれるあたり、悪い人間ではなさそうだ。

どの建物よりも大きくそびえ立つ都庁を振り仰ぐ。去年は帝竜の根城にもなっていたというが、ここで尻尾を巻いて逃げるわけにはいかない。

「ここまでの道ですれ違ってる可能性もゼロじゃねーけど……絶対見つけてやるからな、待ってるユウコ！」

「その意気だ、行くぜ！」

青年に言われた通り目立たない場所を探して駐車し、遠くで動くマモノに注意しながら都庁の入口まで滑り込む。

目を凝らしながら踏み込んだエントランスに人影はない。が、フロアの隅にある段ボールの山で四足歩行の影ががさごそ動いている。

食べ物を漁っているのだろうか。

ムラクモの検査で異能力者と診断されたとはいえ、戦うための技術なんぞ持ち合わせてはいない。気取られれば終わりだ。

(ここはエレベーター使えなさそうだな。階段で行こう)

(オツケー)

一歩、二歩。息を殺し、足音を立てないように階段へ進む。

うつすらと積もっている埃が舞って、窓から差す陽の中で儂げに輝いた。ゆつくりと息を吸うたび鼻や喉に入り込んできて、思わずくしゃみしそうになるのを堪える。

(やべえ、すげえ息しづらい)

(埃もあるけど、これって)

じつと宙を凝視すると、ほんのわずかに空間が色付いている気がする。階段から振り返れば、広いエントランスの奥は薄いヴェールをかけたように霞んで見えた。

換気が行き届いていないだけでは説明できない、不気味な空気のだよみ。あちこちに咲いた赤い花……ドラゴンの花フロワロから生まれている花粉だ。

2020年に大阪で見た物と寸分違わない毒の花。花粉を吸い込むと気持ちが悪くなるのは去年実際に体験している。確か、ミナトがフロワロは瘴気を発すると言っていた。帝竜が棲む地域を中心に、ドラゴンの数が多ければ多いほど、花の数も増えていくと。

健康体の人間であれば抗体ができているため、無闇に接近せず、花弁から根まで丸ごと食べるなんて真似をしなければ問題ないとは聞いている。けれど都庁の中は、外よりもフロワロの数が多い。

なんでこんなという疑問は、二階に続く階段を上がり、踊り場まで来た瞬間に解けた。

「っ——!!?」

叫びそうになった口に指先を突っ込む。

前歯が手の皮を薄く抉り、大きく吸い込んでしまったフロワロの花粉がジクジクと喉を痛めるが、今は息を整えることも瞬きも許されない。

一歩も動けず踊り場で立ち尽くす。

残りの階段越しに見える二階には、どこから入ってきたのか疑問に思わずにはいられない、通路を埋める巨大な影。

(で、っか……)

(マモノじゃねえ、あれ、)

ドラゴン。

忘れもしない、忘れることなどできない、2020年3月31日の影がそこにある。

手についている壁が、埃っぽい空気が、階段の踊り場が遠ざかる。意識が過去に飛んでいく。

屋外ライブの最中に現れた、空を覆う無数のシルエット。地上に降り立つ見たこともない生き物。

最初に犠牲になったのは、ライブの興奮で顔を赤くしていた男性だった。へらへら笑って何だこりやとその足を叩いて、次の瞬間頭から飲み込まれた。

観客席の中央から舞台に届いたバキリという音は、巨体に踏み潰された椅子ではなくて、牙にすり潰された背骨の音だったのかもしれない。

それを境に地獄が始まった。

『嫌だ置いてかないで！ 誰か助けて!! 助け——』

『嫌だ、こんな死に方……！ 死ぬなんて、——が、あ——』

『……どうぞ、先、行ってください。俺、連れがみんな死んじゃったん

で』

『つづ、うう☒つ……!! なんて、なんで、悪いことなんて何もしてないっ、してないのに……!!』

『あああつ!! お父さん！ お父さん!!』

『痛いっ、食べないで、やめてええーっ!!』

尾から頭、さらに頭から生える大きな斧まで五メートルはあるんじゃないだろうか。

去年見たドラゴンのうちのどれかに似ている、二足歩行の脅威。呼吸をするな。音を立てるな。

今この時だけ、路傍の石になれ。自分という存在を極限まで殺せ。できなければ死ぬ。

丸太のような尾が揺れる。百年樹と見間違う二本の足が着地して、その度に設計上想定されていなかっただろう重さに床がたわむ。

がちり、がちりとドラゴンの黄色い眼球が回る。窓の外を、通路の壁を、……自分たちがいる踊り場の、天井に近い壁を順繰りに映して。ゆったりとした動きで背がちらに向けられる。

その巨体が通路の奥へ遠ざかっていったところで、壁に寄りかかって腰を抜かした。

「っは……!!」

「や、べえ、何分、息してなかった？」

「分は、いってない……たぶん……」

ドラゴンに追いかけられたことならある。その時は街中で、建物の中に飛び込み裏口から抜ける、マンホールの下に潜るなど小回りのきく環境だったため、命からがら撒くことができた。

けれど、都庁の中では自由に動けない。青年がくれた見取り図では、エントランスより上のフロアは中央に部屋があり、その周囲が通路というシンプルな構造だ。

ぐるりと部屋の外壁をなぞる形の一本とそこを塞ぐドラゴン。マ

モノの気配だつてそこかしこからする。探索なんてできる気がしない。もし奴らに見つかつてしまえば、窓を割つて屋外に飛び出ても、追いかけてこないとは限らない。

背筋を撫で上げる恐怖と共に、地雷原に踏み入つてしまった実感が強く大きく押し掛かる。

だが、ここにユウコがいるのであれば。

「放つておけるわけねえだろ、くそ……！ あいつ、無事じゃなかったら許さねーからな！」

オクタが声を振り絞り、震える膝に拳を叩きつける。

そうだ、自分だつて友人を置いて帰りたくはない。頬を叩いてドラゴンに踏み潰されてしまった気合を入れ直す。

「ドラゴンはどうする。そこらへんに植木鉢とか椅子とかあるから、音立てて誘き寄せるか？ その間に片方が部屋の中を覗くとか」

「これで部屋の中にもドラゴンいたらお手上げだけだな……しかも都庁つて50階くらいあるんだろ、一階ずつ確認していくとしたら何時間かかんだよ」

「二か八か電話かけてみるか？ 都庁と議事堂の間は通信通らないみたいだけど、同じ建物の中ならもしかしたら……」

「……やんないよかマシだよな」

オクタがかがめていた身を起こす。汗まみれの手を鞆に突っ込みスマホを取り出し、友人は震える指で画面をタップし始めた。

爪が割れかけた親指が受話器マークのボタンを押す。通話は彼に任せ、こちらはマモノとドラゴンの影を探すことに集中する。

「ユウコ、おい、聞こえるか？ どこにいる？ 返事してくれ！」

『……………』



ほぼ殴り合いの勢いで互いに拳をぶつけて肩を組む。

ひどく途切れてしまうものの、耳に届くのは聞き覚えのある少女の声だ、間違いない。スマホは自分たちとユウコを確かに繋げていた。

「おつ、ま——ふざけんな！ やっぱり都庁に来てたんだな!? 今どこだ！」

『そつ……ちだつて——な……んで………なんで、つ、じゃな——いか……ぐ……めん』

「いいから、何階にいる!?!」

『今——じゅ………い、10階………み——な研究………集ま………』

「あ、切れた！ くそ！」

「でも場所は特定できたな！ 行くぞ！」

太陽が東から中天に昇り、少しずつ視界が晴れていく屋内を無心で進む。不幸中の幸いともいうのか、フロアと違い階段にはマモノもドラゴンもない。

登って踊り場で折り返してを何度か繰り返し、窓から見える景色が広く高くなっていくことしばらく。壁に刻まれた10の数字が自分たちを出迎えた。

「つ、着いた……！」

肩を上下させながら辿り着いた10階は、空に近い分日が差し込んでいて明るい。他フロアと違い人がいることもあつて通路にはそれほど埃が積もっていない。フロワロも除染されているからか空気が清潔だ。

緩みかけた頬をペチンと叩く。ここからはフロアの中に踏み入るのだ。マモノが潜んでいるかもしれないのだから、まだ油断はできない。

「右！」

「敵影なし！ 左！」

「同じく敵影なし！ 嫌な音は！」

「……鳴き声も吐息も足音もなし！ な、はず！」

昨年ドラゴンと戦うことを選んだ人間も、今みたいに吐き気が湧くほどの緊張感を味わっていたんだろうか。13班のあの二人は？

ここにいるのは武器はおろか防具のひとつもない民間人だけれど、だからこそ、戦う者の姿を想像して皮をかぶる。ごっこ遊び程度の気休めでも、自分をごまかさなければ恐怖心が麻痺してくれない。

青年がくれた地図を指でなぞって記憶する。フロア入口にあった観葉植物の鉢とパイプ椅子をつかみ、体の前に構えて一気に飛び出した。

マモノとドラゴンが一斉にこちらを振り向く。大丈夫これは嫌な想像力が働いているだけだ。周りには何もいない。

ドラゴンが吐き出した火炎をもろに浴びる。大丈夫この熱さは太陽の光だ。肌は一切ただれちやいない。

背後から迫る牙が、つめが、ナニカが、首の裏を引き千切る。大丈夫ただの悪寒だ。足をもつれさせな。

足の裏全体を吸いつかせるように床につけ、服の腕と脇がこすれないよう肩を持ち上げ、大口を開けて酸素と二酸化炭素が行き来する気配すら漏らさないように。できる限り音を殺して廊下を進む。段ボールと金属棚が並ぶ角を曲がれば、研究室の札がかかる扉はすぐそこははずだ。

ほとんどドラゴンの口に飛び込むつもりで体の向きを90度変える。目に飛び込んできたのはぞろりと並んだ牙……ではなく、一層明るい、廊下だ。左側は東京の街並みが見渡せる大きな窓がいくつあつて、右側には壁。少し進んだところには、閉ざされた扉と、サビひとつない綺麗なドアノブ。あそこが、研究室、の、はず。

着いたのだ。勢いのまま議事堂を飛び出し、化け物が跋扈する街を駆けて、ここまで。



マモノの声は聞こえない。ドラゴンの咆哮も、今はまだ。ただただ穏やかな日差しだけが、自分たちを包んでいる。

「……、だよな？」

「違ったら泣くわ、おれ」

オクタが息切れと震えを深呼吸で押さえこんで、今にも腰が抜けそうな足取りで扉の前へ進む。

きつく握られ骨の盛り上がった拳がノックをすると、いつか聞いたことのある、引きつった悲鳴が向こう側から漏れてきた。

おれだよとオクタが呼びかけると、止まっていた時間が動き出すように、ゆっくり、慎重にノブが回って。

数センチ開いたドアの隙間から、紫のポニーテールにハリのあるおでこ、そして潤んだ瞳が現れた。

「リヨ、リヨウちゃん……アサヒナさんも……？」

「……はあ、……もぉ、……っ！！ 心配させやがってこのアホ！」

盛大に息を吐き出してオクタが研究室に体をねじ込む。

お邪魔しますと入った室内はお世辞にも綺麗とは言えない。PCや謎の実験器具の周辺は片付いているがそれだけだ。紙に段ボール、筆記用具に簡易食の容器が雑多に積み上げられて、ここに勤める人の生活能力の低さが垣間見える。

「あなたたちは……自衛隊やムラクモでは、なさそうですね？」

部屋の奥にいた女性研究員がそつと手を挙げた。理知的な雰囲気になきらりと光る眼鏡のフレームがよく似合う。説教するオクタと縮こまるユウコの会話を聞く限り、ユウコが心配していた研究員が彼女らしい。

特徴的な腕章をつけているから彼女もムラクモの所属だろうか。地図を見る限り、都庁でも一般人とムラクモ関係者の生活圏は区切られていたようだが、何をきっかけにユウコと研究員は接点を持ったのだろうか。

なんてことを考えている間に、部屋の机の下、ロッカーの中、はがれかけた壁紙の影から他の研究員が顔を出してきた。安全が確認できるまで息を潜めていたらしい。

集まってくる白衣たちは揃って首を傾げて八の字眉を作る。疑問と喜色と落胆が入り乱れる微妙な表情。なぜ子どもがここにという混乱が二割、外から人が来てくれたことに対する嬉しさが三割、しかしこの状況をひっくり返せるような戦闘員ではないことへのがっかりが五割といった顔だ。

彼らを代表し、女性研究員が口を開く。

「私たち、真竜が来た日から議事堂へ救難信号を発信しているんです。議事堂にいたカモガワさんが来てくれたものだから、やっと信号が届いたのかと思ったのですが……そもそも、なぜ戦闘員ではない彼女が真っ先に来たのか、疑問に思うべきでした。救難信号はその設備を使えるムラクモか自衛隊の方でないと把握できないだろうから、まだ届いてないのかしら……。あなたたち二人は、どうやってここに？」

「あ、俺たちはこっちの……。ユウコちゃんがいなくなってたから、探してこっちに来たというか」

「腕章もないし、それらしい装備もしていない……。君たちは一般人だね」

女性の肩越しに男性の研究員がこちらを覗く。彼は光明を見つけたような笑顔で「好機じゃないか？」と言った。

「戦闘員ではないけど、一般市民の子どもが議事堂からここまで来られたのなら、今は都庁も街中も安全に移動できるかもしれない。それにカモガワ君もいるんだ。万が一の時も対処が……」

「いけません。ドラゴンもマモノも置物じゃないのよ、見つからない保証はない。それにカモガワさんはムラクモではないのに、危険な目にあわせるわけにはいかないでしょう？ 本来なら、私たち大人は無茶な真似をしたこの子たちを叱らなければいけないのよ」

オクタの予想通り、ユウコは議事堂のケースに収められていたであろう長銃を抱えている。研究職の人間ばかりの場では銃一丁でも大きな戦力に見えるのか、男性研究員はかなりユウコを頼りにしているみたいだ。……申し訳なさそうに床にへたり込んでいる本人は、到底戦えそうにないが。

そんなユウコを庇うように女性研究員はぴしやりと言い放つ。肌荒れに目の下のくま、汚れてほつれた髪。ろくに休めていないのだろうが、それでも彼女は背筋を伸ばし、まっすぐ自分たちの目を見て言った。

「カモガワさん、それから二人。あなたたちは自衛隊でもムラクモ機関の機動班でもなく、一般居住区で生活している子ですね？ あなたたちがここに来たのはなぜ？ 戦えない子を向かわせるように誰かから指示があったの？」

「え、いや、……独断で、来ました」

「ご家族や議事堂から外出許可は出ていますか？」

「――あ」

そういえばユウコを追いかけて議事堂を出たものの、それを誰かに相談することは一切していない。とんでもない忘れものを思い出すのと同時に、めまいがするほど血の気が引いた。

大馬鹿が。ミイラ取りがミイラになってどうする。

ちらりとオクタを横目で見ると、独断で動いたユウコに怒っていた彼も、自身がそっくりそのまま同じ、いやそれ以上のやらかしをしたのだと悟ったみたいだ。顎が外れているうえに顔が青い。

研究室の扉を開いた時の、ゴールにたどり着いたという安堵は瞬く

間に萎んでいく。

女性研究員は自分たちの返答を待たず、どれだけ無謀なことをしたのかをこんこんと言ひ聞かせてくる。追ひ詰められていて苛立っているというわけではなく、大人として、子どもである自分たちに身を守るための判断をしろと説いているのだ。反論なんてできるはずもなく、気付けばユウコ、オクタ、自分の順で横に並んで正座をしていた。

「人を思いやって動けるのは素晴らしいこと。特にこんな状況下ではそれが誰かの助けになったりもするでしょう。でも、それであなたちちに何かあったら意味がありません。せつかく三人とも竜災害が起きても無事だったのだから……」

「まあまあ、そのへんで。あとは議事堂へ戻った時に保護者の方が言い聞かせてくれるだろう。ところで君たち、外出許可はもらってないってことだけど、ここに来ることを誰にも話してないってことかい？ 救難信号が議事堂に届いてなければこのまま君たちも要救助者になるわけだけど……まさかそんなはずはないよね？」

痛い質問がつむじにぶつかって汗が流れる。

やってしまった。まさに自殺行為だ。白髪の青年が言うとおり、一度冷静になって議事堂へ戻れば、自衛隊なりムラクモになり事態を報告していただろうに。これではユウコを助けにきたなどと言えやしない。

手近な壁に頭を打ち付けてこのあほらしさと無能感と羞恥心を発散したい。それすらできやしないから、齒の間から息を吸うたびに心臓があらへ体当たりしている。

言い訳すら思い浮かばない。もうここまできたら、土下座くらいしかできないことがない。

視線を上げる。熱暴走でほとんど停止した頭に思い浮かんだのは、緊張しすぎると視界ってぼやけるんだなんてどうにもならない感想だった。

「ごめんなさい、俺たちも——」

要救助者その1とその2ですと頭を下げかけて。  
ガチャリと背後の扉が開いた。

「ああ、なんだ、自衛隊は呼んでくれていたんじゃないか！」  
「——は？」

男性研究員の言葉をすぐに理解できずに脳が処理落ちする。自衛隊って何だっけ。

彼の輝く目に倣って後ろを振り返れば、黒い服に黒いアーマー、黒いヘルメットに黒いマスク。全身黒尽くめのせいでどこかの暗黒卿を思わせる人間が立っていた。

男性研究員がやったと飛び跳ねる。

「でかしたぞ、君たち！ これで僕らも議事堂へ合流できる、何日ぶりにぐっすり眠れるぞ！」

「え、え？」

「いや、おれらは……」

連絡はしていないはず。であれば自分たちが出発した直後に議事堂が救難信号に気付いたのだろうか。

どちらにせよ助かったのだからいいか。いや、助かったのか？ もうわからないし考えられる体力もない。体から力が抜けて正座を崩す。

「議事堂帰ったら怒られるんだろうな……」

「もうそこは諦めようぜ。ユウコもおばさんに怒鳴られんの覚悟しとけよ……おい、ユウコ？」

「違う」

ぽつりと否定の声がかぼれて首を傾げる。  
はしゃいでいた研究員も目を瞬かせ、声を漏らしたユウコを見下ろした。

「違うって……何かあったのかい？」

ユウコは答えない。というより、答えられないと言ったほうが適切かもしれない。

ただでさえ青ざめていた彼女の肌がもっと血の気を失っていく。依然、黙ったまま銃を持って佇む誰かを見開いた目に映して、震える唇から言葉が紡がれる。

「自衛隊の、装備じゃない」  
「え」

軍隊の武装をしていながら自衛隊ではない。

腕を見る。特徴的な腕章を巻いてはいないから、ムラクモ機関の間でもない。

なら、この人は？

誰、と改めて問おうとするのと同時に、

「H<sup>動</sup>old<sup>く</sup> i<sup>な</sup>t」

ガシヤツと音を立て、武装した誰かは自分たちに丸い銃口を向けた。